
I S ～香りの無い花～

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 香りの無い花

【Nコード】

N7224S

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

ISを使える『唯一』の男、織斑一夏

そのことが報道されてから1ヶ月、二人の男女が編入してくる

『香りの無い花』椿の騎士と

『人を魅了する花』薔薇の姫が

学園に大きな波乱を呼ぶ

本来ありえない二人が登場する世界で、世界は動きだす

ご都合主義?? コラボ?? そんなもんは知ったことじゃない!!

あくまでこれは作者の妄想の産物です

1話

プロローグ

(前書き)

駄文&原作を色々つぶっ壊していきます
不定期更新ですがよろしくお願いします

1話

プロローグ

side

（一夏）

「聞いた？編入生が二人来るみたいだよ」

シャルが俺の席に来てそんなことを言い出した

「編入？？こんな時期に？？」

実際学園に来て1ヶ月しかたっていない

特に何かあったわけでも・・・無いでもないが

某古泉じゃないんだから

「編入生っていつでもやっぱり・・・」

「女の子だろうね・・・」

俺の問いかけにシャルが答える

だよなあ・・・男が来るなんて二次創作くらいしか・・・ん？？

今気づいてはいけない領域に行ったような・・・まあいいか

「どちらにしろあまり問題は起きないだろう」

いつのまにやらラウラさん登場

「そろそろ席についておけ、時間だ」

箒もそれだけ言って自分の席へと歩いていってしまう

「それじゃあ戻ろうか」

シャルの言葉でみんなが散っていった

side

out

一夏たちの会話の数分前

「ここがI S学園か・・・無駄にでけえなおい」

I S学園の前にいる<男>が素直な感想を漏らす

身長は160センチ後半といったところで髪の毛が血でも浴びたように赤い

全体的に幼い印象を持っているがまもっている雰囲気は騎士のそれだった

「楓、愚痴らないの」

もう一人の女が男を咎める

こちらにも幼い印象を受ける150センチほどの慎重にストンとした体型・・・ラウラや鈴音と同じ感じだ

しかし楓同様纏う雰囲気は違う

全体的にどこか上品で・・・まるで姫のような雰囲気をまとっている髪の毛はまるで濡れているかのような黒髪を首筋でひとつに纏めている

楓と呼ばれた男は嘆息して

「そんなこと言ってもこれは絶対高校ではないだろ、カエデ」

「世界で唯一の高校だからね」

この二人・・・朱雀楓と白石カエデは今日、I S学園に編入生として入る

「そろそろ先生がくるわよ、失礼のないようにね」

「へいへい、っと・・・来たな」

楓の言葉に合わせてはいないだろうが校門の奥から楓たちの方に向

かって歩いてくる

我らが織斑先生だ

「お前たちが編入生か??」

「はい、私が白石カエデ、こちらは朱雀楓です」

「デス」

千冬の質問に礼儀正しく答えるカエデと軽く殺気を飛ばす楓

「そうか、今日からお前らの担任になる織斑千冬だ、うちのクラスには専用機が多いからな、あまり注目されんかもしれんが気にするな」

「はい」「ウス」

二人は同時に返事する

「では行くぞ」

「はい」「了解」

この時の二人はまだ知らない
しよっぱなから大波乱が待ち受けていることに・・・

1話

プロローグ

(後書き)

次回は楓とカエデの人物紹介とオリISの紹介を書きたいと思います

人物&IS紹介（前書き）

楓「俺たちのプロフィール的な？？」

椿姫「まあそんな感じだな」

カエデ「ISも公開されるの？？」

椿姫「まあな、正直チートだぜ」

楓「どっちが？？」

椿姫「どっちも、本人も機体のスペックも」

人物&IS紹介

オリジナル人物紹介

すざくかえで
朱雀楓

この小説の主人公

低い身長に幼さの残る顔立ちのため可愛いとよく言われる

しかし本人はあまり気にしていない

返り血を浴びたような真っ赤な髪に右目が紅、左目が蒼のオッドアイ
地味に身体能力が化け物じみている

人を食ったような性格

集中していると誰が相手でも拒絶する

ハイになると狂気に取り憑かれたような行動をとる

某刀を使わない流派を完了させている

神様?? 疑惑がある

本をよんで気に入った技などを使うことができる

束と互角の天才だが言動を見る限りそうは思えない

専用機は椿姫

椿姫

製作者 朱雀楓

世代 計測不能

機体カラー

真紅

楓の使用するIS

全体的に白式に似ているが白式よりもシャープなラインを描いており背中には翼の形のスラスターが付いている

右のスラスターが紅、左のスラスターが蒼と楓の瞳の色と同じ色になっている

既存のどの機体よりも高いスペックをほこるが、起動時に3秒のタイムラグが生じる

思い描いた武装を作り出すことができる

いくつか変異体がある

変異体すべてに固有の意思のようなものがあり、意思の名前は基本的に形態ごとの名前になっている

簡単に言うと多重人格みたいなもの

椿姫つばき

基本形態

この状態だと紅椿程度の能力しか持っていない

楓曰く「お遊び」

意思是礼儀正しく素直、楓やほかの意思のお兄さんの存在具現化時の動物は白いウサギ

武装

莖

近接ブレードよりやや短い日本刀
ビームは出ない

椿姫・鉄くろがね

特徴 オールレンジタイプでエネルギー消費が少ない
意思は男気あふれる性格で頭が悪い
曲がったことが嫌い
具現化後の動物は黒い犬

カラー 黒を主体に全体に赤い筋のようなものが流れている

武装

黒姫

日本刀だが柄の部分に弾倉がある、簡単に言うとガンブレード

兼雅

オートマチックタイプの拳銃
弾切れと同時に作り出すのでほぼ無限

椿姫・赤梅あかうめ

特徴 拡張領域がかなりあり、1000を超える銃が量子変換さ
れている遠距離型
意思は女性型で姉御肌、面倒見がいい
具現化後の動物は白い猫

カラー 赤でところどころに白が入っている

おもな武装

クリムゾン・ティアーズ

B T兵器を元に楓が作り出した武装

ブルー・ティアーズより高性能

赤月雲

狙撃用のライフル

夜叉

いわゆるビット

8基ついている

B T兵器と同じ作りをしている

椿姫・紫炎^{しえん}

カラー 紫

特徴

バススロットがないに等しく肉弾戦を主に戦う

生身と同じように出来ておりかなりシャープなラインを描いている

意思は一言で表すと侍

具現化後の動物は狐

武装 フレイア

両手両足に搭載されている火炎放射器のようなもので楓は手刀や足刀に纏わせて戦う

椿姫・朱雀^{すゑ}

カラー 蒼銀

椿姫の変異体の中で単体では最も能力が高い機体
マルチタイプであり武装はエターニャとリオルのみ
意思是女性型でおっとりとしたやさしい性格

具現化後の動物は雀

武装

エターニャ

刀だがタイプが3つほどある

零

基本的な片刃の日本刀

紅月

両刃の大剣

睦月

2、5mはあろうかという太刀

リオル

オートマチック拳銃

実弾もビームも放てるし調味料も出せる

椿姫・宵闇^{よいやみ}

楓が理性を失うと発動するモード

スラスターから何から全て真っ黒になる

鬼畜レベルの攻撃力と防御力、機動力を備えており正直チート

漆黒のマントをつけている

意思是楓の言うことを聞かないが情に厚く共感して力を貸すことも
しばしば

楓いわく「悪ぶってるけど悪じゃないツンデレ」
具現化後の動物はちっちゃい狼

武装

妖無

日本刀、それ以外に特徴無し

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力
デストラクト・インフラ
暴走せし破壊

3分だけ椿の全変異体の特性が一度に使用できる
正直使用と同時に一方的な暴虐が始まるチート
ワンサイドゲーム

シャドウ・アビス
終焉の闇

使用すると体が闇に包まれて一時的に椿姫・宵闇を理性を保ったまま使用できる

この時の使用時間は5分

デス・コーラス
破滅の哄笑

ただの大笑い・・・ではなく一時的に楓が敵と認識しているi sの行動を強制的に制限できる楓曰く「対i s専用の切り札」ジョーカー

白石カエデ

二人目の主人公

こちらも140センチ程と小さく幼いが楓同様気にしていない上品や振る舞いを心がけているがいまいちうまくいかない髪の色はまるで濡れているような黒髪で腰まである髪を首の所でひとつに束ねている

楓とは5年前に出会った

瞳の色も黒

身体能力はいたって普通で普段はおとなしく暴走しがちな楓のストッパー役だがキレるとどす黒いオーラを纏う

専用機は薔薇月

ばらつき
薔薇月

作成者 朱雀楓

世代 計測不能

機体カラー 赤の下地に緑の茨のような模様が入っている

カエデの使用するIS

楓の椿姫同様変異体があるが3つと少ない

スペックは基本形態では白式よりすこし劣るくらい

薔薇月・白狐 びやっこ

薔薇月の変異体の中で近接攻撃を得意とするモード

下地が赤ではなく白くなる

武装

クリムゾン・ライト
紅き輝き

攻撃的なシルエットのダブルブレード
ビームが出る

マリン・プロート
蒼き旋律

簡単にいえば双剣
二振りの日本刀

薔薇月・清流 せいらいもつ

下地の赤の部分が蒼くなる

変異体の中では遠距離を得意とするモード

武装

スカーレット・コンバイン
緋色の痛み

見た目はただのショットガンだが打つと20発の弾丸が相手を追尾するちよつとおかしな銃

ホワイト・グリエル
白き頂

BT兵器と同じ作りのビット
曲がる

薔薇月・玄武 げんぶ
下地の赤が緑になる

変異体の中では防御力に比重を置いたモード
武器はあるがシールドの方が多い

武装

タイタン・アギス
亀の甲羅

もはやそのまんま
意外にもほとんどの攻撃で傷つかないチートな硬さを持つ

スローネ

12 発打てるオートマ拳銃

薔薇月・四神^{ししん}

ワンオフ・アビリティー使用後に発動する薔薇月の究極形態
黒の下地に白い茨のような模様が出る

椿姫・朱雀と互角のスペックを誇る

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力

四神招来^{ししんしょうらい}

白虎、朱雀、青龍、玄武の力をひとつに集めて薔薇月・四神となる

コア・ツヴァイ

楓が作り出した小型コア、ビー玉ほどの大きさで普通のコアとほぼ
同じ働きをする

主に形態変化や拡張領域を大量に使用する装備を量子変換している

椿姫には40以上のツヴァイが使用されており、そのうち8つは形態変化、残りは創造した武器を量子変換している
薔薇月には10個、赤椿以外の残りにはそれぞれ8つつつ使用されている

ツヴァイに量子変換されている新装備たち（本編未出あり）

白式

新装備

白聖しろひじり

右腕に装備される装甲型レーザー

12発のレーザーが発射される、BT兵器ほどではないがホーミング

性能がある
ゆきひらさんのかた

雪片参之型

雪片式型の後継刀、モードがノーマル含めて4つある

淡雪あわゆき

零落白夜の矢を放つ弓

一度に4本の矢を発射可能

雪風ゆきかぜ

双剣、零落白夜を使用すると刀の一部がパージされて自動の盾になる

春雪しゅんせつ

楓がおふざけで作ったライフフル

零落白夜のレーザーを放つことができる

先端には銃剣が付いており槍としても使うことができる

パッケージ

白光^{びやくくわう}

パッケージというより零落白夜専用のエネルギーパック

これによりシールドエネルギーを使用せずに零落白夜を使用できる
シールドエネルギーに回すことも可能

白夜^{びやくや}

元々のスラストの先端にBTのようなビットを装着することで多^{マル}
チ・イグニッション・ブースト段瞬時加速が出来る、またその時かかるGも完全に相殺することができる

ブルー・ティアーズ

装備

BT? (ブルー・ティアーズ?)

詳細はBTver?を参照

タクティクス

近接用のブレード

持ち手に引き金がありそれを引くと蛇腹剣となる

B 0 8

マシンガン、一秒間に800発放つ、弾幕用

B M 0 8

B 0 8のマガジン

パッケージ

B T v e r ?

B T ?を8基追加し、下のB Tをスラスターにすることで火力と機動力を両立させたパッケージ

B T 2は完全自律機動兵器なので大まかな指示さえ出せば自動で攻撃してくれる

フレキシブル
偏向射撃は高稼働時でなくとも自在に操ることができる

甲龍

Leon

楓が昔に渡したツヴァイに量子変換されていた人工AI
椿姫の弟にあたる

戦闘時のサポートはもちろんハッキングもできるしネットから料理
のレシピなどを検索してきてくれたりする高性能AI
椿姫の意思達と会話をすることもできる
具現化後の動物はちっちゃいライオン

双龍刃・銀しろがね

双天牙月の小型形態のようなもの
しかし、牙月より威力が高い

人物&IS紹介（後書き）

チートだけど気にしたら負けだぜ！！

残りのパッケージなどは思いつき次第掲載します
まだ出てないけどいつか出る

2話

邂逅、セシリアの暴走（前書き）

この小説では

・鈴音がまだ来ていない

・ラウラはそこまで一夏を恨んでいない（千冬にそこまで執着していない）

・セシリアに「貴族モード」がある（原作での最初の状態）

・シャルロットの男装の件がない

等の変更点があります

2話

邂逅、セシリアの暴走

「ここがお前らの教室だ、紹介をするから合図したら入ってこい」
1年4組の前に到着し、千冬が楓達に伝える

「はい」「了解」

楓とカエデは短く返事したあと、どちらが先に自己紹介をするかの
ジャンケンを始めた

「ジャンケンはいいが静かにしろよ」

そう言い残して千冬は教室に入っていた

side 一夏

「朝のSHRを始めるぞ、席に付け」

千冬姉が入って来た

それと同時に席を立っていた生徒が高速で自分の席に付く、相変わ

らず高速だな

「もう知っていると思うが今日から編入生が二人くる、入ってこい」
くガラガラガラく

千冬姉がドアを開ける

そこにはいまにもドアを蹴り破らんとしている男とそれを羽交い締めにして必死に止めて居る女が居た

「何をしている、朱雀」

「出会い頭のインパクトが肝心かなと」

「それで楓がドアを蹴り破ろうとして・・・」

スッパアアアアン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

千冬姉の出席簿^{かたな}が火を吹いた

side out

side

楓

千冬先生が教室に入ってから俺は呟いた

「なあ、カエデよ」

「なに??」

「出会い頭のインパクトって大事だと思うんだ」

「たしかに大切よね、でもどうするつもり??」

「ドアを蹴っ飛ばす」

「ちょ・・・」

そこまで言って足を振り上げる

「か・・・楓!! 止めなって!」

そのまま蹴ろうとしたとき、カエデが羽交い締めにしてきた!!

「な・・・お前!! やめろ!! くっつくな!!」

「じゃあ蹴ろうとしないで!!」

本気を出せば振りほどくことなど容易だができるだけカエデに乱暴なことはしたくない、なのでじたばた暴れる

「とりあえず離れろ!!」

「じゃあやめて!!」

「やめるから離れろ!!」

「先に足を降ろして!!」

くガラガラガラく

「何をしている、朱雀」

おおっと千冬先生の登場だァー

「出会い頭のインパクトが肝心かなと」

「それで楓がドアを蹴り破ろうとして・・・」

スッパァァァァン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

千冬先生の持っていた出席簿でひっぱたかれる・・・どんな素材で出来てんだあれ、絶対普通の出席簿じゃないだろ・・・強化素材もしくはISの装甲の素材かなんかで出来てそうだ

「入れ、朱雀、白石」

人外の威力で俺をひっぱたいたあと、教室の中に招き入れる千冬先生

「ホーイっと」

そろそろ・・・

「始めますか」

s i d e

o u t

楓が先頭で二人は教室に入る

「えっと・・・白石カエデです。よろしくお願いします」
カエデが先に自己紹介をする

「好きな事は散歩と読書で、好きな花は薔薇です」
カエデが自己紹介を終える

「白石、お前の席は窓際の後ろから二番目だ」
「はい」

千冬がカエデの席を指定、それに意義を示さずしたがうカエデ
「次は俺か・・・朱雀楓だ、好きなものは刀、好きなことは読書と
鍛錬、好きな花は椿だ」

言いたいことをひたすら羅列する楓
しかし二人を除いて固まっている

『・・・・・・・・き』

「ちょっと宜しくて?？」

午前中の授業が終わって休み時間^{ちゆうしよく}

一心不乱にノートに新しい武器の設計図を書いていた楓に声がかかる

「あ、セシリアが貴族モードだ」

その前の一夏の席のシャルロットが気づいて呟く

貴族モードとは原作1巻の最初の方の一夏に対するセシリアの態度のことだ

セシリアはおふざけでこのモードを使用することが多い

「よろしくない、忙しい」

セシリアを見もせずに答える楓

するとセシリアは大げさなリアクションで

「まあ!! なんですのその態度は? この私に声をかけられること自体が光栄なことだというのに!!」

「セシリア・・・」

一夏決壊寸前

「あっそう、とにかく忙しいんだからお前みたいな奴と喋ってる暇ないの」

やっぱりセシリアを見ずにノートに集中したまま答える楓

「あの、楓は今忙しいので要件なら私がかわりに聞きますから・・・」

見かねてカエデが間に入る

「私が声をかけたというのに光栄に思わないなんてやはり極東の猿には言葉が通じないようですわね!!」

セシリアがカエデを無視して露骨に挑発する

しかし

「うきーうきー」

楓は猿の真似をして挑発に乗らない

「あなた・・・身の程を知らないようですわね!!」

自分から仕掛けたのに先にキレるセシリア

ISを腕の部分だけ展開して武器を呼び出すコール

「ぶっ・・・くく・・・」

一夏が我慢の限界に達しているのをシャルロット達が頑張って抑えている

「うるさい、固まってきたアイデアが霧散する」

ここまで来てもいつも通りの楓

「ゝ!! 喰らいなさい!!」

ついに本気でキレて引き金を引く!!

「・・・うるせえつつてんだよ」

セシリアの放った弾を楓の手に現れた何か^{……}が切り裂いた
「忙しいって言ってんだろ？日本語通じねえのか？なら」

楓が一呼吸おいて

「I must be not busy, and not obstruct it.」

英語で拒絶の意を示す

「・・・な・・・なんですって??」

セシリアは動かない

否、動けない

なぜならセシリアの首にはひと振りの日本刀が当てられていたからだ
「・・・よし」

日本刀を収納して満足そうな笑みを浮かべる楓

「出来たの？楓」

「おう、今のがさっきまで作っていた椿姫の武装「莖」だ」

辺り一面真っ白になっているのを気にせず楓とカエデが話し出す

「な・・・なんですの一体!!」

いち早く色を取り戻したセシリアが突っ込む

「そういえば何か話することがあったみたいだな、どうしたんだ？オルコット」

楓は先ほどとは違い親しげにセシリアの方を向く

「え・・・えっと・・・こ、こほん!!この私に声をかけられたことを少しは光栄に思いなさい!!」

あまりの変化に戸惑いながらも貴族モードに戻るセシリア

「なぜだ??」

楓は首をかしげる

それでクラスの半分くらいの女子が鼻血の海を形成した

「それは・・・私が専用機持ちでかつイギリスの代表候補生だからですわ!!」

セシリア、復活

「ふうん・・・イギリスの代表候補生・・・専用機か・・・あそこは確か青い雫」
ブルー・ティアーズ

か？で、どこに光栄に思う要素が？？」

本気で分らないといった風の楓にセシリアが突っかかる

「ISのコアは世界に467個、それゆえに専用機持ちちはエリート中のエリートなのですわ！！この意味が理解できて？？」

勝ち誇った顔のセシリアに楓はキョトンとして

「ISのコアは469個あるぞ？？完全体でないなら後50はあるな」

クラス全体が静まり返る

全生徒から「何言ってるのこの子は」的な視線が楓に送られている
「そんなはずありませんわ！！ISのコアを作れるのは世界で束博士ただ一人の「俺も作れるぞ」へ？？」

ISのコア、それは完全なブラックボックスで今のところ唯一コアを作れる束でさえも完全には理解できないほどの物

それを、まるで缶ジュースの蓋を開けるかのように作れるといった楓

「あなたが・・・コアを作れる？？」

「成功したのは2つだけだけだな、あとは完全じゃないからサブとして使ってる」

「ありませんわ・・・なら証拠を見せてみなさい！！」

あくまで認める気はないセシリア

「いいけど今は無理だ、放課後かなんかに遊んでやるよ」

そう言い残して立ち去ろうとする楓

「ちょっと！！どこに行きますの！！逃げるおつもり？？」

セシリア、憤慨

「ばーか、トイレだよ」

実は最初の方から我慢し続けていた楓でした

2話

邂逅、セシリアの暴走（後書き）

楓「次回予告だな」

作「いろいろ混ざってるけど気にしないでください」

楓「作者は中二病だもんな」

作「そのおかげでこの小説が出来ただけだな」

楓「次回はどうなるんだ??」

作「お前のISお披露目とセシリアとのバトルだ」

楓「面白そうだな!!」

作「次の更新は多分3日後位だな」

3話

V S セシリア・オルコット

く椿の騎士は超絶チートく (前書き

という訳でセシリア戦です

おかしいところもあるかもしれませんが温かい目で見ていただけると幸いです

3話

V S セシリア・オルコット

（椿の騎士は超絶チート）

「放課後にでも遊んでやるよ」

この言葉通り楓とセシリアは放課後に勝負することになった

「本当にやるのかよ・・・」

一夏が呟く

時は放課後、第3アリーナに一夏ハーレム（シャルロット、箒、ラウラ）とカエデがアリーナの端に座っている

真ん中には

「逃げずに来たようすわね」

得意顔のセシリアと

「眠い・・・」

超眠そうな楓が向かい合っていた

「カエデ、なんで楓はあんなに眠そうなんだ？？」

一夏がカエデに問いかける

「疲れているだけですよ、グラウンドを3周してましたから」

当たり前のように言うカエデ

『グラウンドを3周！？』

IS学園のグラウンドは1周が普通の高校とは比べ物にならない大きさだ

だいたい5キロ位である

それを3周、つまり

「ここに来る前に15キロ近く走ってたって事か！？」

一夏、驚愕

「ちなみに何かの罰ではありませんよ？」

「罰じゃ無いのに走ったのか・・・」

一瞬エムなのではないかと疑った一夏であった

「眠みいから早く初めて早く終わらせようぜ」

今にも倒れてしまいそうな楓のったり呟く

セシリアも含めた観戦者（一夏たち）が（のほほんさんみたいだな・
・）と思ったのは間違いないだろう

「楓がやばいので始めましょうか、お互いISを装着してください」
カエデの声を合図にお互いがISを装備する

「ブルー・ティアーズ！！」

先に装着したのはセシリア

みんなご存知イギリスの第3世代型IS「ブルー・ティアーズ」だ
一方楓は・・・

「ティアーズは遠距離型か・・・」

先程までの行動が嘘のようにしゃっきりしている

「早くISを装着して！！」

「ったく・・・〔椿姫、おいで〕」

カエデに急かされて装着する楓

「あれが・・・朱雀君が作ったIS・・・」

シャルロットが思わず呟く

一夏は反応できない

「なんだ・・・あれ・・・」

なぜなら

「白式にそっくりじゃないか・・・」

楓のIS「椿姫」は白式にそっくりなのだ
色はクリムゾンだが

「両者、指定の位置まで移動してください」

カエデは本物の試合並みに段取りを運ぶ

二人が移動し終えたのを確認して

「それでは試合開始！！」

こうしてセシリアVS楓の勝負が始まった

「レディーファーストだ、来いよ」

セシリアに親切と言う名の挑発をかける楓

「後悔しますわよ」

セシリアが手にしている大型ライフル「スターライトmk？」を楓に向けて引き金を引く

「おっせえの」

連続で放たれるレーザーをくるくる回りながらよける楓

「舐めない方がいいですわよ！！ティアーズ！！」

セシリアがブルー・ティアーズを展開した

「おお、増えた」

ブルー・ティアーズを見て感心する楓

「踊りなさい！！このセシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！！」

「ワルツなんざ踊ったこと無えヨ」

5本に増えたレーザーの雨を紙一重で躲していく楓

しかし躲しきれずに何発かかすってしまいシールドエネルギーがじ

わじわ減っていく

「先程までの威勢はどうしましたの!!」

「くっそ・・・厄介だな」

じりじり押され始める楓

「楓が押され始めたぞ!!」

一夏が焦る

「大丈夫です、楓は遊んでいるだけです」

きっぱりと言い切るカエデ

「でもギリギリ躲せてるようにしか見えないよ??」

シャルロットが? マークを頭上に作成しながら尋ねる

「おそらくわざとやっているのだろう」

シャルロットの疑問に答えたのは今まで一言もしゃべらなかつたラウラだった

「人が一番油断するのは自分の勝利を確信した時だ、だからあえてセシリアを油断させようとしている、といったところだろう」

「正解です」

ラウラの分析は当たっていた

(そろそろシールドエネルギーがいい感じになるな)

楓のシールドエネルギーは残り10、いい感じも何もあつたものではない

(朱雀楓の残りのエネルギーはほとんど無い、これなら行けますわ!!)

楓の思惑にはまったとも知らずにセシリアは油断する

その時、一陣の風が吹き抜けた

「そろそろ遊びは終わりにしようか」

セシリアのすぐ後ろに楓が居る

「な・・・あの一瞬で・・・」

イグニス・シヨースト

「瞬時加速さ、最も俺のはそれ以上だがな」

楓はエッヘンと言った感じに胸を張る
しかし

「掛かりましたわね」

セシリアの腰の部分からミサイルが発射された

「ブルーティアーズは6機有りましてよ!!」

「なんですとお!？」

刹那、楓の体は爆炎に包まれた

「楓!!」

一夏が身を乗り出す

「平気です、シフトチェンジ形態変化しました」

「シフトチェンジ形態変化??なにそれ」

シャルロットがカエデに問いかける

「昼休みに言っていたでしょう? 未完成の小型のコア・・・」コア・

ツヴァイ」を楓は作ることができると、それを利用したISのモ

ドチェンジ・・・厳密には違うISに切り替える・・・それが^{シフトチェンジ}形態変化」

カエデの説明の終わりを見計らったかのように楓の周りの煙が晴れる、そこには

「そして今回楓が使用するモードは、赤き^{シューター}狙撃手」

楓とカエデの声がシンクロする

「「椿姫・赤梅」」

深みのある紅では無く明るい赤の椿姫を纏った楓が立っていた

「なんですの・・・まさか、^{ファーストシフトチェンジ}一次形態移行??」

「違うな・・・これは、^{シフトチェンジ}形態変化だ」

セシリアの予測は外れた、楓はギリギリで躲していたのではない、わざとギリギリで躲することによりセシリアの油断を誘ったのだ

「ここからは一方的な蹂躪だ、これから俺はお前の攻撃を受け付け^{ワンサイドゲーム}

ない」

楓の宣言と同時にセシリアを5つの赤いレーザーが貫いた

「なっ・・・」

「どうした？おかしなもんでも見たか？？」

セシリアが驚愕するのも無理はない、楓の周りに浮遊しているビットのようなもの

それはまるで・・・

「ブルー・ティアーズ・・・？」

「残念、いや、惜しいな、これはブルー・ティアーズじゃなくてそれをもとに作ったもの「クリムゾン・ティアーズ」ってところか」

外見こそブルーティアーズにそっくりだが色がクリムゾンだ、

「そういえば偏向射撃^{フレキシブル}出来るんだっけか？？」

すると楓はあらぬ方向にクリムゾン・ティアーズを撃った

「どこに・・・！！」

一夏が驚愕する

あらぬ方向に飛んでいったレーザーが「曲がった」

しかもセシリアの方向に

「きゃあああああっ！！」

「はっはっは（笑）」

楓はセシリアの悲鳴を聞いて大爆笑している

一方観戦している一夏たちは

『・・・・・・・・』

無言だった

「一方的な蹂躪どころじゃないよあれ・・・」

シャルロットが口を開くと

「いじめだろあれ・・・」

一夏が続け

「止めたほうがいいのではないか??」

箒も事の重要性が理解できたようだ

「・・・・・・・・」

カエデは無言でハンドガンを構えて

「アビス・グラトニー噛み殺せ、暴食の闇」

楓の方に躊躇いなく撃った

ハンドガンとは思えない太さの黒いレーザーが楓を襲う

「あっはっは・・・ってええ!？」

セシリアをいじめていた楓が黒いレーザーに飲み込まれ、椿姫が解除されたために地面に向けて落下を始める

『あ、落ちる』

カエデをのぞく全員がシンクロした

「そういえばシールドエネルギーが殆どなかったっけ・・・」

一夏たちがシンクロしている間に薔薇月を展開していたカエデが楓を抱えながらぼやく

「カエデ・・・何するんだよ・・・」

「黙りなさい、後でオシオキよ」

「なんでだよこのひんにゆ・・・ぐはっ」

「オシオキの内容追加ね」

楓が何か言おうとしていたが言い終わる前にカエデによって黙らされた

そのままピットへと戻ってゆくカエデ

残された一夏たちは呟く

『なにこのグダグダ感・・・』

翌朝

楓とカエデは学校を休んだ

楓たちの部屋からは一日中楓の悲鳴が聞こえていたそうなの

さらに次の日・・・

「オルコット、いや、セシリア」

「なんですの？朱雀さん」

セシリアに楓が話しかける

「渡したいものがある」

「なんでしよう??」

セシリアの態度はどこか素っ気ない

「セシリアもあんなに意固地になって貴族モードのまま居なくて
もいいのに・・・」

その様子を見てシャルロットが呟く

「いじめられたからな」

「しかも一方的に」

箒とラウラが息のあった連携でセシリアを軽くイジる

「結局勝負の結果は付かなかったからなあ・・・」

一夏は一昨日の戦闘を思い出す

「平気です、仲直りするつもりですから、楓は」

『カエデ!?!』

いきなり現れたカエデに驚く一夏達

「昨日ちようきょ・オハナシしましたから」

今明らかに違うことを言いかけたが突っ込むべきではない

「これだ」

楓が取り出したのは大きな箱

「なんですのこれは」

「開けてみる」

セシリアが開けると・・・

「・・・」

また箱が入っていた

「それも開けてみ」

「え、ええ・・・」

開けるとまた箱

それを開けても箱

また箱

また、また、また・・・

「おちよくっていますの?？」

「いや、次で最後だ」

ちよっとうんざりしながらセシリアが箱の蓋を取ると・・・

「ビー玉?？」

ビー玉のような玉が5つほど入っていた

「あなたは小学生ですか?？」

「それを持ってみろ」

セシリアが5つの玉を手に乗せると・・・

『「B T v e r ?」 「タクティクス」 「B O 8 及び B M O 8」、量
子変換開始』

セシリアの目の前にウィンドウが現れる

「これは・・・なんですの?？」

「それが俺の言った未完成の小型化コア「コア・ツヴァイ」だ、中
にはパッケージが一つと武器が4つ入ってる」

楓の説明が終わると同時に量子変換が終わり、ツヴァイは手のひらに吸い込まれるように消えていった

「こんなんで罪滅しになるとは思っていないが・・・俺はお前と仲良くなりたんだ、セシリア」

楓がセシリアに向かって手を伸ばす、それをセシリアは
「パン！！」

はたいた、それも笑顔で

「・・・・・・・・」

うつむく楓にセシリアは

「・・・今のでおあいこですわ」

楓の手を取り、ニツコリと微笑む

「これからもよろしくお願いいたしますわね、朱雀、いいえ、楓さん」

「ああ・・・こちらこそよろしく」

その時クラス全員から拍手が起こる

「とっくに朝のSHRの時間なのだが？」

しかしそれはほんの5秒ほどだった、すぐに鬼教師ちふゆが入ってきたからだ

「朱雀、お前にはグラウンド5周を命じる・・・と言いたところだが」

この世の終わりみたいな顔をしていた楓に千冬は

「今回は大目に見てやる、私もSHRの時間に遅れてしまったからな」

実は感動のシーンに水を差したくなかったために教室の外で待っていたのだが楓は知る由もない

「さあお前ら席に付け！！今日は2組と合同で起動テストを行うぞ！！」

今日も、一日が始まる

~~~~~

「ついに来たわよ・・・IS学園・・・」

楓とセシリアの友情シーンの少し前、IS学園の門の前に一人の少女が立っていた

小柄で発育不良な体、風にさらされなびくツインテール

「待ってなさい一夏・・・それと」

なぜかそこで一呼吸おいて

「楓・・・」

楓の名前をつぶやく、その少女の名は

「リベンジしてやるんだから・・・」

中国の代表候補生、凰鈴音だった

### 3話

VSセシリア・オルコット

く椿の騎士は超絶チートく

(後書き

という訳でセシリアが仲良くなりました

そして鈴登場です

なんで楓の名前を知っているのかは次あたりに書きたいと思います  
セシリアの新装備たちはいずれ書きたいと思います



## 4話

ファーストコンタクト、カエデとの出会い（前書き）

鈴と楓、楓とカエデの邂逅です

ごっちゃりしていますが気にしたら負けです

## 4話

### ファーストコンタクト、カエデとの出会い

side（鈴）

日本を離れてから1ヶ月

親の離婚がきっかけで日本を離れることになって、あたしはずいぶん不機嫌になっていた

日本には一夏・・・ゲフンゲフン！！とにかく！！かなりクサクサして、一夏に約束した酢豚の練習しかしていなかった

その日も同じように酢豚の練習をしていたときにアイツはふらりと店にやってきた

「よう」

「・・・」

気さくに話しかけてくるが鍋を操りながら喋れるほどあたしは器用じゃない

しばらくすればお父さんが・・・そういえば居ないんだっけ

「無視ですか？？」

「・・・」

どうせ冷やかにでも来たんだろう、ここ1ヶ月はそういった輩が多かったから今話しかけてくる奴もきっとそうだ、日本人ならそんな・・・日本人？？

思わず鍋を振る手を止めて声の主を見る

「やっと反応してくれたか、寂しくて泣いちゃうところだったよ俺」  
自分の目を疑った

それほどまでにそいつの姿は日本人離れ、いや人間離れしていたのだ  
髪は血を浴びたような赤で、瞳は右目が紅、左目が蒼とおよそ人としてありえないような出で立ちだ

まるで一夏の言っていたゲームの登場人物のような・・・

一夏で思い出す

「鍋! !」

「そっち! ?」

赤髪くん（今命名）が何か突っ込んで来ているが耳に入って来ない鍋の中身はというと

「あっちゃあ・・・」

「おお真っ黒コゲ」

ダークマターの完成だった

「また失敗した・・・」

「まあそんなにげんなりしなさんな」

あんたのせいよっ! !

そのツツコミをどうにかこらえて鍋の中のダークマターの処理をどうするか考える

「店員さん注文いいかい？」

「・・・なんでしょう」

半ば呆れながら注文を取る

「酢豚」

「今からお作りしますので「それでいい」へ？」  
今赤髪くんはなんて言った? ?

「それでいいよ、早くしないと冷めるぜ」

「でもこれは・・・」

「失敗したからって捨てていたらもったいないだろうが」  
赤髪くんの右目が輝きを潜めたように見えた

「どうなっても知らないわよ」

カウンターの下から皿を取り出して盛り付ける

ダークマターもとい酢豚の完成

「どうぞ」

「いっただっきまゝす、んぐんぐ・・・」

出した直後にがつつく赤髪くん

「うまい! !」

「嘘付け」

つつい素で突っ込んでしまった

「うん、嘘」

「あんたねえ・・・いくらなんでもはつきり言いすぎじゃないの？  
殴るわよ？」

「すまん、言いすぎた。たしかに炭の味しかないがこの酢豚に使  
われた食材たちの幸福と、お前が込めた思いは受け取れるだろ」  
・・・何か色々とおかしいのかしらこいつは

心って・・・あんたに対しての心じゃなくて一夏に・・・

「受け取れるわけないでしょ！！勝手なこと言わないでよ！！」  
自分でも驚いた

あたしはなんでこいつに怒りをぶつけてるんだろう

こいつは何も関係ないのに・・・

そのまま怒りに任せてひたすらに赤髪くんに対して暴言を吐きまく  
った

5分くらいしただろうか

赤髪くんはあたしの怒りをひたすら聞き続けてくれていたが、あた  
しの一言を聞いた瞬間にあたしを睨みつけた

「一夏とはもう会えない？？なんで決めつけんだ」

「日本にはもういけないし、遠いし・・・」

「じゃあそこから来た俺はどうなるよ？？お前と同じ年だぜ？？」

「どうせ親と来たんでしょ」

「親？？」

赤髪くんの顔に一瞬影が刺したことに気づき、地雷を踏んでしまっ  
たと後悔する

「親か・・・俺を生んだだけの奴を親というならあれが親なのか・・・  
でもフィオナが親代わりだし・・・

「あの・・・えっと」

「ん？ああ気にするな」

あたしが気まずそうにしているのに気づいたのか、赤髪くんは微笑む

「俺には親がいなかった、捨て子だったらしい」

赤髪くんはそこから自分の過去を語り始めた

「見てのとおりこの髪の色に瞳の色だ、俺を産んでから最初に言った言葉が「化け物」だぜ？？生まれてきた子供に言う言葉じゃあねえよな。それからしばらくしたときにいきなり俺を生んだ奴らが居なくなっちゃったんだ、そんなときまたまた俺を化け物扱いしなかったフィオナってシスターがいてな、そのシスターが今まで俺を育ててくれたんだ」

「そんな・・・」

赤髪くんの過去を聞いている間ずっと心の奥底で怒りがふつふつと湧き上がってくるのを感じた

カッとなる怒りではなく、黒くて冷たい怒り

「今俺の過去を聞いて怒ってるだろう？？」

「え？」

「今までこの話をしてきたやつは怒ったりしなかった、みんな「当たり前だ」って言うんだぜ？？」その出で立ちなんだから仕方ないって、ひっでえ話だよな」

あたしはその言葉に戦慄さえ覚えた

誰からも受け入れてもらえずに今までこの男はどれほどの孤独を味わっただろう

それが自分だったらと思うだけで発狂してしまいそうになる

「・・・名前」

「んあ？？」

「名前・・・なんていうのよ」

自分でも変だと思っている

今日知り合っただけのハズの男に・・・

「朱雀楓だ」

「その名前はシスターに付けてもらったもの？？」

「ああ、でもこれが、これしか俺の名前じゃない」

「そう、あたしは鳳鈴音」

ここまで懂れてしまうなんて

「おおとりすずね?」

「ファン・リンインよ!! どうしてそうなるのよ!!」

「そうか、じゃあ鈴だな」

「え?」

「鈴音だと囁むから鈴」

「え・・・ええ・・・」

これが、あたしと楓のファーストコンタクトだった

「そうだ鈴、今度酢豚の作り方教えてやるよ」

「いきなりなんなのよ、教えてもらわなくても出来るわよ」

「いんや、あれじゃあ一夏君は落とせない」

「な・・・なななんでアンタが一夏の事知ってんのよ!!」

「鈴が暴言吐きまくってる時に自分で言ってたぞ」

「止めなさいよ!」

「面白かったからつい」

「なによそれ!!」

・・・それから楓は毎日家に来てはあたしと一緒に酢豚を作ったり、遊びに行ったりした

そんな日々が続くこと2ヶ月、中学校に転入することになって、楓とはあまり遊べなくなった

それでも毎日のように楓はうちに足を運び、毎日あたしの酢豚を食べてアドバイスしてくれた

ある時あたしはIS適正を受け、高い適正を持っていることが分かった

楓に報告しようと思って楓の家に行ったときに見たものは

「ん??? 鈴、どうしたんだ??」

顔だけをこちらに向けてにこやかに笑う楓と

楓の周辺に散らされているISのパーツだった

「なに・・・これ・・・」

「知らないのか?? ISだよ」

驚いているあたしに向かって勝ち誇った笑みを向けてくる楓  
むかついたので足元のISの手を投げてやった

「いきなり投げるとかどんだけ!? 痛いんだよ!?!」

「何であんたが持っているのよ!?!」

「ああ、そのことか」

すると悪戯が見つかったようなばつの悪い顔になり、話し始めた

「俺はISのコアを創れるんだよ」

「ちよつと」

「なにさ」

「病院に行くわよ」

「どういうことだ!! 俺は電波じゃねえぞ!! 本当だ!!」

そういつて楓はビー玉のようなものを取り出す

「これがそうだ」

「ビー玉がコア?? ビーダマンでも作るつもり?」

「違うわ!! よく見てろ」

そういつて楓が左腕を真横に伸ばす

「何が・・・!!」

楓の手にISが装着された

「なんで・・・あんた男じゃなかったの!?!」

「真正正銘男だわ!!」

「証拠は??」

「見せられるか!! 何言ってるのあんた!! 俺を犯罪者へんたいにするつもりですか!?!」

「あ・・・」

自分が何を言ってるのか気づき、急に恥ずかしくなる

「ほれ、これが俺のデータだ」

そういつて楓は自分のデータをあたしに渡してくる

「本当に男なのね・・・ってIS適正S!?!」

「どんなもんだい!!」

ちなみにあたしの適性はA、Sって言ったら・・・

「ブリュンヒルデやヴァルキリー並みじゃない!! しかも男でって・・・」

「そうだ、このことは内緒な」

「何でよ!?!? すごいことじゃない!! 世界で初めてISが使えるなんて・・・」

「だからこそだ、世界に一人しかない男のIS使い、その意味はわかるか?？」

「すごい貴重なモルモット??」

「すごい殴りたくなったが・・・まあそんなところだ、つまり、今ここでこのことを公にすると俺の居場所がこの地球になくなるんだよ。それこそ束博士みたいに逃げ回る必要が出てくる」

やっぱり世界で一人だけって大変みたいね・・・

「この事を知っているのは、俺とお前、それにシスターフィオナの3人だけだ。世界に広められると俺は世界を敵に回さなきゃならなくなる、当然鈴にももう会えなくなるしお前がぞっこんの一夏君にも会えなくなる。いや、鈴とは会えるかもな」

「何でよ」

聞いてみたはいいがあたしには察しが付いている

「敵として」

やっぱり

「よくわかったな、IS適正Aの鳳鈴音」

「だいたいわかるわよ、適正Sの朱雀楓」

「だから公にはしないでくれ、もしそうになったら俺は・・・」  
（お前を殺さなきゃならなくなる）

楓の言葉の意味を理解できていない

もし公になったら戦う?? あたしと楓が??

「・・・わよ」

「どうした? 鈴」



「ぶざけるんじゃないわよ!! いつ、どこであたしがあんたの敵になるなんて言った?? なるわけないでしょうが!! それにあたしは誰にも言わない!! あんたを・・・あんたの家族を売るようなまねはしない!!」

「鈴・・・」

「だから信用しなさい!! あたしはあんたの・・・」

「伏せろ!! 鈴!!」

いきなり楓があたしに覆いかぶさってくる

くダダダダダダダダダダダダダダダダ!!!!!!!!!!

刹那、楓の家の屋根が吹き飛んだ

「朱雀楓、お前を拘束する」

外にいるのは・・・警察!?

「見つかった・・・ということは現実になっちまったか・・・鈴」

「・・・なによ」

「胸ポケットを探ってみろ」

「なによ・・・あ」

そこに入っていたのは・・・

「盗聴器・・・!!」

「なるほど、全部筒抜けだったわけだ、鈴も一枚かんだのか??」

「そ・・・そんなわけじゃない!! あたしが裏切るわけ・・・」

「黙ってる」

「・・・!!」

あたしに銃を向ける楓

「な・・・んで・・・」

「人間は一度裏切られると二度と本気で人を信じることができなくなる、そういうことだ」

「そ・・・んな・・・あたしは・・・何も・・・」

「わかってるさ、これは演技だ、後。」

楓はポケットからビー玉・・・コアをいくつか取り出してあたしに渡す

「これは俺からのプレゼントだ、お前が専用機持ちになった時に専用機に量子変換してやれ、きつとお前の力になってくれるはずだ、そいつはだれにも渡すな、いいな?？」

「うん・・・」

「いい子だ、じゃあ・・・」

「サヨウナラ」

「ぽあん!!」

楓の銃が火を噴く

それはまっすぐあたしに向かって飛んできて  
あたしは意識を失った・・・

side out

side

kaede

「サヨウナラ」

引き金を引く

銃口から飛び出したBB弾は鈴の眉間へと当たり、鈴が意識を失う

「『Leon』後は頼むぜ」

俺は鈴に渡したコアの1つ『Leon』に話しかける

『了解しました、マスター』

「お前のマスターは俺じゃない、そこにいる鈴だ」

『では、必ず生きてください、楓』

「お前もな、ばれるなよ??」

『無論です、必ずマスターは守ります』

「いい返事だ、じゃあ頼んだ!!」

『Leon』との会話を終えて、俺はISを装着する

「咲き乱れろ、「椿姫」」

甲高い音を立てて首輪がはじけ、体全体を粒子が覆う

「椿姫、終焉の闇だ」  
シャドウ・アビス

『いいのですか?? 負担が大きいですよ?? 鈴にも・・・』

「俺の体なら心配いらねえし鈴にはお前の弟であるLeonがついてんだ、心配いらねえよ」

『了解、「シャドウ・アビス」スタンバイ』

「さあ、ワンサイドゲーム一方的な暴虐を始めようかあ!! 近づくものすべてを破壊するこの危ない花に近寄るバカはどいつだあ!!」

椿姫の色がまるで闇のごとき黒に染まってゆく

同時に意識も持って行かれそうになる

《いい加減俺に預けろよ、その体ごと》

「冗談きついで!! お前は俺の一部だ!! 一部なら一部らしく俺に力を貸してなあ!!」

《・・・今回だけ、意識を引っ張らないでやる。宵闇の活動限界がなくなるが相当体力を使うからな、本当に危険なら俺に任せろ、今回だけはちゃんと仕事してやる》

「いつになくやさしいじゃねえかあ!! 共感でもしたかあ??」

《鈴を守りたいお前の気持ちにな、今回だけだ、無理はするな、危険だと感じたらすぐに俺が出る》

「本気で危なくなったらなあ!!」

破壊された家から飛び出すと警察と思しき人間がこちらに銃を向けている

「そんなちゃっちいもん何ぞ効きゃしねえんだよお!! 吹き飛ばせ!!」

宵闇の武装「妖無」を構えて横一文字に振る

それだけで10人は吹き飛ば

「取りあえず命が惜しいものは今すぐここから立ち去れ!! このことを口外したやつは破壊する!!」

その一言でトップと思わしき女をのぞいて逃げていく

「お前は逃げないのかあ??」

「私の仕事はお前の捕獲だ」

「もはや人として扱ってもくれねえってかあ?? 上等じゃねえかあ!! その体をズタズタに引き裂いてやんよお!!」

「さてさて、話は最後まで聞きなさい」

「こっちは早く殺したくてうずうずしてんだよお!!」

「あなたホントに人間なの..?」

「人間だよ失礼な」

とりあえず宵闇を解除、椿姫に戻す

「さっきまではハイになってただけだ」

「とりあえず話を聞いてもらえるかしら??」

「聞くだけなら、不審な動きを見せたら即座に斬る」

「先ほども言った通り私たちの任務はあなたを捕獲...いえ、中国に拘束すること」

「ほうほう、でもあの武装でやんのは無理だろ、相手はIS使いだぜ??」

「そこは...まあ置いといて」

「置いとくんかい」

「単刀直入に言うわ、私にISをくれないかしらずっこけた」

「どうしてそうなるんだよ」

「だって楽しそうじゃない」

もう一回ずっこけた

「楽しそうって・・・」

「自由に大空を飛べる・・・いいわぁ」

「っーかお前何歳よ」

「14よ」

「同い年かよ!! それにしては・・・小っこいな」

「あなたもね」

「名は??」

「私の名前は白石カエデ、よろしくね」

「同じ名前なのか」

「そうなのだ」

こいつのテンションについていく自信がねえ

「いいのかよ? 警察が犯罪者・・・いや、貴重なサンプルと一緒にいて」

「いいんじゃない?? さっき辞表提出したし」

「いくらなんでも早すぎやしねえか!? 俺が断ったらどうするつもりだったんだよ・・・」

「洗脳してでも一緒に行くわよ」

「さりげに怖いこと言わないで!!」

「とりあえずこれからよろしくね」

「確定なの!?! まあいいけどさ・・・」

これが俺とカエデの出会い、ここからずっと俺はカエデと一緒にいた  
舞台は現在に戻るのだ



## 4話

### ファーストコンタクト、カエデとの出会い（後書き）

何なんでしょうね・・・

もう自分でも何が何だか・・・

何でA Iが出たんでしょう・・・

カエデが警察って・・・都合いいにもほどがあるし・・・

楓がハイになると性格変わるのとは考えてましたけどね

とりあえずI S設定のところに追加しますんで

次回は鈴が転入したところからです

## 5話

鳳鈴音襲来、椿姫、具現化する（前書き）

今回はよくわかりませんよ？？（作者が）



## 5話

### 鳳鈴音襲来、椿姫、具現化する

「なあ楓」

一夏が楓に話しかける、時は朝休み、セシリアと楓が戦った翌日である

「何の用だ織斑」

しかし楓はそっけなく返す、しかもにらむ

「一夏でいいって」

「断る」

「なんでだよ・・・」

拒絶されてがっかりしている一夏の後ろからセシリアが楓に話しかける

「楓さん」

「セシルか」

一夏びっくり

「セシル!？」

「あだ名だ」

「そうですわ」

「どれだけ仲良くなってるんだよ・・・」

「楓は基本的に一戦交えないと仲良くしないからねえ・・・」  
カエデが一夏のフォローに入る

「それじゃあ戦えばいいんだな!! 勝負だ楓!!」

「合計IS搭乗時間は?？」

「そんなのがんばってカバーすればいい!!」

「まさかとは思うがろくな練習もせずに戦う気じゃなからうな、それならやめてくれ」

「なんでだよ」

「壊さない自信がない」

『・・・・・・・・』

楓まさかのISぶっ壊せる発言だった

「どうしてもって言うなら織斑が専用機、俺が生身で相手してやる」

「そんな・・・そんな危ない真似できるわけ・・・」

「それで対等だって言ってるんだ」

「楓にとって今の俺にはISを装着するまでもないっていうのか！  
！」

「まあだいたいそんな感じだ」

一夏ハーレムに黒いオーラが漂う

「どうせならカエデ以外の専用機持ちと俺でもいいぜ、そのほうが手っ取り早い」

「つまり貴様は私たち全員を相手取って勝てるというのか??」

ラウラが普通の人間なら卒倒するほどの殺気を楓にぶつける

「ぬるいぜ」

「・・・!!」

ラウラの殺気を受けて平然としていられ、かつそれを上回る殺気をラウラにぶつけ返す楓

「セシル、お前はどようする??」

楓がセシリアに問いかける

「私は・・・参加させてもらいますわ」

「ほお・・・どうしてだ??一夏のためか??」

「ち・・・ちがいますわ!!楓さんに貰った武装のテストをしておきたいだけですわ!!」

楓がにやにやしている

「セシルは決定、お前はどようする??デユノア」

「私は・・・参加するよ」

「動機は??まさか・・・」

瞬間、楓の額に「レイン・オブ・サタデイ」の銃口が向けられた

「何か言った??」

「イエ、ナンデモアリマセン」

さすがに楓でもゼロ距離で銃弾を浴びれば死ぬ

「セシルにデュノア、お前は どうする？？ 黒ウサギ」

「ふん・・・ 貴様にかまっていられるほど私は暇ではない、辞退させてもらう」

「どちらにしろ観戦はしてもらうから乱入でも構わないんだがな・・・ 篠ノ之、お前は？？」

「参加だ」

「了解、カエデは審判な」

「はいはい・・・ っと」

「千冬先生」

「織斑先生と呼べ」

「やです、放課後にアリーナ3のシールドレベルを最大にあげても  
らえますか？？」

「なぜだ」

「俺対こいつらでいじめするんで」

「いじめって・・・」

カエデが嘆息する

「模擬戦程度ならそこまでシールドレベルを上げる必要はないだろ  
う」

「必要あります、俺が全力を出すと軽く壊れます、まあ使うことは  
ないと思いますが一応」

「篠ノ之は後で訓練機の使用申請を出しておけ、いいな」

「ほいほい」

「スッパアアアアアン！！！！」

「返事はいいだ」

「はい・・・」

「あの楓を従わせるとは・・・ 恐るべし・・・」

別の意味で驚いたカエデだった

「授業を開始するぞ、席に着け」

授業が始まった

「この時間はクラス代表を決める」

「クラス代表って何すか??」

楓が質問する

「ヒュオン!!」

楓の脳天に振り下ろされる出席簿、回避する楓

「クラス代表というのは簡単に言ってしまうえばクラスのリーダーの  
ようなものだ」

「まんまじゃねえか」

楓がつっこむ

「ヒュオン!!ズガアッ!!」

今度は振り下ろした後横に薙ぐ、ギリギリ回避する楓

「自薦他薦は問わない、一年間自分たちのリーダーになるのだから  
よく考えて決めろ」

「推薦された場合の拒否権は」

楓がまっとうな質問をする

「パシィッ!!」

再び脳天に振り下ろされる出席簿、白刃取りする楓

「今のはまっとうな質問でしょうが!!」

「む、すまない。ちなみに推薦されたものに拒否権はない」

「ほお・・・にやり」

「朱雀君が不吉な笑みを・・・」

楓が悪だくみの顔をしているとシャルロットがつっこむ

「先生!!織斑君を推薦します!!」

クラスの女子が一夏を推薦する

「え!?!俺!?!」

「お前以外にだれがいる?織斑先生か?」

「私もそれがいいと思いまーす!!」

「私もー!!」

次々に女子が一夏を推薦する

「何で俺なんだよ!!」

「だって・・・」

『男だし』

「すごいシンクロ率です!! エヴ○初号機、行けます!!」

「ネタに持ってくな!! 楓!!」

唐突にネタを挟んできた楓に突っ込む一夏、と

「男だってんなら楓はどうなんだよ」

「げ・・・」

『そういえば』

「先生、俺は楓を推薦します」

「なっ一夏てめっ!!」

「あ、今一夏って」

「お・・・織斑ふざけんな!!」

シャルの鋭い突っ込みに一瞬たじろいだ後即座に呼びかたを直す楓

「他にはいないのか?? いないなら二人に模擬戦をやって決めてもらうが・・・」

千冬がそれを行った直後にクラスの数人の目が光った

『私も立候補します(わ)!!』

というかシャル達だった

「他にはいないな? なら一週間後にクラス代表決定戦を行う、方法は・・・」

「バトルロワイヤルで」

千冬の言葉をさえぎるように楓が立ち上がる

「今日やろうと思ってたけどちようどいい、だろ?」

「・・・好きにしろ」

楓の不敵な笑みに千冬が嘆息する

「一週間の猶予があるんだ、ちよっとは強くなってくれよ。退屈な

のは嫌だぜ??」

楓が挑発する

「あとでどうなっても知らないよ??いくら強いからって代表候補生3人相手に勝てるとは思えないけどね??あまり調子に乗らないほうがいいよ??」

シャルが反撃する

「負ける気はねえから安心しろ、あとセシル、放課後に追加武装の説明をするからアリーナ2に来てくれ」

「わ・・・わかりましたわ」

『・・・』

それはそれはカオスな光景だった

side 一夏

「どうして楓は俺と仲良くしてくれないんだろう・・・」

「いいんじゃない??あんな奴」

昼休みにシャルとご飯を食べながら話しているとクラス的女子（

名前は忘れた）が話しかけてくる

「そういえば2組に転入生が来たみたいだよ」

「転入生ねえ・・・どんな奴??」

「えっと・・・ツインテールでつる・・・」

「一夏あ!!」

クラスの子が特徴を上げようとしたときに聞き覚えのある声がかぶる

「鈴・・・？」

「久しぶりね、一夏」

「誰？？織斑の知り合い？？」

飲み物を買に行っていた楓が近づいてくる

話しはしないが頼めば簡単な手伝いはしてくれる

「ほい、コーラ。デュノアは紅茶な、ミルクティー」

「ありがとう」

「さんきゅ」

短く返事を返してもう一度鈴を見る

「鈴なのか??」

「そうよ、何回言ったらわかるの??」

「まだ一回しか言っていないし」

「うるさいわよ楓！！黙ってなさい！！」

鈴が楓を殴る……ん？

「知り合いなのか??」

「そうよ」

「いやこれっぽっちも知らん」

なんじゃそりや・・・

「忘れたっというの!？」

「誰だ??」

『やれやれ・・・まさかとは思つたが忘れてるとはねえ・・・兄さんは覚えてるだろう?』

突然頭に声が響く

『Leonか……久しぶりだな』

今度は楓の方から声が聞こえる

「Leon?? だって事は・・・」

「思い出したようね」

「ツインテつるぺた娘か！！」

ドゴシヤア!!!!!!!!!!!!

どんなえげつない攻撃をしたかは想像にお任せする

「そんなネーミングで呼ばれた覚えがないわよ!!」

「ああ、鈴か」

「今のどのくだりに思いだす要素があったの!？」

「突っ込みで」

「あたし!! 突っ込みみたいなこと言っただけじゃないわよ!!」

おうおう、言い合いを始めてしまったぞ

「とりあえず落ち着けよ、な?？」

「う・・・」

おとなしく従う鈴

「冗談だよ、久しぶり、鈴。酢豚のレベルは上がった??」

「ええ、うまくなったとおもうわ」

「ん?? 面白いえば作ってたときにだれかに食べさせるって・・・」

「黙りなさい」

「のわっ!!」

楓が鈴の裏拳を喰らって黙る

「それより一夏、クラス代表は誰なの??」

「まだ決まってる」

「あっそ、こっちはあたしだから」

自分から聞いたという興味なしですか・・・

「楓、その子は誰??」

「あ?・・・のわっ!!」

楓の後ろにはいつの間にかカエデがいた

「はじめまして、楓の半身の白石カエデです」

「いつどこで俺の半身になったんだよお前は!!」

楓が突っ込んでいるがカエデは気にしていない

「同じ名前なのね・・・あたしは鳳鈴音」

「おおとりすずね??」

「ファン・リンインよ!! 名前の間違いも楓と一緒にだし!!」

「面白いえばあの襲撃の時にいた警察のトップがカエデだ」

どうやら三人だけの世界に入ってしまったようだ



「一夏、あいつは誰だ、知り合いか??」

箒が聞いてくる

「あいつは鳳鈴音、箒とちょうど入れ換わる形で転入してきたんだよ」

「なるほど・・・」

「それより一夏、約束、覚えてる??」

「約束??」

やくそく・・・約束・・・あ!!

「あれか?? 大きくなったら酢豚を・・・」

「それそれ!!」

「おごってくれるんだったか??」

「・・・へ??」

「あほ、はずれだよ。酢豚を毎日食べてくれるかってやつだ」

楓が教えてくれる、ん??

「どうして楓が知ってるんだ??」

「鈴と会ったときに地雷踏んで勝手に喋ってくれた」

「黙りなさい」

「すいませんでした」

鈴に睨まれて黙る楓

「とにかく覚えているのね」

『覚えてるっつーより今思い出したってとこだろ』

「いいのよどっちでも!! Leon!!」

「Leon?? そういえばさつきから鈴と楓のほうから声が聞こえるんだ??」

「そりゃ喋ってるんだから当たり前やがな」

「そうじゃなくて・・・別の声が聞こえるんだよ」

楓と鈴で顔を見合わせた後、残念な子を見る目で俺を見る

『かわいそうに・・・』

「頭がイってるわけじゃねえよ!!」

どうしてそうなる!!!

「冗談よ」

「全くノリが悪い・・・」

『そんなんだから・・・』

『唐変木なんだよな』

鈴と楓の後にやっぱり聞こえるんだよなあ・・・って

「だから誰なんだよ!!」

「ああこいつらか」

そう言って楓が何かを取り出してスイッチを入れた

直後に鈴の肩にちっちゃいライオンが現れた

「具現化した」

『これが俺か!? ちっちゃ!!』

「あら、可愛いじゃないLeon」

『余計な御世話だ!!』

「こいつはLeon、鈴のISにインストールされているAIみたいなものだ」

インストールって・・・

「お前らはその姿なのか・・・」

「うおっ!!」

楓の周りには結構な数の動物がいた

「椿姫がうさぎとはねえ・・・」

『うるさいよ』

楓と話しているウサギが多分椿姫なんだとして・・・

「何でそんないっぱいいるんだ??」

「俺の椿姫は形態ごとに意思のようなものがあるんだよ、今んとこ6体くらいだな」

「そんなにあんのかよ・・・」

とんでもないISだな、椿姫って・・・

「それで宵闇はどこだ・・・ってお前か」

『なぜわかった!?!』

「お前しかいないだろうが、ちっちゃいオオカミ」

『そんな理由かよ!!』

楓と今話している・・・オオカミ??猫??がどうやら宵闇という名前らしい

「赤梅、鉄、紫炎、朱雀」

『はい』『おう』『うむ』『はい』

楓がそれぞれの名前を呼んでいる

それぞれ猫、犬、狐??雀が返事をする

「それ全部AIなのか？」

「AIじゃねえ、意思だ」

何だそれは

「俺が作ったときに生まれたAIとは違うモノだ、いうなれば俺の人格が乗り移ったようなもんだな」

「人格って・・・」

それじゃあ楓は多重人格者なのかよ・・・

「いつまで私を無視するつもりかな??」

「シャル・・・」

楓の頭に銃を突き付けながらシャルが怖い笑みを浮かべている

「ちょ・・・何でおれなんだよ!!」

「キミが一番私を無視しているからだよ??本来なら盾殺し（シールド・ピアース）物だよ??」

「すいませんでしたシャルロット様」

楓がとてもきれいな土下座をしている!!

「鈴のもそうなのか??」

「あたしのはAIよ」

『よろしく、一夏』

「おお、よろしく」

ちびっこいライオンと喋るのは中々ないからな、貴重な体験だ

「こいつが欲しいかい??」

土下座終了した楓が宵闇を持ち上げる

『離せこの野郎!!』

「くれるのか!？」

「欲しけりゃ俺と戦って勝つことだ」

「嘘ついてるんじゃないやありません」

カエデが楓を嗜める

「どうせ戦った後に「あいつにはアレが足りない」だの「こいつで攻撃してその隙にこいつを・・・」とか言って作るくせに」

「はいそこうるさいよ? 撃ち抜くよ?？」

結局戦わなきゃいけないのかよ・・・

「とりあえず戦えばいいの??」

「ああ、仲良くなるかは別としてな」

シャルが目光らせている、その視線の先には・・・

「楓・・・帰りたいよ・・・怖いよあの子・・・」

猫、つまり赤梅がいた

「赤梅!! キミに決めた!!」

「どこのサトシよあんた!! いやあああああ・・・」

「かわいい?」

シャルは可愛いものが好きみたいだな

赤梅は涙目だがな

「いいのかあれ」

「構わんさ」

いいのね・・・

「だれだ!! 動物を持ち込んだやつは!!」

あ、千冬姉だ

「やべえ!!」

楓が先ほどの機械のスイッチをオフにする

「猫・・・」

するとみんな消えてしまい、悲しそうな眼をするシャルが残された

「仕方ない・・・」

楓はどうやら女の子の涙が嫌いなようでしぶしぶ何かを取り出・・・  
って銃!?

「ど・・・どうして私に向けるの??」

「お前にアクセス許可を出す、それでみんなには見えないがお前と俺、鈴、カエデには見えるし触れるようになる」

楓がシャルに銃を向けたまま淡々と話す

「嘘!?!」

「バーン」

声とともに引き金を引く楓  
すると

『シャルロット・デュノア、織斑一夏にアクセス許可が出ました』

「って俺にも!?!」

「一応な、Leonと話す必要があるだろう」

そう言っって楓は銃をしまう

「猫!?!」

「うわあ!?!」

みんなには見えていないのだろうがシャルの腕の中には赤梅がいて、  
ひたすらシャルに頬擦りされている

「・・・」

「僕たちは戻っていいようか??」

「構わん」

楓の周りには残りの全員がそろっている

椿姫は頭の上に、朱雀と紫炎はそれぞれ肩の上に

鉄は足元にいる

「何というか・・・もっさりしてんな」

「やかましいわ」

「あれ?宵闇は??」

「戻した」

「何で!?!」

「うるさいから」

宵闇の扱いがひどかった

ん、そろそろ昼休みが終わるな

「そろそろ時間か、戻るぞ」

「・・・・・・」

うっわ！！戻るって言った瞬間涙目&上目づかいだよシャル！！そんなに猫好きか！！

「・・・赤梅」

「ん？」

「すまん」

「え・・・ちよっ！！置いてくな！！」

シャルの顔を見て3秒で決断したよ！！強力すぎだろ！！

「授業を始めるぞ！！席に着け！！」

おっと授業が始まるか

「朱雀！！おまえが動物を校内に持ち込んだという話があるのだが  
??」

「それはただの噂です」

しっかり授業を受けますか・・・

## 5話

鳳鈴音襲来、椿姫、具現化する（後書き）

なんかおかしな方向に進んでいるけど気にスナナ！！  
設定に具現化後の動物を乗せときます

## 6話

V S シャル

紫炎の力 (前書き)

今回はシャルロット戦です  
ホントはバトルロワイヤルまで取っておきたかったんですけど・・・  
無理でした



## 6話

## V S シャル

## 紫炎の力

「つまりこれがBT?の注意事項だ、今までの奴も使えるが今の状態だと使ってもせいぜいぶっ壊されるだけだろうな」

「なるほど・・・よくわかりましたわ」

時は放課後、アリーナ2

ここで楓とセシリアは新装備の確認を行っていた

「時にセシル」

「何でしょう??」

「もうひとつ追加で武器を創るとしたらどんな奴を創る??」

ここまで魔改造してさらに強くしようとしている楓だった

「そうですね・・・BT?に比べてスターライトmk?が少し頼りないような気がしますわ」

「ふむふむ・・・狙撃用ライフル、いやマシンガン・・・B08があるからいいとして・・・」

あたらしい武器を考えることに夢中になっていると

「あの、楓さん」

セシリアが戸惑うように楓に話しかける

「どした??トイレか??」

「ちがいますわよ!!バトルロワイヤルの事ですわ、楓さん対カエデさんと鈴さんを除いた他のメンバーで戦うんですのよね??」

「ん??それがどした??」

普通に考えて代表候補生3人+α相手に一人で立ち向かうなんて命知らずな真似はしない

「いくらなんでもそれは甘く見すぎなんじゃないでしょうか・・・」

「確かにちよつとばかりきついかなあ・・・」

余裕があるように見せかけて実は余裕がない楓だった

「でしたら今からでも遅くはありませんし一夏さんたちに謝って形式を変更してもらったほうが」

「初期形態のまんまだとなあ・・・」

「そこですよ!？」

どこまで行っても底が見えない楓だった

「正直本気だしたら魔改造組以外一瞬で塵と化すよ??それにこれはチャンスでもあるんだ」

「チャンスですよ??」

さりげなく魔改造と言ったがセシリアはスルーして話を続けることにする

「俺とセシルが仲良くなったのは何がきっかけだ??」

「戦ったからですわ」

ボロ負けしましたが、とは言わない、断じて言わない

「そう、だから俺に取ってのチャンスでもありあいつらのチャンスでもあるんだ」

「どういうことかな??」

楓の話に割り込むように入ってきたのは

「デュノア、一夏はどうした??」

「一夏って言ってるね普通に・・・一夏達ならいないよ?今頃多分箒の所で剣道を教えてもらってると思う」

シャルだった

「何の用だ??お前の事だ、暇だから来たわけではないだろう。大方一夏のために俺のデータを取りに来た、というところか??」

「只きただけでそこまで勘ぐられるとは思わなかったけど・・・答えはノーだよ」

「なら何しに来た??」

「練習だよ、他のアリーナがすごい混んでるのにここだけ静かだったから来てみたら楓たちが居たってわけ」

すごい普通の理由だった

「使ってもいい??」

「別にかまわないが赤梅はどうした??」

「バックの中」

「死ぬぞオイ!!」

可愛い顔してえげつないことをするシャルだった

「うそ!？」

「嘘じゃねえよ!! 具現化って事は肉体を伴ってんだから!! 具現化解除!!」

シャルとの漫才を打ち切って楓が声を張り上げる

『死ぬかと思ったんだけど・・・』

「ゆっくり休め、未来永劫お前の出番はもうない」

『嘘つくな!! まあいいか、休むわ、出番があつたら喚んでくれ』

楓の頭の上にいた赤梅はゆっくり消えていく

「気をつけてくれ、シャル」

「うん、ってあれ? 今シャルって・・・」

「デュノア」

あわてて言い直す楓だがシャルに追及される

「今完全に言ったよね??」

「言っていないぞ、別にお前らと早く仲良くなりたいたいなんて思っていないぞ」

もはや懐かしい自爆のしかただった

「清々しいくらい自爆したね!？」

「自爆なんてしてないぞ・・・多分、きっと」

「そこまで自分が信じられないの!？」

完全に漫才している楓

「シャルロットさん、そろそろやめてあげたほうが・・・」

見かねたセシリアが止めに入る

「ん、そうだね、ホントはもうちょっと楽しみたかったんだけど」

シャルはドSだった

「シャル、今の事は絶対に誰にも言うなよ!!」

「わかってるよ、楓」

なしくずし的にシャルと楓は和解した

「そうだ楓、ちょっと相手してくれないかな??」

「構わんど、セシル、ちよつと待っててくれ」

「わかりましたわ」

セシリアに一言いってから楓は椿姫を展開する

「咲き狂え、『椿姫』、穢れ無き黒に赤の奔流、鉄!!」

今回のモードはオールレンジタイプの鉄

「その「咲き狂え」って必要なの??」

シャルが質問する

「いいや、単にカッコいいから」

「そうなんだ・・・じゃ私も」

一呼吸置いてシャルも展開する

「吹き荒れろ、『ラファール・リヴァイヴ』!!」

「中々カッコいいじゃないか」

「楓もね」

ヒーローの変身シーンみたいなことをやった後お互いのセリフに  
対して褒めあう二人

「私もやりますわ!!」

さすがに置いていかれるのはまずいと思ったのか、セシリアが入っ  
てくる

「暗雲に一筋の光を示せ!! 『ブルー・ティアーズ』!!」

「おお!!」

「中々カッコいいね」

なかなか好評だった

「それじゃあ・・・」

「ああ・・・」

『勝負と行こうか!!』

その声を合図に楓がシャルに突っ込んでいく

「どんなもんだか見せてくれよ!! 疾風!!」

「考えを改めさせてあげるよ!! 黒椿!!」

シャルの手には「ガラム」が握られている、それを突進してくる楓  
に向けて

「行くよ!!」

引き金を引く

「アメイよ!!」

楓は即座に「兼雅」を構築、シャルに向けて放つ

「楓もね!!」

そういうシャルの手元には「レイン・オブ・サタデイ」が握られていた

「早すぎるだろオイ!!」

「それが私の戦い方なんだよ、「砂漠の逃げ水」ってね??」

「厳しいなあおい!! あいつに変えるかな・・・」

そうつぶやくと楓はシャルから離れて地に降り立った

シャルがいぶかしげな表情で見ると楓は笑って

「お前は強いからな、こっちもちよつとばかし本気を出させてもらう」

そういうと楓は形態変化する

「その姿は正に紫の炎を纏いし死神!! 『紫炎』!!」

直後に楓の体を紫の炎が包む

そこから出てきたものは・・・

「あれが・・・紫炎・・・」

「久々に使ったぜ」

カラーリングが紫になり、さらにシャープになった椿姫を纏った楓だった

「最初に言っておこうか、この形態には一切の武装が無い。つまりだ、この形態は俺の体術で戦うタイプだ、言いたいことが分かるか?? シャルにとって最も戦いやすいタイプだってことだ」

『久々に出てこれた、久しいな、楓』

「わざわざそんな説明をして・・・挑発でもしてるの??」

そう言いながらシャルは少し油断する、なぜなら楓は地面に降り立っていて、シャルはるか上空にいる、一足飛びで来れるような距離ではない、つまり即座に攻撃はしてこないということだ

「違うよ、警告だ。」

しかし、この推測はすぐに打ち碎かれることとなる

「相性が悪い以上、本気を出さざるを得ないってことだ」  
そう言っ、楓はある構えを取る

「七の構え、『杜若』」

『行くか、楓』

いわゆるクラウチングスタートのような構えを取る楓

「何それ?? 的にでもなるつもり??」

シャルが嘲笑する

「御冗談を、御嬢様」

その執事のような言葉を最後に

楓の姿が消えた

「……!!」

「ここでございますよ、御嬢様」

シャルの首に指を這わせ、楓が囁く

つまり、もし楓が本気を出していたらシャルは今の時点で死んでいたということを示している

「何で……!!」

シャルは振り向かずにガラムを後ろに向かって連射する

「甘えよ」

それを体を捻るだけでかわす

「炎撃、『白百合』」

そして捻った勢いを利用して回し蹴りを繰り出す  
「くうっ!!」

回し蹴りを脇腹に喰らってしまい、呻くシャル

「まだまだ行こうか!! 炎撃「椿」から「八手」まで、混成接続」  
貫手、回し蹴り、打突、踵落としなど、様々な攻撃を繰り出す楓

「打撃じゃ……シールドエネルギーは減らない!!」

それを喰らい続けながらも反撃の隙を窺うシャル

「そう思うならシールドエネルギー残量を見てみな!!」

連撃を中断して距離を取る楓

「・・・!! 何でこんなにシールドエネルギーが??」

シャルのシールドエネルギーは残り100もない

「これだよ」

そういう楓の手が燃えている

「これは両手両足に付いている火炎放射器みたいなものでな、『フレイア』って言う。これを纏った状態で攻撃すれば勿論シールドエネルギーは削ることができる」

「そんな・・・武装はないって・・・」

「これは武装じゃない。その証拠に纏わせる以外に何もできないし防御能力もない、ただ纏わせるだけの物だ」

実際武装と呼べなくもないがいわゆるメリケンサックと同じ・・・武器じゃん

「とりあえずお前のデータが取れたから・・・最大の技で決めてやる」

楓は構える

「第11の構え『椿姫』（しほひめ） これを見せるのは俺が認めた相手だけだ」

楓の構えは腰を落とし、両手を貫手の状態で両腰に配置、いわゆる

「待ち」の姿勢だ

「私のほうも・・・」

シャルが右肩のシールドをパージさせる、そこから現れたのは・・・

「シールド・ピアースか」

「よくわかったね、じゃあ・・・」

『終わりにしようか!!』

シャルが楓に突っ込む

「破壊の十字をその身に刻め!!」

「杭に撃たれて磔となれ!!」

二人の距離がどんどん縮んで・・・  
ゼロになる!!

「『?・シューターフロー!!』」

「『グレー・スケイル!!!!』」

お互いの最高の技をぶつけ合う!!

「おおおおおお!!!!!!」

「はああああああ!!!!!!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

二人の攻撃で起きた爆発によって砂埃が舞い、様子が分からなくなる  
「ど……どうなったんですの??」

セシリアは頭部のみISを起動させ、様子を確認する、そこには

「まさかあそこまで威力が高いとはな……見誤ったか」

「こっちこそ……喰らった後に反撃されるとは思わなかったよ……」

ISを展開させているのは楓、その目の前にISスーツ姿で座り込んでいるシャル、つまり……

「楓さんの勝ちですの……??」

「そういうことだ、立てるか??シャル」

「ごめん、無理」

シャルは疲れて足に力が入っていない

「おぶってやる、乗れ」

「ありがと……」

ごく当たり前のようにシャルをおぶって連れてくる楓

「シャルに必要なのはメイン盾の中距離支援……かな、状況に応じてバックアップを……」

なんか陣形を考えているようで……

「何の陣形を考えていらっしゃいますの??」

「襲撃時の陣形だよ、俺と鈴と……今んとこ一夏が前衛、中距離がシャルとラウラ、箒で、後衛、というか射撃はカエデとセシリアってとこだな」

「そんな陣形を立てるほどの敵が現れるとは思いませんけど……」  
いろいろ着眼点がおかしい楓だった

「シャル……って寝てるな……」



今の会話の間に寝てしまったようだ、それに気付いた楓があくどい笑みを浮かべつつセシリアにある提案をする

「シャルで遊んでみようか、一夏も巻き込んで」

「それは・・・いいかもしれないわね」

セシリアも悪い笑みを浮かべる

「具体的にはどうしますの??」

「それはだな・・・」

楓がセシリアに提案したシャル&一夏いじりの内容はこうだ

1、シャルをアリーナに残したまま一夏を呼ぶ（呼ぶのはセシリア）

2、同時に読んでおいた箒たちと合流して様子を見る

3、一夏とシャルをいい感じにする

4、楓の合図で箒たちが飛び出し、一夏に天誅が下る

「これだと一夏さんが死んでしまうのでは??」

「あの鈍感な唐変朴には少し思い知らせてやらないとな・・・クク

ク」

一夏の意見はとことん無視の楓たちだった

「こちら楓、聞こえるか??」

「こちら鈴、オーケー、聞こえるわ」

「こちら箒、感度良好だ」

「こちらラウラ、問題ない」

現在楓たちはアリーナ2の観客席あたりに散っている

アリーナの真ん中辺りには一夏とシャルが居る

「いきなり呼び出してどうするんだ、というか、何で私たちのプラ

イベート・チャネルを知っている」

箒が若干怒り気味に楓に聞く

「セシルに聞いた」

「私は個人情報保護法は適用されないのか!？」

驚愕する箒

「安心しろ、お前だけじゃなくてラウラにも適用されていない」

「なぜ私にも・・・いや、聞くだけ無駄か」

「そういうこった、賢明だな、黒ウサギ」

楓には現在の状況、つまり一夏をボコるチャンスを作ってもらったため、あまり強く言えないラウラと箒

ホントは集まった直後に楓の呼びかたについて議論されたのだが時間の関係上割愛する

「お、いい感じだな、そのままくつついちゃ・・・すみませんでした」

テンションあがった楓が危険な一言を言おうとした瞬間、ブルー・ティアーズが楓の後頭部に当てられたので謝る

「もうちょっと・・・今だ!!!!!! 行け!!!!」

楓が見極めて合図を出す・・・

『一夏ああああああ!!!!!!』

箒、ラウラが一夏に向かって突っ込んでいった

「お前らは行かなくていいのか??？」

「あたしは一夏の事異性としては好きじゃないからね」

「同じくですわ」

楓の質問に即答するセシリア達

「嘘つけ、鈴は一夏に約束のこと聞いてたしセシリアはさっき俺にティアーズ当ててきたろ」

『それは・・・もういいのよ(ですわ)!!!!!!』

楓に痛いところを突かれていまいち言葉に詰まるセシリア達

「ちよっと・・・あれはヤバいんじゃないか??？」

見ると一夏の動きがA I Cによって止められ、箒が斬りかかろうとしている

勿論一夏はI Sを装着していない、シャルは先ほどの戦闘で動けなくなっており、叫ぶことしかできない

『一夏「さん」!!!!』

鈴とセシリアが助けに行こうと身を乗り出した刹那、楓がISを装着しつつ走る

「紫炎!!!『杜若』!!!」

楓の姿が消えるのと箒が刀を振り下ろし、ラウラがレールガンを撃つのは同時だった

「・・・!!!」

セシリアは最悪の結末を見ないように目を閉じるが、鈴は目を閉じずに見守る

「大丈夫よセシリア、楓にできないことはないんだから」

セシリアが目をあけると・・・

「ほどほどにしろって言っただろうが・・・消すぞ」

ラウラのレールガンを蹴りで破壊し、箒の刀を人差し指と中指で挟み込むように止めた楓の姿だった

「楓・・・!!!邪魔をするな!!!」

「黙れ、織斑も俺のチーム『クリムゾン・カメラリア』の一員（仮）なんだよ、ボコるのはかまわねえが殺すな」

「カメラリアって・・・あいつ最近アリア読んだわね」

鈴が嘆息する

「読んだことと何か関係あるんですの??」

「楓は読んだ本で気に入った単語や技、体質なんかを使うのよ

勿論虚刀流も楓が読んで気に入ったから使用されてるの、炎撃って名前だね」

「てことはヒステリアモードも・・・」

「あるでしょうね、確実に」

楓が本当に人間であるのか不安になっていくセシリア達をスルーしてラウラが吼える

「黙れ!!!邪魔するならまず貴様を・・・」

「ちようどいい、千冬先生!!!」

突然楓が千冬を呼ぶ

「まさかばれてるとはな・・・何だ??」

アリーナの陰から千冬が現れた

「今すぐに全員のシールドエネルギーを回復、後に本当は一週間後のバトルロワイヤルを始めます、シールドレベルを最大にして全専用機持ちを呼んでおいってください、保険のために」

「そこまで必要なのか・・・わかった、デュノアの回復には時間がかかる、開始は30分後だ、各自、準備をしておけ」

千冬はそういった後、アリーナを後にした

「さあ、始めようか、死の遊戯を」  
デス・ゲーム

## 6話

V S シャル

紫炎の力 (後書き)

まずは一言

すいませんでした

次回はバトルロワイヤルです、楓の「現時点」の最強且つ最狂の形態が出てきます

本編でも出てきた楓人間ではない疑惑ですが・・・

人間ではないです、神様です

詳しいことについては次第に明らかになっていきます

## 7話

### デス・ゲーム(前書き)

バトルロワイヤルです  
原作にないので大変です

## 7話

## デス・ゲーム

「そろそろか」

楓は一人しかない更衣室で息を吐く

「とりあえずお前の出番になりそうだぜ、宵闇」

楓がそういうと足元から宵闇が現れる

『俺が戦うのか?? それとも俺の力を使ってお前が戦うのか??』

「俺が戦う」

『何パーセントだ??』

「5%ってところだな」

どうやら出す力の量を決めているらしい

『まあ、そんなくらいなら貸してやるよ、だが、油断はするな』

「ありがとな、そろそろ・・・」

「『行こうか、力というモノを見せに』」

「とりあえず着替えられたけど・・・」

一夏は楓のいる方とは逆の更衣室にいるのだが・・・

「どうしてお前が居るんだ??」

一夏の足元には朱雀が居た

『今回楓は宵闇を使う気みたいです』

「宵闇??何だそれ」

どうやら朱雀は一夏に宵闇のデータを教えようとしているようだ

『私たちはもともと楓の精神を乗っ取ろうとしていたんです、でも、宵闇以外はもう対話を終えているから楓と主従の関係を結んでいる。でも宵闇は私たちの中でただ一人対話を終えていない、つまりいつ楓が乗っ取られるかわからない状態です。もし楓が乗っ取られたら・・・』

そこから先はうまく聞き取れなかった

しかし一夏は

「なんだって・・・!??」

聞こえたようだ

『宵闇は私たちの中で一番強いんです、乗っ取られたら私たちにできることはありません』

「だからって・・・」

『それが唯一楓を救う手段なんです、そしてこれはあなたにしかできない』

朱雀はそこまで言って一夏を見る

「もしそれが嫌だというなら・・・これを渡しておきます」

朱雀の前に赤い玉が現れる

「これは??」

『私の精神集合体、いわゆるコアです』

「コア!??」

一夏は驚愕の表情を見せるが朱雀は続ける

『もしあなたに危険がせまったときに心の中で私を呼んでください、きつと力になります』

「わかった・・・なあ」

一夏はまだ踏ん切りがついていないのか、微妙な表情をしている

『楓を救う方法なら一つあります』

「なんだ!??あるなら早く・・・」

『楓の心に直接呼びかけること、です』



一夏は聞いたとたん絶望する

なぜなら今まで何度も話しかけているが楓はそっけない態度しか取っていない、つまりコミュニケーションが取れていないのだ、そんな状態で心に直接呼びかけるなど無理に等しい

「それじゃあ・・・楓は」

『最後に一つ、楓は案外あなたを気に入っているようです、中々いい目をしていると』

それを聞いた一夏の表情は

「だったらやんなくちな」

晴々としていた

『そろそろ始めるぞ、戻ってこい』

朱雀から楓の声が聞こえる

「時間か」

『では、私はこれで、がんばってください』

そう言い残して朱雀は消えた

「絶対に楓に勝つ!!」

「逃げなかったか」

楓が一夏達の前で嘲笑うように言う

「こっちのセリフなんだがな・・・それは」

ラウラが早くも戦闘モードに入っている

「じゃあラウラも限界みたいだし・・・」

復活したシャルが合図をする

「始めようか!!」

楓がまず最初に装着する

「咲き狂え『椿姫』、漆黒の悪夢、『宵闇』!!」

「カッコよ!!」

楓の装着時のセリフに一夏が反応する

「吹き荒れる!!『ラファール』!!」

「シャルも!?!」

続いてシャル

「暗雲に一筋の光を示せ!!『ブルー・ティアーズ』!!」

「セシリアもかよ!?!」

さらにセシリアと続いて

「黒き力の奔流!!『シュヴァルツェア・レーゲン』!!」

「いつの間に!?!」

ラウラも考えていたようだ

「・・・」

「ノらないのか箒!?!」

箒は何も言わずに打鉄を装着した

「早く装着しろよ、織斑」

楓が急かす

「わかってるよ!!穢れ無き光をこの手に!!『白式』!!」

『おお!!!!』

好評だった

「早く始めろ・・・」

千冬のつぶやきに全員が位置に着く

「それじゃ・・・」

『始めるか!!』

バトルロワイヤルが始まった

「・・・・・・・・くっ!!」

同時に楓の様子がおかしくなった、目を見開き、痙攣している

『悪いけど乗っ取らせてもらう』

「宵闇・・・てっめえ・・・」

『油断するなって言っただろうが、とりあえず』

楓の痙攣が止まった、と同時に楓の見た目が変化していく

「この体は、俺のものだ!!」

真っ赤だった髪は一切の光を吸い込む漆黒に、左の眼が蒼から黒になった

「楓・・・乗っ取られたか」

開始早々乗っ取られてしまった楓を見て舌打ちする一夏

「一夏!!」 「織斑君!!」

一夏の名前を呼びながら飛び込んだきたのは

「鈴に・・・カエデ!？」

鈴とカエデだった

「楓の奴・・・乗っ取られたのね・・・」

鈴が忌々しそうにつぶやく

「こうなったらバトルロワイヤル何て言ってもらえない、みんなで協力して・・・」

カエデが作戦を立てようとしていると

「その必要はない!!」

「その通りだ!!」

箒とラウラが楓に肉薄する

「やめろ!! 今の楓は正気じゃない!! 危険だ!!」

「案ずる必要はない、ラウラ!!」

「任せろ!!」

箒が右から、ラウラが左から楓に飛び込む

二人で同時に剣を振るい、衝撃波で楓のいるところに土ぼこりが上がる

視界がふさがれた楓に左右から二人が飛びかかる!!

「連携!!」

「必殺!!」

「「?」(イクス)・フィルメント!!」

箒とラウラの楓を交点に?字の軌跡を描く連携技、それをガードもせずに喰らう

「やったか!」

「バカが、死亡フラグだ」

楓が言った瞬間に煙が吹き飛ばされる

「くっ……」

「なにっ……」

箒とラウラの剣は両方とも楓の指に止められていた

「必殺ってのはなあ……」

箒たちの剣を離れた楓の姿が消える

「こういうのを言うんだよお!! おらあ!!?・フリード!!」

楓の振る妖無に切り刻まれ、あっという間にエネルギーが尽きそうになる二人

それを追撃するかのように

「オラオラオラァ!!!?、?、?!!!」

連続で?を放つ楓

箒たちを起点にもはや?とは呼べないほどの軌跡が描かれる

「「あああああああああああつ!!!!!!」」

シールドエネルギーが底をつき、装甲はぼろぼろにされ、体のいたるところから血を流す二人



「こんなもんで俺を傷つけられるとでも思ってたのかあ？ だとしたら傑作だなあ！！！」

そんなことを言いつつ楓はまた一夏の前に瞬時に移動する

「来いよ、第四世代!!」

「おおおおおつ!!!!!!」

一夏が雪片を楓に叩きつけるように振るう

「おせえ！！」

振りきる前に楓に吹き飛ばされる

「本当の斬撃つつうのはなあ・・・こういうのを言うんだよお！！」

吹き飛ばされた一夏の後ろに楓が移動して・・・

「ぐあ ああ ああ ああ つ……！！！！！！」

一夏の背中を切り裂いた、絶対防御すら貫通して

「夏！」

シャルが目の色を変える

「許さない……楓!!!!」

シャルは楓に突っ込む

「来いよお！……もつと俺を楽しませろ！……アッハハハハハ  
！！！！！」

楓とシャルが切り結ぶ……が

「そんなちっこい剣で俺に勝てるわきやねえダロウがあ!!!!」

シャルの体が吹き飛ばされる

「お前は面白くも何ともねえ・・・退場だ」

シャルの足元に無数の？が刻まれる

「まずい！！よけろシャル！！」

いち早く気づいた一夏が叫ぶ、  
が遅かった

「ヒヤッハア!!!!!!!!!!?!!?!?!?!?!?!?!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!」

9連続の？を受け、シャルはラウラ達と同じように吹き飛ばされ、端っこに倒れこんだ



「一瞬の油断が、命取りだ!!」

楓の周りに黒い煙が集まる!

『しまった・・・「ライズ」された・・・』

「ライズ?? 何だよそれ」

セカンドシフト

『簡単に言ってしまうえば二次移行みたいなものです、私たちは戦闘ごとに一回一回変化します。主に楓の感情が引き金になって。今の楓の感情は宵闇に制御されて「憎悪」になっています、つまり・・・』

「どういことだ」

『今の宵闇は最強最悪、今の私達でも歯が立ちません・・・どうすれば・・・』

一夏が楓のほうを見ると、そこには椿姫の面影が微塵もない禍々しいISを装着した楓が居た

「遅い」

瞬間、一夏は首をつかまれて壁に叩きつけられる

「がはっ・・・」

「残念だ、一夏」

「いち・・・k・・・?」

楓の言葉に違和感を覚える一夏

「一夏!!」

鈴が銀を構えて楓に飛び込む

「お前じゃ相手にならねえ、引っこんでろ鈴」

刹那、鈴もシャル達と同じように吹き飛ばされ、壁際に倒れこむ

「か・・・えd・・・」

鈴を見て疑問が答えに代わる一夏

(鈴には傷一つない・・・つまり楓の意識は今表に出てきている!!)

「セシリア!!」

「わかりましたわ!!」

セシリアがタクティクスを構築して楓に振るう



「そんなんじゃだめだ、セシル」

「甘いすわ!!」

タクティクスを破壊されて吹き飛ぶが直後にBT?が

「バーン」

背後から楓を撃ち抜いた

「使い方がうまくなったな・・・だが惜しかった」

「そうでもないわよ!!」

カエデが楓に緋色を打ち込んでから形態変化する

「四神招来!!」

カエデが纏うのは薔薇月・四神、薔薇月の最強形態で朱雀と互角のスペックを誇る

「一夏!!ダブルスクエアよ!!!!」

「わ・・・わかった!!」

左右から二人が楓に飛びかかる

「[緋剣・ダブルスクエア!!!!]」

二人で放つスクエアはまっすぐに楓に向かって飛んで行った

「こんなんじゃ俺は殺れねえ」

楓は妖無を構築すると「驟雨」

高速の突きでダブルスクエアを相殺した

「カエデ、お前は休んでろ、もう限界だろう」

「全く・・・一夏!!勝ちなさい・・・よ・・・」

カエデは下がる、と同時にISが粒子化して倒れる

「あいつも限界だったのか・・・」

「さあ一夏、こっからは一騎打ちだ、もうわかってんだろ??俺を止める方法が」

一夏の頭の中に朱雀の一言が蘇る

『もし楓が乗っ取られた時は、殺してください』

「だからって・・・殺すわけには・・・」

「お前が俺を殺さないというのなら俺はIS学園を破壊する、最初は鈴達、次に千冬先生、最後にまとめて消し飛ばしてやる、だから・

・「俺を殺せ!! こいつは本当の俺じゃない!! 騙されるな!!」  
「黙れ!!」

楓の目が一瞬だけいつもの蒼に戻ったのを見て一夏は覚悟を決める  
「朱雀、他の奴はどこだ?」

『みんなおまえの近くにいますぜ』鉄がそう言う

『宵闇をおいだそうか』赤梅が伸びをして

『許さぬ・・・斬ってくれよう!!』紫炎が目細めて

『というわけだよ一夏』椿姫が占める

気がつくともみんな一夏の周りに集まっていた

「ああ・・・俺に力を貸してくれ!!」

『』『』『おっ!!!!』

白式に4匹が同化する、様々な色の粒子が白式に流れ込んでいく

「今、5つの力合わせり!!」

『黒き流れを断ち切らん!!』

『白き騎士は無限の色を纏い!!』

『悪しき者を打ち砕かん!!』

『穢れ無き白の奔流は!!』

『光を持つて七色に輝く!!』

「白式・虹<sup>にじ</sup>柩!!」

粒子が消えた後には

白を基本に様々な色の刺青が全身に刻まれた

一夏の姿だったのだ

「それでいい・・・早く俺を殺せ!!」

再び蒼の目になった楓が急かす

「雑魚が集まったところで所詮は雑魚!! 俺にはかなうまい!!」

黒目の楓があざける

「待ってろ楓・・・今」

「早く・・・」

「助けてやる」「殺せ・・・」

二人の言葉は奇しくも同時だった

「砕け散れえ!!!! 驟雨!!!!」

「そんな効かねえよ!!!!」

鋭い突きの中に飛び込んでいく一夏

「月代雪!!!!」

虹柩になったときに構築された新しい武装「新月」で3角切りを繰

り出して相殺する

「おらあ!!!!」

「ハアア!!!!」

一夏と楓の武器がぶつかった瞬間、一夏は真っ白な世界に立っていた

「ここは・・・」

「俺の心の中だ」

楓が目の前に現れる

「これが・・・楓の・・・」

楓の心の中にある感情は、怒り、悲しみ、憎悪、殺意といった負の感情ばかり

「帰るぞ、楓」

「黙れ、良いから俺を殺せ、ここにいろとお前まで取りこまれるぞ」

「だったらその前に連れて帰る」

「無理だと言っているんだ、良いから」

「うるせえんだよ!!!!」

一夏はそう言って楓に殴りかかる

「楓!!!! おまえにはまだ教えてほしいことがいっぱいあるんだ!!!!」

「早く俺を殺せ!!!! お前も死ぬことになるんだぞ!!!!」  
「すべて消してやる」

蒼目の楓が突き放し、黒目の楓がつぶやく

会話の間にも殴り合いは続いている

「お前が死んだら悲しむ人が居るんだ!!!! 死なせねえ!!!!」

「俺が死んだところで悲しむ人間などいない!!!!」  
「すべて滅ぼしてやる」

蒼目の楓が叫び、黒目の楓が一夏を睨みながら言う

「まだまだやることいっぱいあんだろうが!! 諦めんなよ!!」

「黙れ!! 俺がどんな道を歩いてきたのかも知らずに・・・平和に暮らしてきた分際でわかったような口をきくな!! 何も知らないくせに!!!」

蒼目の楓が吼える

「わかるわけねえだろうが!!!」

一夏の拳が楓に当たる

「ならとつと俺を殺せ!! そうじゃなきゃお前の仲間が死ぬぞ!!」

楓の蹴りが一夏を突き刺す

「お前も仲間だ!! 殺すわけにはいかない!!」

一夏の蹴りが楓を吹き飛ばす

「だまれ!!」

楓の踵落としが一夏を挟る

「お前はどっちなんだ!! 生きたいのか、生きたくないのか!!」

「生きたいに決まってんじゃないか!!!! 当たり前のことを聞くな!!!」

楓と一夏の拳が交差してそれぞれに当たる

「なら・・・帰ろうぜ」

「それは無理なんだよ・・・こいつが居る限り・・・」

そう言って楓は自分の後ろを指す、そこには・・・

「楓に一夏・・・入ってきたとはな」

真っ黒の長い髪に真っ赤な目、口元から下は真っ黒なマントのような物で覆われている

「宵闇・・・なのか??」

「そうだ、あいつが俺を乗っ取った張本人。宵闇だ」

「ククク・・・面白い、ここで一夏を殺したらどうなると思う??」

宵闇が目細める

「てめえ・・・そんなことはさせねえぞ」

「お前に何ができる?? さっきも歯が立たなかったくせに・・・」

どうやらずっと楓はここで宵闇と戦ってきたらしい

「一人では確かに何もできなかった・・・でも」

「二人ならなんとかなる、だろ??」

楓のセリフを一夏が横取りする

「たった二人か、面白い・・・くるがいい!!」

宵闇が楓たちに飛びかかろうとした瞬間

「残念、二人じゃないんだよねえ」

「本当に、残念でしたわね」

楓たちと宵闇を分断するかのように現れた二人に楓と一夏は目を見張る

「セシル・・・??」

「それに・・・鈴!？」

救世主のごとく現れた二人は鈴とセシリアだった

「なぜ貴様らがここに!？」

さすがに宵闇も驚きを隠しきれずに若干声が上ずっている

「簡単な話よ、あたしとセシリアのISにはツヴァイが使用されている、それで・・・」

クロッシング・アクセス

「簡単に言ってしまうえば相互干渉みたいなものですから、ツヴァイも一緒に共鳴してここに飛ばされたってわけですわ」

早い話が共鳴しているということだ

「そーゆーこと」

カエデも現れた

「たった五人で何ができる!!まとめて滅ぼしてくれよう!!」

宵闇の周囲に黒い霧が立ち込める

「みんな聞け・・・ここは精神だけの世界、つまり物理法則は存在しないし創造も自由にできる、つまり・・・」

「こういうことよ」

カエデの声に四人が振り向くと・・・

「なるほどね」

日本刀を携えたカエデの姿があった

「つまり創造した武器が出てくるってことだ」

楓もスクラマ・サクスとコルト・ガバメントを構築した

「あんたやっぱりアリア読んだでしょ」

鈴が青龍刀を構築しながら突っ込む

「ばれた??」

楓がいつもどおりに笑う

「わたくしは・・・あれですわね」

セシリアの手にはスナイパーライフルが握られていた

「やっぱりそれか」

「ええ、これが一番しつくりきますから」

「じゃあ俺はこれだな」

一夏は人間サイズになった雪片を握っている

「全員準備は整ったか、布陣は3－1－1だ、前衛はカエデ、鈴、

一夏で、中距離は俺、後衛はセシル、いいな??」

『了解!!』

「よし・・・行くぞ!!」

楓の号令で一夏、鈴、カエデの3人は宵闇に向かって走っていく

「ふん・・・あまい!!」

大鎌を構築した宵闇が嘲笑する

「行くわよ一夏、鈴!!!!」

「「おおっっ!!!!」」

カエデが居合抜きの姿勢を取り、一気に抜刀する!! 神速おも超える居合い抜き、その名も

「三日月!!」

神速の居合いが宵闇を襲う!!

「闇白雪」

宵闇も神速の斬撃を放つ

神速の斬撃がぶつかり合い、相殺される

「こっちだ!! 宵闇!!」

雪片を構えた一夏がカエデの横をすり抜けて宵闇に斬りかかる

「デルタ!!」

「消片」

三角切り同士がぶつかり合って相殺される

「はああああ!!! 燐蔔!!!」

「水無月」

鈴の斬撃も大鎌でいなされる

「貴様らでは相手にならん!!! 夢妖・震鶯!!!」

宵闇の円を描くような斬撃に三人が吹き飛ばされる!!!!!!

「楓!!! 任せた!!!」

「ああ!!!」

吹き飛ぶ一夏達と入れ替わるように楓が駆ける

「お前を斃してやるよ!!!」

「やれるものならやってみろ!!!」

楓はスクラマ・サクスを戻してコルト・ガバメントを二丁構築、連

続で撃ちこむ!!!

「不可視の弾丸!!!」  
インサイズレ

連続で打ち込まれた16発がすべて宵闇にヒットする!

「まだまだ終わらねえ!!! ベレッタ!!!」

ガバメントを戻して二丁のベレッタを構築、またマガジンが空になるまで撃ちこむ

「ぬう・・・」

「まだまだあ!!!」

ベレッタを戻し、コルト・ガバメントとベレッタをそれぞれ二丁構築して同時に撃ちこむ

「おらおらおらおらあ!!!」

100発を超える弾丸が撃ち込まれる

「リフレク・ショット!!!」

楓は壁に向かって無数の弾丸を撃つ、それがすべて跳ね返って360度あらゆる方向から宵闇に当たっていく

「がぁ・・・」

「とどめだ!!」

「いきますわよ!!!」

インヴィジレ・アルファ

「インヴィジレ不可視の豪雨!!!」

楓が不可視の弾丸を放ち、セシリアが嵐のようにライフルを撃ちまくる

「が・・・は・・・」

宵闇の姿が消えていく

「契約だ、宵闇」

楓が契約の剣「クルス・エッジ」を宵闇に突き付ける

「仕方ないか・・・いいだろう」

宵闇の姿がはつきりしていく

「汝、我が剣となり、我が一部となることを誓うか?」

「誓おう・・・我が意思は主の一部となろう」

「契約の証をここに!!!」

こうして楓と宵闇は契約を結んだ・・・が

「どうやって戻るんだ?」

一夏の疑問で思い出す

「そういえば・・・来るときは引っ張られていただけでしたから・・・」

「戻るにはどうすれば・・・」

「そうね・・・」

三人も不安を隠しきれない

「平気だ、なあ宵闇?」

「今から俺の力を使ってお前たちを元の場所に戻す」

宵闇はそう言って力を開放する

「はじける・・・『黒枢』」

瞬間、一夏達は見えない手に引っ張られる

「なんだ!」

「お前らのISが引っ張ってくれてるんだよ、身を任せろ」

四人は急速にはなれていく楓が見えなくなったところで



意識を失った

「ん・・・ここは?？」

一夏が目を覚ますと、アリーナの中心で楓とつばぜり合いをしていた  
「目が覚めたか」

楓は一夏を見てにやりとする

目は蒼に戻り、髪の色も赤に戻っている

「残念だがバトルロワイヤルの最中だ、さあ・・・」

「ああ、続きを始めよう!!」

その言葉と同時に刀が弾ける

「勝つのは俺だ!!」

「あめえよ!! 俺だ!!」

再び切り結ぶ楓と一夏

「全く・・・」

「やっぱり男の子だね・・・」

それを見ているシャル達は顔を見合わせて苦笑する

「でも・・・」

「ああ・・・一夏が輝いているように見える」

中心で戦ってる一夏達の顔は晴ばれとしていて眩しい

「どっちが勝つか・・・」

「実力は楓が圧倒的に上だけど今は楽しんでる、一夏にも勝機はある」

カエデと鈴も満足そうにみている

「一夏さんの援護を・・・」

『だめ』

「はい・・・」

唯一一起動可能なセシリアが勝負に水を差そうとしたので他のみんなが睨む

「どうした一夏あ！！動きが鈍って来てるぞ！！」

「おおおっ！！！！」

二人はお互いの武器を弾き、自分の武器を弾かれ、均衡した勝負を繰り広げている

「そんなもんじゃねえだろう！！喰らいついて来い！！」

「舐めるな！！」

お互いがお互いを弾いて距離が開く

「それじゃあ・・・」

「ああ・・・」

『終わりにしようか！！』

そう言つて楓は？の構えを、一夏はデルタの構えを取る

『喰らえ！！』『?!!!』『デルタ！！』

お互いが技を繰り出し、煙が巻き起こったせいで結果が見えないしばらくして煙が晴れ、結果が見えるようになる

「一夏が・・・勝った??」

「みたいだな、楓が倒れている」

一夏が勝った

「最後の最後でめんどくさくなったわね、アイツ」

『え???』

鈴が呆れながら呟いた、思わず聞き返してしまうシャル達

「よく思い出してみなさい、これは何を掛けた対決だった??」

『あ・・・』

そう、忘れられてるかもしれないがこれは「クラス代表決定戦」だ、つまり・・・

「楓は最後の最後でめんどくさくなって手を抜いたって事??」

「そういう事、全くアイツらしいけどね・・・」

結果

勝負には一夏が勝ったが総合的な結果で見ると本当に勝ったのは楓ということになる

『勝者、織斑一夏！！よって、クラス代表は織斑だ』  
「へ？？」

一夏はこの勝負の意味を忘れていたらしい

「ドンマイ一夏、最後に俺がちよっと手を抜いたから負けたんだ、クラス代表にはなりたくないしな」

ゆっくり起き上がった楓が一夏に向けて策士の笑みを浮かべる

「〜〜！！やられた！！」

「甘いなお前は・・・でも」

ここで楓は真剣な顔になる

「お前のおかげで助かった、ありがとな、一夏」

そう言って楓はほほ笑み、一夏に手を伸ばす

「ああ、どういたしまして」

一夏も手を伸ばし、手を握る

「さて・・・お前らもういいぞ」

『ハアアアア・・・』

楓が立ち上がってそう呼びかけると、血まみれのシャル達も立ち上がって一夏のほうに向かってくる

「大丈夫なのかみんな！？」

「ああ、なんとかね」

シャルが血を拭う

「びっくりしたよ、いきなり乗っ取られるんだもん」

カエデが口をとがらす

「しかし、良い修練になったな」

「ああ」

箒とラウラがそろってうなづく

「ほんとに」

セシリアが楓にほほ笑む

「あんた、今度パフエおごりなさいよ？？」

鈴が楓を小突く

「ま・・・これで一件落着だろ」

『うん』

「ちよっと待てよ！！結局俺がクラス代表なのかよ！？」

『当たり前』

「そんなああああ・・・」

こうして一夏はクラス代表に選ばれた

## 7話

### デス・ゲーム（後書き）

全く持ってグダグダでした

どうか理解してください、作者には文才が無いんです  
次回はバトルなしの日常にする予定です

## 8話

### クリムゾン・ローズ(前書き)

今回は楓が監禁されてしまいます

## 8話

### クリムゾン・ローズ

「質問よろしいでしょうか?」

「聞こうか」

楓が居るのは暗い部屋の中、椅子に縛り付けられている  
そして目の前に居るのは千冬を始めとした専用機持ち組  
鈴と一夏が心配そうな目で見ている。他のメンバーも勢ぞろいして  
いる

「どうしてこうなっているのでしょうか?」

「簡単だ、お前がおこした事件の罰だ」

千冬が言うと言がうなずく

事件とは前回の暴走?? 事件の事である

「お前は各国の専用機を破壊しまくった、本来なら死刑でも足りない  
のだが男のIS操縦者ということでISの没収と8日間の監禁で  
手を打つことになった」

「ここで8日間っていくら俺でも死にますよ!」

「黙れ、やかましい」

「パシィン」

「・・・何すんだ、」

千冬にはたかれて若干キレる楓

「決定事項だ」

「質問2」

「何だ?」

「その間のトイレ、食事はどうすんですか?」

楓が空気を微塵も読まない発言に千冬が呆れる

「・・・今は椅子に縛り付けているが後で移動してから外す、食事は  
決められた時間にここにいる専用機持ちが運ぶ、トイレは監禁する  
部屋にあるから安心しろ」

「了解、じゃあ・・・」

そう言って楓は首にある椿姫を「手で」外し始めた

「何で手が・・・」

一夏が驚いていると楓が

「縄抜けとか常識、ハイ、先生、これ、取扱注意ですから」

「うむ」

千冬にはわかっていたのか、とくに驚きもせずに受け取る

「そろそろ移動してくれませんか？トイレ行きたいんですけど」

「・・・わかった、一夏、楓を持ち上げろ」

「俺一人で!？」

「やれ」

「はい・・・楓、ちょっと揺れるぞ」

「ほいほい」

一夏がISを部分展開して椅子ごと楓を持ち上げる

「よし、それでは行くぞ」

千冬を先頭に一夏、鈴、他の専用機持ちと続く

そのまま歩くこと2分

「一夏、ちょ、あまり揺らさないでくれ、ヤバい」

「お!?!おう!?!」

「心配するな、着いた」

「いやっほおーい!?!」

楓は椅子の上からジャンプして部屋に入り、トイレに駆け込む

「よほど我慢してたのね・・・」

鈴がドアを見て呆れる

「閉めるぞ、出る」

「はい」

千冬がドアを閉めて、

「最初の日はおルコット、お前が朱雀の食事を運べ」

「わかりましたわ」

「いいか??!くれぐれも脱出させるな、これは朱雀のための処置だ」

『はい!?!』



「そんな意気込まなくても脱出しないから平気だよ」

『！！』

楓がいつの間にかトイレから出てきていて、椅子に腰かけていた

「とりあえず詳しいことは聞かないでおくよ、だいたい理解したけどね」

「とりあえず念を押しておくぞ、脱出なんてことは考えるな、いいな」

「ほいほい」

千冬たちは楓に違和感を覚えつつ部屋から遠ざかっていく  
それを見送って楓は呟く

「俺のための処置・・・か、大方各国に言われてんだろな、朱雀楓の身柄とISをよこせて・・・それで監禁という名目で俺を目の届く空間に置いておき、安全を確保する・・・なかなかやるねえ、千冬センセ」

楓は呟き終わってから、悪魔の笑みを浮かべた・・・

1 日目  
セシリア

「「朝ごはんですわよ」って何でハモるんですの!?!」

「だって朝だし」

部屋でうだうだしていた楓は、セシリアの気配を感じ、セシリアが言うであろうセリフを同タイミングで言った

「朝とか関係ないですわよそれは!」

「暇なんだよ〜やる事が無いんだよ〜」

「当たり前ですわ・・・監禁なのですから」

「ですよね・・・」

セシリアとのやり取りを終えた楓はベッドにダイブする

「ご飯ですわよ!?!ほこりを飛ばさないでくださいまし!?!」

セシリアが叫ぶ

「そういえば最近セシリアって突っ込み役だよね」

「皆さんがボケまくるせいですわ!」

素朴な疑問をぶつける楓にセシリアが突っ込む

「まあいいや、セシリア、暇だから軽く生い立ちとか語ろうか」

「軽く話す話題じゃないですわ!?!」

「とりあえず・・・って何でご飯が二人分???俺そんなに・・・食えないことも無いけど」

セシリアの持ってきたお盆にはパスタが二人前、楓一人で食べる量としては多い

「私もここで食べるからですわ」

「いいのかセシリア???密室、しかも人気のないところで俺といて、食べちゃうよ?」

「御冗談を、私は・・・って何でベッドを整えますの!?!」

楓はベッド・・・シーツを念入りに伸ばしている

「え???だって・・・」

「やっぱり言わなくていいですわ!?!」

「嘘だよ、お前の本命はいち・・・」

「シュン!?!」

「何か言いました??」

「いや、何も、そうだ、新しい武器の話んだけどな、実弾とビーム兵器どっちがいい??」

唐突に話を変える楓、セシリアの手に光るものが握られていたのは気にしちゃいけない

「そうですわね・・・どっちもというのは・・・」

「どっちもか・・・出来るにはできるんだがそれやると基本的にセシリア無双になるし、そうすると俺が手加減できないからセシリアにトラウマを・・・」

「実弾でいいですわ!!一夏さんの零落白夜にはビームが効きませんから・・・」

「でもあいつならB08連射してれば勝手に自滅するぞ??ってまだ渡してから戦ってないか」

「B08はもはやチートですわね・・・」

今更ながら自分が魔改造されていることに気付いたセシリア、なんてったって

(BT?だって常に偏向射撃しますしビームって言うより誘導ミサイルですわ)

なのである

「とりあえず実弾にして・・・とりあえず飯食っていい??」

「え!?!ああ、どうぞ・・・」

セシリアはパスタを差し出す

速攻で食べ始める楓、すると

「冷たい、フレア!!」

「きゃああ!!」

楓が何か呟いた瞬間にパスタが燃え上がり、瞬く間に暖かくなった

「な・・・何が・・・」

「企業秘密だ、うん、うまい」

「そうですの!?!それは私が作ったのですわ!!」

「え???あ・・・」

楓は一瞬冷やっとするがパスタの皿の淵の部分に紙が張っており、そこには

「楓へ、セシリアがへい・・・パスタを創ってたから隙を見て入れ替えといたわ、感謝しなさい、鈴」

（助かったぜ、鈴・・・）

死を回避した楓は鈴に頭の中で感謝の言葉を述べる

「どうしました??」

「ん、いや、何でもない」

セシリアに悟られないように紙をポケットに隠し、黙々とパスタを食べる楓、すると

「楓さん」

「なんら??」

セシリアが呼んだので、啜っている途中で返事する楓

「その・・・生い立ちの話ですけど・・・」

「話してくれるのか??」

「ええ・・・私がなぜ楓さんに最初にあんな接し方をしてしまったのかも・・・すべてはなしますわ」

「そうか、聞くぞ、仲間の毒を治療するのもリーダーの仕事だからな」

何気に気に掛け方がひどい気がするがもうそんなの気にしない

「ふふ・・・お願いしますわね、途中でつらく当るかもしれないけどうまく流してくださいな」

そう前置きをして、セシリアは自分の過去を話し始めた・・・

sideセシリア

私の母は、I Sが登場する前から女でありながら次々に成功を重ね、我が家の財産を守って来たんですの

私はそんな母を見ていて「私もこんな風になりたい」といつしか思うようになっていましたわ

それからすぐにI Sが登場して、今の女尊男卑の風潮が広まり、父は最初は母と二人で仕事をしていましたの

でも、もともと婿入りした父はいつしか母に対して卑屈なまでに頭を下げるようになり、母も一人で仕事をする負担から、ストレスを溜めていったんですの

その頃の話はあまり覚えていませんが、どうやらお金に関するトラブルのようで、「企業連」やら「ユニバース」やら言っていましたわ私にはいまだによくわかりませんがそんな父を見ていていつからか「自分より弱い男とは伴侶とにならない」と心に誓っていましたのそれから母が病で亡くなってから、私は妹のルシアと二人きりになった

そうしたら突然父が母の遺産の相続権を自分にしろと言ってきたんです

「それはわたしと彼女がかせいだお金だ!! 私のものだ!!」って怖くなった私はルシアと一緒に勉強に勉強を重ねて、遺産を狙うモノから守ってきましたわ

そう、これが楓さんにつらく当たった理由、最初にあんなことを言われては誰だってカチンと来るものでしょう??

それで怒るようなら私と対等に接する必要はありませんの  
あなたも最初はそうだった

あの忌々しい父と同じ、いやそれ以下だった!!  
あの状態でキレルものはたくさんいましたわ!! でもあなたは違  
た、それも悪い方向に!!  
意に介さず、それどころか当たり前のように私の下であると思わせ  
る行動を取った!!  
私はプライドが高いと自覚していますわ!! だからこそ、あなたの  
行動に異常なまでに腹が立った!!  
だから叩きつぶしてやろうと思った!!  
だから・・・

side            OUT

「だから叩きつぶそうと思った!!」

「もういい」

「だから・・・」

「もういい!! セシリア!!」

楓が大声を出す

それに驚いてしまうセシリア

「お前の内に秘めた誓いも!! 母親へのあこがれも!! 父親への憤  
りも!! 全部わかった!! だからそれ以上自分を殺してまで傷つこ  
うとするな!!」

楓は大声でまくしたてる

「お前の中の黒いものはすべて俺が引き受けてやる!! だからせめ

て一夏の前ではそんな顔すんな!!一夏の・・・せめて一夏の前ではいつも笑顔でいてやれよ・・・そんな泣きそうな顔をするのは・・・俺の前だけでいい」

「かえで・・・さん」

セシリアの目に涙が浮かぶ

「俺は大丈夫だ、お前の中の黒いものを引き受ける。お前は一夏のほうだけ向いていればいいんだ、その重荷は俺が背負ってやる、だからもう心配しなくていい、お前の親父さんは、俺が・・・」  
不意に途切れた楓の声、なぜなら

「う・・・ひつく・・・」

セシリアが楓に抱きつき、泣いていたからだ

「・・・やれやれ、大きな娘だこと・・・それでいい、その涙は俺にだけ見せろ、悲しい涙は俺にだけ、嬉しい涙は一夏だけにな・・・」

そんなことを呟きながら、楓はセシリアの頭をなでる、サラサラの髪をほんの少し楽しみながら、ゆっくりと、子供をなでる母親のように、セシリアが泣き疲れて眠るまで、その髪をなで続けて、それから・・・

「どうしよう、この状況・・・」

後悔した、しかしすぐに名案を思いついた

「あ、一夏??? ちょっと来てほしいんだけど・・・」

電話の相手は一夏だった

『え??? どうしたんだよ・・・って千冬姉!??』

『スパアァン!!』

『織斑先生だ、朱雀、お前は今』

「わかってるよ、セシリアが眠っちゃって、一夏に部屋に連れて行ってもらおうと思って連絡したんだよ」

『オルコットが眠った???・・・何をした』

「ちよっと・・・ね、別にやましいことも薬も使ってないよ、ただ・

・・」

『ただ?』

「きれいになる魔法をかけてあげたんだよ」

『・・・わかった、すぐに一夏を向かわせる』

多少げんなりした声で承諾する千冬

「たのんます、センセ」

くぷっく

「さあ、舞台は整った、後は・・・」

くお前次第だぜ、セシリアく

そう耳元で囁いて、一夏が来るまでセシリアをなで続けた・・・

## 二日目

ラウラ

「ん?? 今日はお前か、ラウ・・・」

くパシィンく

「いきなりナイフとは御挨拶です事」

「どうしてかもわかってるんだろ??」

いきなりナイフで切りかかってきたラウラを迎撃しながら楓はのんきに話しかけ、心なしかいらついているラウラはそれを見て笑う

「やっぱ怒ってる?」

楓は迎撃をやめ、座る

「当たり前だ」

ラウラも本気ではなかったようで、ナイフをしまって楓の前に座る  
「悪かったよ、技パクったりして」



「お前が言っていたのはそっちか!？」

さすがのラウラでもびっくりだった

「ん?? 違うのか?? なら・・・お前のプリンを勝手に食ったことか??」

「貴様かあああああ!!!!!!」

またもやはずれ、ラウラが斬りかかる

「ああ、セシルの事か」

「そうだ、どういう訳か知らんがセシリアの奴、いきなり可愛くなつたようなのでな、一夏とも接近したと聞いている、それで皆で考えた結果、お前があやしいということになったのだ」

ラウラの言葉を聞いた楓は一言

「何だ・・・すっかりできてるじゃないかと、呟いた

「その反応を見るにお前が犯人なのだな?? だとしたら気をつけろ、シャルがうつろな目で「楓・・・殺してあげるよ・・・」とか「うふふ・・・」とか呟いていたからな」

「何それ超怖いんだけど、俺殺されるんじゃない??」

ヤンデレルート獲得の楓&一夏

「まあそれはドンマイだな、で、セシリアに何をしたのだ??」

「ただ単に、生い立ち聞いて少しアドバイスとお膳立てしてやっただけだよ」

「ほう・・・」

それを聞いてラウラが目を細める

「ではそのアドバイスとやらを私にもしろ」

「お前一夏嫌いじゃなかったっけ??」

「シャルのためだ」

きっぱりと言い切るラウラ

「嫌いな事についてはノータッチなのね・・・どちらにしても、それは無理だ」

「どうしてだ!! 私・・・」

楓が断り、ラウラが怒る・・・と

「俺のアドバイスは俺が直接教えないと意味を成さない、しかも俺のアドバイスは生い立ちを聞いてからじゃないとできない」

楓は・・・ラウラの唇に指を当ててさえぎっていた

「・・・／／／／」

うつむいて紅くなるラウラ

「まったく・・・この眼帯があると可愛い顔が台無しだぞ??」

そう言って楓はラウラの無骨な眼帯を取ろうと手を伸ばして・・・  
「パシイン!!!」

「・・・・・・」

「・・・済まない、これは外すわけにはいかないんだ」

ラウラに手をはたかれた

無意識だったのか、ラウラはハツとして手を引っ込める

「境界の瞳・・・・か、お前は試験管ベビーか」  
ヴォーダン オージェ

楓はラウラの秘密を簡単に解いていく

「・・・!!なぜ・・・」

驚愕するラウラ、この秘密はシャル以外に話したことが無いからだ

「ドイツ・眼帯・オッドアイ、この三つは基本的にイコールだからな、黒兎??」

ラウラが表情を消したのに気付き、声をかける楓

「・・・笑えばいいじゃないか」

「ん??」

ラウラは肩を震わせて呟く

「笑えばいい!!おかしいだろう?私は人の子でさえない!!親が誰なのかもわからない!!私がこの話をして、帰ってきたのは嘲笑や同情だけだった!!」

「だれが笑うか、お前はまだ幸せだよ」

不意に楓が声を低くしてそう呟いたのを聞いて、ラウラが不思議そうに楓を見る

「俺はこの容姿のせいで・・・親に化け物って呼ばれて、殺されそ

うになったんだ」

「・・・！！だが親が居るなら・・・」

「あれは親じゃない、親なら・・・自分たちの子を化け物とは言わないだろう??」

楓の頬に涙が流れる

「俺は・・・そのせいで何度自殺しようとしたことか・・・何度！自分を殺そうと思ったことか！！でも・・・俺を育ててくれたシスターが言ってくれたんだ、「あなたの親は私、彼らは親じゃないわ」って！！その言葉で吹っ切れたんだよ、眼帯をしてたけどそれも外した！！周囲の反応なんてどうでもいいだろう！！自分が人間であると信じられていたうちは！！」

大声で、泣きながら言う楓にラウラが反論する

「軍人は・・・周囲の反応がすべてだったんだ！！この目の・・・境界の瞳のせいで！！失敗作呼ばわりされて！！それが軍人にとつてどれほどの屈辱か・・・おまえは知らないだけだ！！」

「当たり前だ！！俺は軍人でも失敗作でもない！！おまえだってそうだ！！軍人の評価なんて価値はない！！軍人である前に・・・お前は一人の女の子だろうが！！それにちゃんと生きている！！おまえのどこが失敗作だ！！十分成功してるじゃねえか！！」

「知ったような口をきくな！！」

「お前こそ！！軍人って殻にこもってるだけじゃないか！！ありのままでもいいんだよ！！おまえは軍人じゃない！！只の高校生だ！！」

「ただの・・・高校生??」

ラウラがハツとなる

「そうだ、ここにいる間は俺もお前も、ただの仲間と喋って、一緒にご飯を食べて、遊ぶだけの高校生だ。だからここにいる間だけはあるのままでいいんだ、それに、シャルは笑わなかったんだろう??」

「それは・・・そうだが」

「ならそれでいいじゃないか、俺はシスター、お前はシャル、人は

違えど同じことだ、それにお互いもな」

「お互い・・・も??」

「俺はお前の事を笑ったりしてないし、お前は俺を化け物とは呼ばなかった、一夏達もそうだ、だから話してみろよ。きつと受け入れてくれるぜ」

「・・・そうだな」

「それにもし親が欲しいんなら俺が父親になってやる、保護者に、盾になってやる」

「お前が・・・保護者・・・ふふっ・それは・・・いいな」

楓の保護者発言を聞いてラウラは笑った

「・・・やっぱり可愛いな、ラウラは」

「おかげで吹っ切れた、だから・・・」

ラウラは眼帯を外す

「ありがとう、父さん」

「ああ、しっかりやれよ、娘よ」

楓はラウラの金色の瞳をしっかりと見据えながら、娘の背中を押してやるのだった・・・

### 3日目 箒

「ご飯だ、楓」

「今日は箒か、サンキュウ」

「・・・何をしている」

「暇だからベッドをひたすら解体↓組み立てしてる」

「どれだけ暇なんだお前は・・・」

楓はラウラと話してからやることが無くなってしまったためベッドをひたすら解体しては組み立てなおす動作を続けていた

「今日のご飯は何なんだ??」

「鮭の塩焼きとお吸い物、あと漬物だ」

「日本料理万歳!!」

「ちなみに私が作ったぞ」

「おお・・・やるなあ箒、美味いぞ、一夏にはもう作ってやったのか??」

「な・・・何を言っている!! 私は・・・その・・・」

「いやこれ実際美味いって、食堂に勝る味だ。とくに何だこの漬物、今まで食ったことないぞコレ」

口に運びながら褒めまくる楓

「それは家で漬けている自家製の漬物だ」

箒は胸を張って誇る

「やめろ強調すんな、お前のソレはもはや一つの爆弾だぞ」

「何だそれは!!・・・まあいい、それで今回セリア達の変化はどうしてだ?? ラウラがお前の事を父さんって言ってたぞ、眼帯も外してたし」

「昨日ちよつと俺たちの本質にかかわる話しをしてな、ラウラには友達と親代わりの人間が必要に思えたから俺がその役になったんだよ。」

「そうなのか・・・」

楓の話を聞いて箒はゆっくり息を吐く

「お前はとうだった?? ラウラの目を見て」

「とてもきれいだったな・・・思わず見とれてしまったよ」

「そっか、だから言ったのに・・・」

楓は箒としばらくしゃべっていた

すると

「朱雀楓、お前を拘束する」

「!!!!」

「箒!!! 鍵を閉めろ!!!!」

いきなり数十人の男たちが部屋に飛び込もうとしていた。瞬間的に箒に指示を出して男たちを観察する

（あれは・・・フランスの・・・）

「おとなしくしろ!!! おとなしくすれば危害は加えない!!!」

「拳銃構えてるやつが言うセリフじゃねえよなあ!!! 箒!!! 突破するぞ!!!」

「どうするっていうのだ!!! 今の私たちにはISが無いのだぞ!!!」

椿姫は現在没収されていて、箒は専用機を持っていない

「簡単なことだ、肉弾戦で突破するんだよ!!!」

「武器が無いぞ!!! しかも相手は銃をもってる!!!」

「ならこっちも作ればいい!!!」

楓は叫びながら両手を前に突き出して目を閉じ、頭の中でイメージする

（鋭く・・・細く・・・決して折れない、強固な刀・・・）

目を開いてたった今創った武器の名前を呼ぶ

「炎牙!!! 氷孤!!!」

楓が創りだした刀、それは

「日本刀・・・??」

二振りの日本刀だった

「箒、お前はこっちを使え」

楓は柄の赤いほう「炎牙」を箒に手渡す

「楓・・・お前は・・・」

箒は目の前の事が理解できなかった。楓は何もないところから二振りの刀を作り出したのだから

「人間じゃないってか?? そんなのはなあ・・・」

「とつくに自覚してんだよ!!!」

「行くぞクソ共おとおお!!!」

楓は氷孤を片手で持ち、ドアを斬る

重厚な鉄の塊であるドアを紙のように切り裂いて楓が飛び出る

「撃て!!! どうせ死なん!!!」

「てめえらは死刑だ、俺のチームに銃を向けたことを後悔しながら死んでいけ!!!」

「一閃、不知火」

楓が居合拔きの要領で刀を振り抜く、それで3人が胴体を真っ二つにされる

「この・・・」

相手の一人が箒に向かっていく

「お前を人質にすれば・・・」

「舐めるな!!!」

箒は男を切り裂いてその切れ味に驚く

(この切れ味・・・異常だ)

「箒!!! 千冬先生に連絡!!! その間は俺が食い止める!!! 刀を貸せ!!! おまえは誰も殺していない!!!」

「お・・・おう!!!」

箒は楓に炎牙を渡して千冬に連絡を取る

「まずい!!! 早く殺せ!!!」

「残念・・・お前らの未来は、死だ」

箒を守るように楓は二振りの刀を携えて立ち上がる

「俺が二刀を扱う時・・・それは」

「相手の死を意味する」

「くたばれ、二閃、白雪」

双剣をまるで自分の一部のように扱い、次々と殺していく

「くそっ!!!」

「後悔してももうおせえ!!!」

切り裂き、貫き、斬り飛ばす

あつという間に残りはリーダーと思わしき一人になった

「後はお前だけだ、逃げるか死ぬか、どちらか選べ」

「くっ・・・せめてお前だけは!!」

リーダーは箒に銃を向ける

「・・・!!」

「箒!!」

箒は銃を見てかたまってしまい、男はにやりと笑って引き金を引く

箒は死を覚悟し、目を閉じる

「パン!!!!」

「・・・!! 楓・・・」

「よお・・・無事か??」

箒が目をあけるとそこには

「痛ってえな・・・この野郎・・・」

箒を守るように前に立ち、背中に紅い染みを広げている楓の姿だった

「楓・・・!! 大丈夫なのか!？」

「心配すんな、かすり傷だ」

「いやどっからどう見てもど真ん中だろう!!」

「気にすんな、それと・・・」

楓はリーダーを睨む

「俺を撃ったんだ、覚悟はできてるよな??」

「あ・・・ああ・・・」

「死ね、屑が」

楓は二刀をリーダーに振り下ろす

「・・・」

「箒よ」

「な・・・何だ??」

楓は箒に振りむき、ゆっくりと歩く

「セシリアだけじゃ不公平だから・・・お前にも言うておく」

「動くな!! 死ぬぞ!!」

箒が心配するがどこ吹く風、楓は箒に話し続ける



「一夏の前だけでいい、素直になって、やさしくしてやれ」

「動くなど言っている!!」

楓はなおも話し続ける、もはやその眼に光りはなく、濁っている

「それに・・・セシリアには料理を教えてやれ、一夏が危ない」

「わかった!!」

そこだけ全力で肯定する箒

『楓!!』

一夏達が部屋に到着し、全員が息をのんだ

白かったシャツが血で真っ赤になっている、おそらくは体内の血をすべて出してしまったであろうその体で、楓はまだ生きている。その事実

「楓!!」

鈴が駆けだして楓をベットに横たわらせる

「鈴・・・か??」

「そうよ!! 待ってて、すぐに医者を・・・」

「間にあわねえよ、この出血だ、持って後数秒ってところだな・・・」

「何言ってるのよあんたらしくない!! いつも通りからかいなさいよ!! あんたはこんなもんで死ぬ奴じゃないでしょう!!」

「人間じゃないみたいに言いやがるなこのつるぺたは・・・」

「だれがつるぺたよ!! 少しは膨らんでるわ!!」

「そりゃあ驚きだな・・・一夏、そこに居るか??」

「ああ・・・お前の隣に居るぜ」

楓は鈴に抱きしめられつつ、一夏を呼ぶ

「お前は気付いてないだろうが・・・シャル、セシリア、箒、鈴の四人はお前の事が好きなんだ」

『楓!! (さん)』

「あたしは違うわ・・・あたしが好きだったのはあんたなのよ!!」  
鈴が楓を抱きしめる力を強める

「そっか、一夏、お前がだれを選ぶかは自由だ、だが、絶対に幸せ

にしろ、良いな」

「ああ・・・必ず幸せにして見せる」

それを聞いて、楓が身を起こす

「楓・・・?」

「約束だぞお前、ちゃんと子供見せろよ??」

楓が何事もないように立ち上がる

「楓!! 平気なのか!」

「当たり前だろ、かすり傷だ」

「だってその血の量・・・」

「貫かれていないぞ??」

楓はけろっとしている

「お前は撃たれて・・・」

「アイツの言葉を思い出してみ??」

そう言われて箒はリーダーの言葉を思い出す

「撃て!! どうせ死なん!!」

「死なんって・・・ということだ??」

「つまりこういうことだ」

楓はポケットから一つの銃弾を取り出す

「これは猛獣を捕獲するための銃弾だ、これは何だ??」

シャルが答える

「まさか・・・麻酔弾!」

「御明察だ」

「じゃあ何でそんなに出血してるんだ!」

「ダメーだ」

そう言っって楓は上着を脱ぐ

「・・・」

細い体に銃痕は一つ、血は止まっている

「じゃあ何であんなにふらふらしてたのよ!!」

鈴が質問すると

「麻酔弾だぞ?? 眠くならないわけがあるまい」

「つまり・・・あれは眠気を我慢してたせいでふらふらしてたってことか??」

箒が吃驚しながら問う

「ああ、でも・・・」

楓は自分の腕に構築したナイフで傷を創る

「これで眠気も・・・とれ・・・」

楓が倒れこむ、胸の傷口からは血があふれている

『楓!! (さん)』

皆が駆けよる、すると

「いってえ・・・予想より深く入ってたのか・・・」

「大丈夫なのか!??」

「麻酔のおかげで痛みはそれほどでもないが・・・血が止まらない」

「白石、朱雀を治療しろ」

「了解」

うろたえる一夏達の耳に聞こえたのはよく知った声、その主は

「千冬姉!!!!」

「・・・今はそれでも構わん、朱雀、重症なところ悪いがいくつか質問をさせてもらおうぞ」

「どうぞ」

「楓、あんまり動かないで」

楓の傷口を治療しているカエデ、信じられないような手つきで治療していく

「一つ目だ、お前を襲ったやつらの所属はどこかわかるか??」

「ええ、おそらく・・・」

楓は一瞬シャルを見てから

「フランスの・・・デュノア社です」

「そんな!??」

シャルが驚く

「そうか・・・。二つ目だ、篠ノ之は、何人殺した??」

「私は・・・ひと「皆俺が殺しました」楓!!」

箒が言おうとしたのでかぶせる楓

「本当か?? 篠ノ之」

「……はい」

楓からの（言うな）的意味の目線で肯定する箒

「最後だ、お前は襲われた、どうする??」

千冬が言っているのは「報復に行くか」「否か」ということだ

「シャル、お前はどっちがいい?? 確かお前は愛人の子で利用されている、もし自由になりたいのなら俺に……いや、俺のチーム「クリムゾン・カメラリア」に依頼しろ、「自由になりたい」って」

「私は……」

シャルは悩む、と

「シャル、楓の言うとおりだ、今ここで断ち切っておいたほうがいい」

ラウラがそんなことを言ってきた

「だって……僕はデュノア社の……」

「つぶした後の事なら心配するな、俺の会社「クリムゾン・ローズ」の社員になってもらうつもりだから」

楓の言うクリムゾン・ローズとは、お菓子、洋服などすべての業界でトップクラスの会社である

勿論ISもトップクラスで、数は少ないがスペックはどのISよりも高い、そんな会社である

「クリムゾン・ローズって……あの!??」

「そうだ、あれは俺の会社だ、社員は俺とカエデ、それとシスターの三人だ」

「三人であれだけの事をやったのか!??」

一夏仰天だった

「お前らもどうだ?? 歓迎するぜ」

楓は一夏達にも声をかける

「私は社員になろう、なにせ、父さんの会社だ」

ラウラは会社に入ることを即決する

「OK、よろしくな、ラウラ」

「うん」

ラウラの「うん」で若干ときめいてしまった楓

「ちなみに言っておくぞ、ドイツのシュヴァルツェア、イギリス、中国のほとんどの企業はローズの傘下だ、つっても表面上だけだからいざって時以外は皆各々の国の事をやってるけどな」

『それってほとんど強制!?!』

「いやならいいぞ、無理強いはしない」

楓は一夏と箒のほうを向く

「お前らはどうするよ」

「俺たちが入ってなんか得するのか?？」

「双方に得があるぞ、まずお前たちは強化パッケージが作れる、基本はテストが多いからパッケージつけてIS動かしてるだけで給料が入る、ローズ製のものがいつでももらえる、俺のほうは社員が増える、どうだ?？」

「お前のほうほとんど得してないじゃん・・・」

楓の説明だとそう聞こえる

「俺は社員が増えるだけでいいんだよ、どうする?？」

「入ろう、一夏」

「箒!？」

箒が一夏の手を取る

「お前のISはどこにも所属してないのでは危険すぎる、それに楓の会社なら信用できる」

「・・・そうだな」

「OK、歓迎するぜお二人さん」

ラウラに続いて一夏、箒も加入

「じゃああたしも入るわ!!」

「鈴、お前が居るとココロ強い、喜んで迎えよう」

鈴も加入

「じゃあ私も・・・」

「よろしくな、セシリア」

ローズ製の服は女性に大人気なのでそれが自由に着られるとなると女子としてはかなりの魅力を感じる

「あ、そうだ、時々新作の服を着てモデルやってもらうかもしれないから」

『是非!!』

「モデル??・・・何だそれ」

「一夏知らないの??これよ」

鈴が差し出してきた雑誌「ローズクォーツ」には薄いワンピースを着たカエデと水色のシャツにストラックスを着た楓が映っていた

「へえ・・・これが」

「簡単だよ、服着て何枚か写真取るだけだから、その新作の服とかあげるし」

雑誌を見てきやいきやい行ってる鈴達を見てラウラが

「服なんて数着あれば平気だろうに・・・」

「違うぞ娘よ、女の子というのは服をたくさん着ておしゃれする生き物なのだ、お前にも服のモデルはやらしてもらおうしそれとは別に新しい武器とかのモデルもやらしてもらおうことになる」

「新しい武器ですか??」

目を輝かせるラウラ

(着眼点が軍人だねえ・・・)

そう楓が思ってしまうのもやむなしといえる

「それで、お前は どうする?? シャル」

「・・・」

「答える、自由になりたいのか否か」

「私は・・・」

今だに決めあぐねているシャル

「・・・自由に、になりたい・・・」

シャルはそういうと、泣き出してしまった

「自由に・・・なりたいよお・・・」

ラウラがシャルを抱きしめ、その腕の中で子供のように泣くシャル  
「決定だ、千冬先生」

「わかった、私は何も見ていない、朱雀はここから出ていない。いか、絶対に死ぬな」

そう言って千冬は椿姫を楓に渡す

「了解、残りの監禁は帰って来てからやりますから」

椿姫を受け取り、首につけた楓は

「これは、俺一人で行く、ラウラ、帰ってきたらさっそく新しい武器のモデルをやってもらうからな」

「はい、父さん」

「んじゃま、行くとしますか!!」

楓は椿姫を展開、光の軌跡を残して飛んで行った

「全く・・・相変わらず甘いんだから」

鈴が軌跡を見ながら呟く

「楓は・・・やさしいんだね・・・」

シャルが鈴の隣に行く

「そう思うんならちゃんと仕事するのよ?? あたしじゃ限界あるし」

「限界??」

シャルは鈴の体型を見て

「ああ・・・」

とてもかわいそうな目をした

「その眼やめてくれるかしら!?? とりあえず・・・改めてよろしく、シャルロット・朱雀」

「・・・え??」

鈴はシャルロット・「朱雀」といった

「デュノア社は・・・デュノアという名前はこの世から完全に消える、楓は多分そのつもりよ。だから楓はあんたをローズに入れたのよ、朱雀という名前を与えるためにね」

「てことは・・・楓がお父さんになるの!？」

「それはだめだぞシャル!! 父さんの娘は私だけだ!!」

もはや完全に娘となっているラウラ

「多分・・・ラウラの姉あたりじゃないかしら?？」

鈴がラウラとシャルを見て・・・実際は体型を見てそう推察する

「鈴よ、そういえばお前楓に告ってたな」

「!?!? そういえば!!」

一夏に言われてからようやく気付く鈴

「まあ・・・なんだ」

『ファイト!!!』

「何よそのハモリ!!」

楓が飛んで行ったあとも大波乱だった



## 8話

### クリムゾン・ローズ（後書き）

ひとこと言わせてもらいます

ほんとにすいませんでした

知らない間にとんでもないことになるしラウラが娘になるし・・・  
次回は楓オンリーのデュノア社消滅回になります

## 9話

デュノア社の崩壊、動き出す神々（前書き）

今回は楓無双デス

## 9話

### デュノア社の崩壊、動き出す神々

最初に言っておこう

楓は本気でキレている

「さてと・・・この辺でいいか」

そう言っって楓は椿姫を解除して目の前を見る

「あれがデュノア社・・・でっけえ会社」

楓の目の前にはデュノア社がある

理由は言うまでもない

「さてと・・・じゃあ、始めるか、一方的な破壊を」

楓はデュノア社の門に向かって歩き出す

「何者だ」

門番に止められてしまった

「聞きたいことがあるんだけどいいか??」

「なんだ」

「あんた、嫁さんはいるのか??」

ここまで来てちようどうでもいい質問だった

「ああ、だがそれがどうした・・・」

「なら今すぐここから逃げろ、巻き込まれて死ぬぞ」

「どういふことだと聞いている!!」

門番が楓に詰め寄る

「だから・・・」

「デュノア社は今から完全に消滅するんだよ・・・」

「なっ・・・」

「選択肢は二つ、逃げるか、俺に殺されるか」

楓は二本指で門番の持っている槍に触れる

「パキイン・・・」

刹那、槍が粉々になった

「・・・・・・」

「どっちにする??」

楓はにっこりと笑い、門番に決断を迫る

「俺は・・・アイツのために・・・」

「ちなみに就職先なら心配すんな、確か傘下の企業に警備関係の仕事があったから、給料もそっちのほうがいいぞ??」

そう言つて楓はある紙を門番に渡す

「そこに書いてある所に行つてみな、詳細を聞かれたら「ローズの社長に言われてきた」つて言えば喜んで雇つてくれるから」

「お前は・・・一体・・・」

「俺の名前は朱雀楓、企業「クリムゾン・ローズ」の社長だ」

楓が渡したのは傘下の企業「レムナス」の住所だった、レムナスは主に情報関連の仕事をしている会社である

「クリムゾン・・・ローズ・・・」

「じゃあな、幸せに・・・緋炎」

楓は去つていく門番を見送つてから手を突き出し、武器を構築する  
「どっかーん」

気の抜けた言葉とは裏腹に尋常じゃない威力で壁をブチ破る楓  
とことんチートである

「じゃあ行くかな・・・」

楓は武器を収納してメガホンを構築し・・・

「あゝ、あゝ、聞こえてるか?? デュノア社に居る者の中で伴侶が居るものは今スグに脱出しろ。今から3分後に、破壊を始める。戦おうとしているものは今すぐ諦めろ、量産機なんかじゃ生身でも破壊できる。いいか?? 今から3分後だ!! それを過ぎても中に居るものは皆殺害する!! 変に隠れようとはするな!! もし過ぎても敵意が無いなら手を頭の後ろで組んで居ろ!!! そうすれば攻撃はしない!!!」

「さてと・・・どうかな??」

楓がメガホンで叫んでから3分、結構な人数が出てきた、ほとんどが只の会社員で、全員レムナスに推薦してあげた

「そろそろかな・・・おい!! そのお譲ちゃん!!」

「は・・・はい!!」

楓に呼ばれてびくびくしながら近づいてきたのは楓と同年の女の子だった

「何でしょう・・・?」

「別にそんな怖がることあねえよ・・・ほれ、キャンディーだ」

「私は幼児ですか!??」

楓がキャンディーを取り出すと少女が突っ込む

「・・・いい突っ込みだ、」

「あ・・・すいません!! 殺さないで・・・」

「だから・・・質問しよう、君から見て、まだ逃げられていない人間はいると思うか??」

楓は少女に質問する

「え・・・っと・・・多分いません、逃げずに戦おうとしている人以外は皆逃げたと思います」

「ふむ・・・時に君、名前は?」

「ええ!?! えっと・・・清水白雪・・・です」

「白雪か、俺は朱雀楓、ローズの社長だ」

楓の自己紹介を聞いて白雪が目を見開く

「ローズって・・・あの!?!」

「そうだ、そのローズだ。白雪、お前、ローズに入らないか??! ついでにIS学園にも」

「IS学園!?!」

楓がなぜか白雪をローズに誘った、IS学園にも

「私なんかが・・・ローズに・・・」

「どっちにしろお前職を失ったんだからチャンスじゃないか??! とうか入れ、強制だ」

「ええ!?!」

何でか知らないがどうしても白雪をローズに入りたい楓

「じゃあ・・・お願いします」

「いよっし!?!」

異常なまでに喜ぶ楓

「そんなに喜びますか社長!?!」

「ああそうだ、社長はやめてくれ、あと敬語も無しでいい、俺はそういうのは好きじゃないから。それと、今からお前は朱雀白雪だ、良いな?」

「わかり・・・わか・・・った・・・ってええ!?!」

どもりながらも敬語をやめる白雪

白雪の性格は簪をイメージするとわかりやすい

「白雪、とりあえずどこかに隠れてろ、いざって時はこれを使え」  
そう言って楓が取りだしたのは黒い腕輪

「これは・・・?」

「うちが作ってる量産機「月光花」<sup>げっこうか</sup>だ、だれとでもマッチングする

から適性がほとんど無い人でも使える」

「わかった・・・」

「じゃあ行ってくる」

「行つてらっしゃい」

楓は白雪に手を振ってからデュノア社の中に入っていく

「いたぞ！！侵入者だ！！」

いきなりリヴァイブ5機に囲まれる楓

「だから・・・」

「かかれ！！所詮は人間だ！！」

（量産機ごときじゃ傷一つつかねえって言ってんだろうが！！）

楓がそう叫んだ瞬間、ISから放たれた無数の銃弾が楓を襲う

「遅い！！」

普通の人間なら速攻ハチの巢にされているはずの銃弾、それを楓は高速で動きまわることによりすべて避ける。紙一重でよけているので時々掠る、しかし楓の動きを止める決定打にはならなかった

「化け物・・・」

「化け物？？違うな・・・俺は、原初の存在「椿姫楓」だ、残念だがこれを聞いたものは生きて返すわけにはいかない、ってなわけで・・・」

死のうか。

楓が一言を言った瞬間、楓の周りに風が吹き荒れる

「始めようか！！死の舞踏を！！」

リヴァイブに向かって突貫する

「さっさと終わらせようぜ！！紅蓮！！氷河！！」

楓は二振りの刀を構築、リヴァイブのアサルトライフルと切り結ぶ

「人間がISに勝てるものか！！」

「人間じゃねえって言ってんだろが！！」

楓はアサルトライフルを斬り落とすと楓はリヴァイブを足場にして飛ぶ、その刹那、後ろに居た別のリヴァイブがアサルトサイフルを放った

「効かねえよ!!」

楓は刀を収納、空中で体制を整え、アサルトライフルを放ってきたリヴァイブの方向に向き直り、踵落としての体制になる自分の足を斧刀に見立てた踵落とし

「落花!!!!狼藉いいいい!!!!!!」

その踵落としてはISの絶対防御、装甲を紙のように切り裂き、爆散させた

「一匹!!次はどいつだ!!」

「おおおお!!!!!!」

両手にナイフを構えたリヴァイブが楓に突進してくる

「牛か!!」

突っ込みながらも楓は真正面からリヴァイブを止める

「そらよ!!」

楓はそのままリヴァイブを持ち上げる

行ってしまうば校倉必と七花の対決みたいな構図だ

「そんなでもって・・・」

楓はリヴァイブを上へ放り投げ、ある構えを取る

半身になり、両足を大きく開き、体をねじる・・・

「第四の構え『朝顔』」

朝顔の構えを取った楓にリヴァイブが降ってくる

自分に当たる寸前でねじった体を開放、握っておいた拳をリヴァイブに当てて叫ぶ

「柳緑花紅!!!!」

打撃透徹の技、それは絶対防御すら貫通し、リヴァイブが操縦者もろとも弾け飛ぶ

「・・・・!!!!!!」

その瞬間、残っていたリヴァイブが一斉射撃してきた。楓は先ほど弾け飛んだ残りを盾にし、それを防いでゆく

「全く・・・仲間の死体をためらわずに撃つとは・・・恐れ入った」  
数秒が経過し、銃撃の嵐が止む、瞬間、楓が動く



残骸を一人に投げつけ、一人に足払い、残った一人の前に行き

「鏡花水月!!」

虚刀流の中で最速の掌底を叩き込んだ

それだけでリヴァイブは粉々になり、操縦者は心臓を掌底に貫かれた

「次だ!!」

楓は足払いを掛けたリヴァイブを踏んで動けなくし、残骸を投げた  
ほうのリヴァイブの懐に入る、そして

「百花繚乱!!」

強烈な膝蹴りが操縦者の頭を消し飛ばす

「最後はお前だ!!」

今だ立ち上がれていない最後のリヴァイブを睨みつけ、蹴り飛ばす、  
宙に浮いたリヴァイブを挟み込むように

「錦上添花!!」

水平手刀、その一撃でリヴァイブが分断される、数分で5機のリヴァイブを斃した楓は一言

「終了・・・なんか萎えてきた・・・」

あそこまで奥義のオンパレードだと見てるほうも疲れるし書いてる  
ほうも疲れる

楓は横たわる死体を気にせず歩く

服をところどころ返り血でぬらしながらも、楓はひととき大きなド  
アの前にたどり着く

「デュノアのおやっさん、居るんだろ??」

ドアを蹴っ飛ばして中に入る

「お前か・・・ローズ」

「俺の名前はローズじゃねえ」

楓は目の前の人物を睨みつける

「何でここに来たか・・・わかってんだろ??」

「ああ・・・シャルロットの事だろう?? 全くあの娘は指令一つろ  
くに・・・」

「一つだけ問う、お前はシャルを愛してやってたか??」

デュノアの首元に構築したナイフを突き付け、楓は低い声で聞く

「愛？？何を言っている、私はあの子を愛しているよ」

「へえ・・・それは驚いたよ、シャルの事を愛してやっていたんだな」

楓はナイフを収納する

「当たり前だ、あの子は私の娘だぞ」

「そう、そしてこれから俺の娘になる」

楓の言葉に不思議そうな顔をするデュノア

「お前はシャルを愛してなんかいない」

「何を言っている、さっきも言っただろう・・・」

「それは、道具としてだろう？？お前はシャルを娘としては愛していない」

楓はそれだけで人を殺せそうなほどの殺気をデュノアに向ける

「ククク・・・そこまで言われるとはな・・・そうだ！！私はシャルロットを「道具として」愛している！！あの子はIS適正が高い、それを利用して各国のデータを取り、我がデュノア社の糧となる！勿論特異ケース、つまり君や織斑一夏のデータも取らせてもらったよ。これはとても興味深くてね、これをもとに男でも扱えるISを開発すれば我が社は一躍トップになる！！」

「あー・・・盛り上がっているとこ悪いんだけどさ・・・その夢はあきらめな？？」

演説のようなセリフに割り込んで呆れながら話す楓

「今日、デュノアという名前はこの世から完全に消滅する・・・俺が消滅させる」

「消滅？？何を言っているんだ、消滅するのは、君のほうだろうか？？」

デュノアがそう言った瞬間

楓に無数の銃口が突き付けられた

「おーおー・・・こりゃあびっくりだ、ここまでバカが多いとはな」  
「負け惜しみかい？？これだけの数の銃から一斉に銃弾を浴びれば、

君は塵と化す」

その言葉を聞きながら、楓は笑う

「聞いてなかったのか?? 量産機ごときじゃ俺に傷一つ付けられな  
いって・・・つまりだ」

ISでさえ傷つかない俺が、ただの銃で倒れるとでも??

楓がそう言った瞬間、あたりの空気が重くなった

「なんだ・・・これは・・・」

「俺の殺気だよ、重いだろう??そして・・・」

くチェックメイトだ、デュノア)

オーバー・アビリティ・ワールド・デストラクション

「椿姫・楓、異常能力崩壊する世界」

楓の宣言と同時に、楓の周りの地面が崩壊を始めた

「そうだ・・・白雪!!」

『な・・・何??』

「急いで月光を展開して逃げろ!! かなり遠くまでだ!!」

『ど・・・どうしたの!??』

「良いから!! わかったな!!」

楓は崩壊を発動している間動けなくなる、なので椿姫のチャネルを  
開いて白雪と意識会話をした、デュノアのほうを見ると、少しずつ  
崩壊している

「何だこれは!!」

「俺は創造神、創るのも壊すのも自由自在ってことだ、これやると  
抑止力が働くから嫌なんだけどな・・・」

楓が小さな声で呟く

「創造神だと!?? バカな・・・」

デュノアはもう顔しか残っていない

「残念だがもう終わりのようだな・・・おい、ローズ」

「なんだ?? 散り際の一言か??」

「私が言うようなことではないが・・・本当に創造神だというなら、  
この世界を救え、・・・亡国企業から」  
ファントム・タスク

「ああ、必ず守ってやる、だから天から見守ってやれ。お前の自慢

の娘を」

楓はデュノアに笑いかけ、静かに目を閉じる

「Good-bye, no summons to the heaven I pray」

「さらば・・・世界よ」

その言葉を最後に、デュノアはデュノア社とともに、この世から消え去った

「・・・で??誰なの??」

「誰って・・・新しくローズ及びIS学園に入る清水白雪、いや、朱雀白雪だ」

「よろしくお願いします・・・」

IS学園に戻ってきた楓と白雪

返ってきた楓の背中に乗っている白雪を鈴が発見するや否や、白雪を降ろし、楓を柔道の技で倒し、その上に乗ってさっきの質問をしたところだ

「それはラウラやシャルみたいに親になるって事??」

「まあそんな感じだな、末っ子だ」

くどすっく

「で、デュノア社はどうなったのよ」

「俺が跡形もなく崩壊させた、シャル、お前はもう自由だ、つって

も大して変わらんだろうケドな」

ラウラに抱かれて泣きだすシャル

「そんでさ鈴、お前、俺が撃たれた時言ってたよな」

「え・・・あ、あれはその・・・」

「嬉しいよ、でも・・・」

楓は表情を曇らせる、それを見て鈴は次の言葉を予想する

（多分・・・だめ、だよな・・・）

楓がゆっくりと息を吐き、鈴に告げる

「俺はまだ結婚できる年齢じゃないんだ、ごめん」

『子供3人いるくせに言えるセリフじゃないだろ!!!!!!』

総突っ込みを喰らう楓

「あ、そうか・・・じゃあ鈴!!」

「な・・・なによ?」

「これからよろしくな」

セリフだけ見れば恋が実ってハッピーエンドなのだが実際は倒されてのしかかられている男と乗っている女だ、どちらかというと主従の契約といったほうがしっくりくる

「・・・それって・・・」

「ああ、結婚はまだしないぞ??ここに居る間は、俺もお前も只の高校生だ、正式には卒業してからだな」

楓はそれだけ言うとおベッドに入る

「楓?」

「俺はもう眠たい、寝させてくれ」

「そのことだが朱雀、お前の監禁はもう終わりだ、今日から自分の部屋に戻れ」

千冬が唐突にそう告げる

「どさあ!!!」

「何でやねん!!!」

楓がなぜかベッドに空いていた穴から落ち、ベッドの下から突っ込む  
「お前がつぶしたのはデュノア社だろう??世界的な会社を一人で

消したんだ、もう誰も怖くて近づけんよ」

千冬が若干笑いながらそう言う、余談だがデュノア社はIS学園にデータの引き渡しを迫っていたらしい、千冬にしても今回の事で肩の荷が少しは降りたのだろう

「そっか、じゃあ帰るか」

「そのことなんですが朱雀君、残念ながらこの後取り調べが待っています」

そう言ってドアから現れたのは

「中学生か??ここは高校だぞ」

「・・・・・・」

ようやく出てきた山田先生だった

「楓、その人先生だよ」

カエデが冷静に突っ込む

「ほんとだ・・・胸が」

『変態!!!!!!』

楓が山田先生の胸について感想を言おうとした瞬間、その場にいた全女子（ラウラを除く）からパンチを受ける

「・・・・それで??山田先生、取り調べって??」

後ろでラウラが「父さーん!!」てやっているがとりあえず無視して一夏が代わりに山田先生に質問する

「勿論デュノア社の事と、デュノアさんの事です」

それを聞いた瞬間、シャルの顔がこわばる

「シャルの事なら心配いりません、俺が養子にします」

「デュノアさんはそれでいいですか??」

きっぱりと言い切る楓、確認を取る真耶

「はい、私は楓の・・・お父さんの養子になります」

「わかりました、さ、朱雀君、取り調べです」

「明日じゃだめですか??」

どうしても寝たい楓

「だめです、今スグです」  
きっぱり、

「どんくらいかかります?？」

「今からざっと3時間くらいですね」

「ZZZZ・・・」

答えを聞いた瞬間に寝始める楓

「スパァン!!」

「取り調べだ」

「うう・・・俺の睡眠時間・・・」

千冬に引きずられて去っていく楓を見送って、真耶が一夏達に向き直る

「あなたたちもう戻っていいですよ、来週は校外学習ですからその準備をしてください、お疲れさまでした」

多少言葉の順序がおかしい気もするが現在11時、眠くなるのも仕方ない

「そういえばそうだったな・・・水着どうしよう」

唐突にカエデが呟く

「去年のでいいんじゃない?？」

鈴がカエデに向き直る

「持っていないのよ、水着」

『へ??.?』

カエデの言葉に一夏とラウラ以外が停止する、一夏はその唐変朴さで、ラウラは軍人のため、『??.?』となっている

「持っていないって・・・ほんと!?!」

ようやく動き始めたシャルが恐る恐る確認を取る

「ああ、楓と一緒にになってから川はおろかプールにすら連れてってもらえなかったからな」

ごく自然に答えるカエデ

「なら明日買いに行けばいい、父さんも誘って」  
ラウラが提案する

「そうですね!! どうせならみんなで行きましょう!!」

今まで黙っていたセシリアがテンション高めに告げる

別に空気だったわけではない、只黙っていただけだ

「それもいいが・・・しかし」

箒が黙りこむ

「だよなあ・・・」

一夏も察知する

全員察しがついた

【楓が果たして開放されるだろうか・・・】  
考えていることが皆同じだった

誰もいない世界

真っ暗な空間に一つの光が現れる

『・・・創造神は禁忌を犯した』

白い光はそう眩く

『良いんじゃない?? あいつなら何とかするでしょ』



紅い光が現れ、砕けた態度で白い光に話しかける

『そんな口のきき方はおやめなさい、アマテラス』

今度は蒼い光が現れ、紅い光をとがめる

『ちえゝ、堅いんだよ。シヴァ』

紅い光は呆れたように揺らめく

『お二方、お止めください』

緑の光が現れる

『遅かったな、ノーム』

白い光がそう言う

『ちよつと幼児が・・・』

『幼児?』

とんでもない言い間違いが起きた

『あ、違った、用事があつて』

『・・・・』

他の光が黙ってしまったので、あわてて言い繕うノーム

『すまん、遅れた』

黒い光がそんなことを言いながら現れる

『お前が遅れるとは珍しいな、カオス』

白い光が驚いたように揺らめく

『ちよつとやりすぎちゃつて・・・なに!? この空気!? 嫌なんだ

けど!』

『カリバーン』

紅い光から大きな剣が現れる

『やめろアマテラス!! あぶねえから!!』

カオスがあわてたように揺らめく

『・・・そろそろ始めようか、議題の内容はわかるな?』

白い光・・・ゼウスが仕切つて話を始める

『【ローズ】の話だろ?』

アマテラスが先ほどもとは違う声の高さで発言する

『あの方は・・・何がしたいんでしょうね』

シヴァが呆れる

『楽しみたいだけじゃない??ここに居た時いつもつまらなそうだったし』

『ああ・・・』

皆納得した

『とはいえ少しやりすぎじゃねえか??』

『黙れ変態』

『・・・』

カオス、沈黙

『やはり神といえどもいささかやりすぎのような気がするな』

ゼウスがそう言うと言が肯定の揺らめきをする

『少しばかり封印処理を施しておいたほうが・・・』

シヴァがおずおずといった風に進言する

『そうだな、しかし・・・世界の抑止力とは戦えるだけの力は残しておきたい』

ノームが考えるように揺らめく

『だったら、ローズじゃなくて椿姫のほうに封印を施せば??宵闇と強力すぎる武器は使えなくして、スペックも若干下げておこう』

アマテラスが名案を思いつく

『そうだな・・・そうしよう』

ゼウスが納得する

『そう言うと思うてもう準備はできてるよ、あ、創造能力は残しくよ??ノータッチで』

アマテラスが軽い調子で告げる

『今回はそれで手を打とう。もしこれで駄目なようなら次は我々が動かなければならない』

『わかってるよ、そうならないことを祈るよ』

カオスがそう言って消えていく

『それでは解散だ』

それが合図となって、その場に居た神々がそれぞれの場所に戻って

い  
っ  
た  
・  
・  
・  
・

## 9話

### デュノア社の崩壊、動き出す神々（後書き）

何で白雪が出てきてしまったのか・・・自分にも謎です  
いよいよ核心に近づいてきましたね

『ローズ』とは誰なのか???

神々の言う「封印」とは???

まあローズはきつとわかっているでしょうね・・・

次回は原作で言う面白い物イベントです

## 原作との変更点、現在の状態（前書き）

魔改造や原作との相違点です  
少ないことには突っ込んでいけません  
なんてたって文才が無いんですから

## 原作との変更点、現在の状態

織斑一夏

原作ほど唐変朴ではない

ISの操縦技術については天才的なのだが知識が足りない  
本編の第二の主人公

主に楓への突っ込みを担う

箒、セシリア、シャルの好意に気づいている

セシリア・オルコット

原作初期のモードを「貴族モード」として引き継いでいる

原作ほどプライドは高くなく、普通の女の子として振る舞う

フレキシブルを最初から使用可能

精密性は原作以上

料理は原作同様壊滅的

鳳鈴音

一夏ではなく楓の事を好きになる

原作よりおとなしい

酢豚以外にも一通り作れる

つるぺたなのは相変わらず

シャルロット・デュノア（後にシャルロット・朱雀）

男として入っていないため、自分の事を「私」と言う

密命の内容も変わっている

原作以上に一夏が好き

時々ヤンデレになる

ラウラとはIS学園に入る前からの親友

## 篠ノ之箒

あまり変化はないが若干腐女子化している（主に一夏×楓）

剣術限定で楓をしのぐほど強い

料理の腕は一流

原作よりノリがいい（そこまで武士ではない）

ラウラ・ボーデヴィツヒ（後にラウラ・朱雀）

そこまで千冬に心酔していない

態度もそこまできつくない

原作より乙女

AICを多用しない

シャルとは（以下略）

オリジナル人物・変更点

朱雀楓

「クリムゾン・ローズ」の社長

軽く存在自体チートになっている

本気を出さなくなった

知能は以上に多いのに言動はアホ

仲間が傷つけられるとキレて宵闇で暴れる

宵闇を意思を保ったまま使用可能

オーバーキルしない

白石カエデ

薔薇月が未完成で戦闘では使用できない

11話にて完

全になり、100%の力を引き出せるようになった

自称「楓の半身」（楓は否定）

当初のキャラはK I ☆ E ☆ U ☆ S E ☆ T A

治療のエキスパート

朱雀白雪

おしとやかで簪の生き写し

しかし平然と毒を吐く一面を持つ

楓にいつも付いて行く

部屋も半ば強引に楓の部屋（5人部屋を一人で使っていた）に住む



一通り何でもできるが素人より上手いが玄人には勝てない  
専用機がまだなく、ローズの量産機「月光花」を使っていたが、  
1話で専用機『雛菊』を使うようになる  
操縦技術は上々

フィオナ・フリディア

楓の親代わりのシスター

つまりラウラ、シャル、白雪のおばあちゃ・・・祖母に当たる

25歳なのに小学生並みの見た目（化粧無し）を誇る

カエデの事も知っている

楓よりは劣るが十分天才の領域に入っている

変更点・原作機体

白式

原作以上に燃費が悪い

椿姫以外で唯一赤梅たちの力を使用できる

楓いわく「第6世代並みの能力を持っている」

魔改造で半端じゃない強さになっている

魔改造チームの中で最も早い（楓、カエデを除く）

紅椿

魔改造がされていないため正直弱い  
絢爛舞踏の使用時間が長くなっている

青い雫

魔改造により実弾を搭載、点より面での制圧力が高まった  
スピードも魔改造グループで3番目  
三点バーストも可能

黒い雨

魔改造でとんでもない武装を持つ  
A I C改はもはやチート  
プラズマ手刀は近接ブレード並み

ラファール

楓に破壊される

変更点・オリジナル

月桂樹・雛菊

月桂樹：シャルの新しい専用機

雛菊：白雪の専用機

楓曰く『第6世代』の機体で最初はどれも同じだが使用者に応じてその姿を変える『自立進化型IS』

カエデの薔薇月もそうであることが分かった

椿姫

宵闇が使用可能になったほか、全体的に機動力が上がった  
だいたい第8世代くらいだということが分かった（11話にて）

月光花

ローズの量産機

世界で15個しかなく、軽く専用機扱い  
誰とでもマッチングするためカエデたちが訓練の時によく使用する

企業

クリムゾン・ローズ

楓の経営する会社

社員は楓合わせて10人

どの業界でもトップクラスのシェアを誇る超大企業

そのため入社志願が絶えないが楓が気に入った者以外採用しないため社員が10人しかない

特に服に関しては世界中の全女性を魅了するほど

貧しい国に支援したり病院を建てるなど弱いものを積極的に助ける値段もとってもリーズナブル

表面上ほとんどの会社を傘下に入れて居るが、あくまで表面上なので協力関係は一切ない

クリムゾン・カメリア

楓が作ったチーム

一夏、箒、セシリア、シャル、鈴、ラウラ、白雪、カエデ、楓がメンバー

いくつか掟がある

- 1、仲間を助ける、どんな時でも見捨てるな
- 2、常に連携を心がけ、相手を思いやれ
- 3、仲間を傷つけたものを消して許すな

神々

第9話に出てきた神様たち

どうやら「ローズ」という神について議論している様子だが・・・  
??

その正体はデジタル神様で災厄の化身『オメガ』の退治を楓に頼む

ローズ

## 原作との変更点、現在の状態（後書き）

どうでしょうか？

紅椿もしばらくしたら魔改造しようと思います

## 10話

### ショッピング・サタデイ (前書き)

買い物イベントです

長くなりそうです

サタデイなのは土曜日の設定だからです

## 10話

### ショッピング・サタデイ

『……遅い（ですわ）！！』

時刻は10時、駅の前で鈴を始めとする女性陣は一斉に突っ込む  
「何やってんのよ楓は！！」

鈴が叫ぶ、周囲の目線が一瞬鈴に向かうが鈴の殺気ゆえに皆あわてて目をそらした

「まさかとは思うけど……寝坊??」

シャルがちよつと黒いオーラを出している

「父さん……」

ラウラは心配しているようだ

「一夏も返ってこないところを見ると……手間取ってるわね」

カエデがふと呟く

「どういふことなの??」

白雪が楓に聞く

「おそらくあいつはまだ寝ている、それを一夏が起こそうとして……  
・戦闘になってるわね」

『何で!??』

とんでもないことになっていた

くどおおおおんく

突っ込みと同時にIS学園の方から爆発音がして、白い機体と紅い機体、つまり白式と椿姫がカエデたちの方向に向かってきていた

「ひゃっはあ！！俺の眠りを妨げる奴あ死刑だあー！！」

「どーなってるんだよこいつ!!」

がんばって逃げ続ける一夏に嵐のようにビームを撃ちまくる楓  
一夏なら零落白夜で斬ることも可能なのだがテンパっている一夏に  
その判断はできないらしい

『……』

カエデ以外固まってしまう

「あのバカは・・・」

カエデが薔薇月を展開して楓を追う

「楓！！落ち着きなさい！！」

「カエデ！！どけ！そいつを殺す！！」

「一夏よ！！約束をすっぽかすつもり！？」

「約束・・・？？」

楓の動きが止まる

「・・・・・・・・・・そうだ！！10時に駅じゃねえか！！ってあれ？  
？？ついてる？？」

「助かった・・・」

一夏が安堵する

『おっそーい！！』

下から鈴達が出ぶ

「おおわりい！！」

楓がその場で椿姫を解除、落下する

「楓！？」

一夏が楓を呼ぶ。だって地上200mから落下したのだから

「気にすんなー！！」

自由落下して・・・

くドオオオオオン！！！

楓が駅に不時着した

「地味に痛かったな・・・」

起き上がり、頭を振る楓

『ほんとに人間なの・・・？』

思わずそう言ってしまった皆だった



「つ・い・た!!」

楓が叫ぶ

楓たち一行が居るのは駅前のショッピングモールの前

『・・・・・・・・』

楓の後ろでは無言の戦い（主に一夏がらみのメンバー）が争いを繰り広げていた

「ど・・・・・・・・どうしたんだこの修羅場は」

さすがの楓でもビビりざるを得ないほどに、シャル、セシリア、箒が争いを（目線で）繰り広げていた

「助けてくれ楓・・・」

その真ん中に居る一夏が楓たちに助けを求める、が

「よいいくぞラウラ、白雪!!」

『うん!!父さん』

「私は先に行くところがあるから」

速攻見捨てて行こうとする楓たち

「裏切ったな楓!!」

「ごめん一夏・・・その修羅に立ち向かう勇気は俺にはない」

もはや神々の戦いレベルのオーラを出しているので正直今スグに逃げ出したい一夏、しかしそうすると修羅達に追いかけるのでできない

「じゃあ・・・生き延びろよ?」

楓がそう言っ行って行こうとしたとき

『待て、楓（お父さん）（さん）』

楓も呼びとめられた

「・・・・・・・・（涙目）」

「・・・ドンマイ」

因みにラウラ達は楓が呼ばれた瞬間にショッピングモールへとダッシュしていた

「・・・何でしょう??」

「お前は思うんだ??」

楓が問いかけると箒が逆に質問してくる

「なにが??」

「楓さんの発言でこの場の全員の好意が明らかになりましたわ、つまり楓さんがこの状態の原因ですの」

「そんなバカな」

「お父さんが口走ったのがいけないんだよ、それで、この中で誰が一夏と一緒に今日回るか決めてほしいんだ」

シャルが決めてほしいと言っているが明らかに全員の目は「自分を選ばなければ殺す」と訴えている

「そうだな・・・一夏、お前の問題だ、お前が決める」

考えた結果、一夏にまる投げすることにした

「何でここで俺に振るんだよ!! 誰選んでも殺されるじゃん!!」

一夏が行っているのは決して比喩表現ではない

現にショッピングモールのまえだというのに一夏達の周りだけ丸く無人の空間ができている

「お前が決めるんだ、「この中で」誰と行くのかを」

楓は「この中で」を強調して言った

「(・・・そうか!!) 俺は・・・」

シャル達がぐくりと喉を鳴らす、盛大に伸ばして一夏は答えを述べる

「楓と行く」

くちゃっく

「何て言った?? 一夏」

シャルが一夏に銃口を突き付けて笑う

「どういうことですか??」

セシリアもB08を構えている、どうやら逃がすつもりはゼロらしい

「まさか一夏にはそんな趣味が・・・いや、楓の容姿なら・・・」  
一人だけ妄想ワールド全開の箒、若干納得しかけているから恐ろしい  
「だって、「この中で」だろ???俺もここに居るんだ、「この中」  
の一人のはずだが?」

さらっと筋の通った事を言う楓、なまじ的を射ているために簡単には反論できないシャルとセシリア

「しかし!!!楓は男だろう!!!」

「女だけとは言っていないかったが?」

箒が反論するも速攻楓に説き伏せられてしまう

「俺が男だから駄目だというなら・・・俺が女装すれば文句はない  
だろう?」

『・・・へ?』

楓の爆弾発言（楓にとっては爆弾でも何でもない）を聞いて固まる  
一夏達

「いま・・・なんて?」

「ん???俺が女装すれば解決する話だろう???ちょっと待ってろ」  
そう言って楓はトイレ（男子用）に入って・・・

「おまたせつと・・・やっぱなれねえな」

一体どこからそんなものを取りだしたのか、女物の服を身にまとった楓が現れた、楓が入ってからサラリーマンが入って行ったので今頃大パニックだろう

「・・・恐るべし」

箒が思わずそう呟いてしまうほどに、楓は女の子になりきっていたいつもの騎士の問うな雰囲気は消えてゆったりとした雰囲気を出している

半袖のかわいらしいシャツに女物のジーンズ（半ズボンみたいなやつ）をきた楓は下手な女の子より女の子だった

「楓・・・なのか?」

一夏が恐る恐る尋ねる

「他に誰がいんだよ・・・どっからどう見ても俺だろ」

女装楓はそう言って一夏達のほうに歩いてくる

「似合いますぎてる・・・」

「ですわね・・・」

シャルとセシリアも思わず見とれてしまう

本来相当の美人であるシャルやセシリア、箒だが女装楓の前だとどうしても劣等感を抱いてしまう

唯一勝てる胸は・・・

「楓・・・何であるんだ?? お前実は女の子だったとか??」

「んなわきゃねえだろアホ、パッドだよ」

「何でそんなもん持ってたんだ・・・」

『・・・』

箒とセシリアは勝っているがシャルはぎりぎりといったところだろうか、パッドだけど

明らかにラウラ達は負けている、パッドだけど!!!!

「文句は??」

楓が三人にそう言う

『・・・ありません』

男に女として負けた三人だった

「・・・なあ、皆で行くのはだめなのか?? 俺と行っても楽しいことなんてないだろうに」

一夏がいったん消えかけていた火種に盛大に油を注いってしまった

『・・・一夏』

この時ばかりはセシリアも敬称をとった

「一夏よ、お前の唐変朴ぶりは犯罪レベルだな、とりあえず俺は逃げるから」

そう言って逃げてしまう楓（女装したままで）を呼びとめようとした一夏は三人の阿修羅に囲まれる

『いちかああああ!!!!!!』

「え・・・ちょ・・・ぎゃああああああ!!!!!!」

楓は走りながら死んでしまったであろう親友の冥福を祈った

くその頃のラウラ達く

「白雪、父さんとはどんな風にあっただん？？」

「ん？？お父さんがデュノア社に乗り込んできたとき・・・」

ラウラと白雪は楓との親子関係の結ばれたときについて話している

「あ、いたいた。ラウラ！！白雪！！」

どうやらはぐれていたらしいカエデがラウラ達を発見、走ってくる

「どうしたんだカエデ、そんなに慌てて」

「慌てもするわよ！！今さっきショッピングモールの前で爆発が起きたの！！」

カエデの言っているのは一夏達の事である

「どうせ一夏がらみの事だろう、大方一夏がヘマをして阿修羅の怒りを買ったんだろう」

恐ろしいほど正確なラウラだった

「あ、ラウラ！！」

その声にラウラ達が振り返ると・・・

「・・・誰だ貴様」

見知らぬ女性がニコニコ笑いながら走って来ていた

「・・・誰？？お姉ちゃんの知り合い？？」

「いや、こんなやつは知らない」

「ひどくないかお前ら！！ってこの格好のせいか・・・カエデ、お前はわかってんだろ？？お前は旅の途中何回も俺を女装させて楽しんでたからな」

その女性はカエデに振る

「・・・クククっ・・・またやってるのね？？楓」

『・・・父さん！？』

「ようやく気付いたか娘たちよ・・・」  
楓だった、

「どうしてそんな恰好を！？」

「それ以前に何で・・・ゴニョゴニョ」

一気に質問ラッシュのラウラと白雪、白雪がゴニョっている理由はお察しください

「一夏と阿修羅たちに巻き込まれてたらこうなった」

『そんなになる争いって！？』

白雪とカエデの突っ込み

「まあいいじゃん、行こうぜ」

そう言っただけで一人で行って・・・

「その彼女、一人でどこ行くの？？」

絡まれた。

「うん、邪魔だからどうか」

カエデはそう言って・・・

「くっぺっ！！」

男の一人の首をねじった

「えげつねえ事すんなよカエデ」

「いいじゃないの、助けてあげたんだから（男たちを）」

カエデの攻撃によって戦闘不能になった男の連れが切れてきた

「てめえら・・・ぶっ殺すぞ!!」

「いまのは宣戦布告と受け取った!!死ねえ!!」

楓が男の顔を蹴り飛ばし、空中で方向転換、もう一撃叩き込んだ

「この際だから言うておくぞ・・・俺は男だ」

楓はとりあえず自分の本来の性別を言うておく

「行くか、ほついてもいいだろ」

楓はラウラと白雪を連れて水着売り場に向かってしまう

「まったく・・・まあいいか」

カエデも用事がある場所に歩きだした

「・・・死ぬかと思った」

一夏は物陰でそう呟く、どうやらギリギリで逃げてきたらしい

「とりあえず楓たちと合流・・・あ、みつけ」

楓たちを見つけたので急いで追い付こうと走る一夏、だが

「あいつ・・・女物の売り場に入っちゃったぞ・・・」

さすがの一夏も一人で女物の水着売り場に入る勇気はない、どうしようか迷っていると・・・

「ちょっと!! そのあなた!!」

見知らぬ女にいきなり呼ばれた

「はい??? って・・・」

一夏はその女を見てげんなりする

目の前に居るおぼさんは「いかにも」といった感じのオーラを出している

実際女Ⅱ偉いの風潮が広まっではいるがほとんどの女性は男のある程度の立場を容認しており、そこまで偉いわけではなくなった

しかし初期のセシリアのように（実際過去に誓ったことがあったからだが）露骨なまでに男を見下す者も少なからず居る

一夏はその性格上、そんな女性が大嫌いなのだ

「何ですか?? 俺はあんたの事を知らないんですけど」

「いいからこれ、元の場所に片しておいて」

「自分でできないなら持ってくるなようざってえ」

一夏、言いすぎである

「今の世の中にそんなことを言うやつが居るなんてね、立場の違いってものを思い知らせてやろうか??」

「どっちが、そろそろ召されるババアよりは立場が上だよ」

そう言ってさりげなく一夏は待機形態の白式を見せる

「ちよっと!! 店員さん!!」

おぼさんは白式に気がつかなかったのか、店員を呼ぶ

いくら同等に近いとはいえ、女性のほうが偉いわけで、裁判とかだとどうしても勝てない

一夏がちよっと引くと同時に

「ちよっと、何やってんの。私の彼氏に何いちゃもんつけてんのよ」

一夏の後ろから聞きなれた声がした、なぜかソプラノだが

「・・・楓??」

楓だった

「全くこんなババアに何構ってんのさ、・・・まさか熟女好き??」

「なわけないだろうが!!」



「・・・で??」

楓はそこで絶対零度の視線を女性に向ける

「あんたの連れかい、ちゃんとしつけときな!!」

女性はそう言って帰ろうとするが・・・

「ちょっと待てオイ」

楓が女性の足を払う

くどしゃっく

「何するんだいこの・・・」

「てめえ何言ってるだ?? 人間をペットみたいにしてんじゃねえ。殺すぞ」

楓は差別といったことを嫌う傾向にある、そのために女性が言った

「しつけ」という言葉に過剰なまでに反応したのだ

「あんた・・・こんなことしてただで済むと・・・」

「残念だが騒ぎになるとあんたが苦勞するぜ、なんてったって世界で「唯一」ISを使える男に、デュノア社をたった一人で崩壊させた「女」だ、あんたの言葉を借りるとすれば、ISが使える私たちと起動すらできないあんた、どっちが偉いかねえ??」

一瞬素で喋ってしまったがギリギリ女に戻した楓だった

「・・・」

黙る女性

「今なら見逃すが?? 行くなら行け、片しといてやるから」

案外やさしく話しかけているがその眼は

(今スグに立ち去れ、殺されたくなかったらな)

と言っていた

「あの・・・すいませんでした」

先ほどとは打って変わって下手に出てくる女性、一夏は

「ああ・・・はい」

楓の剣幕に気圧されて敬語になってしまった

「よし、とりあえずいこうか、一夏」

楓は先ほどの殺気をきれいさっぱり消して一夏の腕に絡みつく、そ

して一夏の耳に顔を寄せてきて

「一夏、阿修羅が三人このあたりに居る、とりあえずその水着売り場に入るぞ」

一夏は言われるがままに女性用の水着売り場に入り、その中の着替え用のボックスに入った

「楓、助かったよ、ありがとう」

「それにしても危なかったなあ・・・俺が居なかったら今頃警察沙汰だったぞ」

地味に狭いのだが楓が小さいために窮屈ではない、とりあえず、と楓が

「阿修羅はこの水着売り場に入ってきたな・・・一夏、俺が合図したらここから飛び出して一直線にト男子トイレに駆け込め、阿修羅に見つかると思うが俺が何とかする」

「わ・・・わかった」

その時、外でシャルの声が聞こえる

「一夏?・・・フフ・・・」

もはやとんでもないことになっているらしい

『・・・・・・・・』

二人とも沈黙、そこにセシリアの声も出てくる

「一夏@・・・」@」

もはや言葉すらまともに喋れないセシリア

「一夏・・・ごめん、別の案を練ろう」

「・・・ああ」

ここまで来ると生きて帰れるのか不安になってくる

「セシリア、シャル、一夏はいたか?」

「居ないよ」

@:「p・・・」

「そうか、一応男子用の水着売り場も見に行こう」

「わかった」

p「:」;・・・」

箒は正常だった

「これはいけるか・・・??」

「ああ・・・!」

楓が外を見て絶句する、何事かと一夏のぞくと

「千冬姉!」

「バカ!!一夏!!」

「そこに居るのか一夏!!」

「何でそんなところに!!」

「k j f j けい j h!!」

楓が非殺傷性のハンドガンカーテンに構えて待つ・・・

「楓!」

「平気だ、非殺傷弾だ」

楓は女の声のままそう呟く

「何でそこに居るんだ!!女の声がしたし!!」

『!!』

箒がボックスカーテンに手を掛け、楓がハンドガンのセーフティを外す

「何をやっているのだ、バカ者が」

「スッパアアアアン!!!!!!」

休日なのに出席簿アタックの音がする

「今の音・・・聞き覚えが」

「セシリアにシャル、箒じゃないか」

「皆で一体どうしたの??」

白雪、ラウラ、カエデも来てしまった

「万事休すか・・・強行突破するしかない!!」

楓がカーテンを開いたときに見たものは

「お前だったのか、バカ者が」

「スッパアアアアアン!!!!!!」

出席簿の代わりになぜか扇子を構えた千冬の姿だった

「で、お前らは男二人で何をしていたんだ」

「隠れてました」

「・・・・・・」

「ちなみに後ろに居る阿修羅に見つからないようにです」

楓と一夏は正座させられていた

「いくらおやすみといっても・・・・」

真耶の説教もついでに受けている

「一夏、仕方ねえよ」

「仕方ないよな・・・・」

楓と一夏がそろってため息を吐く

「・・・・織斑君と朱雀君以外は先生と来てください、手伝ってほしいことがあります」

真耶は鈴達を連れてどこかへ行ってしまう

「まったく・・・・変な気をまわしおって・・・・」

千冬が嘆息する

「俺も言ったほうがいいんじゃないですか?？」

「いや、構わん」

楓が兄弟の時間を邪魔しないために機転を利かそうとするが却下される

「お前もいたほうが決めやすいだろう、一夏」

「は・・・はい!!」

「一夏、今はプライベートだ、朱雀は・・・朱雀でいいか」

「構わないぜ、千冬さん」

教師と生徒ではなく兄弟として話す二人を見て楓は一人思う

（そう言えばシスターは海に行ったことが無いって言ってたな・・・）

「千冬さん」

「どうした、朱雀」

「二人の時間を邪魔するのは悪いんですがちょっと水着選びに付き合ってくださいませんか??」

「構わないが私でいいのか?? ラウラ達のほうが・・・」

「いえ、俺の親のシスターに水着を買ってあげようかと思いましたがシスターはカエデや鈴と同じような体型をしているのでどっちかって言うとなラウラ達のほうが為になるのだがそれをやると殺されるので無し」

「シスターの体型もラウラみたいなんですけどね・・・」

「誰がつるぺただって?? 楓君」

楓がため息を吐いたのと同時に楓の後ろから声がかかる

「つるぺたなんて言っていないだろ。むしろ絶壁が正しい」

「??」

「・・・!!」

一夏は首を捻り、千冬は信じられないといった感じで見ている

「ああ、まだ紹介してなかったな、この人が俺の親、シスター「フィオナ・フリディア」だ」

「どうも、息子がお世話になっております」

そう言うとなシスター・フィオナは深々と頭を下げる

「って言うか・・・」

「まちがっていたら申し訳ないのですが、シスターは朱雀・・・君と同世代では??」

千冬でさえ戸惑っている、なぜなら

「いえ、楓君とは10歳はなれていますよ」

シスター・フィオナはどっからどう見ても楓や一夏と同世代、いや年下に見える

「嘘みただけけど本当なんだ、シスターはこれで25歳だ」

楓が補足する

「若く見られるのはいいいことよ、よかったわね、こんな若い母親を持つて」

「良かねえよ、二人とかでどっかいくと必ず俺が兄貴扱いされるじやねえか」

そう、フィオナの身長はカエデよりも小さく、小学生といっても通用する容姿を持っている

「ってあいつらはどうしたんだよ」

楓がフィオナに問いかける

「ああ、皆ならそのレストランでご飯食べてるわ」

「良くそんな金があるな・・・」

楓がげんなりする

「だってここに世界最高峰の会社の社長さんが居るんですもの」

「まったく・・・まあいいけどさ」

なんだかんだで身内には優しい楓だった

「あ・・・ええと・・・楓??」

一夏が楓に話しかける

「ああ、そう言えば、俺の独断で社員を増やしたけど別にいいよな」

「あなたの会社ですもの、でも、後で紹介してね」

「ここに居る一夏もその一人だ」

「あら、よろしくね、一夏君」

そう言ってフィオナは一夏にほほ笑む

「あ、はい・・・じゃなくて!!楓!!」

「どうした?? ああ、千冬さん、引きとめてすいませんでした。他の兄弟もいるみたいなんで俺行きます、邪魔してすいませんでした」  
「いや・・・いい。最後に一つ聞く、フィオナさんはお前の本当の親か??」

千冬は多少気まずそうに尋ねる

「いいえ、俺を拾ってくれたんですよ、いわば義理の親です」

「・・・そうか、すまなかったな」

「いえ、おきになさらず。そうだ、ラウラ達を見つけたらレストラ  
ンに居るから来てくれって言ってもらえます??」

「わかった、伝えておく」

「お願いします、さあ行くか、シスター」

「いつもはかあさんって呼んでくれてるのに・・・」

「いつ、誰が呼んだ!!」

盛大に突っ込みながら楓たちははなれていく

「私たちも行くぞ、一夏」

「おう」

千冬と一夏もその場を離れた

「よう、久しぶりだなガキども」

『楓!!』

千冬たちと別れた後、レストランでご飯を食べている子供たちの所に着いた楓とフィオナは盛大な歓迎を受けていた

「相変わらず元気だなあ・・・しかも増えた?？」

「あら、気付いた?？この前アメリカに行ったときに捨て子が居たから拾ってきちゃった」

「ペットみたいに言うなよ・・・部屋とかどうすんだ??」

「増やせばいいじゃない」

ごく自然に言っているが実はすでにとんでもなく大きい家に住んでいるフィオナ

「あれ以上はでかくなんねえべ、寮みたいなの作るか」

楓は社長なのでお金には困らない

「水着も新作出したし・・・いいんじゃない??」

フィオナがさらっと言う

「出したんなら早く言おうぜ!!・・・おい鈴!!今スグ全員連れてレストランに来い!!」

楓が大急ぎで鈴に連絡する

『どういうことよ!!今ようやくレジに着いたのに!!』

「それを今スグ戻して来い!!無駄に金使いたくなかったらな!!」

『だからどういうこと・・・なるほど』

どうやら理解した鈴がシャル達を呼ぶ

『シャル、楓が買う前に俺に見せろって』

訂正、微塵も理解していなかった

「そういう意味じゃねえ!!ローズの新作が出るんだよ!!まだ未発表だけど!!」

『なんですって!?!皆、すぐに行くわよ!!』

楓がローズといった瞬間鈴が皆に指示を出す

「ついでに一夏と千冬さんも捕まえて来い!!」

『了解!!』

・・・ぷっ

「・・・なんとか間に合ったか・・・」



「誰との電話??もしかして・・・」

フィオナが興味深々と言った様子で楓に抱きつく

「くっつくな暑苦しい!!」

「えゝ・・・ココクーラー聞してるよ?」

「いくらクーラーがきいててもくっつかれば暑いんだよ!!」

「楓二ーチャン!!パフェ食べていい??」

「構わんが腹壊すなよ」

『ワァー!!パフェ3つー!!』

「腹壊すなっつったばかりだが!!アホか!」

「あの・・・楓兄さん」

「ん??ああ、フィオナが拾ってきたって子か。どうした??遠慮なんかすんな、もう家族なんだから」

「・・・うん!!」

一通り子供たちの相手を終えた楓に声がかかる

「楓、連れてきたわよ」

鈴達だった

「おう鈴、それにみんな、呼び出してすまん」

「別にいいんだけど・・・この子供たちは??」

一夏がパフェを食べる子供たちを見て楓に尋ねる

「シスターが拾ってきた子供たちだ、俺の弟たちみたいなんだ」

「って事はこの子たちも・・・」

ラウラが悲しそうに呟く

「ああ、親に捨てられたか親が死んじゃったか・・・おいお前ら、今日からお前たちの姉ちゃんになる3人だ、仲良くしろよ??」

『わーい!!新しい家族だ!!』

楓の説明に戸惑うラウラ達を取り囲んで子供たちが喜ぶ

「ねーねーお姉ちゃん!!何て名前??」

「お姉ちゃんの目・・・キレーイ!!」

「お姉ちゃんも一緒に食べようよ!!」

子供たちが矢継ぎ早に質問するので身動きが取れなくなるラウラ達、

それを見て苦笑しながら楓はフィオナのほうを向き、

「ってわけだ、あの三人を、俺の養子にした。名前は右からシャルロット、ラウラ、白雪だ」

「……いいんじゃない??でも楓君の娘って事は……」

「そう、フィオナの孫だ、残念だがその年でおばあちゃん……」  
くひゅっく

「楓!？」

楓が話の途中で昏倒する

「大丈夫、急所だから」

にっこり笑うフィオナ

「全然だいじょぶじゃありませんわよ!？」

突っ込むセシリア

「……それからこっちがさっき言った社員になる。右から鈴、セシル、一夏、箒、カエデ……は知ってるか」

少しして何事もなかったかのように話しだす楓

改めて人外であることを納得させられる一夏達だった

「さっき言ってたねそんなこと、シャルちゃん、ラウラちゃん、ユキちゃん、鈴ちゃん、リアちゃん、いっくん、箒ちゃん、楓ちゃんね」

楓が言った順番にあだ名を決めていくフィオナ。多少天災とかぶっているが気にしてはいけない

「わかったわ。そうそう!!新しい水着ができたんだけど、ちよつと着て泳いでみてくれないかしら」

フィオナがさっそく仕事の話をする

『是非!!』

「……朱雀、私たちを呼んだのはこのためか??」

千冬を除く女子がそろってうなずくなか、千冬が楓に問う

「そう言うことです、千冬さん呼んだのもそのためです、好きなものを選んでください」

「しかし……」

「お金とかは心配しないでください、もしあれならこういうことにしよう。俺たちは新作の耐久性やその他のデータが取れる、千冬さんは新しい水着が無料で手に入る。これで双方得するでしょ?？」

「・・・わかった、ありがたく受け取っておく」

「いえいえ、気にしないでください。だって」

そこで楓は千冬の耳に顔を寄せる

「シスターの体型があれなもんですから、こっちとしても千冬さんみたいにスタイルがいいモニターが居てくれるとありがたいんですよ、シスターが着れるのは基本ワンピースですから」

「・・・そうか、大変だな、社長というのも」

「楽しいから苦じゃありませんよ。早く選ばないと」

「ああ、そうだな」

千冬はそう言って歩いて行く

「楓!! こんなのどう?？」

カエデが手に持っているのは大胆な黒のビキニだった

「・・・諦めろ、お前にそれは着れない」

速攻で切り捨てる楓、容赦がない

「即答って・・・わかったわよ。千冬先生!! これなんかどうですか!？」

しぶしぶ諦めたカエデは千冬にその水着を勧める

「一夏、お前はと思う?？」

「俺は・・・こっちの白で」

「なるほど、こっちか」

「そっちは黒だろ!？俺は・・・」

「お前は昔から気に入ったほうを注視する癖がある」  
「・・・」

千冬と一夏が漫才を繰り広げるなか、鈴が楓に向かって歩いてくる

「あんたは選ばないの?？」

「ああ・・・俺は泳がないしな」

「泳げないの間違いじゃなくて?？」

「泳げるわ!! なめんな」

楓は結構泳げるので鈴の言っていることは外れている

「そこにあるのはすべて女性用だろうが」

「そう言えば楓って男だったわね」

「一夏離せ!! こいつを抹殺する!!」

楓が珍しく自分の容姿の事で怒ったようだ

「さすがに素で女っていわれりゃ腹も立つさ!!」

「そう言えば一夏もだけど、どうすんの??」

シャルがトコトコ歩いてくる

「俺たちはもうあるからな」

「おう」

知らない間にそろえていたようだ

「・・・つまらないの」

「お前らが選ぶと間違いなく女ものになるからな」

「俺は大して興味が無いだけだが」

『・・・』

「そこ、残念そうな顔をするな」

千冬を除いて残念そうな顔をしていることに楓が突っ込む

「それより決めたのか??」

「私たちは決まったよ」

そう言ってシャルが見せてきたのは黄色のビキニっぽい奴、（虎縞つき）だった

「ふうん・・・似合うな、おそらくグラビアのトップを飾れる・・・」

「

「何を考えてるんだよ!?!」

楓が大真面目な顔をして言うので思わず突っ込んでしまう一夏

「しかし少しきつくはないか?? いや、太っているってんじゃない、バストが少しきついと思うんだが??」

「・・・着てみるよ」

楓のアドバイスにシャルは思案した後更衣室に入っていく

「何でわかるんだ??」

「勘だ」

楓と一夏がそんなことを話しているとシャルが出てきた

「ほんとに少しきつかったよ・・・」

「な?? でもそれならもう一つ上のサイズがあるだろ」

楓はそう言って一つ上のサイズの水着を手取る

「・・・うん、これならちょうどいいだろう」

「次は私のをみてくださいますし!!」

セシリアがてくてこ歩いてくる

「・・・パレオか、きつくもないしゆるくも無いなこれなら」

セシリアの水着は原作の水着にところどころフリルがついたもの

「似合うんじゃないか?? セシリア」

「・・・じゃあこれにしますわ!!」

顔を赤らめたセシリアがはなれていくと今度は

「父さん、水着とは戦闘に・・・」

「はいラウラはこっちにこようか」

ラウラの着眼点をずらすように楓はラウラの手を引いて水着のあるところに入っていく

「ラウラはすらっとしてるから・・・こんなのはどうだ??」

楓が取りだしたのは原作のフリル増量バージョン。ちなみにすらっとしていたというのはお察しください

「こんなフリフリを着ろというのですか!??」

「ラウラは可愛いんだからこれくらい着なきゃ」

自分のを決めたシャルが近づいてくる

「しかしシャルロット!! 私は・・・」

「シャル、後は頼むぞ」

「任せて!! 可愛くするから!!」

「シャルロット??・・・目が怖いぞ??」

シャルの餌食になるラウラを温かい目で見て、白雪のほうに向かう  
「決まったのか??」

「ひゃあ!!・・・お父さん」

後ろから声をかけると面白いくらい吃驚する白雪

「迷ってるのか??」

「う・・・うん」

白雪が持っているのはいずれもワンピースタイプ、色はピンクか青

「・・・お前は青が似合うと思うぞ」

「・・・うん、わかった」

楓がアドバイスすると白雪はピンクを戻して青を見つめる

白雪のもとを離れて箒のもとへ向かう

「・・・うっわ、大胆」

「かつ楓!？」

白雪に負けず劣らず吃驚する箒

「白のビキニか・・・一夏を落とすには十分すぎる装備だな」

「なにを!？わたしはただ・・・」

「しかし箒よ、一夏を落とすにはシチュエーションが大事だ、だから・・・」

楓は箒に秘密の作戦（原作通り）を教える

「そうか・・・それなら」

「がんばりな」

箒を見送り、鈴に近寄る

「鈴」

「ひゃあ!!」

鈴も吃驚

「お前のは・・・うん、それが妥当だろうな」

「なによ、その含みのある言い方は」

鈴が選んだのは原作（ry

「いいんじゃないか?? 似合うと思うし」

「え!？・・・そ、そうかな・・・」

「そうだろうな（というかお前がビキニなんか着てもむなしいだけどろ）」

ちょっと失礼なことを考える楓

「・・・とりあえず殴っていい??」

「何で!??」

ばれていたご様子

鈴から逃げるようにはなれるとカエデが唸っていた

「どうした?? 腹でも壊したか??」

「とりあえず一発殴らせなさい、迷っているのよ、どっちにするか」

「へえ・・・ん??・・・カエデ、こっちにしろ」

カエデが迷っていた二拓はほとんど布の面積が無い奴とはっばできた奴だった、楓は速攻でその場にあった紫の水着を手渡す

「なんで?? こっちのほうが・・・」

「いいからこっちにしろ、その二つはもはや水着ではない」

半ば強引に水着を選ばせた楓は暇になったのでふらつく。と、一夏と千冬が話していた

「楓ってほんとに人間なのか??」

「・・・逆に人間であるというほうが難しいだろう、どう考えてもあの年で大企業の社長は人間業じゃない」

「この間も一人でデュノア社を跡形もなく消滅させたって・・・」

「残念だが俺は人間だ、それと一夏、これ」

話に割って入り、楓は一夏にツヴァイを4つ渡す

「これって・・・!!」

「そう、お前の追加武装だ、お前の白式の弱点をカバーできるように作った」

『武装、(白聖) (雪片参之型)、パッケージ(白光) (白夜)。

インストール開始』

「雪片・・・??」

千冬がいぶかしげに楓を見る

「俺の作った雪片二型の後継刀です、正式にじゃないですけど」

「これって・・・すげえ!!」

「だろ??」

一夏の声を聞いて皆が集まってくる

「一夏さんも貰ったんですね」

セシリアが聞くと

「一夏も貰ったの!？」

鈴が驚き

「楓、私は赤梅みたいな子が欲しいな」

「わかってるよ、作つといた、皆のもだ」

楓が一人一人にツヴァイを渡していく

「あの・・・ツヴァイってなんですか?？」

白雪の疑問にカエデが答える

「そう言えば知らなかったわね、ツヴァイって言うのは楓しか作れない小型化コアの事よ、ツヴァイの中には主に武装やパッケージを入れている、見た目はビー玉だけどすごいものよ?？」

「そうなんですか・・・」

カエデの説明に白雪がうなづく

『武装 (フルスクエア) (リコーデット) (デュランダル) (デュノア) (八雲)、パッケージ (ガーディアン) (境界の鍵<sup>ヴォーダンス・キー</sup>) インストール開始』

「なに・・・これ」

シャルが啞然としている、その理由は

『あんたが俺のマスターか・・・俺は』

そこにいるのはシャルの父親だった

「楓!!!!!! 何で!!!!」

シャルが楓に詰め寄る

「・・・デュノアはお前が思い描いた形で出てくる、大方親父さんの事を考えてたんだろ?? まだ形は決まってるからからお前が思う形に仕上げろ」

「私の・・・思う形・・・」

シャルが目を閉じた瞬間、デュノアが形をかえていく

(可愛い・・・猫??)



シャルが目をあけるとそこには

『俺の姿がこんなんに・・・』

三毛猫が居た、喋ってるけど

「やっぱり猫なのか・・・」

楓が呆れる

「楓君、もうそろそろ時間だから・・・カエデちゃん、ユキちゃん、  
あなたたちの専用機は校外学習の時に届けるわ」

フィオナが楓に知らせる、現在5時

「もうこんな時間か、今日はもう解散だな」

楓が全員に声をかける

「よし、帰るぞ」

楓を先頭に歩いて行くI S学園メンバー、其れを見ながらフィオナは

「たくましくなったものね・・・身長は変わってないのに」

「あいつは人を惹きつける魅力を持っている、大した奴ですよ」

千冬がフィオナの横に並ぶ

「あの子を・・・よろしくお願いね??、千冬」

「わかっているさ、フィオナ」

衝撃の事実、千冬とフィオナが知り合いました

## 10話

ショッピング・サタデー(後書き)

長くなりましたね・・・

次回は校外学習です

紅椿出るかも!?

そしてあの天災が・・・

感想、お待ちしております

## 11話

銀の災厄（シルバリオ・オメガ）（前書き）

福音戦直前です

## 11話

### 銀の災厄（シルバリオ・オメガ）

何も無い真っ白な空間、そこに楓はいた

「ん??・・・どこだここは」

楓が首を捻っていると

『やあ、ローズ』

突如楓の前に炎が上がり、一人の男を形作っていく。その姿は小学生のようにも見えるしおとなのようにも見える

「・・・アマテラスか」

楓が呼んだ名は、かつての親友であり太陽の化身、アマテラスだった

『御名答々・・・今日はお知らせを持ってきたんだ』

「その前にここはどこだ」

『夢の中だよ??だってローズ今寝てるんだもん』

アマテラスがぴよんぴよんはねながら言うので楓が嘆息する

「・・・で??知らせってのは何なんだ??」

『その前にもとの姿にお戻りになられてください』

アマテラスとは違う女の声、楓の後ろで氷の花が咲く  
しばらくしてそれは一人の女性の姿を形作る

「・・・シヴァさん」

『何だよシヴァ、ついてきたの??』

アマテラスと楓がそろって読んだ名は氷の化身であり水の神、シヴァ  
『アマテラス、とりあえず跳ねるのをやめなさい。ローズ、元の姿に。』

その姿は美女と呼ぶにふさわしい女性だった

「あの姿はできるだけなりたくないんだ・・・が」

楓の周りに紅い渦が巻き起こる、その渦は楓を包み込み、楓を真の姿『創造神ローズ』へと変化させる

渦が消えたときそこにいたのは

『これでいいか??』

漆黒の着物を着た、両目が紅くなった楓の姿だった

髪は腰ほどまでに伸び、血のような黒がかった赤ではなく鮮やかな紅になっている

『久しぶりに見たよ、ローズの本当の姿』

『ええ、本当に』

アマテラスとシヴァがそろってうなづく中、ローズは知らせについて聞く

『で?? 知らせって??』

『ああその事?? えっとね・・・』

ローズに聞かれて言いづらそうにするアマテラス

『その前に、出て来いよ、ゼウスのおっさん』

『・・・ばれておったか』

ローズの呼びかけにこたえるように何もない空間から荘厳な老人が出てきた

『相変わらず老けてんなあ』

『放っておけ。我々は最初、お前の力を封印しようと考えておった』  
ゼウスが話し始める

『やっぱりワース使ったから??』

ワースとはデュノア社で使ったワールド・デストラクションの事である

『そうじゃ、しかし』

『オメガ・・・だろ??』

ローズがゼウスの言葉を先取りする

『気付いておったのか』

おどいたように眼を開くゼウス

『当たり前だろ、アイツどんだけ気配出してると思ってるんだよ』

『ですよね・・・』

アマテラスがため息をつく

『・・・で?? 俺にどうしろと??』

『オメガが狙っておるのはローズのいるこの世界じゃ、ゆえに、我

々にはほとんど手出しができない』

『で、俺に何とかしろと??』

『そう言うことだ』

ゼウスがうなずく

『おっさんよ、オメガを消せばいいのか??それとも捕まえて封印処置を施せばいいのか??』

『可能ならば封印してもらいたいのだが・・・ローズにはできんだろうな』

『たりめえだ、封印なんてめんどくさい真似誰ができるか』

ローズは基本封印とか関係無しで破滅させることを得意としている、封印なんてやった事が無い

『オメガはこの世界の何かに憑依したようじゃ、探し出して消してくれ』

『了解と・・・俺の封印処置はどうすんだ??』

ローズは自分の封印について聞いた、返ってきたのは

『封印した状態じゃオメガには勝てんじやろう、そのままじゃ』

結局封印されずに終わった

『さて、我々は戻るぞ、何かあったらすぐに携帯に連絡しろ』  
神様もデジタル化していた

「持ってんのかよ携帯!？」

「きゃあ!?! 何よいきなり!!」

楓が目覚めと同時に叫んだので隣の席の鈴が跳びあがった

「ん???・・・夢だったのか・・・」

「一体どんな夢見てたのよ・・・」

鈴が呆れるが楓は言えない、

(ここでは俺の神の姿は禁忌だ、ばれないようにしないと)

そう思った楓は携帯を開いて・・・げんなりした

携帯の液晶に映っているのは神々の名前

・アマテラス

・カオス

・シヴァ

・ゼウス

・ノーム

(何でもまんまなんだよ・・・)

楓は携帯をいじり、名前を変える。以下のように

・アマテラス↓アマ公

・カオス↓変態

・シヴァ↓シバ

・ゼウス↓おっさん

・ノーム↓ロリコン

「どうしたの楓・・・って何この電話帳!?!」

鈴に見られてしまった

「勝手に見るな!!!」

慌てて携帯を仕舞って窓の外を向く楓

「変態にロリコンって・・・あんたの知り合いて変なのが多いわね」

「ほっとけ」

言い忘れていたが現在バスの中

校外学習である

「ここが3日間これからお世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『よろしくおねがいしまーす』

「しゃーす」

楓だけフランクに挨拶する

くスパァン!!!!く

「・・・よろしく願います」

案の定千冬からいいのを貰ってタンコブをこしらえる

「みなさん元気があっていいですわねえ・・・」

そう言ったのは



『フィオナさん!?!』

フィオナだった

専用機持ち組驚きだった

「言い忘れていたがここは俺たちローズの経営する旅館だ」

楓がタンコブを気にしながら起き上がる

「荷物は運んである、各自、割り振られた部屋に行って間違いが無いか確認しろ、其れが終わったら更衣室があるからそこで着替えろ、後は自由時間だ」

千冬がそう言う専用機持ち以外が四方八方に散っていく。誰もいなくなったところで千冬が

「・・・という訳だ、ここは朱雀の・・・いや、お前たちの経営している旅館だ」

『どこがという訳!?!』

「だから言ってるんだろ?!?!ここは・・・」

「それはわかってるけど!?!」

「どうしてフィオナさんが!?!」

一夏とシャルの連携突っ込み

「うちの何だからフィオナ以外に経営できんだろ」

楓が「何だこいつ」みたいな目で見ながら説明する

「まあいい、とっとと部屋に行け」

千冬が手を叩きながらそう言う

「そう言えば俺達ってどうするんだ?!?!」

一夏が楓に聞くと

「・・・俺らだけ特別な場所だ」

楓が一夏にだけ聞こえるようにそう言った

「とりあえず着替えて来ようぜ」

楓と一夏は皆と逆方向に歩きだす

「あれ?!?!一緒に来ないの?!?!」

シャルが気づく

『俺たちを変態にするおつもりですか?!?!』

「あ、ごめん」

シャルが言葉の意味に気付き、紅くなって歩き始める

「お前らの部屋は・・・」

「わかってますよ、女子にはバラしません」

楓はニヤリと笑って言う

「わかってるならいい」

そう言い残して千冬は旅館の中に入っていく

「行くぞ一夏、俺たちはこっちだ」

楓は今度こそ自分たちの部屋に向かって歩き出す

「おい楓、そっちは海だぞ!？」

「こっちなんだよ、俺たちは」

一夏の叫びを無視して楓は海に向かって歩き続け、しばらくして・

・

「なんじゃこりゃ・・・」

「どうだ、ここなら女子どもにはれないだろう」

海の近くの森の中、そこに一夏と楓の部屋があった

「明らかにコレ二人で使用するような部屋じゃないだろ・・・」

「そこがローズクオリティ」

もはやローズ何でもアリだ

「一夏、表向きは先生の部屋って事になってるから、ここの事は絶対  
対に言うな」

「どうしてだ?？」

「お前少しは考えろよ・・・あの肉食獣共がここを知ってしまった  
ら俺たちの安全は保障できない」

「ああ・・・」

理解した一夏

「とりあえずここの事は口外禁止、さて、着替えていくか」

「おう」

楓と一夏は自分たちの部屋に入って行った

「・・・・・・・・」

「どうした一夏??」

時間が経過して一夏と楓は浜辺にいた

「これ、泳ぎづれえ・・・」

浜辺にはすでに着替え終えている女子がひしめくようにいる、軽くバイオハザードみたいな感じになっている

「フアイト」

楓は釣竿を持っており、釣りをするつもりだ、どうしてそんなものがあるのかは突っ込んだじゃいけない

「楓、俺も連れてって・・・」

『一夏（さん）!!』

一夏が楓に連れてってもらおうとしたとき、鈴達が出来てしまった  
「ドンマイ」

速攻で逃げる楓

「おい、まて楓!!」

逃げ遅れてしまったがために囲まれてしまった一夏

「いくよ一夏、一緒に泳ご」

シャルが手を引く

「ずるいですわよシャルさん!!一夏さん、サンオイルを塗ってくださいまし」

逆側からセシリアが抱きつく

「一夏、楓は??」

一夏の状況を気にも留めずに鈴が聞く

「この状況を見てから言えよ!!楓なら釣りするって言ってた!!」

左右にゆられながらもなんとか答える一夏

「じゃあ探しに行きましょうか」

カエデが歩いて行ってしまう

「まって!!カエデさん」

「私も行くぞ」

白雪とラウラもついて行ってしまう

「ちょ!!助けてくれよ!!」

一夏が助けを求めると

『ファイト（棒）』

「棒読み!?!」

棒読みでそう言って去ってしまう三人

「楓が居ないならあたしは泳ぎに行くわよ」

「鈴もかよ!?!」

鈴も海に行ってしまう

「どうすんだよこの状況――!!!!!!」

一夏の叫びは結構遠くまで響いたという

「・・・状況――！！！！」

「ん、一夏か。災難だな」

災難な状況を創りだした張本人こと楓は陸地から離れた岩場で釣りをしていた

どうやってそこまで行ったのかは企業秘密

「ん、なかったか」

釣竿に反応があったので竿を上げる楓、そこには

「・・・ウサ耳?？」

原作だと一夏が引っっこ抜くあのウサ耳が釣れていた

「・・・とりあえず一夏に投げておくか」

数秒考えた楓は一夏に押しつけることにする。一夏のだいたいの位置を確認して・・・

「おらあつつつ!!!」

ハンドボール投げの要領で投げた

「スコオン!!!」

「・・・やっべ、千冬先生に当てちった」

一夏達のほうに歩いて来ていた千冬にヒット

ちなみに100Mくらいはある。やっぱり人間ではない

「やべえよ・・・殺される・・・」

千冬が楓のほうを向いて振りかぶる・・・数秒して何かが楓の方向に一直線に飛来した

「スコオン!!!」

跳んできたのは先ほどのウサ耳

「いってえ・・・投げ返してきやがったよ・・・」

楓の二倍くらいの威力で投げ返してきた千冬、軽く人間ではないその痛みに悶えていると

「キィン」

「ニンジンが飛んでる!?!」

デフォルメニンジンが一夏達のほうへ飛んで来ていた

「椿姫!!! 紫炎!!!」

即座に紫炎を纏って杜若、ニンジンに突貫する

「楓!?!」

一夏が楓を見て驚いているがそんなことはどうでもいい

(何だかわからないがこいつは消す!!!)

そう決めた楓は勢い十腰のひねりを加えた回し蹴りをニンジンに叩き込む

「百合い!!!」

勢いのおかげで超威力となった百合はニンジンを盛大に吹き飛ばした

「楓!!! どうしたんだよ!!!」

ニンジンに気付いていなかったようで、一夏は楓の行動に疑問しか出てきていないようだ

「何でか知らないけどデフォルメニンジンがこっちに来てたから吹

き飛ばした」

デフォルメニンジン、そう言った瞬間に千冬の目がわずかに驚きの色を見せる

「それで朱雀、そのニンジンはどうした?？」

「さっきの通り、盛大に吹き飛ばしました」

「・・・よくやった」

「・・・?？」

なぜか千冬に褒められてしまい、少し照れる楓

「んじゃ、俺は釣りを継続してきますんで」

「集合の時刻には遅れるなよ」

「わかってますって」

そう言って岩場に戻る楓

「それにしてもあのニジンは一体・・・??」

考えていそうだが全く考えていない楓

「ん、かかった・・・って重い!？」

釣竿にかかったのはとんでもなく重かった

「まけ・・・るかあ!!!」

渾身の力で釣り上げる楓、その結果は

「・・・カジキマグロ!？」

カジキマグロが釣れた、しかもとんでもなくでかい

「どうぶつの森じゃねえんだから・・・」

とか何とか言いながら明らかにサイズが違うカジキをボックスに収めるあたりどうぶつの森になっている

「もうちょっと釣れれば調理できるか」

でっかいカジキを釣っというてまだ釣ろうとしている楓

「あと2匹は釣りたいな」

大きすぎる目標だった

結局、それから5匹のマグロを釣り上げてしまった楓  
一匹をその場で刺身にして食べたことは知られてはいけない

「アー楽しかった」

『お前だけな』

時は弾丸のように過ぎて夕方。楓がのんびりした声を上げると、一夏と千冬がシンクロして突っ込む

「どうしたんだよ二人とも、そんなに疲れたような顔をして」

良く見ると、二人ともかなり疲れがたまっているように見える

「ちょっと・・・な」

「ちょっと天災が襲来しただけだ」

「ふうん・・・束博士がねえ・・・」

『!!!』

「だってそうだろう?? 一夏と千冬先生が同時に疲れることなんてそれくらいしかないでしょ」

すらすらと自分の推理を告げていく楓



「良くわかったな、さすが楓だ」

「それほどでもねえよ」

一夏に素直に褒められててれる楓

「・・・してその天災は??」

「千冬姉が吹っ飛ばした」

「ご愁傷様・・・」

一夏の言葉でリアルに想像してしまった楓、無言で手を合わせる

「いいから行くぞ、夕飯だ」

千冬が二人に告げて旅館に歩いて行く

「そうだったそうだった、早く行こうぜ。腹減った」

楓も千冬についていく

(そう言えば釣りの結果どうだったんだろう・・・)

そんなことを考えながらついて行く一夏であった

食事の後、部屋に戻った(女子にはばれていない)楓と一夏

一夏が寝てしまった後、楓は調べ物をしていた

(千冬さんのIS・・・どことなく白式に似ているな・・・こいつなら魔改造施して創れるかな??)

千冬のISは現在無い、しかし千冬はブリュンヒルデ、この世界で最も強い

なら、オメガとの戦闘にも大きく貢献してくれるだろう

(オメガ・・・どこにいるんだ)

次に考えるのはオメガ、この世界の何かに憑依してから気配が全く  
と言っていいほどに無くなったのだ

（アイツの目的がなんなのかわからない以上こっちも動けないしな  
あ・・・ん??）

『楓、Leonから通信が入ってる』

楓の肩に現れた椿姫がLeonからの着信を告げる

「ばれないように開け」

『了解』

Leonからの着信を開きます

『助けてくれ』

Leonの最初の一言がそれだった

「・・・何があった??」

ため息交じりに聞く楓

『マスターが切れてる』

「でしょうね」

予測していた楓は適当に相槌を打つ。目と手は調べ物に向かっている

『楓の居場所を教えろって』

「残念だが無理だ」

調べ物から目をそらさずに言う楓

『ちなみに他のメンバーもキレているぞ、とくに白雪が』

「白雪がか・・・」

頭の中に小さくなった白雪がぶんぶん怒っている絵が浮かび、顔が  
ほころぶ楓

『…残念だが楓、そんな生半可なキレ方じゃない。正直言って・・・  
阿修羅だ』

Leonがなぜか楓の想像を見抜いて告げる

「・・・マジかよ」

しかし楓の頭の中ではまだミニ白雪がぶんぶんしている

『今にも月光花で探しに行きそうだぞ』

「I S使う気かよ・・・一夏! !」

楓は一夏を起こす

「どうしたんだよ楓・・・ってLeon! ?」

空中投影ディスプレイに映っているLeonを見て露骨なまでに驚く楓

『Leon! ! 一夏もいるの! ?』

Leonの後ろのほうからシャルの声が聞こえる

「やべえ・・・全員阿修羅じゃねえか」

Leonが見せてきた一方的スクリーンでは額に青筋をこれでもかと敷き詰めた専用機持ちグループの方々が見えた。白雪だけ頬を膨らませている

「なんだ、白雪は可愛い怒り方して・・・ないな、ヤンデレモードだあれ」

白雪の目に光が無い、このままだと絶対に殺されるので楓はある作戦を閃く

「Leon、皆にも聞こえるようにしてくれ」

『いいのか?? 殺されるぞ』

「殺されないために、だよ」

く外部スピーカーに切り替えますく

「聞こえてるか?? 専用機持ち諸君」

『ああ! ?』

「・・・今から俺たちは外を逃げる、お前たちはそれを補足して捕まえろ。制限時間は30分」

『・・・』

沈黙している阿修羅、構わず楓は続ける

「制限時間内に捕まえられたらお前らの勝ち、俺たちの居場所を教える。制限時間終了時に片方でも捕まっていなかったらこっちの勝ち、俺たちの居場所は教えない」

『制限時間内に捕まえればいいのね・・・?? ?』

鈴の目がマジになる

「ちなみにラウラのA I Cは禁止だ」

『なぜですか! ?』

「あたりまえだろうが、あれありなら俺たち本気出すよ? ?」

『ラウラ、悔しいけどA I Cは使っちゃだめよ、二人が本気を出したら間違いなく負ける』

『くう・・・』

悔しがりながらもしぶしぶ引き下がるラウラ

「エリアを決めておこうか、ここから四方に4キロまでならO Kだ。いいな? ?」

『わかったわ』

いくらか落ち着きを取り戻した鈴が周囲の皆に何か言っている

『楓、今スグに始めるわよ』

「了解、じゃあ・・・」

『「開始! !」』

一夏と楓は外に出てI Sを展開、空へと上がる

「いくらなんでも早すぎじゃねえか! ?」

楓たちのすぐそばまで接近してきていた

「箒、シャル、セシリア! ! 一夏をお願い! 残りは楓を落とすわよ

! ! !

『応! ! !』

「一夏! ! 二手に分かれるぞ! ! おまえの機体は魔改造組の中で最も早い、攻撃されたら上手く回避しろ! !」

「わかってる! ! !」

一夏は楓とは別の方向に逃げ、それに応じて箒たちも一夏を追って飛んで行く

「楓、あんたをおとす」

「やってみな、言っておくが攻撃は制限していない、つまり・・・」  
楓の周りに黒い渦が巻き起こる

「・・・俺が出て来てもいいってことだ! ! !」

渦を割くように出てきたのは宵闇、最強であり最狂の機体である

「宵闇って・・・どんだけ見つかりたくないのよ・・・」

カエデがそう呟く

『宵闇!! とりあえず逃げるぞ』

「わかってるよ・・・じゃあな!!」

宵闇は踵を返し、マルチ・イグニッション・ブースト多段瞬時加速ではるか遠くに逃げ去る

「あ、逃げた」

「逃がさないわよ!!」

鈴もイグニッションブーストで宵闇を追う

「とりあえず・・・」

「先回りしましょうか」

「だな」

鈴を見送った後、カエデたちは三方向に散っていき、楓を待ち伏せすることにした

「まて一夏!!」

箒が月光花の武装「白鷺」で斬りかかってくる

「無理だって!!」

それを紙一重でかわし、距離をあける一夏。そこに

「甘いですわよ!!」

セシリアのB08が火を噴き、一瞬でとんでもない量の弾幕を張った  
「これ多すぎるだろお!!」

そんなことを言いながら小刻みな瞬時加速、その名も多段加速イグニッション・ドライブを使  
用してすべて紙一重で避けていく

(こいつも異常だな・・・)

楓の魔改造はとんでもない、いやもとからだが

「いけえ!!」

シャルの月光花の武装「鎌鼬」が飛んでくる

「ちょ!!!!」

一夏は即座にを雪片・淡雪を構築、鎌鼬に向けて矢を放つ

「おおおっ!!」

箒が斬りかかってくる

「雪風!!」

雪風にモードチェンジ、一撃を受け止める

「そこっ!!」

BT?に背中を撃たれてしまう

「ちいっ!!」

箒を吹き飛ばし、白夜を展開、多段瞬時加速で離脱する

「・・・逃げられたか」

「チーム編成がちよっと悪かったかな」

「しかたありませんわね、楓さんを先に落としましょう」

「だな」

ここに、楓VS他の構図が成り立った

『あー皆、聞こえるか??』

唐突に楓の声が聞こえる

『悪いが終了だ、お前たちが居ないことが鬼にばれた、早く戻らな  
いと大変なことになるぞ』

突然のOHANASHI宣言

『俺たちも戻る、生きていることを祈っているよ』  
くぷっく

『なんじゃそりゃあ!!』  
全員の突っ込みがシンクロした

その後、なんとかギリギリ怒られずに済んだカエデたち  
楓と一夏はばれてすらいなかったそうだ

翌日

ISのテスト稼働の日

「専用機持ち以外は量産機で試験稼働しろ、専用機は追加武装の点検をするからこっちへ来い」

千冬がそう指示すると瞬く間に専用機持ち以外が散っていく。箒もその流れに乗ろうとしたとき

「篠ノ之、お前もこっちに来い」

なぜか千冬に呼ばれた

「箒は専用機持ちじゃないはず・・・」

鈴も不思議に思ったのか首をかしげている

「ユキちゃん、カエデちゃん、それにシャルちゃん。あなたたちのISがあるわよ」

そう言いながらフィオナが楓の背によじ登る

ちなみにシャルのラファールはカエデに破壊されている

「登るな、俺はどの山だよ」

「堅いこと言わないの、三人のISは性能が同じだから。姉妹機みたいなものね」

薔薇月と白雪のIS『雛菊』、それにシャルの『月桂樹』は、楓の手の加え具合も一緒なのだ。違うのは色だけといっていい

「ようやくできたのね」

カエデが待ち望んでいた薔薇月、今までのはまだ未完成だったため、四神でもほとんど力を使えないでいたそれが今、完全な形でカエデの手に渡る

「はい、カエデちゃんは黒、ユキちゃんは白で、シャルちゃんはオレンジね」

フィオナがポケットから3色のネックレスを取りだす

ネックレスにはプレートが付いており、それぞれ薔薇、雛菊、月桂樹が彫られている

「ついに来たんだ、私の新しいIS・・・」

シャルが感嘆の声を上げる

「私の・・・専用機」

白雪もネックレスを握って呟いている

「楓、どうして私たちのスペックが一緒なの??」

カエデはどこか納得行っていないといった感じで楓に聞く

「そりゃお前、こいつは予測で行くと第6世代、最初は皆同じだが使用者の個性に応じて外見や能力を進化させていく『搭乗者に最適な姿になる自立進化型IS』だからだよ」

楓はさらりと説明した

「第・・・6!？」

一夏が驚く、というのも世界ではようやく第3世代のトライアルに入ったばかりなのにさらに上に行く第6世代が出てきてしまったのだ、無理もない



「あくまで予測だけだな。ちなみに言っとくけど、一夏。おまえの白式も第6世代並みの力を持っているからな」

「何だって!？」

さらに驚く一夏

「だってそうだろ、椿姫はもともと規格外だ。思念たちを使うのは並のISじゃ無理なんだよ。試しに白雪、月光花を貸してくれ」

「はい」

白雪から受け取った月光花を装着、椿姫たちを使おうとすると・・・  
「くっ!!!・・・がああ!!!!!!」

楓が痙攣し、月光花から黒煙が上がり、やがて動かなくなった

「・・・とまあ・・・こんな具合だ。だから白式はこの世界の人間が作った中で最高峰の機体だ」

無意識に『この世界の』と入れているあたりアホなんだと思う

「まさか白式が・・・」

くキイイインく

皆が驚いていると何かの飛来音が聞こえる、その音に楓は心当たりがある

「ちっ!!! また来やがった」

飛んで来ていたのは昨日のニンジン、天災東さんである

「千冬先生!!! どうします?？」

「破壊しろ」

千冬の許可をもらって楓は紫煙を纏う

「次は消し飛ばしてやる!!!」

昨日と同じように杜若で突貫、百合のコンボを放つ

「吹き飛ばえええええ!!!!!!」

渾身の一撃はニンジンに異常なまでのダメージを与え、はるか遠くへ吹き飛ばした

「・・・ったく、誰の犯行やら・・・」

楓は蹴っ飛ばしといてそう呟く、すると

『それは天災東さんなのだ!!!』

チャネルに介入されたようで、そこから無駄にハイテンションな声が聞こえる

『束!?!』

皆が驚いている中、一夏と千冬、楓の三人は同時にため息をつく

「千冬先生、これにウイルス送りこんでいいですか」

「構わん」

「了解、とりあえずISの情報をすべて消去してっと・・・」

『ちよっとちよっと!?!何やってんの君は!?!』

楓が何かを操作していると地面から人が生えてきた

「・・・束、ここで何をしている」

「やあやあちーちゃん!!それにいっくんに箒ちゃん!!久しぶりだねえ、束さんは会えてうれしいよ!!」

「やかましいわこの変態博士が」

楓が毒づくも束は完全無視

「そうそう!!箒ちゃん、君の専用機を・・・ってあれ?!箒ちゃん、それは何?!」

束は箒が手につけている黒いリング、つまり月光花をみて首をかしげる

「これですか?!これはローズの量産機、「月光花」です」

「月光花!?!そんなしよばい物使ってたの!?!」

「人の機体をしよばいとは言ってくれるなアンタ」

箒と束の間に立つ楓

「誰お前、今は箒ちゃんと話をしてんだよ、お前に興味無いから引っこめよ」

「言ってくれるな、言っておくがアンタが箒に作った専用機よりもうちの月光花のほうが優秀だぜ」

特定の人間以外には興味がない束だが今の一言にはカチンと来たようだ

「この天才束さんが一から設計した機体よりも量産機のほうが優秀だって?!お前何様のつもりだよ」

「こっちが聞きたいんだが??自分で天才って言ってるような奴に負ける気はねえよ」

「ならやってみる??今から箒ちゃんにあげるこの第四世代「紅椿」とお前のISで」

「上等だ、速攻で決着をつけてやる」

当人の知らないところで話がまとまった。本来第4世代で驚くところなのだが先に第6世代が出てきているので全然驚かない

「私が楓と戦うんですか!?!」

「そう言うことだ、箒、お前の全力で来い、俺は・・・だいたい3%位でやるから」

超手抜き

「舐めてんの??現行ISじゃ紅椿の足元にも及ばないよ」

「言ってる、その鼻赤してやるぜ」

楓はISを赤梅で装着、箒は紅椿を装着する

「かかってこいよ、ちようどいい、新技の練習でもさせてもらうか」

「本気で行くぞ、楓!?!」

同時に二人が飛び、楓が距離を取る

「・・・この勝負、楓の勝ちね」

唐突にカエデが呟いた

「・・・一応理由を聞かせてくれ」

一夏がとりあえず聞く

「だって練習する必殺技って・・・チート技よ??」

『ああ・・・』

皆納得してしまった、空では楓と箒が激闘を繰り広げている

「はああっ!?!」

箒が「雨月」を楓に振り下ろす

「甘いよ!?!」

一機のクリムゾン・ティアーズが雨月を受け止める

「まだまだあ!?!」

空割のビームが楓を襲う

「イヤッホオオオオ!!!!!!」

楓は大きく一回転するように避け、右手に「レムナント」(拳銃)を展開する

「いい感じじゃねえか、しかし。もう終わりにさせてもらうぜ!!!」

箒を至近距離で撃ち、距離が開いたところで楓はクリムゾンを大量に展開

「箒!!! 防御しないと絶対防御貫いて死ぬぞ!!!」

「・・・くっ」

箒が防御の姿勢に入ったのを確認し、楓はある言葉を詠唱する

「我が体に流れる正義よ!!! 大きな雨となり、仇名すものを撃ち碎け!!!」

クリムゾンの銃口が輝きを増し、箒を取り囲むように配置される

「閃け!!! レイン・アブソリュート!!!!!!」

瞬間、一斉にクリムゾンから七色の光線が発射され、360°から箒を貫く

「きゃあああああああ!!!!!!!!」

一撃で紅椿のシールドエネルギーがゼロになり、解除される

「終了、っと」

楓が箒を回収、降りてくる

「何だあの一方通行」

一夏が呆れながら突っ込む

「いやあその自称天才様の鼻を砕いてやろうと思って」

「折るんじゃないの!?!」

楓の言葉に一夏が突っ込む

「そんな・・・紅椿が・・・」

楓の後ろでは束がうなだれている

「まあ気にすんなよ博士、もともと俺は規格外だ」

あまりにかわいそうなので慰める楓

「君・・・名前は?」

「ん?? 朱雀楓だ」

「すごく・・・かえで」

束が楓の名前を聞いて何か考えている

「どうした博士、なんか思い当たることでもあんのか??」

楓が束の顔を覗き込む、すると

「かーくんだ!!」

「のわぁ!!」

いきなり顔をつかまれてしまう楓

「何するんだい!!」

しかしするりと抜ける

「束さんはかーくんに興味を持ったよ!! ついでにかーくんが手を加えたISとその操縦者も!!」

つまり、束は専用機持ち全員に興味を持ったことになる

「束博士、ここにいる全員、俺が手を加えています」

「じゃあみんな名前を教えようか!! 束さんが素敵な名前を考えてあげるから!!」

束がそういつてにじり寄ったその時

「織斑先生!! 大変です!!」

そう言って走ってきたのは真耶

「どうしたんだ山田先生」

「緊急事態です!! 付近で起動テストを行っていた銀の福音が暴走、その対処を私たちが担当することになりました」

「銀の福音!??」

千冬の顔が強張る

「福音・・・それを俺たちが落とせばいいんですか??」

楓が今までにない真剣さで真耶に確認する

「はい、とりあえず作戦室に行きましょう、ここには他の生徒の不安を煽って仕舞いかねません」

真耶の一言に従い、一同は作戦室へと移動を始めた

「・・・それで、その方は誰ですか?？」

真耶が楓に聞く

「この人は篠ノ之束、あの束博士です」

「束!？」

天才が居ることに驚く真耶

「そんなことはどうでもいい、千冬さん、福音を見せてください」

「・・・これだ」

スクリーンに映し出された福音を見て楓がいらだたしげに舌打ちする

「野郎・・・よりによってISに憑依するとは・・・ちょっとすいません」

楓は携帯を開き、ある番号に電話する

『はい・・・ってローズか』

「今はそれでもかまわねえ。ゼウス、オメガを見つけた。ISに憑依してやがった」

『なんじゃと!？』

「いまから俺たちが落とすから分離をまかしていいか??」

『・・・わかった、気をつけるのじゃぞ』

「ああ」

くぷっく

「すみませんでした」

楓は何事もなかったかのように携帯を仕舞う

「・・・先ほど山田先生が言った通り、この事態を我々が対処することになった」

「先生、俺に行かせてください」

千冬の言葉をさえぎるように楓が挙手する

「どうしてだ」

「こいつは・・・シルバリオ・ゴスペルは俺以外じゃ落とせない」

『どういうことだ』

いきなり戦力外と言われてわずかにキレる他の面々

「理由を聞こう」

「詳しいことは話せませんが・・・俺で言う椿姫や赤梅といった思念に似ているが・・・災厄の化身「オメガ」が憑依しています。こいつはこの世界の力じゃ勝てない、俺が魔改造した程度じゃ絶対に楓の目が鋭くなり、目の光が消える

「わかった・・・しかし織斑も同行させる」

「俺も!？」

突然呼ばれてびっくりする一夏

「この中で楓以外で有効そうなのは一夏しかいないでしょう、一撃必殺の威力を誇る零落白夜しか」

鈴に言われて「なるほど・・・」と考え込む一夏

「織斑、これは訓練でなく実践だ、覚悟ができていないなら無理にやらなくてもいい」

千冬がそう言うで一夏は楓のほうを向く、楓が一夏に気付くと

「楓、お前は覚悟ができてるのか?？」

そんなことを聞いた

「・・・当たり前だろ、今ここで何もしなかったら間違いなく俺はその時点で死んだようなものだ、だったら例え相討ちでも斃す。俺の命で他のものが守れるなら」

守る、その言葉を聞いた一夏の目が変わる

「そうだな・・・先生、俺にやらせてください」

千冬は一夏の言葉を聞いて

「わかった、他の専用機持ちもバックアップに回すが構わないな？」

「ええ、そうときまれば急ぎましょう、シルバリオ・ゴスペル銀の福音いや・・・シルバリオ・銀の災厄を倒しに



## 11話

### 銀の災厄（シルバリオ・オメガ）（後書き）

次回はバトル回です、拙いけどがんばります

感想など、お願いします

## 12話

落ちる白、閃く零、裏切りの椿（前書き）

福音戦ですネ

才能の無さに絶望中です

## 12話

### 落ちる白、閃く零、裏切りの椿

「・・・一夏」

浜辺に立ちすくんでいる一夏を呼ぶのは箒の声

「どうしたんだ箒、そんな顔して」

「私はようやくお前に並ぶ力を手にできたと思っていた、でもお前は既に上に行ってしまった・・・私

は、役にたたないのだろうか・・・?」

箒の目に渦巻いているのは不安、さみしさ

それを包み込むように、一夏は箒を抱きしめた

「一夏・・・?」

「大丈夫だ、箒は役に立たなくなんかない。そばにいてくれるだけで、俺の力になっている」

「一夏・・・」

「あー・・・良い雰囲気壊すのは忍びないのだが・・・時間だ、一夏」

突然聞こえた楓の声、二人が飛びのく。一夏の肩にはちっちゃい楓が乗っていた

「あと箒、お前に一夏を運んでもらいたい」

「・・・どうということだ?」

楓の言葉に疑問を隠せない箒

「一夏の場合はエネルギーすべてを攻撃に回してもらいたい、だからそこまで行く足が必要なんだ。束に聞いたところ、魔改造ありでも白式の次に早いのは紅椿らしいんだ、能力的に相性もいい、だから

ら、一夏を運んでほしいんだ」

相性、その言葉で箒はいつもの箒に戻った

「本来なら女の上に男が乗るなど言語道断だが・・・状況が状況だ、仕方ない」

仕方ない、と何度も繰り返しているが頭の中ではハッピー状態だった『頼まれてくれるか、助かる。それと一夏、今回の作戦はお前が主体になった』

「え!？」

突然の事に驚く一夏

「残念だが今の俺にアイツを討つ力が無いんだ。なぜだか知らないが俺の力が半減している」

一夏達にこそわからないと行ったが楓はわかっている

(わざわざこんな時に抑止力が働くとは・・・困ったもんだ)

「楓、私はどうすればいい??」

箒がミニ楓に話しかける

「そうだな・・・状況に応じて一夏をサポートしてくれ、けど無理はするな、いくら第4世代といっても今回は言い方は悪いがカス同然だ、あまり深追いはするな」

「わ・・・わかった」

箒が若干目を伏せる。戦う前から戦力外通告されたようなものなのだから

「それと一夏、白光は使えるよな????」

「ああ、こいつだろ??」

一夏は右手の中指にはめられているシルバーリングをミニ楓に見せる

「そうだ、そいつの特性は知ってるだろ???だがいくらエネルギーパックだからって限りがある、そしてそいつが無くなったら福音オメガには勝てない、エネルギーパックが尽きたらすぐに戻れ、いくら福音があと少力でやれそうでもだ」

「ああ、わかってる」

ミニ楓はそれを聞いてにやりと笑う

「さて、おしゃべりはおしまいだ、行くぞ、二人とも」

「「応!!」」

一夏と箒はそれぞれ白式と紅椿を装着する、既に遠くでは蒼銀の鎧、

「椿姫・朱雀」を纏った楓が福音に向けて飛んでいる

「乗るぞ箒」

「ああ、来い」

一夏は箒におぶさり、箒は飛翔する

『作戦・・・開始!!』

千冬声を合図に二人は紅い軌跡を残して飛んでいった



箒が楓を遠くに連れて行き、一夏が雪風を展開して福音に突っ込む  
『この世界の人間ごときが!!』

「黙ってろ!! おまえは俺が斃す!!」

『できるものならやってみろ!!!!』

福音は銀の鐘を一夏に向けて4発放つ、それを雪風で斬り裂いて白  
聖を打ち込む

『ほお・・・この世界の人間にしてはやるな』

全弾喰らってもほぼ無傷の福音。一夏は動揺する

（白聖はかなりの破壊力があつたはず・・・全弾喰らって無傷なわけがない!!）

「おおおっ!!!!」

「一夏!! はなれてろ!!」

不意に聞こえた楓の声、一夏は反射的に離脱する

「これでも喰らえ!! レイン・アブソリュート!!!!」

楓が箒を一撃で戦闘不能にしたアブサル（レイン・アブソリュートの略です）を放つ、全弾命中し、福音が煙に包まれる

「やったか!？」

「なわけあるか、箒、一夏、ここは俺に任せて逃げろ」

「どういふことだ!!」

楓の言葉に戸惑う二人、楓が理由を話す

「一夏はわかるだろう? あいつは異常なまでに強い、俺たち三人  
だけじゃ太刀打ちできないんだ。だから戻って皆を連れてきてほし  
い」

現在なぜか通信が途絶えており、向うは現状すら分からない状態な  
のだ

「まじかよ・・・」

楓が呻く、なぜなら

『この程度か??』

福音が無傷で現れたからだ

「箒!! 逃げろ!!」

福音がノーモーションで銀の鐘を箒に向けて放つ

「くそっ!!」

一夏が箒と福音の間に割り込む

「一夏!!」

すさまじい量のレーザーを喰らい、一夏は意識を失う

「一夏!!」

「箒!! 逃げろ!!!!」

楓が福音に突っ込み、箒たちから距離を取る

「箒!! ぼさっとするな!! おまえまでやられる!!」

「一夏!! 一夏!!」

箒は楓の言葉に耳を貸さず、只一夏の名前を呼んでいる

「全く・・・」

楓が箒を頬をはたく、それで正氣に戻ることができた箒は目に涙を浮かべながら

「楓!! 一夏が!!」

「わかってる!! いいから急いで離脱しろ!! すぐに治療すれば助かる!!」

「・・・わかった!!」

箒は最大出力で離脱、それを見送った楓は福音に向き直る

「さあ・・・これで」

楓の左目が紅く、髪が伸びていく

「全力で戦え!!」

「ローズの力を使うとは・・・しかしそれも無駄なこと!!」  
オメガ  
福音と楓は再び軌跡となる・・・はずだった

「エネルギー切れだ?!」

楓が動揺する、銀の鐘、高速戦闘、アブサル、エネルギーが切れるのも当然といえた

「冗談・・・きついぜ」



楓の動揺を見た福音は口角の釣り上げる

『やはりかなわなかったようだな・・・創造神』

福音が消え、楓はあらゆる方向から打撃を受ける

[illegible]

!!!

[illegible]

聞こえるのは高らかな笑い声と楓の叫び声、それが途切れたのはしばらくしてからだった

『ほう……まだ息があるか』

『うる．．．せえよ．．．』

楓は装甲をすべて破壊され、右腕はあらぬ方向に曲がっている

『ここで貴様を殺すのもいいが・・・どうせなら先ほどの奴らを前で殺してやろう。そうすれば奴らは絶望に染まるだろう』

『黙ってろ屑が……思い通りには、させねえよ』

楓が福音に左手を突き出す

『俺からの贈り物だ・・・受け取れ』

瞬間、手から風の龍が現れ、福音の装甲を切り裂いて行く

『まだこんな力を……』

『すまねえ・・・一夏』

その言葉とともに、楓は海のそこへと沈んでいった

「一夏!!」

楓が落とされる少し前、ようやく着いた箒はISを装着したまま作戦室に飛び込んだ

「先生!!一夏が!!」

「・・・何があったんだ」

千冬は驚いたものの、それを微塵も出さずに箒に聞く

「福音に、やられました」

「朱雀はどうした」

「楓は・・・私たちを逃がすために一人で・・・」

箒はうつむく

「そうか。束、専用機持ちを呼べ。篠ノ之、お前は一夏を部屋に運べ」

「わかりました」

箒が一夏を背負って駆けていく、千冬の後ろから束が顔を出し

「ちーちゃん、かーくんはどうなったんだろうね・・・??」

「おそらく・落とされているな」

その言葉にウサ耳がわずかに反応する

「どうして?？」

「いくら朱雀といえど、白式を一撃で落とした福音を一人で相手取るのは無理だろうからな」

「ふうん・・・そう言えばちーちゃん、かーくんからこんなものを預かっているんだよ」

束はポケットから指輪を取り出す

「・・・何だそれは」

「ISだよ、名前は「白騎士・零」」

「白騎士だと!？」

千冬の反応が面白いのか、束は笑いをこらえながら続ける

「もし俺に何かあったらこれを千冬先生に渡しといてくれって言つてた。とりあえずつけてみなよ」

「・・・そうしよう」

千冬は束から指輪を受け取り、はめる

『搭乗者との接続を確認、白騎士・零、起動します』

そんな機械音声とともに、千冬の頭の中にデータが流れ込んでくる

「なんだ・・・これは」

「どうしたのちーちゃん」

「この機体は・・・」

千冬は驚く、その機体は

「白騎士と同じじゃないか・・・!!」

「どういうこと!？」

束が白騎士・零のデータを見る

「どうして・・・これは・・・!!」

「どうしたんだ束!？」

「彼は・・・これで終わらせる人間じゃない・・・だからこれは約束の証なんだよ。きつと」

「約束?？」

千冬はしばし考え・・・驚いた眼で束を見る

「まさか・・・あの時の少年が朱雀だということのか!?!」

「その考えで間違いないと思うよ、外見は違うけど」

束達が言っているのは一夏がさらわれた時の話

「大変です織斑先生!! 専用機持ち組が一人もいません!!」

真耶が息を切らしながら作戦室にかけてくる

「何だと!?! どこへ行ったのだあいつら・・・」

「福音の所だよ。間違いないね」

束が研究者の目で話す

「いっくんとかーくん、二人がやられたんだ、惚れた男がやられたのなら復讐に行くでしょあの子たちなら」

「束、ここを任せていいか?」

「どうぞどうぞ、行ってるっしょい。ちーちゃん」

千冬はそれを聞いて笑う

「頼んだぞ、親友よ」

「もっちゃん!! その代わり、絶対皆連れて帰ってくるんだよ?」

束はそう言って親友に笑みを返す

「・・・無論だ!!」

千冬は外に飛び出し、零を装着する

「久しぶりだな・・・白騎士よ」

「全くだぜ姐さん、久々すぎてなまっちまったよ」

「!?!」

『驚くこたあないぜ、俺は零。白騎士の思念みたいなもんだ、楓の手によって表に出てこれたんだよ』

「そうか・・・零、福音の居場所はわかるか?」

『あたりまえよ、俺を誰だと思ってるんδει』

「第一世代であり最初のISだろう?」

千冬は零に話しながら空を飛ぶ

『ベースは、な。俺は今は第5世代、『搭乗者の意思にこたえる相棒』さ』

「そうか・・・朱雀には感謝しなければな」

『・・・っと!! 姐さん、福音見つけたぜ。ここから西の方角だ。これは・・・まずいな、押されてるなお嬢さん方』

「そうか・・・行くぞ、零」

『あいあい!!』

千冬は白い軌跡となって飛んだ

「束博士、白騎士・・・ですよね」

千冬が見えなくなったところで真耶が束に聞く

「うん。正確にはかーくんが作った進化型だけど」

「進化型??」

「そう、彼は白騎士の特性はそのままにスペックを異常なまでに引き揚げたんだよ。いうなれば二次移行セカンドシフトだね」

束はあるデータを呼び出す

「この数値は・・・」

「全く良くやるよねかーくんも。ここまであげたら・・・」

「あげたら??」

「多分壊れちゃうよ。もともと不十分な機体だから」

「それじゃ!!」

「大丈夫、白騎士が目覚めたって事は・・・」

束は壁を見る、その方角には一夏が眠っている

「もうひとりの王子様も目覚めるだろうから」

意味深なことを言って束は笑う

それはまるで、待ってましたと言わんばかりの輝く笑みだった・・・

(ここは・・・どこだ??)

一夏は白い砂浜に立ち尽くしていた

(そうだ、俺は福音に・・・)

一夏は砂浜を歩く、真っ白の砂浜は、晴れているのに熱くない

(早く行かないと楓が・・・)

「俺がどうしたって??」

一夏が振り返ると楓が居た

「楓・・・ここは」

「残念だが俺にもわからない・・・だが」

楓の周りに紅い風が吹き荒れる

「ここなら誰にも聞かれないだろう」

しばらくして風が収まり、楓はローズの姿になっていた

「楓・・・その姿・・・」

『いくら緊急事態だからって見せちゃだめじゃない??』

楓の隣に少年が現れる

「黙ってるよアマテラス、お前も姿見せただろうが」

『ここまできたら隠すこともあるまい』

続いて逆から老人が現れる

「あんたもかよおっさん」

それに続いて次々に楓と一夏の周りに少女、青年と現れていく

「あんたたちは・・・!!」

「身構えるな一夏、こいつらは世界で言う神様たちだ」

いきなりとんでも電波な事を言い出す楓

「楓・・・変な所でも打ったんだ・・・」

「電波じゃねえよ!!」

『いきなり神だと言われて信じろというほうが無理じゃ、織斑一夏よ、我々はお主に力を与えるために来た』

そう言うのは老人・・・

「そいつはゼウスだ」

楓が名前を教えてください

「ゼウス・・・さん」

『ほっほっほ、さん付けとは久しぶりじゃ。いいか織斑一夏、今世界は銀の福音・・・いや、そ奴に憑依しているオメガのせいで崩壊の危機に立っておる』

「オメガって・・・」

「災厄の化身、悪の根源といったほうがいいか」

楓が追加で説明をする

「俺がこの世界に來た理由もそれだ、まあ他にもいっぱいあるけどな」

「って事は楓も・・・」

一夏は楓を見る、紅く長い髪、黒い着物、人間とは思えない雰囲気  
「そう、俺は創造神ローズ、世界の創造主にして世界の破壊者でもある」

それを聞いて一夏が反射的に某仮面ライダーを思い出した

「ディケイドさんじゃねえぞ俺は」

「人の心を読むな!!」

「・・・話を戻すぞ、さっきおっさんが言った通り、こいつらはお前に力を授けるために来た、ここはお前の心の世界だ」

楓はそう言って海に入っていく

「出て来いよ、白式」

「痛いよ・・・」

そして海に手をつ突っ込んで少女を引っ張り上げる

「白式って・・・お前がか!」

「そうだよ、私が白式の思念。名前は・・・」

「白<sup>びやく</sup>」でいいだろ」

楓が決めてしまった

「じゃあそれでいいや。一夏、この人たちの準備は終えてる。あとはあなたの覚悟次第」

「俺の・・・覚悟」

一夏は白に言われたことを復唱する

「俺が質問してやろう。・・・一夏、力を欲するか?? 守るために、壊す力を」

楓が一夏に質問する

「守るために・・・壊す・・・」

「仲間を守るために、敵を葬る力だ。どうだ?? 欲するか??」

楓は一夏に近づく

「それは・・・本当に力なのか??」

「ああ、俺が与えるのは創造の力、しかしお前が道を間違えればすべてを破壊する暴力にもなりうる」

楓の言葉を聞いて、決断する一夏

「俺は、その力を受け取るよ、只一つ約束してくれ」

「何だ??」

楓は首を捻る



「もし俺が破壊の道に堕ちたら・・・俺を殺してくれ」

「上等だ、お前の覚悟、受け取った」

楓は一夏に右手を突き出し、そこから剣を射出する

「一夏、それは俺が封印していたお前の力だ、銘は雪羅。そしてこれが俺たちの与える力、銘は水無月」

「雪羅に・・・水無月か」

一夏が雪羅と水無月を手にして呟く

「さあ、行ってきたい、お前の帰りを待ってる戦乙女がいっぱいいるんだから」

「・・・そうだな、行ってくるよ」

一夏の体が透けていく、しばらくして一夏は完全な光となって消滅した

「さて・・・俺も行くかな」

『頼んだぞ、ウィンディ』

『僕の力を貸してあげるよ、すっごく強いんだから!!』

アマテラスが炎をかたどった指輪を渡す

「それは昔の名前だよ阿呆、行ってくる。ありがとなアマテラス」

楓もそこから消えていき、戻っていった

自分が命を掛けて守りたい者の所に

「なんだこいつは!？」

「化け物・・・」

鈴達は苦戦していた

『お前らでは相手にならんとっておろう』

福音が羽を広げる

「皆!! 私の後ろに!!」

シャルがそう言ってパッケージ「ガーディアン」のシールドを広げる

『その程度か!!』

『ガーディアン』のシールドは現行ISの攻撃では消して傷つかない防御力を持つ

しかし銀の鐘は数発でシールドを破壊し、シャルを襲った

「きゃああああ!!!!」

「シャル!!」

シールドエネルギーが底をつき、解除されるIS、下ではラウラとセシリアが同様に墜ちている

「このお!!!!」

「いっけえ!!」

箒と鈴が斬りかかる

『下らん』

銀の鐘で吹き飛ばされてしまう

「くう……」

「かは……」

「鈴さん!! 箒さん!!」

白雪が二人を受け止める

「白雪!! 二人を安全な場所に!!」

カエデはそう言って蒼の旋律を展開、福音に切りかかる

『甘い!!』

シルバー・クロス

福音は銀の十字架でそれを防ぐ

「このお!!」

スカーレット・コンバイン

即座に緋色の痛みを展開、ゼロ距離で打ち込む

『効かぬわ!!』

福音はお返しと言わんばかりに銀の鐘をカエデに撃つ

「ぐっ……」

『そんなものか貴様らは』

「カエデさん!!」

二人を安全な場所に避難させた白雪が戻ってくる

『たった二人になってしまったな……まだやる気か??』

「あたりまえじゃない……」

「だって……」

二人はシンクロしながら同時に指を突き付ける

『惚れた男の仇なんだから!!』

「決め台詞のどこ悪いんだが……」

いきなり聞こえた声に驚く二人

声の主は……

「福音。いやオメガ、貴様は私の教え子を可愛がってくれたそうだな、今からそのお礼をしてやろう」

『先生!!』

織斑千冬、ブリュンヒルデの再来だった

『良いだろう、来い!』

「行くぞ! 零!!!」

『わかってますよ!!! 近接ブレード『出席簿』!!!』  
千冬の手に出席簿が現れる

「.....」

『.....』

福音でさえ固まっている

『ごめん、嘘。改めまして・・・近接ブレード!!! 『雪片零型』!  
!』

千冬の手元にひと振りの大剣が現れる。それを片手で使い、福音に叩きつけた

『ぐぬう.....』

『いつけえ!!! 姐さん!!!!!!』

「はああああ!!!!!!」

あらゆる方向から斬りつける千冬、福音はその威力に後退せざるを得ない

『くっ!!!!!!』

上段からの一撃を銀の十字架で防ぐ、と

『マグナム『雪乃勇<sup>ゆきのいさみ</sup>』!!!』

「おおおおおお!!!!!!」

いつの間にか現れていたマグナムで3発撃たれ、大きく後退する

『くっ!!! 銀の鐘!!!!!!』

銀の鐘を全弾発射するが千冬はすべて紙一重で避ける

「すごい.....」



その時、空から二本のレーザーが福音を貫いた  
「あ……!!」

白雪は上を向き……涙を流す。白雪の目に映ったのは  
「悪い!!遅くなった!!」

第二形態、『雪羅水無月』を纏った一夏と  
せつらみなづき

「良く頑張った、後でご褒美だ、白雪」

第二形態『紅桜花』を身に付けた楓の姿だった  
あかおうか

「二人とも……生きてたんだ……」

「あたりまえだろうが、一夏、千冬さんを」

「あれ千冬姉なの!？」

白雪のもとに降り、一夏に指示を飛ばした楓は白雪を抱き寄せる

ISが解除され、限界だったことが分かる

「良く踏ん張った、後は俺たちに任せろ」

「楓……うわああああ!!!!!!」

白雪は楓の胸に抱かれて、緊張の糸が切れ、泣いてしまう

「泣くな泣くな……よしよし」

そんな白雪を楓は紅い瞳で見つめて、頭をなでる

「それで白雪、皆は??」

「福音にやられちゃって……皆あそこに」

白雪が指した方向を見ると、倒れた仲間たちが見える

「俺の仲間を傷つけたんだ、許すわけにはいかねえな」

楓は一夏が相手取っている福音を見てそう呟く

「白雪、皆の所にいてくれ、できれば起こしておいて。これを渡し  
ておいてな」

楓はツヴァイをいくつか渡す

「……わかった」

楓は白雪を抱いたまま陸に降り、白雪を降ろす

「……楓??」

「鈴か、気がついたんだな」

鈴が目覚まし、楓を見て瞬きをする

「白雪、他の皆を頼むぞ、あと、千冬さんにこれを渡しておいて」  
楓は指輪を白雪に渡す

「これは白騎士・零の最後のパーツだ」

「わかった、行つてらっしゃい」

楓は一夏のもとへと飛んで行く

「鈴さん、戻つて来てくれましたよ、私たちの騎士が」

「・・・ええ、そうね」

二人が見る先には蒼銀の軌跡と白い軌跡が銀の軌跡とぶつかり合っている

「全く遅いのよ、あいつは・・・」

それを潤んだ目で見つめながら、鈴は一言呟いた

「一夏!!」

「楓!! 皆は??」

「無事だ!! 後は・・・」

「こいつだけだな!!」

二人は合図もせず福音に連撃を浴びせる



一夏の肩にウサギ・・・椿姫が現れる

「どういことだよ!」

『そのままの意味だ。今のあいつは楓じゃねえ』  
宵闇も足元にいる

『創造神の力・・・試してみようか!!』

オメガが海に向かって手を突き出す、すると  
くゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「城!？」

とんでもなくでかい城が生えてきた

『これはいい!!とても面白い力だ!!』

オメガは城を見て激しく喜んでいる

「子供か!!」

『子供とは失敬な、お前だって銃とか懂れるだろ??』

「それは・・・そうだが」

『だろう!!男にとって城や銃といったものは浪漫だ!!いい!!  
良いぞ!!』

「・・・」

一夏の目には只のミリオタにしか見えていない

『ミリオタとか言うな!!』

「当然のように心を読むな!!とりあえず楓を返せ!!」

『だから言ったであろう・・・楓の意識はすでに消去してある、も  
うこの体は俺のものだ』

「くそっ・・・楓が、こんなミリオタに・・・」

『だからミリオタ言うな!!全く調子が狂う・・・』

オメガがため息をつく

『とりあえずだ・・・我はこれから3日間の猶予を与える、その間  
に我に對抗できるくらいに強くなれ』

「なんだそのラスボス・・・」

一夏が突っ込む

『我の前に一人だけ敵を用意しておく、それを斃して我のもとへ来

い』

「3日間で・・・」

『話は終わりだ、回復してやるから倒れている者を運べ、ちゃんとレディに対しての扱いをするのだぞ』

「性格変わりすぎじゃねえ!？」

とっても紳士なオメガだった

『・・・ほい、回復できたぞ』

「ああ・・・ありがと」

白式は完全回復している

『気にするな、じゃあ我は行くぞ、三日後だぞ、忘れるなよ』

「忘れねえよ・・・三日後な」

オメガはふよふよと城に飛んで行く

(あれ狙えば落とせんじゃね??)

『後ろから狙うなよ』

「ばれてた!!」

一夏は下降し、皆のもとへ戻っていった

「一夏!!! 楓は??」

鈴が辺りを見回す

「楓はオメガに乗っ取られちゃった」

「楓が!？」

のけぞる鈴

「・・・・・・・・!!!!!!」

「無理すんなよ、痛いくせに」

「むっ無理なんか!!」

一夏は千冬のほうを見る

「千冬姉、楓が」

「わかっている、白雪、皆に渡してやれ」

「わかりました」

千冬に言われて白雪が前に出る、その手に持っているのはツヴァイ

「それは・・・」

「楓に託されたものです」

そう言って白雪は皆にツヴァイを渡していく

ひやかかりようらんのはころも

あずさゆき

あじさい

『パッケージ「百花繚乱之羽衣」「梓雪」「紫陽花」「レギンレイ

ヴ」「ラーズグリズ」「カオスデイルト」「ノクターン」「ブレイ

クハザード」「ブリュンヒルデ」量子変換開始』

上から箒、一夏、白雪、鈴、セシリア、ラウラ、シャル、カエデ、  
千冬のパッケージが量子変換される。その能力は・・・

「何だこれ!!」

パッケージは無かった。いや、効果が見えないといったほうがいい  
「最後の最後に・・・ふざけてるのか!？」

一夏がキレル

「違う・・・あいつがこんなことするはずがない」

鈴が呟く

「・・・どちらにしろ三日間しかないんだ、各員すぐに戻って準備  
をしろ」

そう言って千冬は飛ンでいく

「とりあえずは戻るか・・・」

千冬に続くように一人、また一人と旅館に向かって飛ンで行く  
それぞれ、全く別の気持ちを抱きながら

## 12話

### 落ちる白、閃く零、裏切りの椿（後書き）

クライマックス！！ではありません  
あくまでイベントです、まだ続きます  
次回は息拔きの外伝、というか昔話です  
とっても短いと思います

## 昔話（前書き）

今回は一夏がさらわれた時のお話です

## 昔話

これは、織斑一夏がさらわれた時の話、そして、本人は知らないが楓と初めて会った時の話である

「ん・・・ここは?？」

一夏は暗い部屋の中で目を覚ます

一夏の体は椅子に縛り付けられており、身動き一つできない

「起きたか、少年」

暗い部屋にはもう一人、声を聞く限り同い年くらいの少女が監禁されていた

声の方向を見るが暗くて何も見えない

「お前は?？」

一夏はその少女に問いかける

「俺か??俺は・・・まあいいだろ。お前は?？」

男らしい喋り方をする少女らしい

「織斑一夏だ」

「一夏か、良い名前だな」

少女はほほ笑む

「ここはどこなんだ??」

「俺にもわからない、気が付いたらここに監禁されてた」

少女は首を振る。それから一夏のほうに顔を向け

「暇だからたとえ話をしようか、一夏、もし目の前に神様が居て、お前の願いを一つだけ叶えてもらえたら、何を祈る??」

少女は一夏に質問をする

「そうだな・・・力が欲しい、かな」

「力?? どうしてだ」

「守りたいんだよ、大切な人を」

「ふうん・・・鈴とか??」

「鈴!?? 何で鈴の事を・・・」

「ちょっとした知り合いでね、で、どうなんだ??」

一夏は考え込む

「鈴もそうだが・・・家族も、友達も、皆守りたい」

「・・・じゃあもし、その仲間が敵に回ったら、お前は どうする??」

少女の声は鋭くなっている

「諦めない、絶対に助ける」

「そうか、良い答えだ」

少女は一呼吸置いて、続ける

「しかし、それは自分勝手でもあるな」

「なんでだよ」

一夏はいらだちを隠せない、自分の言ったことを否定されるようなものだから

「誰しも自分の中の正義がある。しかしそれは他人から見れば悪でしかない、自分の正義が絶対じゃないんだよ」

「・・・・・・・・」

黙って聞く一夏、少女は続ける

「だからお前の言ってることは自分勝手に、一番人間らしい答えだ」

少女は、多分笑っている

多少嬉しそうにそう呟く

「人間らしい??」

「そうさ、自分勝手に、まっすぐで・・・・とっても人間らしい」

少女は続けざまにそう言う

「まるで自分が人間じゃないみたいな物言いだな」

「・・・・・・・・そう、だな・・・・人間じゃ、ないかもしれない・・・・  
だって」

少女はそう言いながらぐるぐる巻きにされている太いロープを引き  
ちぎった

「・・・・・・・・!!」

「な??? 人間じゃなさそうだろ??」

一夏は哑然としている

少女は一夏のロープも引きちぎる

「さて・・・・脱出と行こうか」

「脱出って・・・・どうやって??」

「決まってるじゃないか、正々堂々、真正面からなぎ倒していくの  
さ」

少女は分厚いドアの前まで行って

「第四の奥義『柳緑花紅』」

拳を打ち込んだ。しばらくの静寂の後

くギギギ・・・・

ドアがひとりでに開いた

「行くぞ一夏、ここにいると最悪殺されそうだからな」

明るいつもりに出た少女を一夏はマジマジと観察する

真黒な髪、右が黒で左が紅い瞳、中性的な顔立ち。そのすべてが完  
全な造形として存在している



「どうしたよ、俺の顔になんかついてるか??それとも・・・見惚れてたのか??」

意地悪そうな笑みを浮かべる少女

「べつに、見惚れてなんか・・・」

慌てて顔をそらす一夏

「・・・まあいいさ、取り合えずこれ使え、剣術の経験はあるだろ??」

少女は一夏に竹刀のようなものを投げる

「・・・これは??」

「スタンソード、とても名付けようか。簡単に言くと刀身に高圧電流が流れている刀だな」

「・・・危なっ!!」

一夏は刀身を触るのをやめる

「ボタン押さなきゃ大丈夫だよ。さ、行こうか」

少女は肩にかかるようにスタンソードを持ち、外に歩きだす

「ってさっそく見つかった・・・」

運の悪いことに見張りに3秒で見つかる

「どりゃあ!!!」

2秒で仕留める少女

「走れ一夏!!!」

「お・・・おう!!!」

慌てて少女の後ろに付いて走る一夏、それを見て少女は

「・・・とりあえず戦わなそうだからスタンソード貸してくれ」

とってもげんなりした様子で左手を一夏に向けて差し出す

「俺だって戦う!!!」

「じゃあ後ろじゃなくて並走しろよ!!!」

などとやり取りしながらも二人は次々と斃していく

「!!!一夏!!!」

一夏の後ろに現れた男が刀を一夏めがけて振り下ろす、少女は一夏と男の間に滑り込み

ゝひゅっ・・・ガギイン!!!!!!ゝ

右手に持っていたベレッタで刀を受け止める

「いつの間に!!!」

「教えるかよ!!!」

左に持ち替えていたスタンソードで一閃、マンガみたい骨が透けて倒れる男

「・・・もっと周りに気を配りな、俺が気づかなかったら死んでたぞ」

「わ・・・悪い・・・!!!」

今度は一夏が少女の後ろに走り抜け、

ゝすばあああん!!!!!!ゝ

少女の後ろにいた女を仕留める

「・・・わりい」

「それにしても・・・何処なんだ此処??」

結構適当に走っていたので迷っていた

「そろそろ出口に着くはずなんだが・・・」

少女が近くにあったドアを開ける

「あ・・・」

そこは大きなホールになっており、階段の上には大きな西洋鎧が置いてある

「あれは・・・IS??」

驚いた風な一夏の気にせず観察する少女

「どうやらそうらしい・・・ん??あれは・・・まずい!!!」

少女がその鎧に向かって飛び出す

「あ、おい!!!」

「伏せてろ!!!あれは・・・既に起動してる!!!!!!」

少女がそう言うのと同時にIS『カーチャ』がゆっくりと動き出す

「!!!」

「一夏!!!!!!刀を!!!」

少女の声に半ば反射的に少女に向かって刀を投げる

「行くぞ!!!! 試作品!!!!」

二刀になった少女はさらにスピードを上げ、カーチャに突貫する  
カーチャは近接ブレードを展開、二刀と切り結ぶ

「くっそ……」

さすがに生身の人間と試作品とはいえIS、力の差は歴然で、じり  
じりと押されていく少女

「くっ!!!」

弾かれて吹き飛ぶ。その時に一刀が手から離れ、隅に転がってしまう

「冗談……」

転がっていく刀を見てそう呟いた後、立ち上がって構えなおす

「平気か!？」

「大丈夫だ!!!」

そうは言ったものの、見るからに大丈夫じゃない姿をしている少女。  
それを見て一夏の中に何かが現れる

『お前はここで突っ立ってていいのか??』

(でも今の俺じゃ……)

『お前は守るんじゃないのか?? 姉を、親友を』

(どうすればいいんだ……)

『簡単だ、転がってる刀を拾って願えばいい、守る力が欲しいと』

(守る……力???)

『そうだ、守るための力だ』

「……やるっきゃ、ねえよな……」

一夏の目の前にはISに立ち向かう少女、切り結び、吹き飛ばされ、  
ぼろぼろになっていく

「ここでやらなきゃ、男じゃねえ!!!!」

刀に向かって全力で走り、地面すれすれに手を置いて、拾う

「俺は!!! 皆を守るんだ!!!」

一夏が願った瞬間、スタンソードが光る、電気が流れる輝きではな  
く、性質が変わるような、そんな輝き

「あれは……きやつ!!!」



「千冬姉!？」

「一夏!・・・無事なようだな、というか・・・何で刀を持っている?？」

千冬は一夏の持っている雪羅に目を留めてそう言う

「ああ、これは・・・」

「痛ってえな・・・テメエ」

がれきを吹き飛ばして少女が出てくる

「貴様・・・何者だ」

「そりゃこっちのセリフだこの野郎、いきなり吹き飛ばしおってかに・・・」

首をゴキゴキと鳴らしながらスタンソードを構える

「IS相手に生身で戦おうというのか?？」

「勝てないわけじゃないだろう?？たかが第一世代、負ける気がしないね」

「待てよ二人とも、どっちも敵じゃないって!!」

陰悪な雰囲気になりかけているので止めに入る一夏

「一夏、そこをどけ、第一世代程度軽く破壊してやる」

「そうだ一夏、って・・・一夏、そいつと知り合いなのか?？」

少女が不敵にほほ笑み、千冬が一夏に問いかける

「そうだよ、ここに捕われてたんだ」

一夏の説明を聞いて納得する千冬

「見た感じお前の姉さんみたいだな・・・申し訳ありません。年上の方に無礼な物言いを・・・」

「いや、別にいい。一夏、帰るぞ、お前は・・・」

千冬は少女を見る

「俺の事なら心配いらんよ、ちょっと用があるし」

そう言って少女は背を向けて歩き出し・・・思い出したように一夏のほうを向く

「一夏、それは今のお前には危険だ、封印させてもらう」

少女が手を突き出すと、雪羅がスタンソードに戻り、塵となった

「んじゃ、俺はこれで」

今度こそ、奥に消えていく少女

「一体何なんだあの男は・・・」

千冬が呟く

「男!？」

「あれはどう見ても男だろう、もしかして見た目で女だと判断していたのか??」

千冬は一夏を見る

「それは・・・」

「・・・まあいいさ。帰ろう一夏、ここは危険だ」

千冬に言われるがままに、一夏は千冬とともに下に降りて行った

「ようやく見つけた・・・こんなところにあるとはな。俺の体」

少女・・・カエデの目の前には紅い髪の少年、つまり楓の体が横たわっていた

『早く終わらせましょ、私の体をこれ以上壊したくないし』

「別に壊してねえぞ??・・・まあ無茶はさせたけど」

一人二役で話しながらかえでは近くにあるベッドに横たわる

『行くぞ、せーの・・・』

「『魂の共鳴!!』」

どこぞの鎌使いさんみたいなことを言って二人は意識を深く潜らせる  
『・・・いけるぞ!!』

楓が自分の体に意識を転送する

しばらくして・・・

「どう?? 楓」

カエデが起き上がる、その眼は赤ではなく黒くなっており、楓が中にいないことを示している

「・・・ん・・・」

楓も起き上がる、二、三度頭を振ってから

「成功したか・・・良かった・・・」

色々あって肉体と意識がはなれてしまった楓が、カエデの中に入る  
ことによって難を逃れた

「とりあえず・・・行くか」

「今度はどこに行くの??」

二人は歩く

「どこに行くか・・・マダガスカルでも行くか??」

「あの島に何があるってのよ・・・」  
多少変則的ではあったがこれが一夏と二人の出会いだった



## 昔話（後書き）

はい、短いですが、すいません  
次回は城に突入します

## 13話

絶望の柩【デイスパイア・コフィン】（前書き）

城に突入編です

予想ではまた魔改造されます

## 13話

## 絶望の柩【デイスパイア・コフィン】

楓が乗っ取られてから3日間、一夏達は校外学習そっちのけでISの操縦技術、戦略の練り上げに明け暮れた

千冬でさえ真耶と束に教師としての仕事を丸投げしてISの事しか考えなかったからその凄まじさが伺える

そして、3日後・・・

「準備はいいか?? チーム『カメラリア』」

『OK』

千冬を筆頭に、一夏を始めとする専用機持ちが円を描くように立っている

「いいか、基本的に二人一組で行動し、朱雀を<sup>ターゲット</sup>発見したらすぐに他のものに連絡、迎撃を開始しろ」

「千冬姉、質問がある」

「なんだ??」

「楓を・・・殺すのか??」

一夏の顔にははっきりと「殺したくない」と言っている

「可能な限り生きたまま拘束しろ、殺すのは最終手段だ」

「・・・わかった」

「先生、質問があります」

一夏が下がると次は鈴が手を挙げる

「どうした、鳳」

「組み合わせはどうしますか??前衛があたしと一夏、箒、先生として、後衛がセシリア、シャル、ラウラ、白雪、カエデです」

「そうだな・・・一夏、お前は白石と組め、この中で唯一朱雀と互角に渡り合えるのは、お前だけだ」

「おれ・・・だけ・・・」

「白石もそれでいいな??」

『その必要はねえよ、千冬せんせ』

カエデから発せられたのは本来ここにいないはずの声

「朱雀・・・??」

『よう皆、3日ぶりだな』

カエデの左目は紅くなっている

「あの時の・・・」

「そうか、一夏と会ったのはこの姿だったっけ??」

今度はカエデの声が発せられた

『俺は今んとこ思念だけの状態でカエデに憑依してるんだ、体は城の中にある。いわば幽霊状態だな』

「朱雀、必要無いとはどういうことだ??」

千冬が楓に問う

『一人ずつでも、一斉にでも、どちらにしろ離れることになる』

楓の声でそう言うときカエデの左目が黒くなり始め、うつむく

「楓!??」

「・・・完全に消えちゃった、時間が無いよ」

カエデが顔を上げた時、その左目は完全に黒くなっている

「急いで、オメガに体が乗っ取られたら、だれにも止められない」

そう言うときカエデは薔薇月を展開、城に向かって進む

「・・・仕方ない、全員で行くぞ」

千冬も白騎士を展開してカエデに続く、皆もそれぞれ展開して二人に続く

「一夏、もしもの時は・・・覚悟を決めましょ」

鈴は一夏の肩に手を置いてそう言うってから甲龍を展開して飛んで行く

「覚悟・・・か」

一夏はもやもやとした気持ちを抱えながら白式を展開してついで行く

「オメガ！！約束の日だ！！！！」

一夏は城の入り口から叫ぶ。すると

『あ？？ちょ・・・待ってろ！！今あける！！』

とても災厄の化身とは思えないオメガの声が返ってきた

『ほんとに災厄の化身なの？？』

皆思ったようです

くギイイ・・・く

しばらくして、扉が開く

「・・・」

誰ひとり喋らない、そうさせるだけのプレッシャーが扉の内部から  
発せられていた

「・・・行くぞ、皆」

一夏が中に入る

「一夏・・・」

しかし、他の皆は、千冬でさえ足がすくんで一歩も動けないでいる

「・・・皆はここで待っていてくれ、決着は俺が付ける」

それに気付いてか、一夏は笑いかける

「なめんじゃ・・・無いわよ！！」



「いっててって・・・」

一夏が目覚めたのは、自宅だった

「・・・なんで?? 俺は確か・・・」

「起きたか一夏」

そう言ってドアから入ってきたのは・・・

「千冬姉!??」

「どうしたんだ一夏、私の顔に何か付いているか??」

千冬は不思議そうな顔をしている

「どうしたじゃないだろ!! 早くしないと楓が・・・」

「楓?? 誰だそれは」

千冬は首をかしげる

「誰だって・・・千冬姉にISを・・・」

「IS?? さっきから何を言っているんだお前は、早く着替えないと遅刻するぞ」

一夏は愕然とした

（ISを知らない、楓の事も知らない・・・どうなってるんだ??）  
（ピンポーン）

「ほら、早くしないと篠ノ之が先に行ってしまうぞ」

「お・・・応!!」

大急ぎで着替える一夏、制服を見て違和感に気付く

（これ・・・藍越高校の・・・!!）

一夏が手にしたのは藍越高校の制服だった。慌ててロッカーを開けるも、IS学園の物は見られない

（どうなってるんだ・・・）

一夏は釈然としないまま、とりあえず着替えて下に降りる、そこにいたのは

「遅いぞ一夏、このままでは遅刻してしまう」

やはり藍越高校の制服を着た箒が居た

「箒・・・束さんはどうしてる??」

「何を言っているんだ?? 昨日会ったばかりではないか」  
不思議そうに一夏を見る箒

（やはり・・・）

どうやらここは、ISが存在しない世界、らしい

「早く行くぞ」

「ああ・・・」

やはりどこかおかしい、一夏はシルバリングを見つめるが、何もわからない

（俺がおかしいのか、それとも世界がおかしいのか・・・）



考えながら歩く、すると背中に衝撃、吹っ飛んだ

「おはよー一夏！！相変わらずしけた顔してるわねー」

鈴だった

「いってえ・・・鈴！？」

「何よ？」

（鈴なら・・・）

「鈴、朱雀楓って名前に心当たりはあるか？？」

鈴は少し考えてから

「いいえ、知らないわ」

（鈴も知らない・・・って！！）

一夏は大事なことに気付く

「白！！」

【何？？、一夏】

一夏が右手のガントレットに向かって呼びかけると、白の返事が返ってきた

「どうなってんだ？？」

【おそらくあの時の振れが原因ね】

白の答えに安心した一夏は次の疑問を出す

「どうすればいいんだ？？」

【ここは一夏の願いの世界、この世界の鍵はあなたが持っているはずよ】

白がそれだけ言って実体化する

「そんなこともできんのか」

【ほんと使いたくなかったけど】

「一夏・・・今の・・・何？？」

鈴と箒が若干引きながら尋ねる

「ああ、こいつは白、俺の・・・」

「一夏の従姉妹よ」

白が一夏に助け船を出す

「「従姉妹？？」」

鈴と箒がそろって頭の上に？マークを浮かべる

くキーンコーンかーんコーンく

「あー！！チャイムー！！」

「白！！」

「全く・・・白式、展開！！！！」

一夏が白式を展開・・・

「できない！？」

できなかった

「どういことだ！！」

「一夏！！アホなことやってないで行くわよ！！」

鈴がそう言って走って行ってしまう

「待てよ鈴・・・！？」

突然景色が歪み、歪みの中から鎧を着た男が現れる

「どういことだ・・・何で俺が居る！！！！」

一夏の目の前にいるのは全体的に灰色がかった一夏だった

『どうもこうもないさ、俺はお前、お前は俺だ』

黒一夏がゆっくりと目をあける

『一夏、それはお前の中の闇だ』

一夏の後ろに現れる男、それは

「楓！？」

『よう、悪いが邪魔させてもらった。一夏、そいつと戦って勝て、そうすれば梓雪の意味がわかるはずだ』

とりあえず白式を展開する一夏

『・・・今のお前じゃ、俺には勝てない』

「やってみなきゃ分からないだろ！！行くぞ！！」

一夏は雪片・雪風を展開して雪片二型と切り結ぶ、が

くガキーン！！く

「雪風が！！！？」

細い木の枝かなにかのように砕けてしまう雪風、吹きとばされる一夏  
『言っただろ、今のお前じゃ俺には勝てない、守る者の無い、お前

では』

黒一夏がゆっくり一夏に近づく

『結局お前はそこまでなんだよ、守るものが無ければ、力を全く出せない、出したところで大した力じゃないんだ』

「俺は……」

折れかけた一夏の心、それを支える声が聞こえる

『一夏!!!』

箒の声を皮切りに、鈴、セシリア、仲間たちの声が次々と聞こえる、そして

「一夏、お前は一人じゃないだろう。お前は言った、力を得て、何をしたいのか」

楓の声が聞こえたとき、白式に変化が起きた

「俺の力は……守るための剣、仲間を……守る!!!」

白式の背中には真つ白なマントが現れ、ほのかに光りを纏っている

【**梓雪、起動。** <sup>टीम</sup> 意思、守りぬくための力】

「良い姿じゃないか、それならいけるんじゃないか??」

楓はゆっくり姿を消す

『ようやくか……来いよ、 <sup>ホーリーナイト</sup> 聖なる騎士』

「行くぞ!!!」

雪片二型を展開して、一夏の姿が消える

『!?!』

「こっちだ!!!」

声の方向を振り返るが既に一夏はいない

『なんて速さだ!!!』

「はあああああ!!!!!!」

黒一夏はなすすべもなく、あらゆる方向から一夏の斬撃を受ける、

一夏は <sup>マルチ・ハイ・イグニッション・ブースト</sup> 多段瞬時超加速を使って斬っては移動を繰り返し、超高速で連撃をたたきこんでいく

その姿はさながら旋風の様に周囲の空気を巻きあがらせ、黒一夏は切り刻まれる

果てしなく続いた連撃が止んだのは数分後、黒一夏の白式はすでにエネルギーが底をついた

「はぁ・・・はぁ・・・」

『まさか、やられるとはな・・・合格だ、俺よ』

黒一夏の姿が揺らぐと同時に周囲の空間も揺らいでいく

「おいおい・・・またかよ・・・」

突然襲ってきた頭痛に顔をしかめながら、またも一夏は意識を失った

「・・・」

「ここは?..?」

一夏が目覚めたのはどこかの家、一夏には見覚えがある

「ああ、鈴の家か」

「いい加減出て行きなさいよ!!!!!!」

「おわああ!!」

後ろに立っていた鈴に蹴飛ばされ、部屋を転がり出る一夏

「何すんだよ鈴!!」

「こっちのセリフよ!!こっちでも一夏は一夏・・・ん??」

突然考え始める鈴、しばらくして

「あんた、どっちの一夏??」

「どっちって・・・少なくともこの世界の俺ではないな」

とりあえず答えると鈴はまた考え込む

『一夏、お前は、本来の、一夏でいいのか??』

『間違いないよ、なんてったって私が居るんだから』

Leonの声に白が反応する

『だそうだぞ、マスター。この一夏は本当の一夏だ』

「やっぱりね・・・で何でいきなり現れたのかしら??」

口調こそ柔らかだがはつきりと感じられるほどに殺気が出ている

「俺にもわからん、いきなり時空が揺らいで気付いたらここに落ちた」

「全くわからないわ・・・」

鈴がうなだれる

「しかし鈴、ここはどうやらお前の願いの世界らしい。何か違和感を感じなかったか??」

一夏の言葉に鈴が考える、いきなりハッと顔をあげて

「お父さんが居たわ」

「居なかったらお前生まれないだろう」

「違う!!離婚したはずなのに一緒にいたのよ!!」

鈴の言葉に一夏は気付く、どうして鈴が中国に帰ってしまったのかを  
「って事は鈴は心の奥底で離婚した事実を否定していたのか」

「多分・・・そうだと思う」

鈴は苦々しげに言い、俯く

「・・・気にするな」

一夏は鈴の頭をそっと撫でる

「一夏、どうやって自分の世界から脱出したの??」

撫でること数分、元に戻った鈴は一夏に聞いてきた

「突然俺の中の闇が現れて、それを倒した」

「・・・一夏、もう少し日本語をがんばりましょう」

「中国人に言われたくないんだけど!」?

『簡単に言うと、世界の抑止力に引かかると、一夏の場合I Sが無い世界だったから白式を展開しようとしたらだけど。それをすると現れるみたい』

白がわかりやすく説明する

「さすが白、わかりやすいわ」

『・・・おい、この世界のものじゃない何かの反応があるぞ、すぐ近くだ』

Leonが突然そんなことを言い出す

「それって・・・」

「誰かかも知れない!! 行こう!!」

一夏と鈴は窓から飛び降りる、するとそこにいたのは

「一夏?? それに・・・鈴??」

「「白雪!」?」

白雪が啞然としていた

「そうか、やっぱり白雪も・・・」

「うん。闇の私・・・闇白雪が現れて、紫陽花が起動した」

白雪から一通り話を聞きながら、三人は近場のカフェに向かっていた  
「とうか二人ともあのパッケージ起動できたの!？」

「ああ」「ええ」

鈴が聞くと二人ともうなずく

「白雪はどんなテーマだったんだ?？」

「ちよっと恥ずかしいんだけど・・・生きぬくための力、だよ」

「生きるため・・・良いじゃんか」

「そう・・・かな?？」

『そうよ、白雪はもっと自分に自信を持ちなさい』

「「!?!?!?」」

いきなり聞こえた白やLeonと違う声に驚く一夏と鈴

「まだ紹介してなかったね、この子はカナ。一夏で言う白みたいなものかな」

『よろしくね、一夏、鈴』

「そうだったのか・・・」

感心する一夏、何になのかは分からない

「なんか少しの間に成長してない?？」

鈴が白雪を見て呟く

「そ、そう?？」

「そうなのか?？」

一夏も白雪をしげしげと眺めて・・・

「確かにちよっと髪の毛が伸びてるな」

「そこ!？」

鈴がツインテールを真横に伸ばして突っ込む

「そこ以外に何があるんだ?？」

「えっと・・・その・・・」

『胸よ』

白が恥何ぞ知るかな口調で答えを言う

「そうなのか??・・・ほんとだ」

一夏が今度は白雪の胸を見てそう言う

「一夏??一回死ぬ??」

「何で褒めたのに死刑宣告!??」

女心がわからないのは一夏クオリティ

「とにかく!!そのうちあたしが出てくるからそれを倒せばいいのね??」

「まあそう言うことになるな」

不穏な空気を鈴が打ち消し、話を本題に戻した

『』『空間の揺らぎを確認、来るぞ!!』『』

白、カナ、Leonが同時に警告する、直後に目の前の空間が揺らぎ、真黒な甲龍を纏った鈴が現れる

「あれが・・・」

「ああ、名づけるなら【邪悪な鈴】ってところか」

一夏が黒い鈴を見てそう名付ける

「言いづらいから却下、そうね・・・って名づける必要無いわ!!」

鈴が盛大に突っ込む

『一夏に・・・白雪も一緒なの、まあいいわ、まとめて片づけてあげる』

裏鈴は双天牙月を展開して構える

「白雪!!」

「わかってるわ!!」

一夏と白雪もそれぞれ展開する

「二人とも、マント・・・」

鈴が甲龍を展開しながら二人をみてそう言う

「これがパッケージみたいだ」

「能力は違うみたいだけどね」

白雪のマントはピンク色だった



「白雪、俺が暴風の刃で動きを止めるから」

「私が仕留める」

「ちょっと!! あたしは!?!」

「下がってて」

「酷い!!」

一方的に一夏と白雪が決めてしまい、ふてくされる鈴

『言っておくけど、あたしはあたしじゃないと倒せないわよ』

「冗談!!」

裏鈴に突っ込む一夏

『一夏、しょっぱなから全力で行くわよ!!』

「おう!! 最初からクライマックスだぜ!!」

「どここのモモタロスだお前は!!!!」

二人に突っ込まれながら一夏は多段瞬時超加速で裏鈴の周囲に風を巻き起こす

「これが俺の力【暴風の刃】だ!!」

『ふうん・・・はあああつ!!!!!!』

裏鈴が双天牙月を振り回す、一夏は周囲を回っていたために直撃を受ける

「がああつ!!」

「一夏!! ターゲット、ロック!! 紅蓮月花!!」

白雪がいつの間にか展開していた大型ライフル【炉心融解】メルトダウンの銃口

を裏鈴に向け、引き金を絞る

銃口から真紅のレーザーが放たれ、裏鈴に直撃し、辺りを煙が覆う

【油断しないで白雪、ほとんど効いてないよ】

カナが忠告する、直後に裏鈴の周りの煙が晴れ、ほぼ無傷の裏鈴が現れる

『こんなもんなの?? 白雪』

「くっ・・・」

一夏が雪片・雪風を構える

『だからあたしはあたしじゃないと倒せないって言ってるでしょ』

「あたしが・・・倒す!!」

「「鈴!」?」

今まで下がっていた鈴が銀を展開、弾丸のように飛び出し、裏鈴と切り結ぶ

「わかったわ・・・あたしは!! 楓を信じる!! 一夏も、皆も、どんな時でも信じ続ける!!」

鈴がそう叫んだ直後、

【レギンレイヴ、起動。<sup>テーマ</sup>意思、信じ抜く力】

Leonがそう告げ、甲龍が輝く

「起動したか・・・」

一夏が呟く

『ようやくね・・・さあ、仕切り直しと行きましょう!!』

裏鈴が鈴に向かって高速で飛び込む

「Leon!!」

【わかってらあ!! 黒龍!!】

Leonが武装の名前を叫ぶ、すると

「キィン」

甲高い機械音の後、鈴の漆黒のマントが左手に収束していく

それは一つの剣の形を取り、鈴の左手には漆黒の剣が握られる

「これが・・・あたしの力・・・」

『そう、それがあんたの思いよ』

裏鈴は鈴に斬りかかる

「くっ!!」

黒龍で受け止める鈴、黒龍が輝く

【なんて名づけるか・・・これでいいか!! <sup>フラッシュ・グレイス</sup>『黒の閃光』!!】

Leonがそう言った瞬間、黒龍の先端に黒いエネルギーが収束し、放たれた

「何でこっちに!」?

しかし、一夏のほうに

「ドオオオオン」

「一夏!？」

白雪が駆けよる、一夏はぎりぎり梓雪で防いでいた

「あぶねえな鈴!！」

「わかるわけないでしょ!！あたしもびっくりしたわよ!！」

裏鈴とつばぜり合いを繰り返しながら鈴が一夏に言う

『はあっ!!!!』

裏鈴が双天牙月を振る、吹き飛ばされる鈴

【標準を合わせろ、俺がサポートする】

「了解、一夏、白雪!！アイツの動きを止めて!！」

「「わかった!!!」」

一夏が永遠の旋風で裏鈴の周りを音速で駆ける

『それはもう効かないわ!！』

「どうか!！」

一夏は只回るだけでなく、距離を近づけたり離したり、ジグザグに走っている。つまり、多段瞬時超加速ではなく、多段超加速を使用しているため、裏鈴の攻撃は当たらず、動くこともままならない

「鈴!！」

「わかってるわよ!!!Leon!！」

【黒い閃光、発射!！】

黒龍から放たれる黒いエネルギーが裏鈴を襲う

『ようやくね・・・がんばなさいよ』

最後にそう言い残し、裏鈴は黒いレーザーに飲み込まれた

「終わったのか・・・」

一夏が白式を解除する

「そうみたいね」

鈴も甲龍を解除する

【時空の歪みを確認、次はだれの所かしら?？】

カナがそう言うと、辺りの空間がゆがんでいく

「・・・なんかもう慣れたな」

一夏はゆっくりと目を閉じ、意識を手放した

side 一夏

「・・・ちか・・・」

「ん・・・」

良く知った声が聞こえる

「い・・・か・・・いち、か・・・」

誰だったっけ？

「おい・・・おき・・・いち・・・」

確か・・・これは・・・

「起きろって!!!!」

「ごはあっ!!!!」

突如、腹部に衝撃

「いってえ……ん??」

俺は辺りを見回す、しかし誰もいない

「いるわよ!!!!ここに!!!!」

腹のあたりを見ると鈴が突き刺さっていた

「……新しい遊び??」

くぎゆるぎゆるぎゆる!!!!!!

「痛い痛い痛い!!!!!!腹が割ける!!!!」

鈴が高速回転、熱いし痛い

「鈴!!!!何やってんの!!!!」

「一夏!!!!起きたなら加勢してくれ!!!!」

声のしたほうを見ると、箒、シャルが居た

「どういう状態??」

「見てわかんないの??楓と戦ってたのよ!!!!」

鈴の言葉の意味に気付いた時、俺の耳に入ってきたのは一人の男の声

「よう一夏、お目覚めか??」

「楓……??」

そこにいたのは、生身でISと対峙する楓の姿だった

side OUT

一夏が驚愕する

「どうしたよ、俺がいちゃおかしいか??」

「そうじゃなくて・・・」

一夏は楓の足元を見ながら言う

「何で・・・白雪とラウラが倒れてんだよ!!」

楓の足元にはラウラと白雪が力無く横たわっている

「なんでって、そりゃあ・・・」

動揺する一夏に楓が告げる

「俺がやったからに決まってるだろう」

「・・・!!」

その時、一夏の中で何かが切れた

「おおおおおおお!!!!!!!!!!」

ハイ・イグニッション・ドライフ

瞬時に雪風を展開、多段超加速で楓の周りを駆けながらあらゆる方向から斬撃を浴びせる

「それが、お前の意思か」

「ああ・・・守るためのな!!」

楓は一夏の攻撃をすべて喰らっているが目立ったダメージは無い

「こんなもんかよ、なら」

楓が何かを呟く、すると楓の周りに

「行って来い、勝ったほうが本物だ」

「何でまた俺が居るんだ!!」

「決まってるだろ、俺が出したからだよ、お前らを強くするために」

楓がしれっと言ったのける

「強く・・・するため?」

「そうだ、オメガは正直俺を除けば今勝てるはずの無い相手だ、だから俺はお前らに渡したんだ、オメガに対抗しうる力を」

楓は通常の蒼い目に戻り、続ける

「しかしお前らはまだ甘い、だから俺が出てきたんだよ、お前らを、オメガに勝てるほどに強くするために」

楓は笑う、無邪気な笑みではなく、凄惨な笑みを浮かべる

「だからって……ここまでする必要はないだろう!!」

「カメリアの掟、第三、仲間を傷つけたものを絶対に許すな」

楓が不意に低い声で言う、その眼に光は無く、一切の感情を遮断しているようにも見える

「これでお前たちは俺を本気で殺れるだろう?」

「楓……お前、何でそんなに戦おうとしてるんだよ……」

一夏が若干眼に涙をためながら続ける

「そんなに辛いんなら戦わなきゃいいだろ!!何で……」

「一夏、俺は……」

「そんなに……泣いちゃう位辛いんなら戦わなきゃいいだろうが!!」

楓は言われてから気付く。自分の頬を、涙が伝っていることに

『楓、もういいんじゃない??』

椿姫が楓の肩に現れる

「……一夏……お前は、仲間を守り抜くって言ったよな……なら。」

楓はそこで区切り、思いを吐き出すように言葉を紡ぐ

「俺も……守ってくれるのか??」

「……あたりまえだろ、仲間なんだから」

一夏はそう言ってほほ笑む

【白式、再起動】  
リスタート

【紅椿、再起動】  
リスタート

【甲龍、再起動】  
リスタート

【雛菊、再起動】  
リスタート

【シュヴァルツェア・レーゲン、再起動】  
リスタート

【白騎士・零、再起動】  
リスタート

【薔薇月、再起動】  
リスタート

【ブルー・ティアーズ、再起動】  
リスタート

【月桂樹、再起動】  
リスタート

【椿姫、再起動】

リスタート

直後、ほぼ同時にすべてのISが強制解除され、光に包まれる  
「どういうことだ!？」

「・・・一夏、お前は言った、俺を・・・神を守ると。だから、俺は力を与える。オメガに対抗しうる力を、一度だけ」

楓は眼を瞑り、開く

そこには、両目が蒼くなつた楓が居た

「今の俺は一切の神力を使えない、ただの人間だ。しかし・・・」

楓は大きく深呼吸してから改めて話す

「今の俺を含め、お前たちなら勝てる、オメガに・・・災厄の化身に」

楓はゆっくりと全員の顔を見ながらそう言う

『あたりまえだ(ですわ)!!』

全員、笑いながら楓にそう告げた

『待て待て、何か忘れておらんか??』

不意に、老人の声

「おっさん!! どうしてここに!？」

楓が過剰に反応する

『まあそう身構えるな。わしからもプレゼントじゃ』

ゼウスがそう言うのと、すべてのISのエネルギーが回復した

「おお・・・気が効くじゃねえかおっさん!!」

『ロー・・・楓よ、帰ったらちゃんと修正するのじゃぞ』

「わーってるよ!!」

姿の見えない老人と言ひ合う楓の姿は、じつにシュールだった

「・・・すまん。いいか、オメガは連携しないと勝てない。だから白雪、お前の母なる意思<sup>マザー・ブレイズ</sup>を使用する、具体的な指示は千冬さん、お願いします」

「わかった」

千冬がうなづく

「基本的に一夏と俺、千冬さんが前衛<sup>フロント</sup>、セシル、カエデ、ラウラの



三人で後衛を頼む。シャル、鈴、箒は中距離からのバックアップと白雪の援護をしてくれ」

『了解（です）』

楓はもう一度皆の顔を見回し、最初で最後の指令を下す

「最後に一つ。……ありきたりで悪いが、死ぬな、絶対にだ」

『応！！！』

【白式・絶。再構築完了】

【紅椿・極。再構築完了】

【雛菊・乱。再構築完了】

【甲龍・彩。再構築完了】

【月桂樹・麗。再構築完了】

【白騎士・零式。再構築完了】

【薔薇月・閃。再構築完了】

【シュヴァルツェア・レーゲン・エクスフィア。再構築完了】

【ブルー・ティアーズ・クライシス。再構築完了】

【椿姫・蒼。再構築完了】

同時に、全ISの再構築が終わった

「基本的には変わらないがスペックがかなり上がっている、母なる意思に対応もしてるからいつでも連携ができる」  
マザー・ブレイン

「何だこれ……異常じゃねえか」

一夏が呟く。他の者も驚いている。それほどまでにスペックが上昇しているのだ

「言っておくが今回しか発動しない、オメガが消えたらそれも元に戻る。つまりあれだ、ちょっとしたドーピングみたいなものだ」

楓が念を押す

「それでも勝てるかは分からない、全力で行くぞ、慢心するな」

「わかってる」

一夏が皆の返事を代弁する

「行くぞ、オメガはこの部屋にいる」

楓を先頭に、一夏達は歩く

オメガのいる場所へ、決着をつけに

## 13話

### 絶望の柩【デイスパイア・コフィン】（後書き）

まさかの裏切りからのコンボが出ましたね  
相変わらずの文才の無さ・・・Orz

まあできる限り頑張ってみたいと思います  
感想など、是非お願いします

新しい武器などのアイデアでもかまいません

**14話**

**決着（前書き）**

決着編です

「オメガ!!」

楓たちはドアを開け、オメガを呼ぶ

『やっと来たか』

オメガは楓の体に乗っ取ったときの様に黒い霧となって楓たちを迎える

「オメガ、とりあえず一言。消してやるよ」

楓は両目が赤紫になり、辺りに風が吹き荒れる

『その姿は・・・』

「楓!？」

一夏達はとっさに楓から離れる

「正解だ、一夏」

楓はそれだけ言って右手をピストルの形にし、それをオメガに向けてる。指の周りには風が吹き荒れている

「放て、超電磁砲<sup>レールガン</sup>」

楓がそう言った瞬間、指にまとっていた風が弾丸の様に射出されてオメガを貫き、霧散させた

「一撃って・・・」

「俺たちの出番なしかよ・・・」

鈴と一夏が半分呆れたように呟いている

「・・・ちっ」

不意に、カエデが舌打ちして薔薇月・閃を起動する

「楓、まだまだね」

そして『蒼き旋律<sup>マリン・プロト</sup>』を展開、楓に後ろから襲いかかる

「!?!」

突然の事だったので全員一歩も動くことができなかった

「冗談、あんな抜け殻で俺が気づかないとでも??」

楓を除いては

楓は刀身が蒼く光る日本刀『蒼月』を瞬時に展開し、二刀を受け止めていた

「ふん・・・気付いたうえで気付かないふりをしていたとはな・・・」

カエデ、もといオメガが腕に力を込める

「ぐっ・・・おお!!」

楓は真っ向から力でオメガを跳ね飛ばした

「どういうことだ楓!! 何でカエデが・・・」

「俺も予想外だったな・・・まさか、入れ替わってるとは」

楓が苦々しく呟く、同時に他の皆は安堵のため息をつく

「ふふふ・・・」

カエデは不気味に笑う、右手のスカーレット・コンバイン緋色の痛みを楓に向けながら

「・・・畜生が」

楓は風を周囲に纏わせようとするが、一瞬早くスカーレット緋色の引き金を引いた。数十の弾丸が楓を貫く

『楓(さん)!!』

楓は体中から血を流し、既に目から光が消えかかっている

「く・・・」

「残念、いくら人外の者といえどISの前では等しく無力なのよ・・・今はな。はっはっは!!!!」

カエデが高笑いする、その隙に全員にチャンネルを開く楓

『白雪、母なる意思を起動させろ、マザー・ブレイン絶望の柢だ』  
デイスパイア・コフィン

『絶望の柢!? でもあれは・・・』

一夏が驚いたように返す

『俺の事は気にするな。それと一つ、もうわかってると思うがあれはカエデじゃないから遠慮はいらない、思いつきりやれ』

それだけ言うと楓はチャンネルを切り、白雪の合図を待つ

「・・・母なる意思」

白雪がボソツと言った直後、カエデを中心とするように散等間隔にちらばる一夏たち

「お前はここで眠る！！この・・・絶望の柩で！！」  
デイスバイア・コフィン

絶望の柩は対象を中心にそれぞれが等間隔に広がり、相手に回避の隙を与えない連続波状攻撃をくりだすフォーメーションである

「これは・・・」

「これが、俺たち人間の力だ」

楓が言った瞬間、大きな一つのうねりの様に波状攻撃を叩きこむ一夏が突撃しながら雪片・雪風を振るい、離脱と同時にセシリアがBT？で狙撃、オメガがひるんだ隙に箒が雨月の斬撃波を飛ばして切りつけ、シャルがパイルバンカーを炸裂させる。箒、シャルが離脱してラウラがPICでオメガの動きを止め、千冬が雪片零型で連続切りを浴びせる、最後に全員離れる。離れた所には楓がレイン・アブソリュート改の発射態勢に入っていた

「決める・・・蒼天の輝き！！！」

楓がそう言うのと全員がそれぞれ銃を展開、楓に合わせる

『レイン・フルバースト！！！！』

直後、すさまじい量の銃弾やレーザーの嵐がオメガを襲った

「碎け散れ」

楓がそう締める

「・・・やったのか・・・？？」

全員のISが解除され、ISスーツだけになる

「さすがに無理させすぎたか・・・！！」

楓の顔が陰しくなる、一夏が楓の視線を追って・・・戦慄した

「まったく・・・やってくれる」

もうもうと立ち込める煙の中から現れたのは、無傷のオメガだった

「うそ・・・」

鈴が膝をつく。もともと楓との連戦だ、疲労は限界だったようで、次々と座り込んでいく

「あれだけの・・・攻撃で」

シャルが震えだす。はじめてみる圧倒的な存在。現代最強の攻撃力を持つ機体の、さらに最高威力の攻撃、それを喰らって、無傷でい

る存在

全員の心は、もう折れかかっていた  
ある二人を除いては

「諦めてどうするんだよ・・・」

一夏が立ちあがる

「諦めたら・・・そこで終わるだろうが!!」

一夏は震える足を地面に叩きつけ、震えを抑える

「そうだよなあ・・・俺たちが諦めちまったら終わるもんなあ」

楓が立ち上がり、刀身が真っ黒の大太刀「椿」を取りだす

「俺らがやんねえと・・・守らねえと!!」

楓はオメガに向かって走る、そのスピードは高速を超えており、傍  
目には黒い風と表現できる

「はああっ!!」

上段から叩きつける、オメガは何と言うこともなさそうにそれを受  
け止める

「おい、椿姫・・・いつまで寝てるつもりだよ」

オメガと戦闘を繰り広げながら、楓は相棒を呼ぶ

「お前たちはそんなもんじゃないだろう。起きろよ!!」

横薙ぎ、突き、斬り払い。全て躲される

「見せてみるよ!! おまえたちの本当の力を!! 無限の先を歩む者  
インフィニット・ストラトス

!! 椿姫  
幻想の騎士!!

楓が叫ぶ、すると

【椿姫、フルパワーモード、新しいアビリティを発見】

聞き慣れない機械音声、そのあとに、楓の体は虹色の粒子に包まれる

『見せてみる・・・お前の力を』

虹色の粒子が晴れたとき、そこにいたのは

「楓・・・」

「あれは・・・」

「椿姫・・・なの?」

一夏、鈴、白雪が思わず呟く



『始めようか、椿姫・・・月花』

漆黒に輝く椿姫を纏った楓だった

「ほお・・・こいつあすげえ」

楓が驚嘆する、すると、楓の肩にフクロウが現れた

【お主が呼んだのか？ 我を】

「おう、俺が呼んだ。それにしてもフクロウとはな」

【我の名は月花。椿姫最後にして最強のモードだ】

フクロウ・・・月花はそう言って、おそらくは誇るようにのけぞった

「そっか・・・じゃあ」

「【とっとと終わらせよう!!】」

楓と月花は同時に行ってオメガに突撃する

「面白い!! 来い!!」

「うおらああああああ!!」

楓はエターニャ・紅月と黒姫を展開し、交差するように振るう

「はああ!!」

「フン!!」

瞬時に展開していた蒼い旋律<sup>マリン・プロット</sup>で防ぎ、弾いてお返しとばかりに交差

させた旋律で楓の首を狙う

「そらそらそらあ!!」

「はああああ!!」

切り結び、斬り裂き、削る。お互い防御をせずに斬りあっていく

「あれって・・・」

「もう一対一だな」

シャルとラウラはそう言って呆れる。もはや二人には戦う力が無い、

唯一戦えるであろう一夏は

「・・・・・・・・」

「一夏!! 一夏!!」

気絶して箒に介抱されていた。理由は簡単、箒が倒れた一夏を介抱すると言いながら殴りまくる⇒一夏起きる⇒箒気付かず殴り続ける⇒一夏気絶。というループが起きていたからである

「・・・どうするよ??」

「・・・とりあえず邪魔にならないように結界張るか」

その様子を見ていた楓とオメガは戦闘を中断、自分たちと一夏達の間に結界を張った

「楓!! 何で「やかましいんじゃコラア!!」・・・」

鈴が楓を問い詰めようとしたらオメガが切れた

「なあ、一つ聞いていいか??」

「何だ、降参か??」

「なわけねえだろうが。お前・・・オメガじゃないだろ??」

楓はすでにISを解除しており、漆黒の着物を纏っている

「・・・ばれたか」

オメガ・・・カエデは舌を出してISを解除する

「絶望の枢の時点でオメガは消された、そうだろ??」

「うん、でもオメガの残志は残ってた。今まで主導権を取れなかったんだけど・・・今ようやく主導権と意識の消去が終わったの」

楓は結界を消し、一夏達のほうへ行く、そこには

「一夏!!」

「アンタいつまで殴ってんのよ!! 死んじゃうわよ!??」

「箒!! もうやめて!!」

まだ続いていた

「何をしトンのじゃお前らは」

楓は風で一夏を救出し、風を利用して一夏を立ち上がらせる

「終わった・・・のか??」

「ああ、勝ったんだよ」

一夏が目を覚まし、楓に問うてくる

「そっか・・・」

また気絶してしまう一夏を背負い、楓は出口に歩きだす

「帰ろうぜ、旅館に」

楓に続いてぞろぞろと城から出ていく千冬たち

旅館に着いた時には城は跡形もなく消え去っていた

「イヤー疲れたなあ」

「全くだ」

時は夜、食事を終えた一夏と楓は隠れ家でくつろぎタイムを楽しんでいた

あの後旅館に戻り、全員検査を受けたのだが、幸いにも重症のものはなく、食事と入浴をして解散となったのだ

「明後日でおしまいなあ・・・残念な気もするなあ」

「夏休みに来ればいいさ、どうせおれたちの旅館だし」

忘れがちだが旅館は楓の会社のものであるため、金銭面の心配がない

「今日はゆっくりして明日泳ぐとするか・・・ん」

楓の目の前にちっちゃい千冬が現れる（イメージとしてはバカテスの召喚獣）

「どうしたんだ?? 楓」

「さあ・・・どうしたんですか先生」

『朱雀、織斑。今スグそこから逃げろ』

「どゆこと??」

『篠ノ之達にばれた』

「一夏!!!」

「おう!!!」

即座に外に出る二人、そこには・・・

「へえ・・・こんなところにいたとはねえ・・・」

「一夏・・・?? どうして私たちに見つからないようにしてたのかなあ??」

黒シャル、起動

「一夏・・・」

「これは・・・」

「「逃げる!!!」」

即座に椿姫と白式を起動、極超音速で―多段瞬時極超加速《マルチ・マキシム・イグニツション・ブースト》で逃げる

『逃がすかあ!!!!!!』

戦乙女もISを展開して追っていく

束の話によると、その日の夜は先を往く白と銀、それを追ういくつ

ものの軌跡が夜明けまで見えていたらしい

翌日

「逃げ切ったは良いが・・・」

「逆に追い詰められたな」

昨日は逃げ切れたものの、今日は朝に集会の様な物がある。つまり

「俺たちは死んだようなものだ・・・」

同時にうなだれる二人。楓がハッと顔を上げる

「アイツを使えば・・・」

楓は空中にコンソールを呼び出し、キーボードを超高速で叩いて行く

「これを・・・こうして」

「何だ?? どうした??」

「ダミーを創ってるんだ」

「さすが友よ!!」

それ以外に会話をせず、楓は着々とダミーを作成していく

そして数分後・・・

「できた!!」

「全く同じじゃねえか!!」

「おお!! 一夏!!」

「何だ!? 俺が二人いるぞ!?」

上から

楓（オリジナル）

一夏（オリジナル）

楓（ダミー）

一夏（ダミー）

の順で発言後、楓（オリジナル）がダミーに作戦を教える  
「わかったか??」

『了解』

「行け!!」

『おう!!』

ダミーたちは走っていく

「これで・・・良かったんだよな」

「ああ・・・ほとぼりが冷めるまで釣りでもしていよう」

楓たちは釣り道具を用意して岩場に向かった

同時刻

「まったく・・・結局逃がしちゃったじゃない・・・」

鈴が呟く

「でも集会があるから否が応でも来るでしょ」

シャルが黒いオーラを発しながら言うので、少し下がる箒たち  
「まあ・・・来たら狩るけどね」

「ですね」

カエデと白雪が不穏な事を言っている

「白雪。父さんをか??それとも一夏??」

「どっちもよ」

「・・・」

白雪の気迫に押し黙るラウラ

「なんだか知らねえけど不穏だな・・・」

「なんかあったのか??」

ここで一夏と楓(ダミー)登場

「一夏・・・楓・・・」

くジャキン!!く

瞬きの後には、一夏は箒、シャル、セシリアに。楓は鈴、白雪、カエデ、ラウラに武器を向けられていた

「・・・へ??」

『天誅!!!!!!!!!!』

「「ちょ・・・ぎゃあああああつあああ!!!!!!!!!!」」

ダミーとはいえ、あまり見たくない光景だった



「「あああああああ………」」

「あ、かった」

ダミーの悲鳴に気付かず、竿を上げる楓

「おお、大物だな」

「食うか」

「いや食えないだろ」

楓が釣り上げたのはホホジロザメ。どうして釣れたのかは考えちゃいけない

「……つと、こっちもきた」

一夏も竿を上げる、そこには

「……うさみみ」

「一夏、動くなよ」

くひゅぱっ!!！く

楓が蒼月を一閃、ウサ耳だけを正確に切り裂いた

「同じネタを使うな」

「束さん……」

切れたウサ耳を放り投げて釣りに戻る一夏、すると楓が

「焼けたぞ一夏、ポワレにした」

「どこにそんな設備があるんだよ!？」

いくら楓でもやりすぎ感が否めないが、腹は減っているので受け取り食べる一夏

「……うまい」

「そりゃよかった、まだ腕は衰えていないようだな」

「何かやってたのか?？」

楓の言葉に何かが引かかったのか、一夏が聞く

「昔我がままな姫様のところで執事をちよつとな。基本的に全部料理出来るぞ」

此処まで来てさらに設定を増やす楓、もはやキャラがわからない

「ふうん・・・ならセシリ」「セシルに料理は教えないとまずい。帰ったら一から教えるさ」そ・・・そうか」

話をしながら食べ続ける一夏、その肩にミニ千冬が現れる

『貴様ら、どこにいる』

「そこにいません?？」

『お前らのダミーは先ほど専用機持ちに破壊されたぞ』

ミニ千冬はやれやれといった様子で首を振る

「何だ?!? あれはやりすぎてくらい堅くしておいたのに!!」

楓はそのことを予想していたので異常なまでに防御面を高めておいたのだ

『一撃で木っ端みじんだったぞ』

「異常だ・・・」

うなだれる楓

『とりあえずそこにいていい。殺されてはしまいだからな』

ミニ千冬はそう言って一夏の肩から飛び降りる

『集会の内容はそこにいるミニの私を通じて聞け』

ミニ千冬はそう言ってクーラーボックスに腰かける

「こいつあつれえ・・・」

「後が怖い・・・」

二人ともげんなり、そこに飛来する一つの影

『いっくうくん!!!! かーくうくん!!!!!!』

正確には、デフォルメニンジンだ

「一夏!!!!」

「おう!!!!」

「「デルタ・クライス!!!!」」

瞬時に楓は蒼月、一夏は紅羽を楓から受け取り、同時にデルタを繰り出す

共同で繰り出すデルタ、二つ重なってニンジンにぶつかり、大爆発を起こした

「危機は去った・・・」

「危なかった・・・」

「ところがどっこい!!!」

『何ィ!?』

撃墜したニンジンはダミーで本体は普通にボートで来たらしい

「やあやあ二人とも、ご機嫌いかがかな??」

「最悪だよ」

「そこそこです」

露骨に嫌な表情をする楓と普通に答える一夏

「なるほどなるほど・・・そうだ!! かーくんにつくくん、IS見せてよ!!」

束は楓と一夏の反応を見るが早いか、楓の首輪椿姫と一夏の腕輪白式にコードをブツ差した

『せめて俺たちの答えを聞いてからにしろよ!!!』

何かと突っ込みがハモる二人

「ふむふむ・・・梓雪はこういうことだったのか・・・」

突っ込みすら無視して解析する束、

「紅桜花・・・これはチートだね」

「そんなでもないっしょ。スピードだって一夏と互角位だし」

「そもそもがチートだって言ってるの」

束が珍しくおちゃらけた口調ではないことに気付き、真剣な表情になる楓

「今気付いたんだけど・・・これ敵なしじゃない??」

「確かに。本気なら一瞬で塵になるしな」

「塵って・・・」

うなだれる一夏、しかし時は戻ったりしない。魔改造は治らないのだ

「まあ・・・基本的に月花しか使えなくなったから・・・椿姫たちはいるだけになっちゃったな」

楓はコンソールを呼び出して呟く

「それって・・・」

「ああ氣にするな、椿姫たちの特性は全て月花が引き継いでるから・・・いちいち形態変化する必要がなくなったからラッキーかな」

「何というチート・・・」

一夏はコードがブツ差さってなんだかりードに繋がれているみたいになっている楓を見てため息をつく

「そう言えば一夏、白式は戻ったろ??」

「あ、ああ。絶が無くなってる」

「そりゃあそうさ、俺の力を一時的に分けたようなもんだからな。箒たちのも無くなってるぞ」

正直なところあまり意味が無いような気がしないでもないがそれは氣にしない

『一夏、朱雀。逃げろ』

『またかよ!!』

そう言ってISを展開、見つかる前に逃げる

「いたわよ!!白雪!!」

「うん!!<sup>マザー・ブレイン</sup>母なる意思発動!!」

『マジかよ・・・チートかつの!!』

シンクロ突っ込みを披露しながら逃げる二人、しかし一つになった箒たちには勝てるはずもなく、一夏は箒、セシリア、シャルに連れられて行ってしまう

一方楓は・・・

「どうして逃げたのか、教えてくれるかしら??」

阿修羅に囲まれていた

「えーっと・・・なんと申しますか・・・」

まちがっても怖かったとは言えない。言ったら殺られる

「まあいいや。楓、婚約は破棄よ」

「は??」

本気でわからない楓、鈴が呆れながら

「だから、不公平だからイーブンにしようって言ってんの」

「ほうほう、何で??」

くスパアァン!!」

楓が言った瞬間、カエデに叩かれる

「まだわからないの?? ここにいる皆で楓を手に入れるために競うのよ」

カエデが言う、白雪たちは「あわわわわ・・・」慌てている

「何で俺が景品なんだよ。そう言うのは一夏に任せときゃいいだろ」  
結論、楓は一夏並みの唐変朴でした

『・・・』

「わかった!! わかりましたからレイプ目で武器構えないで!! マジで怖いから!!」

身の危険を察知した楓が肯定する

「・・・よし」

鈴達は武器を降ろす

「・・・で俺は何をすれば??」

「普通にしてればいいのよ」

カエデが答える

「はい・・・」

成す術が無さそうなので降参する楓

「聞き分けがいいわね」

「まだ死にたくないしな」

楓は軽く諦める、これからどうなろうと知ったこっちゃないと

「じゃあ、行きましょうか」

「どこに行く気だよ」

楓が若干冷や汗を浮かべつつ聞くと鈴達はそろって

『海!!』

「・・・さいですか」

これから起きることを予想できず、楓はため息をついた

「海・・・か」

楓が落ち着いた風にそう言っているが内心では  
（何をされるんだ・・・鮫と一対一か!？）  
とんでもないことを想像していた、が

「泳ぐわよ」

「ハイ?？」

「泳ぐの、楓も」

鈴と白雪に言われて、しぶしぶ水着に着替える

「お前らはどこで着替えるんだよ」

椿姫に変換しておいたので一瞬で着替えて聞く楓

「あんたと一緒に・・・って着替えるの早!!」

「そりゃ変換してたからな」

楓はそう言って海に入っていく

「すぐ着替えてくるから待ってなさいよ!!」

鈴達はそう言い残して高速で更衣室に走っていく

「来るまでの時間ゆっくりしますかな・・・ん??」

楓の目には誰かの手が見えた。

「溺れてるんじゃないか!? 椿姫!!」

『間違いない、溺れているぞ』

月花が答える

「ったく!!」

楓は足に風を凝縮、一気に加速して溺れている少女の所へ着く

「おい!! 大丈夫か!!」

「・・・ん」

楓が肩を揺ると、少女は気がついた

「だれ・・・??」

「お前・・・溺れてたんだぞ?? 大丈夫か??」

「溺れて・・・??」

少女は言われてようやく自分がおぼれたことを思い出したらしい、

ついでに楓に抱かれている事実にも気がついた

「・・・!!」

瞬間で真っ赤になった少女は楓に水をかける

「あ!! おい!! 暴れるなって!! また溺れるぞ!!」

楓は少女のかけてくる海水をガードしながらも少女を離さない

「あ・・・ああ」

不意に海水が止まり、少女が震えだす

「ん??? って・・・鯨???」

楓が振り向くと、巨大なヒレが楓たちに近寄ってきていた

「なめんな・・・よ!!」

楓は足をヒレのほうに向け、風を凝縮する

「くらっとけ!!」

それを今度は弾丸のように発射して鯨に当てる

鯨はかなりの威力で吹き飛ばされ、はるか遠くの海に着水した

「・・・なに・・・今の」

「あれか??? あれは風を凝縮、発射したんだ」

楓は説明するが少女の? マークは消えない

「・・・俺は風を操れるんだよ」

とりあえずアニメっぽく言い直す

「ああ、なるほど」

理解されてしまった

「そういや名前聞いてなかったな、名前は?」

「更識・・・簪。あなたは?」

少女、いや簪は言いづらそうに名乗る

「俺は朱雀楓、よろしくな、簪」

「よ、よろしく・・・」

楓はその後、簪を浜辺まで背負って泳ぎ、それを見つけた鈴達にいろいろ聞かれたりした

そして時は流れ・・・

「みなさうん!! バスに乗ってくださいーい」

校外学習、終了である

「つ・・・疲れた」

「一夏、ドンマイだ」

一夏が前の席で死にかけているのでとりあえず風をそよがせておく楓



「さんきゅ、あゝ涼しい・・・」

「一体何があったんだろうか・・・」

楓はそう言ってゆっくりとなりを見る

「・・・??」

「「??」じゃないだろ。かわいらしく首をかしげても無駄だぞ簪。可愛いけど」

「どう、したの??」

なぜか隣には簪が居る

「お前は4組だろ??ここにいちやいけないんじゃないか??」

「あまり、関係なくなってる」

残念なのか幸運なのか、バスの席は東が勝手に「好きにしちゃっていいよ」と決めてしまったのでクラスとかもう関係ない。ちなみに楓たちは1組だったバスに乗っている

「そう言えばその子は誰なんだ??」

一夏が復活して楓に声をかける

「ああ、この子は更識簪だ。簪、こっちはフラグ建築に定評のある唐変朴、織斑一夏だ」

「酷い言われよう!!」

「織斑・・・白式の」

簪の顔がかける

「そうか、ごめんな、思い出させちゃったな」

「大丈夫、楓の友達なら悪い人じゃない」

「楓、かなり簪に気に入られているみたいだけどどうしたんだ??」

「ああ、溺れてるところを助けて、さらに鯨から守った」

（がつつりフラグ立ててんなぁ・・・）

人の事は言えないはずだが今回は目を瞑ってあげよう

「一夏、今日はお前どうしたんだよ??一度も姿を見なかったけど」

「聞かないでくれ・・・」

一夏は遠い目をしてそう言う

「・・・大変だなお前も」

「ああ」

「あ、簪寝ちゃってる」

いつの間にか簪が楓の肩に頭を預けて寝息を立てていた

「まったく・・・可愛い奴め」

楓は簪の頬を指で押す、そのプニプニ感にはほ笑むと・・・その顔が凍りついた

『・・・・・・・・』

鈴を始め、ラウラ、白雪、カエデがジト目で楓を見ていた

「・・・お前らも来いよ、席あいてるし」

楓の座っている席は一番後ろの右から二番目、その列には楓と簪以外座っていない

『・・・・・・・・』

無言で席を立つ鈴達、ゆっくりと歩いてきて・・・

「取った」

白雪がダッシュ、楓の隣に座る

「ちよっと白雪！！抜け駆けはするいわよ！！」

「良いじゃん、変われば」

白雪は最近物おじしなくなっている

「とりあえず席に着きましょうか」

カエデの一言でしぶしぶ席に座る鈴達

「楓！！頭なでて！！」

「よしよし」

白雪は頭を撫でられて気持ちよさそうに楓に体を預けて寝てしまう

「・・・動けなくなっちゃったな」

「楓！！あたしも・・・」

くぷにくぷ

鈴が大声を上げようとした瞬間、楓は鈴の唇に指を当て、静かに首を振る

「静かに、寝てるんだから」

鈴は顔を真っ赤にしてあうあう言っている。すると今度はラウラが

「父さん、膝を借ります」

そう言って楓の膝に頭を載せ、寝る態勢に入ってしまう

「じゃあ逆は私が」

カエデも逆側に頭を載せる

「・・・何これ、動けないんだけど」

「・・・ドンマイ、楓」

一夏は楓を見て苦笑いした後、前を向く

「一夏・・・お前も大変なんだな」

一夏も同じような状態だった

こうして、福音に始まった一連の事件は終わりを告げる

しかし、彼らはすぐに大きな事件に巻き込まれるようになる

## 14話

### 決着（後書き）

おおっとお！！

文才の無さに磨きがかかる今日この頃です  
次回はちよつと番外編をいれます

感想等、よろしく願います

あとひとつ、新しいキャラを登場させようと思っているのですが  
アイデア等ございましたら是非願います  
性別は、男一人の女一人のつもりです

## 15000PV記念

## カオスハザード（前書き）

という訳で記念です

いつの間にか15000PVという自分の中ではすごい数字が出ていたのを書いてみました

名前のカオスは・・・わかりますよね？？

## 15000PV記念

## カオスハザード

今回は俺こと朱雀楓がお送りする

現在、IS学園には生き残りは12人

俺、一夏、箒、シャル、ラウラ、鈴、白雪、千冬さん、東、カエデ、  
真耶先生、のほほんさんだ

生徒会メンバー（簪も）は所用で出ているらしくいないが残りの者は  
はというと

『ウオオオオオオオオ・・・』

勘のいい人はわかるだろう、ゾンビ化している

「楓、これって・・・」

シャルが聞いてくる

「間違いない。これは・・・」

こうなったのは朝にさかのぼる

「セシル??何してんだ」

俺は調理室でセシルを見つけ、声をかける。俺は今日の昼飯を作りに来たのだ

「あら楓さん。見ての通りお料理ですわ」

「ごめんセシル、俺のレパートリーにハンマーと科学薬品を使った料理は無いんだが・・・」

ちなみに全て言ってしまうと

・クロロホルム

・ノコギリ

・酢酸

・ドリル

・グリセリン

が他に置いてある

「あら???これを作るだけですわよ???」

そう言ってセシルが見せてきたのは・・・

「パスタだど!??」

鮮やかなボンゴレ・ヴィアングが映った料理本だった

「セシル、良く見ろ。レシピのどこに薬物を使用するんだ」

「写真と同じようにすればいいのではなくて?？」

ヤバイ、主に一夏の身がヤバイ

「セシル、俺が教えてやる、とりあえず卵焼きを創るところから始めようか」

「何でですの??」

本気でわからないのかこいつは・・・

「一夏を殺すわけにはいかない。ついでに俺もまだ死にたくない」

そう言ってセシリアの持ってきた凶器を片づけ、料理器具をならべる

「これだけあれば出来るだろう。まずは一人でやって・・・ごめん、ちゃんと教えるわ」

セシルが真っ先に取りだしたのはミキサー。これは下手ってレベルではない

「まずは卵焼き用のフライパンを熱して・・・何で火炎放射器を取りだす!? つーかどこにしまってたんだよ!!」

「それは乙女の秘密ですわ」

「どら〇もんか!!」

とりあえず突っ込んでおいたが意味は俺も良くわかってない

「普通にIHを使え。熱している間に卵を割って混ぜるんだ」

「わかりましたわ」

くチュイイイイイインく

「だから何でドリルが出てくるんだよ!? 穴あける気か!？」

何でだろう、セシルには例え世界一の料理人達が総がかりで教えても失敗する気がする

「普通に箸使って混ぜろ!!」

「わかりましたわ」

少しずつだけど上達したかな?？」

「ふう・・・良い感じに混ぜ終わったら甘くするために砂糖を入れるんだ。ダシを入れるのもありだぞ」

「じゃあ・・・これを」

ごめん、前言撤回



「何で?? 何でクロロ酢酸!??」

「甘くなるかなと」

「死ぬわ!!」

それからずっとセシルの奇行に突っ込み、修正し、気付けば・・・

「出来た・・・」

「出来ましたわ・・・」

俺たちの目の前にあるのは上手に焼けた卵焼き

「見た目は合格だ・・・次は味なんだが・・・」

俺は無言である男を呼び出す

「やあやあ!! どうしたんだい??」

「カオス、いきなりで悪いがこれ食べてみてくれ」

俺が呼んだのはへんた・・・カオス

「ではさっそく・・・もぐもぐ・・・」

一つはおぼるカオス、かたずをのんで見守るセシル、お味は一体!?

「・・・ぐふっ」

やっぱり駄目だったか。そう思いながら一口に運ぶ

「ん?? 美味しいじゃねえか、何で」

くじやりっく

「!??」

慌てて吐き出す、卵焼きに入っていたのは・・・

「銀・・・だと?」

「見た目的に良いかなと思ってまして」

「何で料理に鉱石入れるかなあ!??」

おそらくカオスは銀でやられたんだろう、あいつは吸血鬼に近いかな

「銀以外は普通にうまいぞ」

「なら良かったですわ」

その後、俺はセシルと弁当を作り、時間ぎりぎりで教室に飛び込んだ

そして昼

「楓、飯食おうぜ」

「おお一夏じゃないか、良いぞ、俺は弁当だな」

一夏のために隣の席を即席ランチテーブルに変形させ、向かい合うように座る

「弁当って・・・作ったのか!？」

「あたりまえだろうが。食うか??」

そう言って一夏の口に唐揚げを放り込む

「んぐんぐ・・・おお」

一夏の目が輝く、唐揚げは自信作だ

「どうだ、美味いだろう」

「ああ、箸に勝るとも劣らない」

ほう、俺と互角の料理の腕とは、やるな箸

「・・・で、これがセシルの作った卵焼きだ」

一夏、石化

「そこまで嫌か。心配するな、俺がちゃんと教えた奴だから」

「それなら安心だ」

箸を取って食べようとする一夏、その卵焼きを・・・

「はぐっ」

生徒Aが横から食べてしまった

『・・・え?』

「・・・ん、おいしー。これ朱雀君が作ったの??」

「いや、セシルだ」

「・・・」

生徒Aは硬直した。しかし様子がおかしい

「待て、硬直じゃないぞコレ・・・」

「・・・ウウ」

生徒Aが唸る、同時に俺と一夏はとある現象を思いつく

『バイオ・・・ハザード』

「ウアアアアア!!!!!!」

まさかのバイオだった

「どういふことだ楓!! あれ食ってたら俺あなつてたよなあ!!」  
「騒ぐな!! 走れ!!」

現在俺と一夏は廊下を全力疾走している、というのも

『ウアアア……』

「増えすぎだろ!!」

某黙示録みたいに咬まれると即終了という状態らしく、既にクラス  
の皆がゾンビ化している

「いくらなんでもこりゃあまずいぞ!! 一夏!! 脱出するぞ!!」

「脱出って……何処に!？」

「とりあえず外だ!!」

俺は一夏に言いながら全員のチャネルを同時に開く

『生きている者に次ぐ!! 今すぐ食堂に来い!! 理由は後で話す!  
!』

それだけ言って通信を切り、両手にある武器を展開する

「楓!! それって」

「安心しろ、高圧電流を発生させる弾だ」

「十分あぶねえぞ!？」

武器、二丁のハンドガンを展開し、正確に頭を狙っていく

「はっはあ!!!!」

リアルバイオ、やっべ楽しいわ

「楓! ……危な!!」

一夏の横の部屋から飛び出してくる二つの影、反射的に銃口を向け  
て、良く見ると……

「鈴にシャルじゃないか」

「どうなってるのよコレ!!」

「何でゾンビ化してるの??」

鈴とシャルは俺たちの後に着いて走ってくる

「話は後だ!! 食堂に急ぐぞ!!」

俺たちは食堂へ向かって一直線に、近づいてくるゾンビ共は全てヘッドショットで無力化し、たどり着いた先は……

『どうして開かない!?!』

ドアが嚴重に閉められていたのだ

「誰かが先に入って閉めちゃったんだ!!」

後ろにはひしめくようにゾンビが居る、もう引き返せない

「一夏、俺が血路を開く、その隙に逃げろ」

俺は武器を仕舞い、風を纏う

「そんなことしたらお前は……」

「気にするな、俺は死なない、後で追い付くさ」

あ、死亡フラグ立ててしまった

「そっか……わかった」

俺は一夏達の前に立ち、風を収束させる

「喰らえ!!」

そして風を一気に前方へと放出する

「今だ!!!!……てええ!!?」

一夏達は食堂の中に入っていた

死亡フラグではなかったが尊い犠牲となった者がちらほら

食堂に入ると鍵をしめたであろう先客が俺たちを待っていた

「やはり生き残ってたか」

メンドイのでいたメンバーだけ報告

千冬さん、真耶先生、束、ラウラ、白雪、カエデ、箒、のほほんさん。

正直どうしてのほほんさんが生き残っているのか不思議でしょうがない

「・・・で?」

「つまり、これはバイオハザードです」

「そんなことはわかってる」

きつついな千冬さんや

「どうしてこうなった?」

「セシルの料理が原因と思われます」

というか、間違いなく

「・・・解決方法はあるのか?」

現在、食堂にて作戦会議中

「今のところは何とも・・・というかこのメンバーなら皆殺しもできなくはないんですけどゆんうえ」

話の途中で白雪の頭が脇腹に突き刺さった

「何すんの!」

「怖いんだもん」

涙目&上目づかい

「くっ……」

頭をなでる

『……』

イタイイタイ痛い、主に視線が痛い。とくに鈴とカエデとラウラの「とはいえIS学園の生徒ですから・あまり手荒なまねはしたくないんですよ」

「さっきハンドガンでバカスカ撃ってたのはどこの誰だったっけ？」

俺です。

一夏、お前後で俺の相手になれ、地獄を味あわせてやるよ

「とにかくだ、ちょうどよくここにへんた……天災が居るわけですから、ちよっくら解析しますか」

「言い直してゐるんだろうけど悪意が消えてないよ??」

束が突っ込んでくるがキニシナイ

「とりあえず一匹捕まえてきましょう」

そういつて外に出、手近な奴を風で捕獲する

「ってこいつ同じクラスの相原清香じゃねえか」

そいつは原作で一夏にお姫様だっこ（ry

ウインド・プリズン

「風の檻」

風を使用して拘束する風の檻で捕獲、ついでに口の中に風の塊を入れて閉じれないようにする

「それにしても……多すぎるよね」

俺の目の前には多分残りのゾンビが集結しているとみて良い数の頭がひしめいている

「これ吹き飛ばしてえな……っと、危ない危ない、戻るところだった」

首を切り飛ばしたいのをぐっところえ、バリケードを突破、帰還した

「ううむ・・・これは・・・」

束が唸っている

「どうよ?? なんか進展あり??」

俺達は捕獲してきた奴の解析をしているため、暇なのだ

「ううん、体組織に異常は見えなかった」

「うっそ、それじゃあどうすんのさ」

「とりあえず・・・殺っとく??」

「Y E A R!!」

抹殺だーい!!

「勿論だめだ」

千冬さんが乱入してくる。いたいいたい、アイアンクロー痛い

「わかってますよ、十分わかってます」

さりげなく千冬さんのアイアンクローから逃れつつ、俺は謝罪した

まあ、最後の切り札だからね、ホイホイと使う訳にはいかんさ

「まあ抹殺は冗談として・・・まじめにどうするか・・・」



そう、殺すという手段が使用できない以上、俺たちには本気で時間が無い

「とりあえず自衛の手段位は持ってたほうが・・・」

シャルがおずおずと手を上げる

「それなら」

俺は意識を集中させ、人数分の武器を構築する

「相変わらずのチート能力」

黙れ一夏

「やかましい。使えそうな武器を各自取ってくれ」  
結果

一夏、箒、千冬さん⇒日本刀

シャル、白雪、カエデ⇒ライフル

真耶先生、のほほんさん⇒ハンドガン

鈴、ラウラ⇒なぜかアサルトライフル

俺、束⇒規格外ですが何か??

俺は率直に感想を述べることにした

「何この最強チーム」

半端じゃないでしょうこれ、いつ俺たちはこんな鬼集団になったんだ・・・最初からだね!!

「とりあえず全部非殺傷性だから心配はいらない。全力でやれ」

俺の言葉に全員がうなづく、すると  
(ドオオオオン・・・)

大きな音を立てて、ドアが破壊された  
反射的に俺と一夏は前に立つ、そして煙の中に目を凝らし、出てくるであろう人影に備える

「何だ・・・これ」

「詰み・・・カナ?？」

俺は回想を終了し、目の前のゾンビ共に向き直る

そこにいたのは軽く数百を超えるゾンビの群れ。それを見てシャルと束が呟く、それを聞いて俺と一夏は

「「冗談。俺たちが負けるはず無い!!」」  
同時に飛び出す

「一夏!! 援護は任せろ!!」  
「応!!」

俺は瞬時に右手にベレッタを、左手にグロックを構築、頭を狙って連射する

「オラオラオラア!!!」  
若干目が金色になりつつあるので自制し、平常心を保ちながら一夏の援護をしていく

「はぁぁ!!」

一夏も頭を狙って薙ぎ払っていく

「楓!!」

一夏が俺の脚を払ってくる

「お?? お??」

俺の後ろにいた奴を胴で沈め、振り向きざまに三人の頭を吹き飛ばす

「やりすぎだ馬鹿!! 何人か死んでるぞ!!」

「どうせギャグ補正がかかってくれるから平気だ!!」

お前はどこの人間だよ。ギャグ補正って・・・

「かかるか!! 出来るだけ殺す・・・いや!! 殺せ!! 皆殺しだあ!!」

あーあ、やっちゃった・・・

俺、いや、俺ではないか、感情に流されてしまった俺、金色の目をした俺ことG楓は俺の中の異常なまでの殺意が一つの意思として確立してしまった存在だ

「碎け、殺せ!! 跡形もなく!!」

G楓は椿を取り出し、薙ぎ払う。それだけでG楓の前にいた数十体が屠られる

「ははは!! ははははははははは!!」

いい加減ラリるのやめろ・・・よ!!

「・・・ふう、あぶねえあぶねえ」

なんとか体の主導権を取り戻し、改めてどうするかを考える

「そうだ!! セシルを探せばいい!!」

そうだよ!! 原因を突き止めるにはそれが一番だ!!

「呼びました?? 楓さん」

そこに聞こえてくる聞き慣れた声、これは・・・

「せし・・・る??」

そこにいた者は異形だった

白かった肌は浅黒くなり、改造された制服はどこどころすりきれていて、悪魔のような耳と角を生やした少女

しかしセシリアのトレードマークといっても過言ではない金髪ロールはそのまま、それがセシリアであることを証明している

「なんだ・・・その格好は・・・」

「これですの?? 楓さんが呼び出した方に良くわからない魔法を掛けられて・・・」

「あいつかあ!!!!」

何やってんだあの変態は!!

「セシル、そいつはどこに行った？」

落ち着け、中身はセシルっぽいし、落ち着けば大丈夫だ

「帰ってしまいましたわ」

瞬間、俺の近くにいたゾンビたちが消し飛んだ

「あの・・・野郎・・・!!!!!!」

再びG楓になってしまったが、今回は構わん、瞬時にカオスの居場所を突き止める

「殺せ!! 壊せ!! はっはははははは!!!!!!」

G楓はゾンビを吹き飛ばしながらある方向へと一直線に進んでいく

「あれ?? 楓?? ... ちょ、なに、やめ・・・ぎゃあああああ  
あ!!!!!!」

カオスを発見して捕獲、空中で文字通り八つ裂きにする

こうして、カオスに魔法を解かせ、この事件は終わりを告げた

ちなみに、カオスは俺が八つ裂きにした後、学園の全員から私刑及

び死刑にされたい

**15000PV記念**

**カオスハザード（後書き）**

セシリアは関係なかったというオチでした

次回は新章突入です

## 15話

### 事件発生、追われる楓（前書き）

今回から一応第二章のつもりです

では行ってみましょう



## 15話

### 事件発生、追われる楓

大事件が起こる日の夜中

一夏は、テレビを見ていた

毎週見ているアニメ「緋弾のアリア」がやっているの、この時間は毎週起きている

相部屋の箒はとくに寝てしまい、ゆえにイヤホンで音を聞いている

『突然ですが、ニュースが入りました』

「・・・ん??」

唐突にニュースに代わってしまったので、不満げな声を漏らす一夏、しかし次の瞬間にはテレビを凝視せざるを得なくなる。なぜならそこには

『はろはろー!! みんな大好き束さんだよ!!』

一夏の知り合いであり、世界ではISのコアを唯一作れるとされている、篠ノ之束。彼女がテレビに映っていたからだ

「何で・・・束さんがここに??」

首を捻る一夏、彼女はいつものハイテンションは何処へやら、真剣な表情で喋りだす

『今回私がここにいるのは、世界に対してゲームをしかけようと思っただけだ』

ずっこける一夏、真剣な顔ではあるが言ってることはいつもと変わらなかった

『国ごとの対決だからね。ルールは簡単、私が指定する人を、私の所まで連れて来てくれればクリア、景品は・・・』

ISのコアを一個進呈しちやおうと思います』

一夏は驚愕する、コアは現在もとても貴重といっても過言ではないのだ、一個であってもその重要度は計り知れない

「な・・・ISのコア!？」

「ん・・・何だ一夏、む」

驚きのあまり大声を出してしまい、箒が起きてしまう。そしてテレビを見、一気に不機嫌になる

「ああ箒、起こしちゃったか」

「かまわん。で、どうしてこの人がテレビに出ている」

箒の不機嫌そうな声に、一夏は首を振る

「俺にもわからないんだよ、でも、世界に対してゲームをしかけようとしているらしいんだ」

「ゲーム??あの人は・・・」

呆れた顔をする箒

『それではお待ちかね、ターゲットの発表です!!ターゲットは・・・』

「誰だろうな」

「さあ、わからないな、あの人が興味を持つくらいだ、よっぽどの変人だろう」

しかし束の言うターゲットは、二人の予想を裏切った

ターゲットの名前が出てきた瞬間、二人は凍りついた

『ターゲットは・・・朱雀楓くんです!!』

「「楓!?!」」

スクリーンに写されているのは、二人の親友である楓に間違いなかった。なぜか女装

「どういうことだよ!?!というか何で女装バージョン!?!」

「私に聞くな!!とりあえず楓に・・・」

【心配ご無用】

箒が立ち上がったとした刹那、宵闇がドアの前に現れた。なぜか人

型で

「ご無用・・・って!!」

【既に行動を開始してるんだ。一人で束の所へ行けばこのゲームは終了だからな】

『ちなみにこの子が一人で来ちゃった場合、全てのISのコアを休眠状態にするからそのつもりで』

「・・・・・・・・」

【ほう、最初に楓がやりそうな事を見抜くとは、中々やるな】

宵闇はそのまま楓と通信を始めた

《何だよ、俺は今忙しいんだが??》

【残念だが楓、お前が一人で行くとな全てのコアが休眠状態になってしまうらしい】

《何だそれ!?!》

【良いから戻ってこい、だれにも見つかるな】

《誰に行ってらっしゃるんだこのハーフ狼》

【俺は純血種だ。とにかく、逃げ場を確保しておく】

《頼んだ》

楓との通信を切断し、宵闇は一夏達へと向きなおる

【二人とも、このことは誰にも言うな、明日から楓が学校を休むが、詳細は絶対に話すな、楓の、そしてお前たちの身を守るためにも】  
そう言うとな宵闇の体が透け始める

「宵闇!?!」

一夏が名を呼ぶと、宵闇は元に戻った

【なんだ】

「楓は・・・世界中に狙われるのか??」

一夏の脳裏に映るのは、仲間である代表候補生のセシリア、鈴、シヤル、ラウラ。世界が楓を狙うんだとしたら、彼女たちは間違いなく国に呼び戻され、楓を捕まえさせられるだろう

【そうだろうな。ISのコアはどの国のものだから手が出るほど欲しいだろうから】

宵闇の答えは、一夏の中で最悪の答えだった

「なんとか・・・ならないのか??」

【無理だ、少なくともお前たちではな】

「それはつまり、楓の魔改造を受けた私たちでもということか??」

【向こうも魔改造組が居るし、何しろお前たち二人の力で世界を相手取れるわけないだろう。噂によれば、世界のほかにも楓を狙っている企業があるらしいしな】

宵闇は足元から透け始める、一夏達は声を掛けなかった。否、掛けることができなかった

世界が、楓を狙う。つまりはこの地球上のどこにいても、楓の安全は保障されないのだ

「一夏・・・」

箒は一夏に声をかけることしかできない、箒は自分の無力に歯噛みした

無言が続くこと数分、一夏は顔を上げ

「箒、俺・・・楓について行く」

そう言いきった一夏の目には、決意が漲っていた

同時刻、楓は海の上を滑空していた。生身で

何のことはない、風を操れるのだから、それくらいの事は朝飯前だ

「まったく・・・厄介なことをしてくれるもんだ」

楓は一人ごちる。すると、前方から紅い光が楓めがけて飛来する

「いくらなんでも早すぎるだろ!!」

楓は椿姫を展開、紅いレーザーを蒼月で斬り裂く

「ほお・・・やるじゃん」

椿姫のハイパーセンサーが敵の姿をとらえる。既存のISには無いフルアーマー全身装甲で、スラスターからは真っ赤な粒子が出ている。その姿は、悪魔と呼ぶにふさわしかった

「誰だ、お前」

楓はわずかに目を細めて相手を見据える

「俺か?? 俺は鈴木政志。亡国企業の傭兵ってところだ」

そのIS【アルケー】を身にまとった茶髪の男、鈴木政志は、そう言って笑う

「亡国・・・企業」

楓の脳裏にデュノアの言っていた事がよぎる

「本当に創造神だというのなら・・・この世界を救え、亡国企業から」  
ファントム・タスク

「デュノアの言っていたあれか」

「ん?? デュノア?? ああ、シャルの親父さんか」

「シャルを知っているのか」

楓の顔が陰しくなる。シャルの事を知っているなら、それはそれで  
まずい

「ああ。といっても、こっちは知らないけどな」

「メタ発言注意な。いろいろと問題があるから」

「お、悪い」

良くわからないことを突っ込んで、楓は朱雀に切り替<sup>スイッチ</sup>える。蒼月  
と氷河を展開し、前後に構える

「どっちにしろお前を倒さなきゃダメっぽいな」

「出来れば早く片付けたいんだ。早く帰って電波女と青春男見たい  
し」

現在時刻 1..53分

「おい、後二分だぞ」

「何ィ!?! 悪いが今日はやめとく!?! また今度だ!?!」

そう言うが早いか、政志は踵を返して瞬く間に紅い軌跡となって飛



んで行った

「何だったんだ、あいつは・・・」

ポカンとした顔の楓は、とりあえずIS学園に帰ろうと、学園の方向にふよふよ飛んで行く

「亡国企業・・・厄介なことになってきたな」

ふよふよと飛びながら、楓は政志の事を考える

（アイツ、ふざけた態度だったが・・・あれはどっかの組織のトツプってところか。それにあのIS、見たことが無いし・・・そもそも男がIS使えるというのにニュースにもなっていないところを見ると・・・危険だな）

楓はまだ知らない

他にもいることを・・・

「着いたか」

「何でここに?？」

楓がIS学園に着いて最初に目にしたものは、千冬だった。かなり怒っている様子

「無断で外出するとはいい度胸だな」

どうやらニュースを見ていないらしい

「待ってください。これには事情が・・・」

「束だろう??あのニュースのせいで」

「見てたんですか」

「いきなりテレビがついてな、おそらくハッキングでもしたんだろ、それくらいは平然とやってのける奴だ」

千冬は友人である束を思い出して嘆息する

「大変ですね」

「私の事はいいとして、どうするつもりだ??」

千冬の纏う空気が鋭くなる。しかし楓は平然と受け流し、自分の見解を述べる

「とりあえず出来る限り逃げ続けます。多分どこの国に行っても狙われるでしょうけど、俺は自分から捕まる気はありませんよ。というか、捕まったら高確率で戦争が起きる」

「どういうことだ?? お前と戦争と、何の関係がある」

「自分で言うのもなんですが、今の俺は下手に動けば戦争を起こしかねない起爆剤です。同時に誰にでも手に入る宝石でもあります。つまり、俺を拘束した国はほかの国から攻撃を受けることになる」

自分のことであるはずなのに、楓は淡々と言葉を紡ぐ。千冬は楓をまじまじと見、口を開く

「なら、週に一回でいい。私に連絡をよこせ」

「何ですか、盗聴されたら終わりです」

「零の極秘回線を使えばいい、アイツにハッキングで敵うのはお前くらいのものだろう」

考える楓、しかし千冬は有無を言わせぬ、というか言ったら殺す目を向けて来ていたので渋々承諾する

「わかりました。でも・・・」

「わかっている。一夏達には言わないさ」

楓の言いたいことを理解したのか、千冬はわずかに笑う

「なら安心です。とりあえず、俺は行きます」

楓は風を操って中に浮かぶ

「前々から思っていたのだが・・・なんだ??それは」

「昔とある精霊に習いましてね、いわゆる超能力と同義です」

楓は足に空気を圧縮し始める

「そうか」

そっけない返事を残し、千冬は学園に戻る

「そうだ、一夏達に伝言を」

「なんだ」

「俺の事は気にするな、絶対に追いかけてくるな。と、伝えといてください」

楓はすでに10mほどの高さにいる

「わかった。伝えておく」

「ありがとうございます。では」

それ以上言葉を交わさず、楓は空高く飛んで行く

「最初は、中国にでも行ってみるか」

軽く旅気分なのは突っ込んではいけない

「一夏」

「おう」

楓と千冬のやり取りを、一夏と箒は離れたところで見ていた

千冬にばれないように移動しようとする。しかし

「そこで何をやっている、一夏、篠ノ之」

ばれていたようだ

「気づいてたのか」

気まずそうに出てくる二人、しかし頭では

(白、どうすれば千冬姉を出しぬける??)

【うーん・・・無理じゃない??】

(んなバカな・・・)

白でさえ千冬を出しぬく方法が見つからないようだ

「一夏、わかっているとは思うが朱雀を追おうなんて馬鹿なまねはよせ」

「仲間を助けるのを馬鹿な真似だって言うのか!？」

「そうだ。とくに今は分が悪すぎる、それに、朱雀一人の方が見つかりにくいだろう」

千冬は考えていた。どうすれば楓を助けられるか、しかしそれは意味が無いことを理解していた。この騒動に束が関わっている時点で下手な手出しはできない

「とりあえず二人は戻れ、朱雀の動向についてはわかり次第伝える」

「はい・・・」

「・・・クソっ」

渋々戻っていく二人、二人が見えなくなったところで、千冬はある男に連絡をする

『どうしたんスカ千冬さん』

「すまない、聞かれていたようだ」

『ええ!? 誰に!?!』

「一夏と篠ノ之だ」

『何ということだ・・・』

千冬は笑う。楓が落胆しているのを想像して

『仕方ない、でも他の奴には内緒でお願いします、特に白雪には』

「無論そのつもりだが、どうしてだ??？」

『あいつに聞かれると間違いなく飛び出しますから』

「・・・わかった」

白雪は若干ヤンデレ属性を持っているため、一人で戦争を起こしかねないのだ

『あとひとつ。世界以外の組織でISを使える男子がいるみたいで  
す。というか襲撃されました』

「なんだと??？」

千冬の顔が険しくなる

『何らかのコンタクトを取ってくると思いますんで気を付けてくだ  
さい』

「わかった、注意しておく」

千冬はそう言うと言線と回線を切断して空を見る

「束…何を考えているんだ」

千冬が学園に戻るのと同じ時間、イレギュラー地図にない世界に、政志はいた

「朱雀楓・・・か、面白そうな奴だったな」

政志はかすかに笑う、と

「ニコニコして良いことでもあったのか?? 政志」

城の壁にもたれかかるようにして、銀髪の少年が政志に問いかける

「ああ、ターゲットの朱雀楓と接触してきた。かなり面白そうだぜ。

夜明」

夜明と呼ばれた少年は政志の方に歩み寄り、肩パンする

「痛った!!! 冗談じゃねえぞ夜明!!!」

「ターゲットとの接触はまだ駄目だって言われてたろうが。何をし  
とんだオドレは」

「二人とも、集合だ」

二人を呼んだのは背の高い少年。その足元には白銀の狼が座っている

「真人・・・」

「お前も来てたのか」

「来るも何も俺の居場所ナワバリはここだろうが。今は」

「真人、いつまで話してるんだ。みんなお怒りだぞ。おかげで耳が  
キンキンなっているんだ」

その声に三人が上を向くと、赤髪の少女が城の屋根の部分に立っ  
ていた



「太陽か」

夜明が少女の名を呼ぶ

「良いから早く来てくれ、オータム辺りが暴走しそうなんだ」

「だってよ、行こうぜ」

「もとはと言えばお前が原因だろうが」

「行くぞ、ヴィル」

【ああ】

そんな会話を交わしながら、城の中に入っていく……

「遅せえ!!!!!!」

ロングヘアーの女性、オータムが政志達を怒鳴りつける

「」「怒鳴るな!!!!!!」」「」

『…………』

四人の迫力に空気が軽く死ぬ

「……コホン、とにかく始めるぞ」

スコールが場を収め、会合の開始を宣言する

「会合の内容はわかっていると思うが……朱雀楓、彼を我らの組織に勧誘する」

「捕獲じゃなかったのかよ」

オータムが口をはさむ

「本来はそうだったが、事情が事情だ、こちらに引き込んだ方が都合がいい」

「具体的にはどうやるんだ?!!?!!」

政志が手を挙げて質問する

「とりあえず、夜明と太陽、政志の三人はIS学園に行ってもらおう」

「「は??」」

「俺はどうする??」

固まる三人を気にも留めず、真人が尋ねる

「真人はターゲットに接触して勧誘してもらおうわ」

【主の苦手分野だな】

「うるせえ」

【事実だから仕方ないだろう】

「俺だってそれくらいできるっての」

【一応聞くが、どんな手段を使うつもりだ??】

「ンなもん男なら拳で『私は太陽を推薦する』・・・ちよっと待て  
ヴィル、俺じゃ不満だったのか」

「聞くまでもないわよそんなこと」

スコールが嘆息する

「太陽、真人の代わりに行ってくれる??」

「わかった、最善を尽くす」

「という訳で真人は学園に行っちゃようだい」

「・・・わかった」

渋々承諾する真人

「後の者はそれぞれ準備しなさい、良いわね」

その言葉を最後にその場にいた全員が散っていく、政志達四人を除いて

「なあ、政志」

「何だ太陽」

「朱雀楓ってどんな奴だった??」

いきなり聞かれた政志はしばし考え

「面白い奴だったな、しかも俺たちと同じ匂いがする」

『どういう意味だ??』

訂正。四人と一匹

「つまりだ、あいつは俺たちと同じく異世界から来た可能性があるんだよ」

「てことはやっぱり・・・」

「アイツも被害者なのかもな。グレイ・ラデイス灰のカーテンの」

真人の言葉に三人と一匹は気を引き締める

「あれのせいで俺らはここに飛ばされたんだよな・・・」

「ああ、偶然にも並行世界だったから良かったものの・・・」

「それ以外だったら大変だったろうな」

「どうしてアレが生まれたのか、なんで俺たちが飛ばされたのか、一切合切謎だもんな」

ファントム・タスク

【しかしこの亡国企業、どこか嫌な気配がする。気のせいならいいのだが】

真人・太陽・夜明・政志・ヴィルの順でひとしきり回った後、一斉にため息をつく

「「「『どうしたものか・・・』」「」」」

そう呟いた後、各自割り振られた仕事の準備に向かった

そして、翌日

「やっぱりか・・・」

「ああ」

セシリアを始めとする代表候補生が一斉に帰国した

一夏と箒はなまじ理由を知っているために嫌な予感しかない

「一夏、どういふことなのコレ」

「楓もないし・・・」

カエデと白雪が一夏の席に近寄ってくる。白雪は校外学習以降楓を名前で呼んでいる

「さ、さあ・・・」

「私たちにもさっぱりだ」

どもる一夏とすらすらと嘘をつく箒、相応といえば相応である  
くがらがら・・・

「席に着け」

千冬が教室に入ってきたので、会話を中断し、席に戻る

「代表候補生の面々は事情があつて本国に帰国した。朱雀は・・・  
ちよつとした仕事があるそうだ」

千冬にしては珍しい苦しい言い訳、一夏は千冬に回線を開く

『千冬姉、ローズの事を言ったほうがいいんじゃない・・・』

『馬鹿を言うな、そうだったらお前たちまで飛び火するぞ』

『私たちは構いません』

箒がログインしました

『しかし・・・』



く狼だ」

「どっちでも変わらないだろ。犬みたいなもんだし」

【ほお・・・政志、お前が大事にしている小説たちがどうなってもいいのか??】

「ほんとマジすんませんでした」

「弱すぎるだろうお前!!!!」

『・・・・・・・・』

いきなり教室で漫才が始まってしまい、呆然と見るしかなくなるクラスみんな。それに気付いた夜明が

「悪いな、いつもこんな感じなんだ」

苦笑いでフォローに入る。しかし、そのフォローは遅すぎた  
なぜなら呆然と見ていた本当の理由は

「貴様ら、喧嘩ならよそでやれ」

阿修羅<sup>ちふゆ</sup>が政志とヴィルの後ろで出席簿（零の武器ver）を構えていたからである

くバキッ!!!!!!く

頭から出たらいけない音を発して、倒れる政志、ヴィルは間一髪回避したようだ

「何つう威力だよ・・・」

真人は啞然としている。すると出席簿を収納した千冬が

「一時間目はISの起動の復習をする、第一アリーナに集合しろ」  
それだけ言って出て行ってしまった

「相変わらずえげつない・・・」

一夏は呟く、そして重要なことに気付く







その頃楓は、アメリカ軍と対峙していた

「油断するな!!」

「あのさぁ・・・俺は危害を加えるつもりはないんだが、どいちやあくれないかねえ??」

逃げ始めてまだそんなにたってないのに、何回も軍に接触されている特にアメリカに

「おとなしくすれば危害は加えない。大人しく我が国に来い」

「だから何度も言ってるでしょうが、俺はこの国とも行くつもりはない。いい加減にしろよ・・・」

若干瞳に金が交じり、慌てて心を落ち着かせる。ふう、危ない危ない  
「・・・もういい!! 殺さなければ何をしてもかまわん!! やれ!!」

しびれを切らした隊長格がそう告げると、隊員たちが慣れた動きで俺を包囲してくる

「かかれ!!!」

その声に飛びかかってきた隊員たちを見据えて  
「さぁ、乱れ咲こうか」

俺は、風の力を完全開放した

「なん・・・だど?」

「ギャグに持っていく必要は皆無なんだが・・・まあいいか」

決着は数秒で着いた、というか勝手に飛びかかって来て風に切り刻まれただけなんだけど

「どうする?? 残るはあんた一人だ、それとも、ここで死ぬかい?」

あえて余裕ぶって言ってやると、隊長格の男はビビって逃げて行ってしまった

「つたく・・・つまらんあ・・・オイ、いつまでそこで見てるつもりだ、とっとと出て来い」

「まいったな、まさか見破られるとは・・・」

俺がそう言うと、木の上から赤髪の少女が飛び降りてきた

赤髪の少女、太陽と楓が対峙する

「で、お前はどっちだ?？」

「・・・?？」

いきなりの質問に首を捻る太陽、それを見た楓が苦笑しながら

「ああ悪い、言い直すわ。・・・お前は俺の敵か、否か、どっちだ」

真剣な楓に、太陽が答える

「私は・・・私たちはお前の敵ではない。・・・といっても信じてもらえんだろがな」

「どうしてそう思う??」

楓の問いに太陽はあたりまえのことを口にする

「現にお前は、臨戦態勢に入っている」

「わりいな、状況的に信用することはできねえんだ」

それを聞いた太陽は「そうか」と答えて、自分も臨戦態勢に入る

「悪いが、手加減はできないぞ」

「勿論だ、全力で来るといい」

そう言いつつも動かない楓、不審に思った太陽は警戒する。しかし、遅かった

「杜若!!! 派生形『薊』!!!」

風を纏った手刀を繰り出す、それは太陽の首を切断する

「おっと」

事が出来なかった。太陽が一瞬で距離を取ったのだ

「おいおい・・・今の躲すってどういうこったよ・・・」

「私はちよっと特別でな、ただの人間ではないぞ」

「だろうな!!」

楓は再び杜若で間合いを詰め、風を推進力にした拳を太陽に向けて発射する

「くっ!!」

「そらそらそらあ!!!」

防御する太陽に容赦ない拳を浴びせ続ける楓、ふと妙なことに気がつき、太陽から離れる

「どうした??まさか、バテたとか言わないだろうな」

「これでバテるとかあり得ないだろ。・・・何でお前、攻撃してこない??」

そう。太陽は一度も自分から攻撃をしていない

「そのことか。私が攻撃したら敵であることが確定してしまうだろう」

「ふうん・・・」

楓は警戒を解き、太陽に近寄り、手を差し伸べる

「?..?」

「とりあえず、敵でないことが分かったからな、一応」

「そうか・・・わかってくれて何よりだ」

太陽は楓の手を握り、微笑む

「私は夕暮太陽だ。お前は・・・朱雀楓だったな」

「何でそれを・・・ってあたりまえか、あんなにでっかく報道されれば」

報道の様子を思い出し、苦笑いする二人、そこに

「大変だ！！軍がせめてきたぞ！！」

そんな声が聞こえた

「夕暮、手伝ってくれるか??」

「勿論だ、それと、私の事は太陽でいい」

「助かるぜ、俺も楓でいい」

二人は声の聞こえた方向へ、疾走する

「・・・・・・・・」

「なんじゃこりゃあ・・・」

前方に広がるのは軍、その数、軽く見積もっても千は優に超えている

「何がしたいんだよこいつら・・・」

「私が知るわけないだろう、どっちにしろ・・・」

「「全滅させることに変わりはない」」

二人でそう言った後、軍に突っ込んでいく二人、途中で二手に分かれる

「行くぞ!!!!クソ共があ!!!!」

楓は自分を中心に円を描くように風の刃を配置、高速で飛ばすこと  
によって兵を蹂躪していく

「はあぁっ!!!!」

太陽も一撃で地面にクレーターができる威力の攻撃を放ち、次々に  
兵士を吹き飛ばしていく

一方的な殺戮が続き残りの兵が半分ぐらいになったところで、楓は  
大技を出すために太陽に指示を出す

「太陽!!!!離れろ!!!!」

「応!!!!」

太陽がはなれたのを確認して、楓は全身に風を纏わせる

「吹き荒れる！！」  
スラッガー・オブ・ウインド  
『風の殺戮！！』」

楓の声と同時に風が吹き荒れ、兵士を切り刻んでいく。不可視の刃になすすべもなく、残りの全てが風に刻まれた

「こんなもんだな・・・」

「いくら何でもやりすぎだろう・・・」

二人の前にはとても子供には見せられない光景がある。具体的には千切れた手や足、内臓やなんかをぶちまけて死んでる兵士の数々だ

「確かに・・・ちよつとやりすぎたな」

これでちよつとなのだから恐ろしい楓だった



## 15話

### 事件発生、追われる楓（後書き）

はい、ということで上がりました

オーバーキル復活してますね・・・

太陽、夜明はサザンクロスさんの、政志はEXTREMEさんから、真人はジャッキーさんからお借りしました。本当にありがとうございます

・ 束の目的は何なのか、楓はどうなるのか、一夏達はどうするのか・

正直いいいます。全く考えておりません！！

それと、新キャラも考えておりません！！  
なのでこの小説を読んでいただいている方々のお力をお借りしたい  
と思います

男一人、女一人のアイデアがあれば、よろしくお願いします

## 16話

### 日本編1

旧友との再会、迫りくる月桂樹・・・?? (前巻)

遅くなってすいません

テストやらなんやらでドタバタしてたものですから・・・

今回は北海道からあの学園の生徒たちが登場します

ではでは、行ってみましょう

「もしもし、ああ俺だ。そっちはどうだ??」

今俺はある親友と電話している

『なんだ、俺のハーレムの話を聞きたいのか??』

「いんや、お前の妄想などには興味はない」

ぶっちゃけ杉崎鍵だ。コラボしても大丈夫。だってこれは二次創作  
『その言い方だと俺が年中妄想している男に聞こえてしまうだろう！  
!』

「違うのか??」

『違うわ!!』

「楓、そろそろ目的地に着くぞ」

俺の隣にいる太陽が辺りを見回して告げてくる

『楓、今お前の隣で美少女の声があったんだ??』

「何で声だけで美少女かどうか判別できるんだお前は……俺は今  
太陽って奴と一緒にいるんだ」

『太陽……いい名だな』

無駄にハードボイルドな声になる鍵

「黙れ屑。あ、つい本音が」

『お前俺のことほんとに嫌いだろ!!』

「え?? いや、別に??」

『嘘だ!!!!!!』

「ハイそこネタにもってかないでね」  
ちなみにひぐらしネタ。わからない人は『ひぐらしのなくところに』  
を見てみよう!!

「楓、私の名前が出た気がするんだが……」

「大丈夫だ、今連絡してるのは屑……じゃなかった、俺の奴隷だ」

『おおい!! ランクが非常に下がってるんだが!??』

「え?? 何お前、俺の親友だと思ってたの??」

軽蔑を込めた声で言ってやる。と

『うっわ、すごい裏切られた気分!!』

「嘘だ、というかお前仕事はいいのかよ」

『俺以外皆遅れるらしいんだ。だから俺一人だ』

「ふむ、じゃあ今から行くわ」

『はぁ!?!いまからって・・・何処にいるんだよ』

吃驚したような声が返ってくる。俺はたっぷり間を開けてから

「碧陽の前だ」

「『何でこの距離で電話すんだ!!』」

おお、窓から身を乗り出しおった。危ない奴だな

「何やってんだお前、事故るよ??」

「『やかましいわ!!』」

携帯切れよ、やかましい

とりあえず校門に突っ立ってるのも何なのでてくてくと生徒会室の窓まで歩く

「太陽。俺の手を離すな」

「わかった。」

「相変わらず何なんだその能力<sup>チート</sup>」

鍵が窓から離れる。その開いたスペースにまずは太陽を降ろし、俺も入る

「ホントに誰もいないのな。・・・もしかしてお前嘘ついてたんじゃないのか??」

ジト目で鍵を見る

「嘘じゃねえよ!!今はいんだけどよ!!」

「しかし、クラスみんなに聞いてもそんな人物は存在しなかった。鍵は気付く、今までのことすべてが妄想であったことに」

「やめて!!痛い主人公扱いやめて!!」

頭を抱えて叫ぶ鍵。既に痛々しいよ。

「残念だが鍵よ、今回の場合は俺が主人公だ」

そう。生徒会の一存ではない。あくまでこれは二次創作

「まあその話は置いてだ。鍵、一応言っておくが今や俺はお尋ね者だ。今後軍とかが聞きに来るかもしれない。そのときは・・・」

「気にすんな。そのときは何とかするから」

話の途中で鍵が口をはさむ

「なんとかって・・・」

「言って無かったか??ここはいわゆる流行の発信地だ。それをうまく使えば、軍程度どうってことない」

「それだとお前が・・・」

「いやっほー!!!」

「おくれました」

「悪いな、遅くなった」

「あら??キーくん、その方たちは??」

俺が反論しようとしたとき、ドアが開いて四人の女子が入ってくる。誰だかはあえて触れない

「・・・お前の話ってほんとだったのな」

「そうだろ??俺のハーレ・・・」

鍵がハーレムと言おうとしたとき、目にもとまらぬスピードでボディーブローを叩き込んだツインテール女子が一人。実際は俺や太陽は見えていたけど他の連中は何が起きたか理解できてないであろう

「それで杉崎、この人たちは誰??」

腹を押さえてうずくまる鍵を気遣うそぶりを見せず、ピンクの髪の毛を・・・小学生??が鍵に聞いている

「・・・俺の親友の・・・楓と・・・太陽さん・・・です」

途切れ途切れになりながらも俺たちの名前を紹介した鍵。良くやった

「それで・・・楓さんと太陽さんは何をしに来たの??」

次に聞いてきたのは背が高く、黒いロングヘアーの女性だった、一応制服を着ているがきつと高校生ではないだろう

「鍵に忠告をしに来たんですよ」

簡潔に答える

「忠告??? 何の忠告だよ」

続けて聞いてきたのは先ほどの人外ガール。普通にしているんだろ  
うけど威圧感がすごい

「みなさんテレビは見ますよね??? なら今の状況を理解していない  
はずが無い」

「朱雀って・・・あなたもしかして」

黒髪の人が驚いたように聞いてくる

「そう。世界で二番目にISを起動し、いまや全世界からその身を  
狙われている男。それが俺です」

『男だったの!?!』

『そこ!?!』

四人がシンクロで来たので俺と太陽もシンクロで返す

「・・・まあそれで、俺に危険が及ぶかもって事できてくれたんで  
すよ」

いつの間にか復活していた鍵が補足する

「なるほど・・・よし!!」

人外ガールが俺の方を向く

「あたしと勝負しろ」

「話の運び理解してる!?!」

何でか知らないけど勝負することになってしまった。

「鍵、あの子壊れても文句言うなよ??!」

「え、うそ、マジで殺る気??!」

「勿論手加減はするつもりなんだが・・・もしかしたら、な」

「では、はじめ!!」

太陽の合図と同時に人外ガールが突っ込んでくる。って速すぎるだろ!?

「おりゃああああ!!!!」

そのまま拳を俺の顔面めがけて振り抜いてくる。しかし、取れる!!

「ってうわああああ!!!!!!」

人外ガールの拳を受け止めた、ここまではいい。ならなんで

俺は吹き飛んでいるんだ??

「・・・なろっ!!」

瞬時に風を制御して体制を立て直す。その時にはすでに人外ガールは目の前まで来ていた

(嘘だろ?? 空中だぞ??)

「そんなもんなのか!!」

「黙ってろ!! 風ノ爪!!」

風を纏わせた鉤爪。当たれば一撃で粉碎できる!!

「閃閃風神!!」

人外ガールも腕に風を纏い、風ノ爪とぶつかり合う

「だから何で人間が特殊能力持ってたんだよ!!」

しかも同じ属性!!

「鍵!! なんだこの人外ガール!!」

「楓、深夏は人間から外れた存在だ・・・」

人外ガール・・・深夏さんは人間のテリトリーから逸脱しているらしい

「一つ聞いていいか」

「なんだ」

「お前、自然治癒はどれくらい早い??」

「浅い傷なら一時間もかからない」

訂正。バケモノデス。でもこれで・・・

「ならこれを使っても大丈夫か」

「なにを・・・!!!!」

深夏表情が強張る。そりゃあそうだ

「喰らえ、『風ノ吹雪』」

俺の目は、両方とも金色になっているんだから

「碎け散れ、小娘」

瞬間、深夏は弾かれたように吹き飛び、地面に激突した

「あゝ危なかった・・・鍵、こいつマジ危ない」

「そりゃあ深夏なものな」

両目を元に戻した俺はそのまま深夏さんの所まで飛んで行く

「大丈夫か?? って・・・あれ喰らってこれだけしか傷が無いって・・・」

深夏はいたるところから血を流している、はたから見れば大騒ぎになってもおかしくない。

しかしあの技『風ノ吹雪』は普通の人間なら跡形もなく消滅するレベルの技だ。それ喰らってこんだけとはマジ人外



「まさかこのあたしが負けるとはな・・・」

「中々強かったぞ。まあ鍵ほどではないが」

そう、なんだかんだいって鍵は強い。ISも使えるみたいだし

「そうだった、ほい鍵。頼まれてたもの」

鍵に青いネックレスを渡す

「おお、これが俺の・・・」

「ああ、お前の専用機『鳥兜』だ」

「何故名前が毒物なのかはさておき・・・こい!!」

鍵の声に反応するように鳥兜が光り、鍵を包み込む

「これが・・・俺の」

「ああ、仲間を守るための翼だ」

鳥兜の見た目は紫の白式のスラスタが天使の羽みたいな感じの奴。  
手抜き??? んなもん関係ねえ

「・・・楓、私はそろそろ戻る、また会おう」

「ん? んじゃな、太陽」

太陽はそれを見ると黄昏の黒斧を展開し、一瞬で飛んで行ってしま  
った バルディッシュトワイライト

「武装とかのデータはもう入ってるから後で参照しな、とりあえず  
浮いてみ」

「おう・・・おおお!？」

鳥兜は急激に上昇し、上下さかさまになって浮いている

「アホか、姿勢維持を考えろ」

「悪い悪い・・・よつと!!」

アドバースしてやるとすぐに姿勢を元に戻し、上下正しい位置に戻る鍵。なかなか覚えが早い

「杉崎!! 私も乗せなさい!!」

下でピンク小学生が飛び跳ねている。あの小学生は何者なのだろうか

「鍵。あのピンク小学生は何者だ、迷子か??」

「あれは桜野くりむ。生徒会長だ」

「児童会長の間違いじゃないのか??」

正直あのなりで高校生は可笑しすぎる、しかも生徒会長って事は3年?? 笑わせてくれる

「聞こえてるわよその男の娘!!」

SEE YOU☆

「あ、手が滑った」

クリムゾン・ティアーズ、夜叉同時展開、ファイア!!

「手が滑ったレベルじゃないわよそれは!??」

CTと夜叉の放った紅いレーザーが小学生?? を襲う

「会長に手を出すな」

一瞬で俺と小学生の間に入り込み、拡散型粒子シールド『唐檜』とうひで全てのレーザーを防ぎきった

「おいおい……一瞬で使いこなしすぎだろ。ならこれでどうだ！」

クリムゾン・ティアーズ総展開。夜叉、B-4の位置に配置。冠するは轟く五星――！

ブリューナク  
「轟く五星――！！！！」

クリムゾンティアーズと夜叉から今度は黄金の光が降り注ぐ。鍵は唐櫓を仕舞い、ある装備を呼び出す

みずとんぼ      ペンタグラム  
「水蜻蛉、五芒星展開、『もみじ櫓』発動」

水蜻蛉はティアーズと良く似た形状のビット型シールドだ。それを星の様に配置し、それぞれからそれぞれにエネルギーシールドを展開することによってできるエネルギー無効化シールド。それが櫓なのだ……

「行け、櫓」

それを……ブリューナクに向けて発射した！？

「つてええええええ！？」

櫓はブリューナクのエネルギーをなんということもなく消して、俺に迫ってくる

「なめんな――！！エクスカリバー約束された勝利の剣――！！！！！！！！」

右手に櫓を展開し、夜叉を辺りに漂わせる。夜叉は回転を始め、紫

電を散らす

「おらあああああ……！！！！！！！！！！」

そのまま五芒星に向かって椿を振り抜く。同時に夜叉は消え、残された紫電は椿を包む巨大な剣となり、椿を飲み込む

「続けて！！」 『お上に仇名す破滅の妖刀・村正』 「……………」

蒼月と紅羽で十字に切り裂く。切っ先から赤と青のビームが伸び、エクスカリバーごと権を切断する

「とどめだ……遥かなる蹂躞制覇……！」

最後に黒姫を取り出し、シリンドーの中身を全て炸裂させ、瞬時加  
速で光の奔流の中に飛び込む。村正に切断された棍を発見すると、  
ためらいなく黒姫を投擲する。シリンドーすべてを炸裂させたため  
に刀身が変形し、先端が槍のようになっていた黒姫は一直線に棍を  
貫き、霧散させた。

「ふう、危なかった」

「いやどう見てもオーバーキルだろ!？」

鍵がISを解除しながらつつこんでくる

「そうか?? まあやりすぎた感はあるかな。だって……」

俺の視線の先にいる人間、ソレハ……

「久しぶりだね。お父さん」

「お前が一番乗りか。鈴辺りが最初だと踏んでいたのだが」

フランスの代表候補生、シャルロットだった。

# 16話

## 日本編1

### 旧友との再会、迫りくる月桂樹……??

(後事

楓「一カ月以上間を空けておいてこれだけか??」

作「ほんとに忙しかったんだよ?? 評議員の仕事とか友達関係とかテストとか」

楓「睡眠時間削れよ」

作「これ以上削ったら俺死ぬよ??」

楓「良いんじゃないの?? どうせいてもいなくても変わらないだろ」  
作「そういうこと言うなよ!!」

鍵「どうもどうも。ハーレム王こと杉崎鍵です」

楓&作「帰れ。」

鍵「扱いがひどいよ!??」

白「そう言えば鍵って複雑な形してるよね」

鍵「お呼びですか?? 美しいお嬢さん」

白「……」

くヴァチヴァチヴァチ……

鍵「んぎゃああああ!!?!?!?!」

シャル「白雪?? ここにいるって事はあなたも次回に出演するの??」

夏「俺も出るぞ!!」

楓「次回!! 日本編2 交錯するセカイ!!」

作「嘘つくな!! 名前はまだ決まってねえよ!!」

鍵「しかも世界ってどんだけスケール大きいんだよ!!」

桜「いつそのこと私を主役にしたらどうかしら??」

楓&作&鍵「却下」

桜「三位一体!??」

深「どうしてあたしたちに回ってくるんだよ・・・」

真「やっと喋れました!!」

知「そろそろおしまいにしましょうか」

作「次回も」

全「お楽しみに!!」

## 17話

### 日本編2

不敵に微笑むオータム、特に気にせず増える社員

最近また執筆が乗ってきた椿姫デス  
シャルがどうして来たんでしょうか、答えは本編にて

では言ってみましょう

ISファイト!!!レディー!!!gooooooooo!!!!!!  
楓「時空超えんな!!!!!!」



## 17話

### 日本編2

不敵に微笑むオータム、特に気にせず増える社員

「久しぶりだね」

「まさかお前とは・・・驚いたぜ」

ここは私立碧陽学園。俺はそこに旧友に会いに来ていた  
ひと悶着あって、今俺の目の前にはシャルがいる

「たった一人でどうするつもりだ??」

それを聞くとシャルはにっこり笑って

「私と一緒に来て」

といった

「だそうだ、鍵」

「地獄の果てまでお伴します」  
ボケとして鍵に振ってみる

くパァン!!く

シャルの持っていたマグナムが火を吹く。銃口の先にいるのは・・・

「がっ・・・」

鍵が前のめりに倒れる。同時に俺の中の何かが外れた

「何してんだお前・・・!!」

「さあ、行こ??」

シャルはただ機械のように笑っている。ん??機械の・・・ように

?? 何であいつはISを展開せずに空中にとどまっていられる??  
まさか・・・

「月花」

月花を呼び出す

【久しぶりだ、マスター】

「アイツを分析しろ」

【・・・分析終了。】

「やっぱりか」

ISの登場によってほかのさまざまな分野の技術も格段に上昇した。  
少なくとも、人間を摸した機械が作れるほどには

「行こ??」

シャルは笑ってただ同じことを繰り返している

「悪いが、破壊させてもらうぞ」

【久々だな、俺が出てくるのは】

次に出てくるのは俺の中の狂気こと宵闇

「宵闇、俺の体を貸してやる、アイツを殺れ」

【いいのか?? あれはシャルの嬢ちゃんじゃねえか】

宵闇も丸くなったもんだ。前はあんなにとがってたのに・・・今じゃ・・・

【やかましいわ!!】

聞こえていたようだ。

宵闇は咳払いして空気を元に戻すと

【本当にいいんだな??】

「良いんだよ、あれは偽もんだ」

最後にそう言って意識を深く潜らせる。それと入れ違いになるように宵闇が浮上する

|||||

「さて、始めようか、嬢ちゃん」

俺の目は漆黒、つまりは宵闇ってことだ

「行こ???」

嬢ちゃんはひたすら笑っている。なるほど、機械なわけだ。良く似てるが本家には遠くおよばねえな

というかこれで楓が落ちると思ったのか??

(とりあえず避難させないといけねえぞ。被害はできるだけ出したくない)

「わかってる。・・・おいその!! あぶねえから逃げとけ!!」

下にいた小学生とその他に向かって叫ぶ、しかし

「杉崎!! しっかりしてよ!!」

「こんなところで死ぬな!!」

だめだ、聞いちゃいねえ

「おい、白雪!! いるんだろ??」

(え!?!? いんの???)

俺が名前を呼ぶと、俺から見て学園の影になるところから白雪と一夏が出てきた

「ばれてたのね・・・」

「まさかとは思ったが・・・」

「見つからないわけがないだろ」

(いや、俺は全くとっていいほど気付かなかったのだが・・・)

「ずっと見てたんだ、状況は理解してるよな??」

「ええ、一応は」

「まあ一応」

（うわぁ頼りねえ）

「黙ってる楓。白雪は鍵の治療を、一夏は辺りを警戒しといてくれ」

「「わかった（わ）」」

一夏は上に、白雪は下に飛んで行く。これで邪魔は入らない

「お待たせだ、嬢ちゃん」

妖無を展開し、正眼に構える

「敵対行動を認識、迎撃に移ります」

ヤッパリ嬢ちゃんのコピーか。こんなもので良くまあ

（なんだよ、とっととぶっ壊せよ）

楓の様子がおかしい、何があったんだ??

（簡単なことだよ・・・自分の子供を利用しようとするやつが許せないだけだ）

養子だろ???

（そんなことは関係ない。経緯はどうあれ俺の娘だ、その姿形を真似して許されるはずがねえ）

ずいぶんご立腹の様子だ。んじゃまあ・・・

「サヨウナラ。っと」

ハイ・イクニツシヨ・ブレスト

瞬時超加速で背後に回り込み、一刀のもとに斬り伏せる

切断面からは紫電が走り、機械であることが伺える

「楓!! シャルがいっぱいきた!!」

一夏から飛んできた通信を聞くと同時に、センサーに大量の敵対表示が現れる。その数、実に50

「（はぁ???）」

楓と宵闇、シンクロして呆れたため息をつく

（宵闇、変わってくれ。もう我慢ならん!!!!）

「え、ちょ、ま!!」

ああもうじれってえ!!

宵闇を強制的に戻し、蒼紅に戻った瞳で迫りくる敵を見据える。しばらくするとその姿が明らかとなる

「うっわ・・・気持ち悪い・・・」

シャルの容姿はとびっきりだ。でもあれだけ同じ顔が集まっているとさすがに気持ちが悪い  
だってみんな笑ってんだぜ?? 気持ち悪いどころか怖いよ・・・

「白雪、鍵の具合はどうだ??」

「心配無いよ。もともとこの人回復力がすごかったから」

「楓、心配掛けたな」

鍵も大事無いようだ

「男の娘!! 私もISに乗せなさい!!」

黙れ小学生

「仕方ないな・・・こいつを使うか」

俺は紅い指輪を会長に放る

「これは??」

「あんたの専用機『五倭守頑駄無』だ」

「あなた私たちの小説読んでるでしょ!!」

「ちなみにそいつに武装は一切装備されていない。PICもな」

「それはただの拘束具でしょ!!」

会長が盛大に突っ込む。俺としてもこれ以上コントを続けるつもりはない

「鍵、一夏、白雪!! 学校の人間の避難を頼む!!」

簡単な指示を出してシャル軍に近づく

「さて、お前たちの未来を宣告してやろう・・・」

「死だ」

CTを10基と夜叉5基を展開し、両手を指揮者のように振るう

「さあ、舞い踊れ!!!俺の織りなす死の行進曲で」  
デスマーチ

その言葉をトリガーに、シャル部隊は迎撃行動に、夜叉とCTはシャル部隊のせん滅に向けて動き出す

「まずは前奏だ!!!第一章『破壊の旋律』!!!!!!」

高らかに宣言すると今まで個々に動いていたCT2基と夜叉1基が編隊を組み、チームを組んで動き出した

CTの援護射撃を受けながら夜叉が一体を貫き、その傷口にCTが集中砲火を浴びせる。そんな戦い方だ

「どうしたポンコツがあ!!!!」

今回ばかりは手を抜くつもりはねえ。全力で破壊してやる!!

「ハッハア!!!!」

五体ほど破壊したところで次に移行する

「次だ!!!第二章『破滅の哄笑』!!!!!!」

俺が宣言すると、CT達は甲高い音を立てて合体を始める

CTが2基連結し、その真ん中に夜叉が連結する。まるで鳥のような形状になったCT達、『鴉』は夜叉とCTの銃口からエネルギーブレードを展開し、部隊を刻むべく特攻を開始する  
体のすれすれを通り、通り過ぎると同時に切断する

「さあさあどうした・・・」

シャルの放ったマグナムの弾が体を貫通する。腹部と胸部に衝撃、一瞬後に激痛が頭に上ってくる

「がっ・・・」

「楓!?!」

避難を終えたらしい一夏が飛んでくる。それを確認だけして指揮に集中する

「俺は・・・大丈夫だ。それより避難は・・・」

「既に逃げてる、大丈夫だ。俺も加勢する」

「やめろ、鴉達の邪魔だ」

正直鴉達の動きは鈍っている。だが一夏が入ると余計に動きが鈍る

ことになる

あくまで俺の意思に従って動いているからな。白雪が居ないと完全なる邪魔なのだ

ちなみに白雪は会長に拘束されている。何やってんのあんたたち、一応危機だかんね?? わかってる??

「だって・・・」

一夏は不安そうに鴉を見る。視線の先では鴉がシャルに墮とされている。傷口からは血があふれだし視界にもやがかり始めている

「楓!!」

一夏の腕の感触。ああ、倒れかけたのか・・・

「一夏、そのまま支えてくれ、このままやる」

「お、おう」

一夏に支えてもらう・・・というかコレ抱かれてるよな、後ろから。箒が見たら卒倒しそうだ

その頃・・・

箒「おおう!？」

カ「どうしたの箒」

箒「・・・一夏と楓が抱きあってる気がする」

カ「あんたの腐女子ぶりには何も言えないわ・・・」

政「どうしたんだカエデ、箒が腐ってんのはもとからだろう?？」

箒「お前には言われたくないぞ政志!!」

政「んだとお!?!やるってのか!!」

箒「上等だ!!お前にBLの素晴らしさを教えてやろう!!」

千「不毛な争いをするな馬鹿どもが!!大概にしろ」

箒「BLは正義です!!」

千「黙れ!!」

くどすっく

千「何故止めないんだ、月光、大神」

夜&真「面倒だから」

ヴィ『・・・・・・』

カ「あれ??そう言えば一夏と白雪は??」

・・・・まあいいや、そのまま指揮を再開する

「ちときついが・・・・最終楽章『殲滅の協奏曲』」

俺の持つ楽章の中で最後にして終末の楽章の指揮を始める。すると

くカシン!!く

さらに甲高い音で鴉の一部がパージされ、それが集まり再結合して、ビットを形成する

「行くぞ・・・・終焉だ!!」

俺の号令と同時に全てのビットの動きが一つになる。

ちようど軍団を囲うようにサークルを形成する。それが二重、三重と重なり、魔法陣のようになる

「発射!!」  
ファイア

俺の声とほぼ同時に、ビット達が中心にいる軍団に一斉掃射を開始する

「えげつねえ・・・・」



一夏がぼやく。やかましいわ

【主、高速で飛来するISを補足した】

月花が新たな敵の出現を知らせる

「何だって?? 援軍か!？」

【違うな、この情報・・・嬢ちゃんだな】

今度は宵闇が続ける

「シャル!？」

どうやら本家様らしい

シャルはフルパワーの一夏真っ青のスピードで戦闘可能空域まであつという間に到達、俺たちを一瞥すると

「私の体を・・・」

【フルスクエア、発動準備完了】

シャルの体、正確には雛菊が淡く光りだす

「勝手に使うなあああああああああ!!!!!!」

シャルが両手を突き出す。すると光が一点に集まり、次の瞬間辺り一面をオレンジ色の極太レーザーが覆い、シャル軍団は一瞬で塵と化した

シャルの顔はいつものやさしいそれではなく、阿修羅すら半泣きで逃げそうな感じだ。いや、マジで花澤香菜さんが演じていい顔じゃない。あの声が合わない。怖いよ。

『ぶるああああ!!!!!!』とか言っただよ

うわあ、かなりお怒りの様子だ・・・って

「え?? シャルさんや、これ何なの??」

「あ。いたんだ」

いやお前完全に俺たちの事見てたよね、だって目があったもん「ってそれはいいとして・・・こいつらは何だったんだ??」

といっても残ってるのは灰なんだけど・・・

「デュノア社の研究員だった人たちが私そっくりのアンドロイドを作っちゃったみたいだね、その時に楓の事が報道されて、復讐を兼ねて飛ばしてみたんだって」

・・・俺のせいか!?

「で?? お前は自分のアンドロイドを壊すためだけに来たと??」

聞いたって何だがおそらくそれは無い。俺の捕獲もするつもりだろう

「ほんとに捕獲も兼ねてだったんだけど・・・今日はいいかな」

「どうしたよ、お情けか??」

「お情けも何もその状態じゃね・・・」

そっか、俺撃たれたのか。思い出すと痛みがじんじんとせりあがってくる

「これってまずくないか?? 俺死ぬんじゃないだろうか」

「白雪は・・・まだ小学生の相手をしてる・・・」

まだやってたのかあの生徒会長

「白雪!! 楓が!!」

「わかってるけどこの子が!!」

「逃がさないわよ!! さあ!! 私も乗せなさい!!」

「会長!! 結構マジでヤバいんですって!! 楓マグナムで撃たれたんですよ!!」

「え!?! それって普通即死じゃ・・・」

会長が白雪を拘束している手を緩めた。今だ!!

「今だ!! 白雪!! がはっ!!」

大声を出したせいか、最後に若干吐血してしまった

「・・・!! これは・・・」

白雪が俺の傷口を見て息をのむ

「白雪!! 何かあったのか!?!」

一夏が焦ったように白雪に問いかけている。やべえ・・・意識にもやがかり始めた

「この出血量・・・楓の体格からして生命維持の限界はとうに超えている。血が足りないわ」

「なら俺の血を!!」

「わかってる!! でも・・・」

「でも、何だよ!?!」

「ここに・・・楓に適合する血液を持つ人はいないわ」

「・・・!!」

一夏が息をのむ

「・・・じゃあ、楓は助からないのか?」

・・・そんな弱弱しい声出すなよお前・・・

「一つ、手はあるけど・・・楓の体に負担がかかる。今の状態じゃ・・・」

「【迷っている時間は無いよ】、【とっととやれ】」

自分の口から発せられた、良く知った二つの声、それを聞いて、俺は目を閉じる

意識が・・・落ちてく・・・

「【早くして!! ぼくたちの力で最低限の生命維持はできる!!】」  
一夏は楓の声を聞いて思わず呟く

「椿姫・・・??」

「【椿姫だけじゃねえ!! 俺たち全員の力でやってんだ!!】」  
続いて宵闇の声が楓から発せられる

「・・・白雪!!」

「うん!! 移動型治療用ラボ『茜』展開!!」

すると白雪に周りには手術室の様なものが展開される。同時にそれから注射器の様な物が楓の腰に突き刺さり、血を抜いていく

「【くッ!!】」

虹色の瞳を見開き、わずかにのけぞる楓

「白雪!!」

「黙って!! 楓の血液型を解析・・・完了!! 続いて骨髓の増殖、同時に赤血球の増殖を開始」

白雪は異常なまでの早さでラボを操作していく

「増殖・・・80%完了、銃弾の摘出・・・成功、傷口の縫合・・・完了、血液・・・作成完了。患者の体内に注入・・・成功、異常なし。よし、治療成功だよ」

治療開始からわずか5分、致命傷だった楓の顔は、とても安らかに眠っている

「良かった・・・!!」

「【一夏!! 真下から熱源反応!!】」

白が一夏に警告する、刹那、一夏のすぐ横を紫のエネルギーが通過する。一夏が下を見ると、紫のハンドガン『阿片』を構えた鍵が厳しい瞳で一夏を見据えていた

「いきなり何すんだよ!？」

「お前が・・・楓のほかにISを使えるっていうやつか」

「お・・・おう。織斑一夏だ」

「ん・・・んう」

楓が目覚めた

「ん・・・んう」

どうやら俺は一命を取り留めたらしい

目を開くと、険しい顔の一夏、つーか近えよ

続いて一夏の見ている方角、つまり鍵を見る。阿片を構えたまま微動だにしない

ほお、これは・・・

「鍵!!!」

「お、楓!!! 無事か!!!」

「そんなことはどうでもいい!! 一夏に何で銃向けてんだ!! まさかとは思うが「自分以外女のハーレムがうらやましい」とかだったら刻むぞ!!!」

「・・・!!!!」

図星かよ、なんて簡単な思考回路してやがんだこいつ

「大丈夫だ。こいつは超唐変朴念仁だからな、近くに女がいたところでどうこうなるわけじゃない」

まあ、フラグ乱立するけどね

「しかし!! そこにいるだけでうらやましいんだ!!」

「死ね阿呆が」

右手に兼雅、左手にリオルを展開、同時に発射する

「のおおおお！！！！！！！！！！」

轟音とともに砂ぼこりにのまれる鍵。自業自得だ馬鹿め

「あれ…大丈夫なのか？」

一夏が心配そうに見ている。いや、お前のせいでもあるんだぞ？多分

「まあ死なないだろ、鍵は丈夫だからな」

IS持ってるし

「それより一夏、お前なんでここにいるんだ？学校だろ」

「千冬姉に聞いた」

なんで俺が北海道にいと知ってんの？怖いよ？だって教えてないよ？？

「まあいいか、とりあえずお前たちは帰れ」

こいつらがいると危険だ

「私も？」

シャルがキョトンとしている。あれ？

「お前学園から来たんじゃないのか？」

「私はあれを破壊しに来ただけだよ」

そう言っってシャルは灰の山を指差す

「なんだそりゃ…」

思わず項垂れる

「うん、ほんとは捕獲したいんだけど…」

わずかに目の光が無くなる

「今回は見逃してくれ、後生だ」

全力でお願いすることにする

「楓、この美少年は誰だ。真冬ちゃんが目をキラキラさせてるぞ」  
鍵が少し警戒しながら聞いてくる。美少年？

まじまじとシャルを見る。シャルの服装はタキシード？みたいな男  
っぽい服だ、確かに男に見えなくもない。だが

「鍵よ、シャルはお前の大好きな性別だぞ」

「何！？そんなはずは…」

鍵がシャルを嘗め回すように見ている。正直言って殴りたい。非常に不愉快だ

鍵の目が足から腰と続いて胸で止まる

「……………」

わずかに身を振るシャル。すまない、馬鹿なんだこいつは：

「ホントだ、女の子だったのか！！」

鍵がのけぞる。そこまで驚くか？

「楓…この人殺している？」

黒シャル発動！！

「やめとけ、こいつはバカだけど一般人だ」

バカだけど。バカなんだけど！！

「いつまで私たちを置き去りにするつもりよ！！」

下で会長がわめいている。あれで高校生ねえ……

「まあ何だ、降りるぞ」

俺がおり始めるとシャル、白雪、一夏、鍵と降りる

「で？？何だ児童会長」

「児童じゃないわよ！！立派な高校生よ！！」

「よしよし。そう言う夢を見たのかい??」

「知弦く！！男の娘がいじめるうく！！」

泣いてしまった……楽しかったからいいけど

会長をなだめている黒髪の……あれ高校生じゃないよね、きっと先生だよ？？

「あの……センス??」

とりあえず確認してみる

「あら、私は先生じゃないわよ??アカちゃんと同じ、高校3年生よ」

「え????」

ほんとに高校生だったよこの人、つか俺らより年上だったよ知弦さんは会長さんを愛でながら

「キーくん。なんか増えたみたいだけど??」

と鍵に聞いていた

「ああ、そうだ楓、この人たちは一体??」

俺に話を振ってくる

「まずは・・・こいつは最初にISを使えることが分かった男、織斑一夏だ。こっちは俺がデュノア社を壊滅させたときに気に入ったから引き抜いた朱雀白雪。んでこのタキシードきたのがフランスの代表候補生、シャルロット・朱雀だ」

一通り説明を終える。すると人外ガールが

「白雪って人を引き抜いたって言ってたけどよ、会社かなんか持ってたのか??」

と聞いてきた。俺が言おうとするより早く白雪が

「楓はあの超大企業『クリムゾン・ローズ』の社長ですよ」  
と言ってしまった。これ秘密事項なのに・・・

『クリムゾン・ローズ!?!』

・・・まあ、そりゃそうだよな。驚くよね普通。って知弦さん???  
あんたは何でそうあくどい顔してんの??

「クリムゾン・ローズって・・・あの超高性能スパーリングマシンを開発した??」

人外ガール深夏。彼女の目の付けどころは恐ろしい

「ああ、『クラッシュくん』か。もともとは俺のストレス発散用のマシンだったんだけどな、俺の攻撃に耐えられるようにしていくうちにどんなに殴ってもこわれなくなった。今じゃ村正程度なら耐えられるぞ?? いるか??」

「ほんとか!?! サンキュー!?!」

クラッシュくんを作成、深夏に渡す

ちなみに村正は本気ならたいいの奴なら一撃で葬り去る位の威力があるぞ!?!

「あのあの!?! あの伝説のBLゲームを開発した会社ですよね??」  
次に目をキラキラさせながら腐女子街道まっしぐらな子が詰め寄ってきた。全体的に儂げな印象を持たせる。色白な女の子だ。こいつ



がさつき鍵が言ってた真冬ちゃんか

「『俺と兄貴の蜜月を』か。あれを知っているって事は相当だな」  
ちなみに製作者は箒。アイツもいい感じに腐ってやがる

「あれっでもう販売されてないんですね・・・真冬、持っていないので残念です」

「そっか。ほい、これだろ?? 後続編である2、本来非売品であるノベライズだ」

ポンポン出しては真冬ちゃんに渡す。これも製作者は箒である。一度プレイ画面を見せてもらったが登場する男が何処となく俺や一夏に似ているのだ。見た当初は破壊してやろうと思ったのだが・・・  
「わぁ!! ありがとうございます!!!」

真冬ちゃん大喜び。社会的に疎外されがちなこういう子たちの笑顔を作るのも俺たちだからな・・・

「次は私よ。CR社・・・あの伸縮自在の鞭を作った会社よね。あとあのスタンハンドガンも」

「『大蛇くん』と『ビリビリくん』か。あんたも物好きな・・・」  
もともとその二つはIS用に作ったんだが・・・という訳か小型化して護身用携帯武器にチェンジした

「これとこれだろ??」

構築して渡す。すると

「ふふふ・・・」

いきなり笑い始めた!?

「鍵、俺はいま重要なミスをしてしまった気がするよ・・・」

「そうだな、お前は俺たちの未来を絶ったのだよ、楓・・・」

それは大変だ、まあ安全装置付いてるから大丈夫だろあぎやぎやぎやぎやが!!!

「楓!??」

今のは・・・スタンハンドガン!?

知弦さんの方を見る。うわぁ、容赦なく撃ってきたよこの人・・・  
しかも最大出力で

「なにするん！？死ぬるぞ！！」

右手にスタンライフルを構築して銃口を知弦さんに向ける

「あら？？それは見たこと無いけど・・・」

「本来なら一カ月後に発売される奴だ！！」

「それ出しちゃいけないんじゃないの??」

「ごもっともです」

ライフルを仕舞う。すると最後に残っていた小学生会長が偉そうに

「楓！！私を社長にしなさい！！」

ハイドーン

「あがががががが！！！！！！」

スタンハンドガンの最弱で返答してあげた

「何してんの楓！！？」

「いや、偉そうな小学生が居たからちよつとね」

「うう・・・さすがに社長は言い過ぎたわね・・・改めて、コホン。

楓！！私たちを社員にしなさい！！」

「・・・べつに良いんだが??」

そう、CRのたった一つの条件は俺が気に入ることだ。その点では既にクリア済みだ

「ふえ??」

いや、聞いたってキョトンとするなよ

「CRの採用基準は一つだけだ。俺に気に入られること。お前たちはすでにその基準をクリアしている、だから別に問題はないぞ。というかお前たち巻き込まれたけど良いのか??」

巻き込まれてしまった生徒会役員達に聞いて見る

「あたしは構わないぞ。新しいマシンの開発とか出来るんだろ??」

深夏OK

「え・・・と知弦さんは??」

「私も作りたいものがあつたから構わないわ」

知弦さんOK

「真冬ちゃん・・・はOKだろうね、目がキラキラしてるよ」

「はい！！あのBLゲームを作った人と一緒に仕事ができるなんて  
光栄の至りです！！」

真冬ちゃんOK

「鍵・・・は良いよな別に」

「ああ、給料も出るんだろ??」

「ああ、多分普通の会社の正社員の2倍近くはな。だいたいひと月  
百万位だっけか??一夏」

「まあそんなくらいだったな、吃驚したぞ最初は、いきなり口座に百  
万だからな」

「百万!??」

「まあ規模が規模だから。俺の総資産は・・・聞いたら人が絶望す  
るくらいはあるぞ」

「お前相変わらず怖いな・・・」

鍵OK

「で??会長さんは何を作りたいんだ??」

「そうねえ・・・お菓子!!」

「良いだろう。うさまろを超える新商品を作るといい」

という訳で社員が五人増えたのだった

「太陽！！太陽！！」

オータムが怒鳴る。ここはイレギュラー。つまりは亡国企業の本拠地だ

「怒鳴らなくても聞こえてるよ、オータム」

太陽はオータムの正面まで歩き、止まる

「太陽、こいつが今日からお前のパートナーだ」

オータムの傍らに控えていた少女、その顔を見て太陽は顔をひきつらせる

（セシリア！？いや・・・セシリアにしては幼い・・・）

「はじめまして太陽さん。セシリアの妹、ルシア・オルコットです」

「セシリアの・・・妹」

太陽はマジマジとルシアの顔を見つめる。確かにセシリアの様な勝負気な様子はなく、むしろ大人しい風に見える

「ルシア・・・といったか、お前の専用機は何なんだ？？」

「私の専用機は・・・『蒼き涙<sup>ブルー・ディリッパ</sup>』です」

「セシリアのBTの姉妹機か・・・」

蒼き涙、蒼い雫の姉妹機であり、サイレント・ゼフィールのさらに後継機に当たる第三・五世代機だ

「オータム、私たちはどこへ向かえばいいんだ？？」

オータムは醜く口をゆがめて

「お前たちが行くのは東京だ」

「また日本！？」

思わず突っ込む太陽だった

## 17話

### 日本編2

不敵に微笑むオータム、特に気にせず増える社員

お疲れ様です〜椿姫デス

シャル軍団・・・ほんとにいたら怖い気がしますね

とうとう前々からはっていた複線、セシリアの妹登場です  
蒼き涙、翻訳サイトで変換したら『ティアーズ』でしたよ  
んでもって雫を変換したら『ドリップ』でしたよ

ちなみに出てきた生徒会の方々は椿姫の愛読書『生徒会の一存』シリーズのキャラクター達です

これからも気に入ったキャラをガンガン出していきたいと思います  
ので、どうか温かい目で見守ってください。今のところは『琴浦さん』と『姫宮さんの中の人』のキャラを出したいと思っております  
でわでわまた次の話でお目にかかりましょう

## 18話

### 日本編3

ルシア・オルコット、彼女は大食いだった（前書き

どもども、椿姫です

夏休みになって執筆に勢いが出てきた今日この頃です

夏の暑さ何ぞふきとばせえー！！！！

では、行ってみましょう

## 18話

### 日本編3

ルシア・オルコット、彼女は大食いだった

前回のあらすじ!!

楓「確かシャル軍団が灰になったよな」

シャル「それだけだと皆さん理解しないんじゃない?」

鍵「俺も新しい力を手に入れたぞ!!」

楓「名前植物だけだな」

白雪「楓死にかけたよね」

楓「そんなこともあったな。シャル軍団に撃たれたんだよな」

くりむ「そして私が神に!!」

全『なってねーよ』

太陽「私たちの方もいろいろあったぞ」

楓「ねえそれ言って良かったの??俺たち知らない設定なんだけど」

一夏「良いんじゃない」

楓「では本編スタート!!」

一夏「扱いが酷いぞ!」

「えーっと・・・だから・・・」

俺はのっけから呆れている。なぜなら

「私たちは帰らないわよ」

「そうだ!! 俺たちも楓と一緒に行く!!」

俺の目の前にいるのは白雪と一夏。つまり・・・

俺は一連の事件の後始末（主にシャル軍団の灰を風に乗せて飛ばしたり弾丸を取り除いたり記憶消去を敢行したり）をし、生徒会の部屋でまったりしていた一夏と白雪、シャルにばれないように北海道を後にするはずだった。しかし知弦さんの策略によって眠らされ、拘束されて、一夏達の前に放り出された

「なにすんだよこらあ!!! いきなり眠らせて縛るってどういうこと!?!」

「その通りの意味よ。一夏と白雪に頼まれたからやったの」

「しかもこの縄切れねえぞ!!! 最大限鋭くした風なのに!!!」

「ZKNだから」

「なんだそりゃあ!!!!!!」

「Z E T T A I N I ・ K I R E N A I ・ N A W A（絶対に、切れない、なわ）」

「そのまんまかい!!!」

なんてコントを繰り広げつつ、縄を外しにかかる。簡単なことだ、切れないなら外しやすい

「ほいっと・・・で?? お前らはどうして俺に着いて来ようとするんだ??」

わずか数秒で縄の結び目をほどき、一夏達を睨みつける。この目に耐えられないならいても邪魔なだけだからな。多分耐えられないだろう

しかし、俺の予想は外れた

「楓、その眼で俺たちを試してんのかもしれないけど、そんなんじ



や今の俺たちはビビったりしない」

一夏は正直わかっていた。オメガの城でも真っ先に殺気を乗り越えて踏み出したからな

「そう、私たちはもともと相当な覚悟の上にここにいるわ」

・・・まさか白雪まで耐えるとは。出会った当初の臆病な性格はどこに行ったんだよ

「私も行くよ、さっきフランスの偉い人とケンカになったから」

・・・お前は急いで仲直りしてきなさい。シャル

「とりあえず俺の眼に耐えられたのは褒めてやる。しかしな、俺が歩むのは道案内も何もない、真っ暗で血塗られた道だ。本来お前たちみたいなたまごうな道を歩んでいる者には想像もつかないような世界だ。いまならまだ間に合う、ここで学園に帰り、何も無かったかの様に過ごせば、いつも通りの日常に帰れる。しかし、進んでしまったら戻れない。あとで後悔するような道なんだ。だから・・・」

「「そんなことはどうでもいい」」

言葉がさえぎられる。見ると三人の目には、確固たる覚悟があった

「・・・そうか。残念だ」

俺は両手をまっすぐにのばす。そして、ある契約の呪文を呟く

「呪え、『スペル・エラー』彼らの俺に関する記憶を消去せよ」

スペル・エラー。どこかの生徒会長が使う剣ではなく、記憶消去の呪文。それを一夏達に向けて放つ

「鍵、こいつらを学園に運んでやってくれ。頼む」

「良いのか?? こいつらの記憶を消しちゃって」

鍵にしては珍しく、男である一夏も心配している

「俺が消したのは俺がいたという記憶だけだ。ちよっと混乱するだろうが不自由なく過ごせるだろ」

「あたしたちの記憶はいいのか??」

深夏が聞いてくる

「本来なら消したいところなんだが・・・お前たちはあまり関わりが少なからな、わざわざ力使って消す必要もないってことだ」

「そっか……」

なぜか落胆するような声を出されてしまった

「鍵、俺はそろそろ行く。お前のハーレムを守るのはあたりまえなんだが……出来ればで構わない。俺の仲間も助けてやってくれ。俺の代わりに」

「……ああ、任せろ」

鍵の返答を聞き、椿姫を展開する

「じゃあな、生徒会の諸君」

そう言って、上空に飛び立つ

さて、次は東京にでも行ってみるか……秋葉原とか見てみよう  
そう決めると、俺は東京の方角へ針路を取り、ゆったりと飛び始めた

S i d e

太陽

「太陽さん、これは何ですか?」

「それはアニ●イトだ」

「太陽さん、それは?」

「メイド喫茶だ」

「太陽さん」

「お前は観光にでも来ているつもりか!」

秋葉原は珍しいのか、あっちへふらふらこっちへふらふらしているんなものを聞いてくるルシアに半ば反射で受け答えしつつ、溜息を吐く

(夜明・・・最近あってないな)

頭に浮かぶのは銀色の髪をした少年。つまりは夜明だ

「太陽さん、あれは?」

「吉●家だ。ってあれはどこにでもあるだろう」

亡国企業とはいえまだ12歳、中学一年生くらいなんだ、思春期真っただ中なわけで・・・

「太陽さん!! なんか18禁って書いてあるお店が!! 入っていいですか?」

「まってまって!!!! そこは教育上よろしくない!!」  
ルシアに突っ込み、やってられんと少しばかり離れる。というかす

ぐそこにあるアンティークショップに興味があつたのだ

「ルシア!!! 私は少しこの店にいるから、勝手にどこかに行くな!!!」

「はい!!!」

ルシアの声を聞きつつ、扉を閉める。

「おお・・・なんというか、すごい・・・」

そこかしこにある様々な種類の雑貨に目を奪われ、ルシアの事を気にしている自分が何処かへ行ってしまった

side

楓

「付いたけど・・・なんじゃこりゃあ」

秋葉原は常時人が多い、それを上空から見ても、吐き気がする

「いっそ上空で吐いてやろうか・・・ん??」

一瞬間にチラついた不審な考えを消去し、人ごみに目を凝らす

「あれは・・・セシル??」

どこかで見たような金髪、しかしロールが無い

「って事は・・・セシルの妹か。ちょうどいい、セシルの恥ずかし

い話でも聞くとしようか」

とはいえ人ごみにIS展開して突っ込むと死者が出るので少し離れたところに降りて椿姫を解除する

「さてと・・・しゃきーん」

楓が構築したのは某ライダー図鑑のバックル

「こいつをやってみたかったんだよねえ・・・これこれ」

《アタックライド・クロック・アップ》

瞬間、楓を除く全ての時間が停止した。否、楓が時間の概念すら超えて行動しているのだ

「えーっと・・・いたいた」

止まったままのルシアを発見し、近づく

《クロック・オーバー》

そんな電子音声の後、止まっていた時間が動き出した

「もう時間切れかよ、俺が動いた方が早いぞ」

「あなたは??」

その声の音源に目を向けると、おそらくセシリアの妹であろう、ルシア??が俺の顔を覗き込んでいた

「おお、セシルの妹だろ、お前」

「セシル?? 誰ですかそれは」

「あ・・・セシリアの」

「お姉さまを知っているんですか??」

どうやらやっぱりそうらしい

それにしてもお姉さまって・・・

(よくここらにいる奴らに拉致られなかったもんだぜ)

そう思いながら周りを見ると、やっぱりいたよ、ルシアを凝視して息を荒くする変態が。ま、放置するけど

「名前、なんて言うんだ??」

ルシアだろうケド

「はい、ルシア・オルコットです」

はい大正解

「ルシア、ちょっとそこの喫茶店で話したいことがあるんだけど、良いか??」

「別に、良いですけど・・・」

辺りを見回し、比較的まともな（ルシアの教育上問題ない）店を発見、ルシアの手を取り歩き出す

「あの・・・」

「ん???どした??」

「お名前、なんて言うんですか??」

「そう言えば名乗って無かったな。俺は朱雀楓、よろしくな」

「楓・・・お兄様」

やめてそんなロリコンが歓喜しそうな路線に入らないで

「とりあえず、そこだな、まともそうだ」

「楓お兄様、あそこに入ってみたいです」

「え???あれって・・・メイド喫茶だね??」

「はい!! チェルシーのような方が給仕してくれるんですよね!!」  
チェルシー。確かセシルのメイドで幼馴染みだったか

「残念。あそこはそんなに崇高な場所じゃないんだよ、あれはさえない男の最後の休息所さ」

嘘は言っていないもん

「そうなんですか・・・残念です。じゃああそこ!!」

「よ・・・吉●家・・・だと??」

「はい!! 『ギュードン』なる物を食べてみたいです!!」

元気いっぱいルシアちゃん。しかしチョイスが・・・まあいいか

「よし、行ってみようか」

「やった!!」

とりあえずはぐれないように手をつなぎ、吉●家に入る

「いらっしやいませ・・・楓??」

「おお、義久。久しぶりだな」

席に着いて、さてどうしようかと考えていると、俺の親友である真鍋義久が声を掛けてきた

「どしたん?? バイトなんかして」

「いやちよっと、琴浦にプレゼントをな」

琴浦、というのは真鍋曰く「心が読める」らしい。そいつはいないのだろうか

「.....」

いた、完全に反応した。普通だったらあの格好不審者なんだが.....もしかしたら勘違いか??

「義久、その琴浦ってやつでえろい妄想をしろ。3秒でだ」

「.....」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

義久が妄想を始めると明らかに挙動がおかしくなる、やべ、面白い「もういいぞ。それと牛井並と大盛り一つずつ頼む」

「ぎゅーどん!!ぎゅーどん!!」

「わかった。では少々お待ちください」

最後に店員らしく言い残し、義久は厨房に消える

ルシア、ちよっと静かにしてようよ。キミ一応中1でしょ???

「.....」

さて.....アイツをどうやってからかうか.....そうだ!!

「!!」

（義久の恥ずかしい話をしよう）

「.....??」

（アイツは一回俺を女だと間違えて道のど真ん中でハグしてきたんだ。おい琴浦さん、駄目だよ箸を折っちゃあ。牛井食えなくなるよ）

（なんで私の名前を!?!それに真鍋君とも仲よさそうだったし.....）

心を読むなんざ朝飯前なので聞こえるのだ

（やっぱりお前が琴浦か。心を読めるのも困りもんだな）

（私の心を読まれてる!?!）

いや明らかな挙動不審だからあんた

（俺は朱雀楓、よろしくな）

（あ・・・琴浦春香、です）

（さっそくで何だが・・・義久のどこに惚れたん??）

（な・・・!! ななな何のことでしょうか!??）

「ははははは!!!! 悪い悪い、冗談が過ぎたな、まああんたなら義久と一緒にいても平気だろうな」

「いきなりなんですか!! もう!!!!」

怒りながらも此方の席に移動してくる琴浦さん

「その格好は不審者だぞ」

「わかってますよ・・・脱げばいいんですよ」

「別にコートはいいけどそのサングラスと帽子、それとマスク」

「ふしんしゃー!!」

容赦ねえな、ルシアよ

「でも・・・これ外すと真鍋君にばれちゃう・・・」

「そうか、なら・・・」

メイク道具を構築、ちゃちゃっとメイクを終わらせる

「お待ちどうさま・・・楓、いつからお前はモテ期に入った」

「知らんわ。ルシア、これが牛丼だ・庶民の強い味方、美味いんだぞ」

「いただきます!!!!!!」

その勢いがかつつくかと思いきやそこは貴族、余裕を持って食べ始める

「どうも、私、楓の親友の、真鍋義久です」

ルシアの様子を見守っていると、義久が琴浦さんを口説いていた

「は・・・はあ」

「お前浮気はだめだぞ、琴浦さんに失礼だ」

「大丈夫だ、ばれやしないよ」

いい笑顔だ、それが絶望に歪むともっといい。どれ、やってみるか

「だとよ、琴浦さん」

「・・・へ??」



俺の言葉をとっさに理解できなかったのか、固まる義久。一方琴浦さんは・・・

「真鍋君??」

わーお、怒り心頭、箸が三つほど犠牲になってる

「琴・・・浦??」

「なあに?? 真鍋君・・・」

不意に、琴浦さんの顔が赤くなる、何かと心を読むと

（琴浦が・・・異常なまでにきれいになっているだど!? ヤバい、写真撮りたい!! 待ち受けにしたい!!）

「変態かお前は」

とりあえずといった感じに突っ込み、牛丼を食べる

うむ、相変わらずここの牛丼は美味いな。・・・ルシア、お前自分のあったろ

「もしかして足りないのか?? 食うか??」

「え!?! いいんですか!?!」

とか言いつつ既に食べ始めている。あ、俺の箸使われてる

「楓、どうやって琴浦をこんなきれいにしたんだ。もともと可愛い  
が、この可愛さは尋常じゃないぞ」

「ま・・・真鍋君」

何やってんだかこのバカップルが

「どうもこうもない、ただメイクしただけだ」

牛丼はルシアが食べてるので、セルフの水を飲んでそう告げる

「どうやったらこうなるんだよ。人間業じゃないぞコレ」

「そうでもないぞ?? 世界トップクラスの奴ならこれくらいごろごろ」

「トッピクラスだからだろ!? 普通の人間でこれはいないって!!」

「あーもううるせえ!!! ルシア、食い終わったか!!」

「今ちようど食べ終わりました」

ならちようどいい、早く出ないと・・・

「あの・・・朱雀君、私も、教えてほしいんだけど・・・」  
「・・・仕方ねえな」

「まずはコレで目元を、次にこれで頬をするんだ。それから・・・」

（10分後）

「・・・最後にこれを使って終わりだ」

「なるほど・・・」

「どうやら納得してくれたらしい」

「とりあえずこれがメイクの手順を書いた紙だ、コレ通りにやればできるはずだ」

「最初からそれ渡せばよかったんじゃない」

「じゃかあしい。ルシア・・・お前それ何杯目??」

「5です」

「あ、そう・・・」

この子見かけによらず大食いだぞ。セシリア、苦勞したんだろうなあ・・・

「とりあえず会計だ、義久、これで足りるか？」

必殺、札束

「・・・って札束出された俺はどうすれば」

「とりあえず一枚あれば足りるだろ。他はお前がとっておけ。琴浦さんにプレゼント買ってやるんだろ」

「でも・・・」

「俺を誰だと思ってやがる。CR社の社長だぞ」

「そう言えばそうだったな」

「そう言うことだ、んじゃ、またな」

「ああ」

そんなやり取りをした後、俺とルシアは店の外に出る、そこには

「その君!! おとなしく人質を渡しなさい!!」

警察が銃を構えて待っていた

「 .....  
ふえ??:?」  
「」

## 18話

### 日本編3

ルシア・オルコット、彼女は大食いだった（後書き）

バイトに落ちまくって意気消沈の椿姫デス

まさかの超展開！？一応伏線は張っておいたのですがわかりましたか？？

ちなみに警察呼んだのは太陽ではありません。他の人です

最近タイピングスピードが地味に上がってきました。進歩です

今回は日本編4です。この国ごとに5つずつエピソードを書くつもりです

そしてコラボメンバーを増やすことにしました。

以下のメンバーを出すつもりです

- ・『ネクラ少女は黒魔法で恋をする』より、空口真帆
- ・『蟲と眼球とシリーズ』より、眼球抉子、殺菌消毒、宇佐川鈴音、賢木愚龍
- ・『黒姫のユズハ』より、レン・リーンバート、ユズハ

椿姫の読んでる本です。すいません、分かりづらいですよね・・・

次回は出てくるキャラのおさらい、というかコラボキャラの説明と本編での役割を掲載します

## オリキャラ、ルシアの説明とコラボキャラクター（前書き）

コラボキャラとルシアの説明です

コラボキャラの途中からはまだ出ていないので出てきたら本編での役割を書き足したいと思います

## オリキャラ、ルシアの説明とコラボキャラクター

オリジナルキャラクター

ルシア・オルコット

本編にはいない、セシリアの妹

12歳、つまり中学1年生だが、その精神年齢はお子様  
意外と大食い（吉●家の牛丼を5杯平らげる）

ブルー・ディリッブ  
専用機は蒼き涙

なぜか亡国企業出身

生徒会の一存

本編の中では最もかかわりが多いとされる小説のキャラ  
長期にわたって出る可能性あり

・杉崎鍵

碧陽学院生徒会の副会長を務める高校1年生

エロの塊であり、平然とセクハラ発言をする等、節操がない

本編では楓の親友として登場。専用機『鳥兜』を使用し、一夏おも  
超える才能を発揮する

おそらくまだまだ出てくると思われる

・桜野くりむ

生徒会長を務めるロリ要員

自分を神か何かと同一視しているちよつと痛い子

本編でも上から目線で相手をいらいらさせる才能を遺憾なく発揮、  
いい感じに突っ込み要員と化した

一応専用機は持っているが完全にネタ用なので楓に改良を依頼、現  
在整備中

・椎名深夏

鍵と同じく生徒会副会長を務めるthe・人外ガール

楓と本気ではないにしてもほぼ互角に戦えると、本編でも人外ぶりを  
発揮、おそらく地球最強はクリリンではなく彼女であると思われる  
おそらく訓練機くらいなら破壊できる。

・椎名真冬

生徒会会計の少女

人外深夏に元気やらその他諸々を吸いつくされたかのような色白B  
L少女

CR社の作った超マニアックBLゲームを知っている等、本編でも  
そのいろいろと残念な才能をフル活用。しかし本編に何ら関係ない  
のでそのままにされた

・紅葉知弦

生徒会書記

ドSで破滅思考の美人

この人は絶対高校生ではない  
彼女もまた、本編にあまり関係が無いのでその片鱗しか見せられなかった

・琴浦さん

吉●家にて登場

ちょっとしたギャグとして登場した  
どうやらISは持たないらしい

・真鍋義久

エロスの塊2

エロ妄想で琴浦さんをからかうだめな彼氏。でもこっそりプレゼン  
トを買うためのバイトをしていたりとひそかな所でいい奴

・琴浦春香

心の読める少女

それが原因で本編では楓に弄られる結果に  
楓がメイクを施すと別人のようになる

姫宮さんの中の人

・姫宮ちとせ

高校三年生



明るい髪に凜とした顔つきだが、実は中の人がいるらしい  
実は、『外の人スーツ』というスーツらしい。メカニズム的にはき  
っとケロロ軍曹のあの人間みたいなスーツ

・姫宮ちとせ（中）

こっちが本当の姫宮ちとせ  
ちっちゃい、臆病、大人しいとマジロリコン歓喜な女の子  
純人にべったり

・星野純人

わけあってちとせの中の人存在を知っている数少ない人間  
スポーツ、勉強、全てにおいて平凡という典型的主人公

蟲と眼球とシリーズ

・眼球抉子（グリコ）

不老不死の力を持つ『林檎』を体内に宿す少女  
千年生きているらしい。その所業は神様たちも知っている  
特徴的なオオカミヘア、銃のごとき眼は何者すらも内側を読むこと  
を許されない  
名前の通り人の眼球を抉るのが好き

主な武器はスプーン。投擲したり突き刺したりやりたい放題  
一人称は「グリコ」

口癖は「眼球抉っちゃうぞ」。マジでやるから林檎を持っているか  
不死じゃないと大変なことになる

今までにも何人も眼球を抉って殺しているが、賢木財閥によっても  
み消されている

・宇佐川鈴音

体内に『林檎』をもつ少女

あらゆる意味でノーマル、林檎があろうとあまり関係が無い

やさしく、グリコに眼球を抉られたこともあるのに仲良くなれる懐  
の広さを見せる

グリコ大好き

・殺菌消毒

体内に神を7分割したうちのひとつ『大きな欠片』を持つ女性

グリコや鈴音とは違い、大きな林檎を持っているため、特殊な能力  
を持っている

主に『蟲』と呼ばれる化け物相手に戦っている

職業はナース、本名殺原美名

蜜姫という妹がいる

・賢木愚龍

体内に『林檎』を持つ男性

鈴音と付き合っており、彼女のことを『閣下』と呼ぶ  
人間としてはパーフェクト、しかし戦闘に関しては深夏には遠く及ばない

ネクラ少女は黒魔法で恋をする

・空口真帆

ネクラな女の子

しかし脳内では超饒舌な内弁慶  
とあることから人を好きになってはいけないことになっている

黒姫のユズハシリーズ

レン・リーンバート

文様師の少年

中性的な顔だちで良く女装させられている  
常にユズハと一緒にいる

・ユズハ

伝説の『姫』の少女

甘いものに目が無く、わがままな性格

楓の正体を一見して見抜いた唯一の存在

登場 I S

ブルー・デイリツプ  
蒼い涙

イギリスの第3・5世代機、サイレント・ゼフィルスの後継機

B T兵器を大量に使用、遠距離はもちろん、実験段階ではあるがB

T近接兵器も導入されている

セシリアを超える狙撃性能を有しており、B T v e r?すらも凌駕  
する高性能機体

機体カラーは深みのある蒼

見た目はサイレント・ゼフィルスと同じ

兵装のイニシャルがすべてB Tになるのも特徴

## 兵装

アルト  
B T v e r A R T

蒼い雫の初期装備よりも簡単に操作でき、出力も上がっている  
連結することで貫通性能がつく。蒼い涙に収納されているのは全部  
で10基

ブラッティ・トゥライ

見た目は近接ブレードだが実態は雪片二型のようにビームで刀身を  
形成するレーザーブレード  
B Tらしくレーザーの部分の形状を自由に変更でき、複雑な形も思  
いのまま

ブラインド・トルネイダー

ルシアが主に使うB Tハンドガン  
実弾とレーザー、装填数は少ないが切り替えることで両方を使用で  
きる

全部で4丁収納されており、シャルほどではないがほぼ瞬時に切り  
替えることができる

鳥兜

鍵の専用機、見た目は紫の白式に背部スラスタ―が天使の羽根のようになっている

武装を始め、全ての名前が植物の名前になっている  
珍しく武装の8割が防御用と正に『守るためIS』  
しかし数は少ないが攻撃兵装の威力は尋常ではない

阿片

紫のハンドガン  
威力的にはパイルバンカーとほぼ互角  
装填数は8発

唐櫓

拡散型粒子シールド。椿姫の攻撃を防ぎきることから既存のISではまず傷一つつかない最硬の防御力を誇る

## 水蜻蛉

平たく言えばシールドビット  
粒子シールドを展開でき、見た目と裏腹に防御範囲は広い

## ペンタグラム 五芒星『椀』

水蜻蛉を星のように配置してその間の空間に粒子シールドを展開する星型の盾

楓はこの使い方を想定しておらず、鍵が自分で作ったと思われる

## オリキャラ、ルシアの説明とコラボキャラクター（後書き）

きつとまだまだ増えますよ

### コラボキャラ募集

ラノベで面白いのがあったら教えてください  
読んでそのキャラクターを出しますので

では



## 19話

### 急変、世界の選択（前書き）

急展開！？な感じでお送りいたします

## 19話

### 急変、世界の選択

前回のあらすじ!!

- ・ 楓、一夏達の記憶を封印、東京へ
- ・ そこでセシリアの妹、ロシアと出会う
- ・ 東京にいた親友の真鍋義久と偶然再会、義久の彼女である琴浦春香で遊ぶ
- ・ ルシアとともに吉●家を出た直後、警察達に銃を突き付けられる

「大人しく人質を渡しなさい!!」

「誰が人質か、刻むぞコラ」

威勢のいい女性警察官に絶対零度の視線をプレゼント、気絶してしまふ

「ん?? あれは確か・・・」

良く見ると先ほドルシアを見て息を荒くしていた変態がにやにやしている。アイツか、この騒動の発端は

「おいそこの下種!! にやにやしてねえで男なら真っ向から来いよ!! つつてもこんなただの人間の集まり、1分もたねえがな!!」  
強がりでも何でもない。本心だ

「・・・ブフフ・・・誰がまともにやるか、この僕の頭脳で考えた最高のシナリオを遂行してもらうよ」

変態はそう言って下品に笑う。豚の方がまだ親近感わくぞ、気持ち悪いことこの上なし

「そのゲームとアニメしか入ってないすっからかんの頭でか??? おいおい、自分の力を過信しすぎじゃねえか??」

「キミがどれだけ強くとも所詮人間、警察に、ましてや拳銃に敵う訳が無い」

あれ??? こいつもしかしてニュース見てない???

「お前が信用している拳銃ってのは、これのことか??」

右手に拳銃を構築、その下種に向ける

「そんな模造品ごときで僕に勝てるっても??」

模造品か、確かにそれじゃ勝てないな

「試してみるか??? これが模造品ならBB弾が飛び出すが、もしこれが本物だった場合、お前の汚らしい脳みそは吹き飛ぶぜ」  
所詮はオタク、知識はあっても度胸は無いだろう

「やってみなよ、どちらにしろキミは警察官にお世話になるのだから」

OK、地獄行きの片道切符をくれてやる!!

「あ、そ。じゃあな、名前も知らない下種野郎」

「パァン!!!!!!」

拳銃から音速の弾が吐き出され、オタクの眉間に穴をあける  
一瞬の静寂、それを切り裂くようにあふれる真っ赤な血

「前言撤回だ、こいつらは人質、だが俺にはこいつらを連れて逃げる力が無い、ってわけで」

ルシアの手を取り、琴浦さんに心を読ませる

（いいか、俺たちは逃げるからお前たちは俺のことを知らないふりをしろ、そうすれば厄介事が少なくなる）

「・・・はい」

琴浦さんがうなずいたのを見て風を操作、上空に飛ぶ

「じゃあな!!! 低能な人間ども!!!」

次はどこに行こうか、新宿にでも行くかな

「楓お兄様、次はどこに行くのですか??」

ルシアが俺に聞いてくる

「何処に行きたい??」

「シンジユク・・・というところに行ってみたいです」

あれま、おんなじこと考えてたよ

「んじゃま、行きますか、新宿へ」

秋葉原⇒新宿。あまり距離的に言うと移動した感が無いが・・・ま

ぁいい、新宿にもいたはずだからな、俺の親友が。

まぁ行こうか、新宿へ

その頃、I S 学園

I S 学園に、シャルが復帰した

ついでに一夏と白雪はわけのわからないまま千冬にこっそり絞られ、ちよつとブルーなテンションで今日の最後の授業を受けている  
それを見て、カエデはため息をついた

（一夏にシャル、白雪まで楓の事を全く覚えてない・・・って事は楓に記憶消去でもされたのかしら）

いまだにブルーな一夏達を再び見、ノートにある項目を書き連ねる

「白石、この問題を解け」

「 $\pi r$ 二乗 $\parallel 3 \cdot 1827$ 」

どうやったらその数字が出てくるのかは謎だ

「正解だ、だがノートに朱雀の事を書くのはいただけないな」

いつの間にかすぐそばにいた千冬にノートを取り上げられてしまう

「返してください。一夏達が楓の記憶を取り戻す手掛かりを・・・」

「私がそのことについて何も策を講じないとしても思ったか。授業が終わったら朱雀姉妹と織斑、それに篠ノ之を連れて第二整備室に来い」

「・・・わかりました」

渋々うなずき、ノートを返してもらう

「月光、お前は何をしている」

「全力で太鼓の達人やっています」

夜明の代わりに政志が答える

「そうか、そんなに私の授業はつまらないか・・・零」

【あいよ、せゝのおっ!!!!!!!!!!】

くドゴォっ!!!!!!!!!!

「うわ・・・痛そう・・・」

カエデは思わず息をのむ

「カエデ！？何が起きた！？」

一夏がカエデを見、夜明を見て

「ああ・・・」

なぜか納得、席に戻った

（何を納得したのかしら・・・）

なんか引っかけたがとりあえず流すことにする

「何というか・・・怖いな、やっぱり」

政志が頭を押さえてうずくまっている夜明を見、一夏のもとに移動しながら尋ねる

「まあ・・・あの性格だしな。でも私生活は壊滅的なんだぞ、部屋もちよっと見ないうちに・・・」

「見ないうちに??」

先を促したのは政志ではなく千冬だった。政志はその表情を見て神速で席に戻るが、一夏は気付かずに続ける

「最速だと数日で物が散乱するし、料理ができないから食事は主にインスタントかコンビニ弁当、さらに家事全般ができないために洗濯物はたまる。尊敬できるいい姉なんだけどなあ・・・」

「最後にいい感じに閉めたとこ悪いが手遅れだ、一夏」  
真人が小声で残酷な事実を告げる

「どうしてだ?? 今話してたのは政・・・し」

一夏は政志のいた方向を見る。そして気付く

「千冬姉・・・いつからそこに」

「ほぼ最初からだな。織斑、校庭3周と懲罰用プログラム、どちらがいい??」

「どっちも地獄ですか!??」

そんなやり取りを見てカエデはひらめく

『千冬先生』

『なんだ、白石。本来はこれも懲罰ものなのだが??』

『罰は後でいいです。一夏に校庭3周をさせてください』

『どうということだ??』

『昔、楓がセシリアと模擬戦をしたことがありましたよね、その前に楓は校庭を3周していたんですよ』

『だが、それとこれとの関係が見えないんだが??』

『現状打破の鍵が無い以上、一夏に楓の行動をなぞらせるんです。

それで一夏が違和感を感じたらそこから私と箒で何とかします』

『そう言えば白雪はどうした??』

『何とかします』

そんなやり取りをプライベート・チャンネルで終えた後、千冬はいまだにどちらがましか考えている一夏に

「時間切れだ。お前は放課後校庭3周をしろ」

「横暴だ!!!」

「そんなことは知らん」

「キンコンカンコン……」

「授業は終わりだ。織斑、朱雀姉妹、篠ノ之、白石以外は速やかに帰宅しろ」

「何故私まで……ぶつぶつ」

箒が何か呟いているがカエデは気にしないことにした

「集まったな。まずはお前らに聞く、こいつに見覚えがあるか??  
まずは一夏」

千冬が出したのは楓の写真

「いや、誰だ?? なんかとんでもない髪色とかしてるけど」

「朱雀姉妹、お前たちはどうだ??」

「いえ……知りませんけど」

「私は……見たことあるような気が」

「白雪、ちょっと来なさい」

カエデは白雪の制服の襟をつかみ、離れたところまで引きずっていく

「何すんのよカエデ……?」

「白雪、今からあなたが関わったことをあげていくわ、違和感を感じたら教えて」

「わかったけど……どうして??」

「いいから。まず一つ、あなたはここに来る前はデュノア社で働いていた」



「うん。武装開発にかかわってたよ」

(とてもそんな風には見えないわね・・・)

カエデは聞いたことをメモしながら続ける

「次、そのデュノア社が何者かに破壊された」

「そう、たしかシャルに深い・・・あれ??」

白雪は気付く。なぜシャルと自分が同じ名字をしているのか。頭の隅にぼんやりと浮かぶ人型の影

「白雪、あなたは何で朱雀って名前になった??」

「確か・・・??」

頭の隅の人型の影に、わずかに色が入る。髪は紅く、赤と青の特徴的なオッドアイ

「貴女が大好きだった義理の父親の名前は??」

「えっと・・・??」

黒い服を好んで着る何も考えていないようで、でも誰よりも深く物事をとらえる事のできる男、白雪はここまで思い出しているのにまだ最後のピースが埋まらない

「その男はどんな顔をしていた??」

「たしか・・・赤と青のオッドアイで・・・紅い髪の」

(最後のピース、それは深いかかわりを表すものだったはず。なら・・・)

「白雪、あなたは誰にISを貰った??」

その時、白雪の記憶の隅で何かが弾けた。特徴的な紅髪、二刀を主に使い、自分たちの義理の親であり自分が初めて本気で憧れを抱いた自分と同じ年の少年。その名は・・・

「かえで・・・楓!!」

「思い出した??」

「確か北海道で見つけて・・・何かをされて・・・」

「千冬先生、白雪は思い出しました」

「そうか。姉の方もそろそろだ」

「デュノア・・・だったはず、でも・・・朱雀?」

シャルが混乱している。白雪とカエデはシャルに近づき

「「シャル、あなたは誰にそのISを貰った??」」

同時に問いかけた

「月桂樹・・・あ、」

どうやら思い出したようだ

「後は・・・」

「一夏か」

白雪が北海道からの出来事を説明してるのを見て、二人は考える

「あの二人は楓からISを貰ったって共通のピースがあったからいいけど・・・」

「アイツには特に其のピースが見つからない。どうすれば・・・」

白雪とシャルの記憶は戻った。しかし肝心の一夏の記憶を戻す手掛かりをつかめず、千冬とカエデは同時にため息をつくのだった

「着いたぞ、ここが新宿だ」

秋葉原を出てから5分ほど、俺たちは新宿に降り立った

「さっきの所とあまり変わらない気が・・・」

「いいからいいから、行くぞ、人を待たせてるんだ」

そろそろ恒例になってきた俺の親友紹介

「お、いたいた。純人！！」

「お、楓！！！！」

俺が声をかけたのは星野純人。俺の親友の中で唯一の普通少年だ

「楓、お前・・・ロリコンにでも目覚めたのか??」

「黙れ。お前の方がだろうが」

「純人、この方たちは??」

ふと、純人の横にいた女性が俺たちを無遠慮に指差して質問している。なんて奴だ、人を指差すなって教わらなかったのか

「こっちの人間離れしている奴が噂の楓、でこっちが・・・誰なんだ?? 楓」

「この子はルシア。イギリスの代表候補生の妹君だ」

「・・・何でその子と一緒にいるんだ??」

「秋葉原で見つけた」

「オイ、誘拐じゃねえか」

「違うぞ、同意の上だ」

「お兄様、この方たちは誰ですか??」

ルシアは良く見ると微妙に俺の後ろに隠れるようにしている。人見知りなのだろうか

「ああ、こっちが星野純人。で??こっちのお前に似合わない女性  
は誰だ、純人」

「大きなお世話だ。こっちの人は姫宮ちとせ先輩」

「どうも、楓さん」

「いえいえ、こちらこそ」

二人で同時にお辞儀をする

「・・・まあいいや、んでこれからどうすんだよ」

「とりあえずお前の家に行く」

「聞いてないよ!? それに今からって・・・」

「ほらほら、座標はわかってんだから集まる集まる!!」

ここでISを使うのは危険なので風で行くことにする

「あつまれって・・・どうするんだよお!!!!!!?!?!?」

「きゃああああ!!!!!!」

集まった瞬間、風を操作して浮かび上がる

「さて、しっかりつかまってるよ!!」

そのまま純人の家に向かってそこそこのスピードで向かう

5分後・・・

「ここか、中々だな」

「し・・・死ぬかと思った」

「情けないな純人、女性陣を試してみろ」

純人がルシア達の方を見て、うなだれた

「何でこんなに元気そうなんだ・・・」

純人の前ではしゃぐルシアと何ということもなさそうに立っている  
ちとせの姿があった

「まあいいや、お前はそのまま憔悴してろ、運んでやるから」

そう言いつつ純人の周りの風を使って浮き上がらせる

「わああ!!!!!!?!?!?」

「そんなに驚く必要はないだろ・・・どうしたルシア、そんなに目をキラキラさせて」

「お兄様、私も!!」

「・・・はいよ」

実際のところルシアは軽いのでそこまで風を操る必要はない  
二人を乗せて、俺の後ろについてくる風、の後ろで何やら焦っている  
ちとせ

「どうしたちとせ、トイレか??」

「違うわよ!! なんでそうなるのよ!!」

「なぜ怒られにゃアカンのだ・・・」

とはいってもさすがに家の前で長々というわけにもいかないので、  
家に入っていく。鍵がかかっていたが、風で開けた。風に不可能は  
ないのだ!!

「お邪魔するぞ」

「なのです」

俺に続いてルシア、ちとせと純人の家に上がっていく  
廊下を通り、リビングへ

「一人暮らしにしては中々広いじゃねえか」

「大きなお世話だったの」

とりあえずソファアの上で風を解除、ルシアと純人を落とす

「それで純人。俺がお前に会いに来たのは「きゃわー!!」・・・  
コホン。会いに来たのは「きゃほー!!」ルシアうるさい!! 静か  
にしてください!!」

「はい・・・」

ルシアが大人しくなったのを確認してから続ける

「三度目の正直だ。ここに来たのはほかでもない。ニュースは見た  
よな??」

「ああ、お前が全世界でトップクラスの指名手配犯なんだろう??」

「まちがっちゃいないがそれだと俺が凶悪な犯罪者みたいだな・・・  
。まあその認識でまちがっちゃいない。それでそのことを言いに来  
たんじゃない。俺が指名手配って事はお前にも何らかのアクション  
があるはずだ、ここ最近で黒い服のお兄さん達が来たりはしなかつ

たか??」

俺がそう聞くと、純人は少し考えるそぶりを見せてから

「いや、そう言うのはいな「いたわよ。何度か尾行されてる」……マジですか」

純人の言葉をさえぎってちとせが俺に向かって厳しい視線を向けてくる。……まだ警戒されてんのな

「それはいつだ?? 場合によっちゃ俺がここにすることもばれてる可能性がある」

「たしか3日前からだったかしら」

三日前……って事は

「まずいな、俺がお前に連絡したのもそれくらいだ。間違いなくばれてんな」

俺がそう言うのと同時に、外であやしい気配がする

「見つかったな。ちとせ、ルシアを頼む。それと、絶対に出てくるな。俺が行くのは戦場だ、お前らが出ていいところじゃないんだ。分かったな」

「え、ええ……」

「ルシア、お前もだぞ。絶対に出てきちゃだめだぞ」

「はい!!」

わずかに力が出そうになるのをこらえ、椿を展開する

「出来るだけ被害を出さないようにするが一応警戒しといてくれ」  
「分かった」

純人の返答を聞いてから、ドアを開けて外へ出る

「よう、諸君」

予想通り、外には黒服がいっぱいいた

「……ゴキブリホイホイ」

思わず口にした言葉を聞いて、黒服から発せられる殺気が強くなる

「……悪い、失言だった。」

素直に謝ることにした

『……』

うっわ!!めっちゃ睨まれてる!!

「・・・で、用件は???って、聞く意味無いか。俺だろ??」

「分かっているなら話は早い。私たちは日本の国家組織だ、単刀直入に言おう。私達と一緒に来い」

どの国も言うことは同じか。なら・・・

「だから・・・俺はどの国とも行かない。自分勝手に逃げ続ける」

「日本に住んでいて、国に従えないと??」

「住んでいる??御冗談を。住んで「やってる」んだよ。そこんこと間違えんな」

住むところなんて自分で決められるわけがない。いや俺は決められるんだけどね

「なら・・・力づくでも連れて行かせてもらおうぞ」

「ISも使えねえゴミ共が、一瞬で片つけてやんよ」

目を漆黒に、宵闇をフル活用する今さっき思いつきで考えた形態『刹那』

自分の身体ダメージを度外視すれば一瞬で東京くらいは消せる。それやると体バラバラだけど

「漆黒の闇に、飲まれるがいい」

その声を合図に、黒服が動いた

それぞれ手に銃器を持ち、一斉に発砲。ハンドガンから何処から取り出したのかわからないロケットランチャーまでぶっ放してきやがった

「んなもん全部ぶった切ってやらあ!!」

一閃『不知火・煉獄』

一瞬で銃弾は全て切り裂かれ、地に落ちる

「今度はこっちから行くぞ!!」

二閃『白雪・新月』

黒服はなまじ数が多いゆえに身動きが取りづらい。そこを利用して、椿で一気に叩き斬る

たちまち3人が切り裂かれ、地面と熱烈なキスをする

「ひるむな!!」

やられた仲間には目もくれず、銃を乱射する黒服達。学習能力が無いって言うかなんていうか・・・

「見せてやる、狂った戦士の力を」

〽三閃『葵・紅』〽

葵は高速で放つ刺突の嵐だ。そいつを喰らって、黒服達は結構な数が吹き飛ぶ

「・・・ぐっ」

不意に、腹部に衝撃。見るとそこには

「・・・打鉄??」

日本産の量産機『打鉄』を纏った女が近接ブレードで俺のことを突き刺していた

「まさか女がいたとはな・・・」

「あなた、この状態でもさっきと同じことが言える??」

さっき、というのは先ほどの事だろう。確かに普通の人間なら腹に刀ブツ刺されて同じことが言えるわけがない。でも・・・

「俺はどの国とも行かない、俺は自分勝手に逃げ続けてやるさ」

言ってやったぜ!! へへん!!

「そう、じゃあ・・・」

「言っておくが、・・・死ぬのはお前だぞ」

打鉄の右腕を、近接ブレードもろとも引きちぎった。鮮血が飛び、女の顔が歪む

「え・・・?? きゃあああああ!!!!!!!!」

いきなり腕を引きちぎられたらそりゃ誰だって痛いよなあ??

「どうする?? 降参するなら治してやるが??」

「する!! するから腕を・・・」

基本俺はやさしいので

「はい」

「え??・・・今のは??」

「幻覚だ。すんごいリアルだけど」



実際はアマテラスの力を使っただけだな

「え……」

いまだに状況を理解していない女に若干いらっとしながら

「ほれ、さっさと行け。殺されたくなかったら」

もうなんか相手すんのもめんどくさくなったので追い払う。黒服達

は殺しちまったからアマテラスの力を使って燃やす

「あらかた片付いたか」

跡形もなくした所で切り上げて純人の家に戻る

「ただいまー。終わったぜ」

リビングに入った俺が目にしたのは、異様な光景だった

その頃学校では

「一夏、瞬時超加速やつてみてよ」

昼休み、私は白雪と一緒に一夏の特訓に来ていた

「??? 何だそれ」

覚えてないって事は関連情報を全て封印しているようね

「白、聞こえてる??」

【・・・・・・】

「白??? どうしたの??」

【白は今、眠りについているぞ、楓の手によって強制的にな】

いきなり、私の肩に猫が現れた

「赤梅??? 違うわね、どなた??」

【ヤッパリ影が薄いのか・・・】

「オルスだよ、カエデ」

ちなみに、デュノアという名前では不満だったようで、楓が居た時に名称変更をしてもらっていたらしい

「ああ、シャルの子ね」

【その言い方はどこか引かかるんだが・・・まあいいだろう】

それにしても眠りについているってどういうことかしら?? デュノアにそれを訪ねると

【今、一夏は白雪や我が主よりも強固な封印を施されている。そのため、白式の力のいくつかは制限されており、その一部である白も眠りに着かされているのだ】

「なるほど・・・面倒ね」

私がため息をつくとき、アリーナのドアが開いて、水色の髪をした女の子と千冬さんが入ってきた

「あれ??? 先生、その子は??」

「ああ、こいつは更識簪。生徒会長の妹だ」

生徒会長??? ああ、あの女か

「それで、生徒会長の妹さんがどうしてここにいるんですか??」  
ちよっとだけ語調を強くすると、肩をびくつかせた。昔の白雪に似てるわね・・・

「私・・・私も、一夏の・・・記憶を戻す・・・手掛かりを・・・」  
言葉の間に『・・・』挟むのね、聞き取りづらい・・・

「千冬センセ、この子が役に立つと?？」

校外学習の時に隣にいたのは知ってるけど、楓と知り合いなのかさえ不明だわ。

「戦力は多いほうがいいだろう。一夏が使えない今、専用機持ちが多いほうが都合がいい」

「専用機持ち?？既存ISじゃあ、セシリアとかに会ったときに瞬殺されますよ。間違はなく」

楓が魔改造を施したISには、既存ISでは勝てない。世界トップの使い手でも不可能だ。それくらいの差があるのだ。私たちのISも含めて

「そんなこと・・・ない」

「じゃあやってみましょうか、私が相手になってあげる。一夏、白式解除して客席にいなさい、白雪、シャル、一夏に異変が起きたらお願いね」

二人に一夏を託して、薔薇月を展開する

「・・・・・・」

簪も、無言で『打鉄二式』を展開する

「打鉄のカスタム機?？そんなんじゃ戦おうっての?？」

無意識のうちに笑みがこぼれる。白雪の顔が引き攣っているところを見るに、オメガに乗っ取られた時の影響が残っているのね。忌々しい

「・・・負けない」

簪の目はさっきまでの臆病なそれではなく、冷静に私を観察しているようだった

「・・・先生」

「分かった、では、始め!!」

先生の合図と同時に、スカーレット・コンバイン緋色の痛みを展開、簪に向けて放つ

以前よりも威力が強化されたそれは、結構な速さで打鉄二式を襲う  
「・・・!!」

簪はそれをギリギリのところで回避し、背部のミサイルポッドから  
数発、ミサイルを放ってくる

(実弾武装・・・打鉄といえども少しは警戒しといたほうがいいみ  
たいね)

「それ!!」

即座に白狐に切り替え、蒼い旋律で切りかかる  
マリン・プロット

「はあっ!!!!」

袈裟掛けに切り裂く、避けられる

「せえい!!!!」

頭部に向かって突く、かわされる

「このお!!!!」

バトンのように回して竜巻のように切りかかる、紙一重ですべて避  
けられる

「未改造にしてはなかなかやるわね。でも!!」

ある程度距離を取ってある構えを取る

「第一の構え『鈴蘭』」

「あれって・・・」

白雪が何かに気付いたかのように口に手を当てる。一夏はポカンとしている

「楓が使っていた拳法。確か名前は……」

「虚刀流だな」

そう言って現れたのは夜明、政志、真人だった

「知ってるの??」

「ああ、連れが使えるらしいからな」

連れ、というのは太陽の事らしい

「お、始まったぞ」

政志がそう言うのと、全員がカエデたちの方を向く

「『梅』!!!『薔薇』!!!『野苺』!!!」

まさに怒涛の勢いで攻めるカエデと、紙一重ですべて避けていく簪。

「このっ!!!!!!『椿姫・X・シューターフロー』!!!!!!」

楓の技を使用するカエデ、かわそうとしたが一瞬遅れてしまい、簪の肩をかすめる

だが、それで決着はついた。簪は大きく弧を描いて吹き飛び、打鉄二式はシールドエネルギーを全てなくした。

「どう?? かすただけでおしまいなの、これがどういう意味かわかるわよね?? それでも、あなたは楓や一夏の記憶にかかわれるというの??」

カエデは冷酷に簪を突き放す。

「それでも……わたしは、楓を見つけないし、一夏の記憶も取り戻したい」

そう言う簪の目は、今まで見たことないほどに強い決意を秘めていた  
「そう……じゃあ」

カエデはISを解除して簪に近寄る。その威圧感に若干たじろぐが、こればかりは譲れないと踏みとどまり続ける簪

「まったく……楓はこうなるのを予想してたのかしら……」

カエデが簪に向けて手を差し出す。そこには

「どの道その機体じゃ満足に戦えないでしょ。これ、楓から預かつ

てたの」

カエデの手の中にあるのは水色の腕輪、幾何学的な文字が彫られている

「これは??」

「あなたの新しい力よ。名前は・・・『フェアリー・オブ・マーキュリー水銀の妖精』だつて」

水銀の妖精、縮めて妖精を受け取り、簪は打鉄二式と妖精を見比べる。

『打鉄二式を確認、統合を開始します』

そんな電子音が妖精から発せられ、双方が輝きだした。二つの輝きはゆっくりとひとつになっていき、輝きが収まるとそこには・・・

「これは・・・」

そこにあつたのは指輪だった。簪の指にあつらえたかのようにピツタリで、その色は蒼銀だ

「へえ・・・きれいなもんだな」

夜明たちも簪の指輪をみて口々に感想を述べる

「・・・む、なんだ???」

不意に、千冬の携帯に連絡が入った、最初は普通に使っていた千冬だが

「・・・なんだと!?! ああ、わかった」

携帯を切り、カエデたちの方へ向き直る

「どうしたんですか??」

白雪が聞くと千冬は腹立たしげに

「・・・各国が連合を組み、朱雀を捕えることになった。・・・つまり、戦争だ」

戦争、その単語に反応した者が三名

「夜明・・・」

「ああ、そろそろ戻らねえと」

「行くぞ、ヴィル」

『了解だ』

訂正、三人と一匹

夜明たちは気付かれないようにアリーナからでて、それぞれISを

展開すると、ある場所へ飛び立った。彼らの拠点である、『イレギ  
ュラー』へと

## 楓side

俺が見たのは、銃弾の跡がある窓、倒れ伏すちとせと純人。そして  
消えたルシア

「何が起きた・・・くそっ」

ふつつつと湧き上がる怒り、それは体の奥から滲み出る狂った怒り  
に似ていた

「ルシアちゃんは・・・さらわれちゃったです」

ふと、ちとせのからだから紫電が走っていることに気がついた。同  
時に、そのなかから小さな少女がはい出てくるのも

「あんたは??」

「わたしは・・・ちとせです」

「つまりあれか?? それ（外見）は機械でできていて、あんたが本体ってことか??」

倒れ伏すぬけがらをみながら問う。答えは予想通りだった

「はい、それは『外の人スーツ』といって・・・」

「その話は悪いが後でだ。まずはこれ、何があったんだ??」

「あ、えと、いきなり黒い服の人が入ってきて、私に向けて発砲した後、ルシアちゃんを連れて逃げていっちゃいました」

状況からするに日本の奴らか・・・ふざけやがって

「ちとせ、今日の事は他言無用だ、死にたくなかったらな」

俺の視線は、つけっぱなしのテレビに向いていた

『速報です。国際特殊指名手配犯【朱雀楓】を、世界全体で捕獲することが、決定されました。日本も、その中に入っているようです。詳細は・・・』

無言でテレビを消し、ちとせに向き直る

「悪いな、平穏な暮らしを邪魔しちゃって」

窓から外に出て、椿姫を展開する

【どうするんだ?? お前とんでもないことになってるぞ】

宵闇が意識に語りかけてくる

「こうなるとは思ってたさ」

【全世界・・・ってことは皆・・・】

赤梅が言い淀む

「まあ間違いなく敵だわな」

【楓・・・戦えるの??】

椿姫が聞いてくる。一夏や白雪たちと、戦えるかと聞いているのだろう。勿論答えは・・・

「ああ、殺す覚悟もできてる」

もともと俺はここにはいけない存在。存在自体が禁忌であり、異常であり、間違いなのだ



「だが、それがどうした」

自分の答えに突っ込みを入れて、俺は飛び立つ

「オメガは俺の力を使って城を出現させたんだよな」

【ああ、やってたな】

「なら・・・こんなのもできるわけだ」

極超音速で飛び、あっという間に沖合にたどり着いた、そこで両手をかざし、目を閉じてイメージする

（そうだな・・・ラスボスがいるような感じで・・・めんどいから異空間で）

イメージが、形となって現れる。目を開けると、禍々しい黒い球体が現れていた

「おお、良いねえ。・・・それじゃ」

同時に処理していたテレビへのハッキングを終了し、全世界に向けて発信する

以下、その内容

「聞こえてるか?? そして見えてるか?? 世界の諸君、俺が国際特殊指名手配犯こと、朱雀楓だ。言っておくが俺は世界が相手でも容赦しない、いざとなったら地球もろとも吹き飛ばすくらい造作もな

いことだ。だがそれだとつまないだろう?? だから、ゲームだ  
ルールはたった一つ、『何でもアリ』だ  
開始日は5日後、スタートの舞台は太平洋上空。専用機持ち諸君、  
それまでに、ちったあ強くなってくれよ??  
最後に一つ。・・・亡国企業、お前たちがどう動くかは知らんが、  
俺はお前たちも攻撃する。戦うなら俺のいない場所でやんな。じゃ  
ねえと、間違って消しちまうから」

「これだけ言えはいだろう。それと・・・おい、おっさん」  
「なんじゃ」

ゼウスのおっさん呼び出し、許可を取る

「ローズで、戦っていいか??」

「本来ならだめなのじゃが・・・いいだろう、許可しよう」

「サンキュ、これで・・・」

俺の外見は変化する。漆黒の着物を身にまとい、鮮やかな色になっ  
た髪は腰まで伸び、両目が紅く輝く  
「効率よく殺せる」

「・・・ローズよ」

「なんだよ、いまさらだめってのは無しだぜ??」

「そんなことはいわんよ。ただ・・・」

「ただ??」

「出来るだけそれはつかうな、この世界の理から離れ過ぎている。」

行使し続けると消滅するぞ」

「分かったよ、こうすりゃいいんだろ??」

俺がそう言った瞬間、首輪、つまり椿姫が輝き、消えた。どこに行ったのかというと

「これで、この世の理の範疇だ」

俺の右目、紅かったそれは、今は虹色になっている。つまり、取り込んだのだ、椿姫を

「・・・いささか強引な気もするが・・・まあいいだろう。では、あとは好きにするがいい。滅ぼそうが破壊しようが、誰も咎めはせんよ」

「サンキュ、まあやりすぎないようにはするさ」

「うむ」

その言葉を最後に、ゼウスのおっさんの気配は消えた。あとやることは・・・

「そうだ、お前ら」

俺の中にいる椿姫達に呼びかける

「さっそくで悪いんだが、宵闇は白雪たちの所へ、椿姫は太陽、赤梅は鈴、紫炎はラウラ、鉄はセシルのところに行ってくれ、回線を一齐に開く」

俺が言い終えると、次々に椿姫達の気配が消えていく

「これで、準備は整ったか」

世界は、選択を誤ったのだろうか

## 19話

### 急変、世界の選択（後書き）

次回はバトルですよ、それも楓VS世界の

では、次回でお会いしましょう

## 申し訳ありません

いきなりなんです、本編の設定を改編して、新しく書きなおそうと思います

大きな変更点として、

白雪が最初から登場

『白石カエデ』が、『白石深雪』に変更

楓は、「神に最も近い人間」にランクダウン。風を操れるのは月花の能力

椿姫の形態は、最初から『月花』『桜花』『乱花』の三つ

月花は風を操れるようになる以外はそのまま、桜花は鉄と赤梅、乱

花は紫炎と宵闇の複合型

楓のキャラが多少変更（若干冷酷になる）

神様の類は後々登場

一夏達の装備についても後々新しくします

些細な変更点

フィオナの身長が楓よりちょっと小さいくらいに伸びる

楓がより中性的になる

という訳で、新しくしたいと思うので、応援よろしくお願いします  
名前の方も少し変えて『IS 　　く乱れ咲く花く』にします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7224s/>

---

I S      ～香りの無い花～

2011年9月27日09時14分発行